

取扱注意

放送大学開設予定授業科目講義内容案

昭和58年 8 月

第 1 版

放送大学学園

教務部教務課

目 次

1. 基本科目	頁	注)1 新	注)2 旧	注)3 開設年次	作成年度
(人文系)					
1 現代の人間観と世界観	1		○	1	
2 人間の歴史	3	○		1	
3 文化の形成と普及	3	○		2	
4 文学と芸術	4	○		2	
5 生活と芸術	5		○	1	
6 日本の教育	7	○		2	
(社会系)					
7 人間と社会	8		○	2	
8 社会生活と法	10		○	2	
9 比較政治 I, II	12		○	1	
10 比較経済・経営・社会				2	
11 日本経済と産業と企業	16	○		1	58
(自然系)					
12 地球と宇宙	18	○		1	58(㊥)
13 物質とエネルギー	20		○	2	
14 人間の生物学	22		○	1	
15 日本の自然				2	
16 数学と人間性活	24		○	1	

2. 基礎科目					
(人文系)					
17 哲学の基礎	26	○		1	58(㊥)
18 古代・中世の思想	28		○	1	
19 近代の思想	30	○		1	58
20 現代の思想	32	○		2	58(㊥)
21 世界史と時代意識	34	○		1	58
22 比較文化論	36	○	○	2	
23 言語とコミュニケーション	39	○		1	58(㊥)

		頁	新	旧	開設年次	作成年度
24	思考と論理	41	○		2	
25	人文地理	42		○	1	
26	行動科学	44	○		2	
27	心理学概論	45		○	1	注) 4 58(1/2)
28	教育学概論	47	○		2	
29	日本語の基礎	48		○	2	
30	作詩・作歌・作句	50		○	1	
	(社会系)					
31	国家と法Ⅰ,Ⅱ				1	
32	現代の経済と経済分析	52		○	1	58(1/2)
33	会計学	54	○		2	58
34	社会科学の成立と発展Ⅰ,Ⅱ	56		○	2	
35	現代社会論Ⅰ,Ⅱ	58	○	○	1	
36	社会調査	61	○		2	58
37	数理計画法入門	63	○		2	
	(自然系)					
38	基礎数学	64		○	1	
39	基礎物理学	66		○	2	
40	基礎化学	68		○	2	
41	基礎生物学	72	○		2	
42	基礎宇宙地球科学	73	○		1	
43	確率論・統計学	74	○		1	
44	自然系実験	75	○		1	58

3. 外国語

	(英 語)				
45	英語Ⅰ	77	○	1	58
46	英語Ⅱ - A	78	○	1	
47	英語Ⅱ - B 1			2	
48	英語Ⅱ - B 2			2	

		頁	新	旧	開設年次	作成年度
	(独 語)					
49	独語Ⅰ	80		○	1	
50	独語Ⅱ - A	84	○		1	58(㊦)
51	独語Ⅱ - B 1	86	○		2	
52	独語Ⅱ - B 2	87	○		2	
	(仏 語)					
53	仏語Ⅰ	88		○	1	
54	仏語Ⅱ - A	92	○		1	58(㊦)
55	仏語Ⅱ - B 1				2	
56	仏語Ⅱ - B 2				2	
	(その他)					
57	ロシア語	94	○		1	58(1/2)
58	中国語	97	○		2	58(㊦1/2)
59	スペイン語	100	○		2	

4. 保健体育

60	保健体育	101	○		1	
61	体育実技				1	

5. 専門科目

	生活と福祉専攻					
62	生活史	102	○		2	
63	家庭の本質				2	
64	生活の社会学	103	○		2	58
65	衣服論	105	○		1	
66	食物論	106	○		1	
67	住居論	107	○	○	2	
68	家庭経営学，家庭経済学	110	○	○	1	58(1/2)
69	家族関係	114	○		3	
70	生活福祉				3	
71	母子保健	115	○		3	

		頁	新	旧	開設年次	作成年度
72	成人の保健	115	○		4	
73	老人の保健	115	○		4	
74	青少年の保健	118	○		3	
75	環境衛生	119	○		3	58
76	精神衛生	123	○		3	
77	人間の病気	124		○	1	
78	衣生活物資	126	○	○	1	58(㊥1/2)
79	食生活物資	130	○		1	58(1/2)
80	住生活物資				2	
81	余暇生活	133	○		1	58(㊥1/2)
82	生活と福祉特論				4	

— 発達と教育専攻 —						
83	教育思想	135		○	1	
84	児童観	137	○		2	
85	発達心理学	138	○		1	
86	学習心理学	139	○		2	58(1/2)
87	異常心理学	146	○		3	
88	深層心理学	147	○		3	
89	教育社会学	148		○	2	
90	教育方法学				3	
91	道德教育	150	○		3	
92	情操教育	151	○		1	58
93	家庭教育	152	○		1	58(㊥)
94	学校教育	154	○		1	58(㊥)
95	地域社会と学校	156	○		3	
96	言語と教育				3	
97	文化と精神発達				3	
98	青少年文化				1	
99	青少年の指導	157	○		3	
100	カウンセリング	158	○		4	
101	パーソナリティ論				3	

		頁	新	旧	開設年次	作成年度
102	人間関係論	159	○		3	
103	知能と創造性	160		○	1	
104	認知と思考	162	○		4	
105	教育評価				3	
106	乳幼児の健康と心理	163	○		2	
107	児童の心理と教育	164		○	2	
108	青年の心理と教育	166	○		4	
109	障害児の心理と教育	167	○		1	58(㊥)
110	生涯教育論	169		○	1	
111	言語障害	171		○	1	
112	発達と教育特論				4	

— 社会と経済専攻 —						
113	市民と法	173	○		1	
114	現代の裁判	174		○	1	
115	日常生活と法				2	
116	取引と企業の法	176	○		3	
117	日本の社会と法				1	
118	国際社会と法	177		○	4	
119	政治思想Ⅰ，Ⅱ	179	○		3	58(1/2)
120	現代政治理論	181	○		1	58(㊥)
121	現代の政治生活	183		○	1	
122	現代の国際政治	185		○	1	
123	日本の政治				2	
124	政治史Ⅰ，Ⅱ	187	○		3	58(1/2)
125	政策科学	189		○	1	
126	近代経済思想				3	
127	経済発展論				3	
128	産業組織論				3	
129	中小企業論	191	○		2	58(㊥)
130	国際経済学				3	
131	日本経済史	193	○		1	

		頁	新	旧	開設年次	作成年度
132	欧米経済史	194	○		1	
133	財政と金融	195	○		2	
134	社会学の理論Ⅰ，Ⅱ	196	○		1	58(㊦1/2)
135	社会構造と社会変動Ⅰ，Ⅱ	198	○		3	
136	地域社会学Ⅰ，Ⅱ				3	
137	マスコミュニケーション論Ⅰ，Ⅱ	200	○		1	58(㊦)
138	社会と経済特論				4	

— 産業と技術専攻 —						
139	技術史・技術論				1	
140	産業技術の動向Ⅰ，Ⅱ				3	
141	産業社会学	202	○		1	58
142	産業地理学	204	○		1	58(㊦)
143	産業と情報	207	○		2	58(㊦)
144	産業と企業	209		○	1	
145	産業と資源				1	
146	産業と環境	211	○		1	58(㊦)
147	経済活動と法				1	
148	労働問題と法				1	
149	経営管理Ⅰ，Ⅱ	213		○	1	
150	人事・労務管理	217	○		2	58
151	労働経済	219	○		4	
152	経営分析と財務管理	220	○		4	
153	企業と会計Ⅰ，Ⅱ				2	
154	マーケティング	221	○		3	58
155	経営組織論	223	○		3	
156	経営戦略				3	
157	生産管理とOR	224	○		3	58
158	経営科学				3	
159	システム工学	226		○	3	
160	人間工学	228		○	4	
161	情報工学	230		○	1	

		頁	新	旧	開設年次	作成年度
162	計測と制御	232	○		2	58(㊥)
163	解析と設計	234	○		2	
164	物質工学	235	○		3	
165	エネルギー工学	236	○		3	
166	商業と流通				3	58(㊦)
167	サービス産業論	237	○		1	
168	交通と通信				3	
169	産業と技術特論				4	

—人間の探究専攻—						
170	哲学的人間学	238		○	1	
171	知識と学問の構造	240		○	1	58
172	行為と規範	242	○		1	58
173	美の本質と様態				1	
174	文化人類学	244	○		2	
175	アメリカ論Ⅰ,Ⅱ	245	○		2 3	
176	アジア論Ⅰ,Ⅱ	247	○		1 3	
177	ヨーロッパ論Ⅰ,Ⅱ	249	○		3	
178	アフリカ論	250	○		3	
179	日本文化論	251		○	1 2	
180	哲学思想史	253		○	1	
181	社会思想史	255	○		3	58(㊧)
182	宗教理論と宗教史	257		○	1	
183	歴史の理論	259	○		1	58(㊨)
184	情報と記号	261	○		3	58(㊩)
185	構造と解釈	263	○		4	
186	美術史と美術理論	264		○	1	
187	音楽史と音楽理論	266		○	1	
188	演劇史と演劇理論				4	
189	文芸史と文芸理論	268	○		2	
190	表現と鑑賞				3	
191	日本言語文化論				3	58

		頁	新	旧	開設年次	作成年度
192	和文古典Ⅰ，Ⅱ	269		○	1 2	
193	和文古典Ⅲ，Ⅳ				3 4	
194	漢文古典Ⅰ，Ⅱ	273	○		3	
195	近代文芸Ⅰ，Ⅱ	274	○		3 4	
196	イギリスの言語文化	275		○	1	
197	アメリカの言語文化	277		○	2	
198	ドイツの言語文化	279	○		1	
199	フランスの言語文化	280	○		2	58(㊦)
200	ロシアの言語文化	282	○		2	58
201	西洋古典	284	○		3	
202	人間の探究特論				4	

— 自然の理解専攻 —						
203	物理科学史	285		○	1	
204	生命科学史	287	○	○	1	
205	宇宙の構造と進化	290		○	1	
206	太陽系の科学				3	
207	宇宙像の変遷				3	
208	地球の科学	292		○	3	
209	地球像の変遷	294		○	1	
210	大気と海洋	296		○	1	
211	生態学概論	298	○		2	
212	現代資源論	299		○	2	
213	現代物理学Ⅰ，Ⅱ				3	
214	物質の科学Ⅰ	301		○	3	
215	物質の科学Ⅱ				4	
216	脳と行動	303	○		1	58(㊦)
217	生命のしくみ	305	○		1	58(㊦1/2)
218	集団遺伝学	307	○		4	
219	動物の行動	308		○	1	
220	植物の生理	310	○		4	
221	生物の進化と系統	311	○		3	

		頁	新	旧	開設年次	作成年度
222	統計学特論				2	
223	データ解析法	313	○		1	58
224	コンピュータ・情報処理・数値計算	317	○		2	58
225	現代数学特論	321	○		3	
226	現代応用数学	322	○		3	
227	自然の理解特論				4	

6. 総合科目

228	生命論				4	
229	生理と心理	323	○		4	
230	行動と責任				4	
231	都市問題と都市政策	324		○	4	
232	社会保障と福祉政策				4	
233	人口・食糧・資源Ⅰ，Ⅱ	326		○	4	
234	存在と価値				4	
235	自然と文明				4	
236	科学と宗教				4	
237	環境論				4	
238	文学の東西				4	

注) 1. 新：今回新たに提出された講義内容（案）

2. 旧：大学放送教育実験番組講義内容

3. 開設年次：設置認可申請時のもの

4. 58(㊟1/2)：昭和58年度放送教育開発センターが全単位数の1/2作成の意

＝現代の人間観と世界観＝

〔主任講師：中 埜 肇（筑波大学教授）〕
 放送時間：午前 6 時～午前 6 時 45 分
 放 送 局：テレビ朝日

全体のねらい

私たちがいま生きている現代という時代には、人間と世界について、他の時代には見られない独特の考え方があるはずである。それを、科学・哲学・文学・芸術・宗教という 5 つの分野について、講義と対談によって考えてゆく。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/12 11	序　　　　　　論	まず「現代」とは何かを考え、「現代」の思想的・文化的な特質と、それにもとづいて形成された人間観と世界観の全般的な特徴を概括する。	中　埜　　肇 （筑波大学教授）
2	18	自然科学的世界像 と人間Ⅰ	17世紀の西欧で遂行された「科学革命」は、科学的自然観を定着させ、世界像にも多大の影響を与え、さらに科学技術を基盤とする機械文明のもとで、人間観の変革をうながした。まず、この歴史的経緯を概観する。	永　井　　博 （筑波大学教授） 中　埜　　肇
3	25	自然科学的世界像 と人間Ⅱ	20世紀になると、新物理学理論、特に量子論の形成によって、世界像は「古典的」から「現代的」へと変貌した。因果律に代って確率統計法則が科学の基本となり、新しい型の機械論が登場してくる。	同　上
4	58/1 8	自然科学的世界像 と人間Ⅲ	機械論の影響は生物科学に及び、生命の機械論的解明をおし進め、人間の科学的理解を深めるのに役だった。しかし、この傾向に全く何の問題もないかどうかを検討し、これからの人間像について考える。	同　上
5	15	現代哲学から見た 人間と世界Ⅰ	現代哲学を大別すると、「考える我」を中心に据えたドイツ・フランス系の超越論的哲学と、実証主義的発想を受け継ぐ英米の分析哲学とに分かれる。世界と人間の見方はこの二つの流れでどのようになるか。	竹　市　明　弘 （京都大学助教授） 中　埜　　肇
6	22	現代哲学から見た 人間と世界Ⅱ	「ことがら」に即して考えるという実証主義の精神を生かしつつ、同時に素朴で日常的なものの見方を徹底的に反省することから、現象学や解釈学という、新しい世界と人間の見方が成立する。	同　上
7	29	現代哲学から見た 人間と世界Ⅲ	現代思想の特徴は、これまでの実体的な見方を排して、物を機能や構造のなかにとけこませることである。しかし私たちの具体的な世界概念や人間経験は、むしろ逆に「物」や「個体」という見方の確立を求めはしないか。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/5	現代文学にあらわれた人間像と世界像Ⅰ	まず、文学は人間・世界をどのように捉えるか、を考える。つぎに現代文学の〈現代性〉とは何か、を考える。そして現代文学を構成する主要な流れを、①心理主義的文学②マルクス主義的文学③キリスト教的文学に分類し、それぞれの人間観と世界観を考える。	山　形　和　美 (筑波大学教授) 中　埜　肇
9	12	現代文学にあらわれた人間像と世界像Ⅱ	上の三つの主要な流れを代表すると思われる作家・作品をあげながら、現代文学にあらわれた人間像・世界観を具体的に確認してゆく。	同　上
10	19	現代芸術から見た人間と世界Ⅰ	自分で直接に見ることのできる自分の顔かたちはごく限られており、それについて多くを知ろうとすると、鏡や他人の眼のような媒介が必要となる。現代人と現代世界がいかなるものであるかを知ろうとすると、われわれにとって事態は類似の構造をもっており、われわれは人間と世界を映す鏡やこれらを捉える他人の眼を必要とする。芸術作品はこのような意味での鏡のひとつであり、芸術家は同時代を客観視する鋭い眼である。—このような認識にもとづいて、ここでは主として造形芸術の具体例によって、現代の個人としての人間、人間関係、生態系としての社会の基盤である環境世界の特徴をさぐり、その意味を哲学的に考える。	増　成　隆　士 (筑波大学教授) 中　埜　肇
11	26	現代芸術から見た人間と世界Ⅱ		同　上
12	3/5	現代芸術から見た人間と世界Ⅲ		同　上
13	12	現代宗教から見た人間と世界Ⅰ 現代における神の問題	宗教の性格と本質は、その崇拜の中心である神の内容によってきまる。神概念は、(A)非形態的、(B)形態的、(C)人格的の三つに分けられる。そのうち真の超越性は人格的独一神に求められる。	小　川　圭　治 (筑波大学教授) 中　埜　肇
14	19	現代宗教から見た人間と世界Ⅱ 神から見た人間	人間を客観的に見る科学の立場に対して、哲学では主体としての人間そのものをとらえる。その主体の中心を人間の理性におく自律的・内在的・主観的な見方に対して、超越者としての神から見る超越的・客観的なとらえかたがある。	同　上
15	26	現代宗教から見た人間と世界Ⅲ 神から見た世界	人間のとらえかたに二種類があったように、世界に対する見方にも、内在的・主観的なものと超越的・客観的なものがある。前者で世界は人間の活動の場所、利用する資源となる。それに対して世界を与えられたものとして、世界そのものとして見る立場があるはずである。	同　上

＝ 人 間 の 歴 史 ＝

— 日本女性史 —

〔 主任講師：笠原一男（元東京大学教授） 〕

全体のねらい

日本の女性史を日本の女性と信仰生活史のなかで考える。日本の女性には古代社会においては仏教の救いから拒否され、男性との間に修行と救済の両面で大きな差別が存在した。それが中世社会においては男女平等の形で女性の宗教による救いが説かれるようになった。さらに近世以後、近い現代においては女性教祖の誕生を見るほどになった。このような女性と宗教との関係は、日本女性解放史の宗教的視角からの究明ということが出来る。

これが、現在考えている日本女性史のねらいである。

主な項目

- (1) 女性を救いと修行から差別し、拒否する古代仏教の聖域。
- (2) 巷に生きる古代の女性と仏教。
- (3) 女人往生論を説く鎌倉仏教。
- (4) 近・現代社会における女性教祖の誕生と女性救済の論理。
- (5) 膨大な男女に救いを説く女性教祖。

＝ 文化の形成と普及 ＝

— 仏教の日本土着化の過程 —

〔 主任講師：笠原一男（元東京大学教授） 〕

全体のねらい

日本の歴史は外国文化の選択的摂取を通じて形成されてきた。それは思想・宗教・制度・衣食住のすべてについていえることである。ここでは、外国文化の一つとして日本人に摂取された仏教が、約1,400年の日本人との関係の中で、日本人の生活の中に土着化して行人過程を、仏教の伝来以来現在にいたる歴史のなかで考える。この問題の究明によって日本人が外来文化を摂取する場合の基本的姿勢、つまり日本民族の心ともいべきものをさぐってみた。

主な項目

- (1) 仏教の心と救いの条件を探究する古代社会の日本人。
- (2) 仏教の救いを全日本人の手の届くところへおろした鎌倉仏教。
- (3) 転換期の時代 — 鎌倉初期、明治初期、終戦当初 — の日本の民家と宗教。
- (4) 日本史上の宗教者の行動と思想。

= 文 学 と 芸 術 =

〔主任講師：長谷章久（埼玉大学教授）〕

全体のねらい

文学も芸術の一環であるが、言語あるいは文学を媒体として人間の思想・感情・想像を美的に表現している点が、造型美術と呼ばれ視覚に直接訴えかける絵画・彫刻や聴覚中心の音楽と根本的に異なっている。この相違点を分析するとともに、文学と他の芸術とが古来密接に関連し合っている事実例えば絵巻や舞台芸術の如きを生んで効果を発揮していることを考慮し、これらの諸点について検討を加える。

主な項目

- (1) 文学と芸術
- (2) 唐絵と大和絵
- (3) 文学絵巻の種々相
- (4) 平曲（平家琵琶）の鑑賞と批評
- (5) 舞台芸術各論 ― 能・人形浄瑠璃・歌舞伎・オペラ等

＝ 日本 の 生活 文化 史 ＝

－茶の湯といけばなを中心に－（→生活と芸術）

主任講師：山根有三（群馬県立女子大学教授）
熊倉功夫（筑波大学助教授）
放送局：テレビ朝日

全体のねらい

日常生活に即した「茶を飲み」・「花を生ける」ことから、日本独自の芸能ないし芸術として知られている「茶の湯」・「いけばな」が、いつ、どうして成立し、現在でも栄えているのはなぜか。その歴史を中心に、生活・芸術・自然を一体とする日本文化の特質に触れてみたい。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	56/12 18	日本の生活文化史 －はじめに－	生活文化とは何か。平安・鎌倉時代の貴族を中心とする生活の芸術化とその伝統。日本人の生活（衣・食・住）の基本的なスタイルが確立した室町時代以後における生活に即した新しい文化とその普及。床の間のことや、茶の湯といけばなの意義などを考えてみたい。	山 根 有 三 (群馬県立女子 大 学 教 授) 熊 倉 功 夫 (筑波大学助教授)
2	15	茶の文化の成立	人類がいつから茶を飲用したかわからないが、約二千年前の中国の文献には茶の記事が初めて現われる。中国の茶の文化は唐代に大きく成長し、日本にも九世紀に伝わっている。さらに鎌倉時代に再び茶の文化が禅宗とともに渡来し、日本的な展開をとげた。	熊 倉 功 夫
3	22	供える花と飾る花	「花を瓶に挿す」ことは、まず、仏に供える供華として、とくに密教伝来の九世紀以後に盛んとなる。また平安時代の貴族は愛する草花を瓶に立てて楽しんでた。鎌倉時代の絵巻などを例に、それらの供花や観賞花が生活空間に取り入れられてゆくさまを眺めてみたい。	山 根 有 三
4	57/1 5	南北朝時代の生活 と文化	鎌倉末以後、禅宗を背景に数多く輸入された中国宋元時代の書・画・工芸品は武家や公家によって唐物として珍重されそれらの唐物を誇示した会所（接客空間）で、茶寄合や花合せが盛んとなる。室町初期の書院造の形成に伴い、それは「座敷飾り」として洗練され、それを母胎として、茶の湯といけばなが確立する。	山 根 有 三 熊 倉 功 夫
5	12	書院の茶の湯	室町時代の武家文化の発達に伴い、武士の礼法、室礼、飲食などの面で新しい様式が完成される。そうした様式の一つの核となるのが書院造における茶の湯で台子の茶といわれる規式正しい道具の扱いや点前法が行われたといわれる。器物を見ながらその姿を具体的に述べる。	熊 倉 功 夫
6	19	室町時代のいけばな	「花を瓶に挿す」ことにおいて、技術や方法が問題となりはじめたのは、室町時代、十五世紀の中葉。その核となったのは、座敷飾りの中心をなす「三具足の花」。座敷飾りの普及は略式の飾りを生み、いけばなの役割が増大する。それらの種々相と理論を初期の花伝書などにより述べる。	山 根 有 三
7	26	わび茶の成立	京・堺などの都市には経済的に豊かな新興町衆が登場する。彼らは武家貴族の遊びであった茶を自らの生活のなかにあみなおし、“やつし”の美ともいうべき粗相の美をもって茶の湯の建築や道具を創造した。村田珠光と武野紹陽の茶をとおしてわび茶の成立をみる。	熊 倉 功 夫

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/2	千　利　久　の　茶	わび茶の大成者千利久の茶とはどのようなものであったのか。日常生活の様式を借りながら、非日常的な体験を創造するために、庭や茶室に新しい工夫をこらし主客の礼法を完成させたのが利久の茶である。戦国時代の下剋上の文化とあわせて利久の茶を考えたい。	熊　倉　功　夫
9	9	池坊専好の立花 (りっか)	室町末から座敷飾りとしての花以外に花を立てること自体を楽しむ花会が行われた。江戸初期の後水尾天皇は寛永年間に宮中や仙洞御所でしばしば花の会を開かれたが、その花会を指導したのが池坊専好(二代)でいけばな史上最大の天才。この専好により自然と造形の合致したいけばなの古典・立花様式が完成した。	山　根　有　三
10	16	元禄町人といけばな	専好が大成した立花様式は公家・僧侶から裕福な町人層に普及、大住院・周玉・藤掛似水・寓春軒仙溪などの名手がでて、造形美を競った。しかし江戸中期より、その巨大化や類型化に対する反省から、より自由で自然を生かした抛入花が再興した。	山　根　有　三 工　藤　昌　伸 (いけばな芸術 協会事務局長)
11	23	茶の湯文化の普及	茶の湯の発達に伴って、茶の湯の美意識や、礼法、さらに食事様式などが、生活文化の各方面に大きな影響を与えた。例を懐席料理などにとって探ってみよう。さらに江戸時代には町人の遊芸として茶道が大衆化する一方、庶民生活には煎茶が普及していく点もみのがせない。	熊　倉　功　夫
12	3/2	化政文化といけばな	自由な抛入花は、せいぜい間口一間・奥行三尺の床の間をもつ多くの住宅の座敷飾りに適するものとして迎えられた。しかし江戸後期には次第に格式化を強め立花様式の簡略式ともみられる生花(せいか)様式が誕生。生活の飾り、教養、遊芸として、広く町人層に普及した。	工　藤　昌　伸
13	9	近代の茶の湯	伝統文化としての日本の生活文化は近代を迎えて厳しい試練にであうことになる。茶の湯も従来の遊芸性から脱脚して精神性を強め、また支持者層もそれまでの武士や上層町人にかわって財界人や、一般大衆に求められた。茶の湯の近代文化としての再生の道をたどる。	熊　倉　功　夫
14	16	近代のいけばな	明治以後の厳しい生活の変化に際しても、日本人の自然愛を根底とするいけばなは、一方で古い様式を保存しながら、他方で新しい生活や芸術に即応する活力をもち、洋花の採用や自由花の運動を展開、女性にひろまった。戦後の専門化には造形芸術への強い志向をみる。	工　藤　昌　伸
15	23	生活文化の回顧と 展望 —まとめ—	戦後の日本の日常生活は衣・食・住とも、かつてないほど大きく変わりつつある。日本文化の特質を端的に示す、生活文化として、長い伝統をもつ茶の湯やいけばなは、今後どうなるであろうか。単なる伝統文化として保存されるのか。新しい世界的な生活文化の形式に寄与するものはなにか。	山　根　有　三 熊　倉　功　夫 工　藤　昌　伸

＝ 日 本 の 教 育 ＝

〔 主任講師：深谷昌志（放送大学教授） 〕

全体のねらい

教育についての入門コースにあたるため、教育現学を巾広い角度からとらえるのを狙いとする。そのさい、学問的な体系から離れて身近かな教育問題の中から、よく考えると、深い重みを持つテーマを選んで扱う形をとりたい。とりあえず、15のテーマを選び、教育考現学とでもいう型式の講義を展開していきたい。特に、日本の教育は、他の国の教育と比べ、長所や短所を備えているので、そうした特性を具体例を通して提示したいと思う。なお、こうした構成を考えているため、数名の共同研究者の協力を得るのを予定している。

主な項目

入学式、教科書、給食、学力、入学試験、教師、学歴、修学旅行、部活動、女性の教育など、15の項目を選び、歴史的な背景や、比較教育的な角度からの分析をまじえて、それぞれのテーマを掘り下げていきたい

＝ 人 間 と 社 会 ＝

主任講師：加藤秀俊（学習院大学教授）
 放送時間：午前 7 時 45 分～午前 8 時 30 分
 放送局：ラジオたんぱ

全体のねらい

社会と人間の関係を探究することは、社会学のもっとも中核的な課題であると同時に、その明確化はきわめてむずかしい。このコースの前半では、動物としての人間というわれわれの存在の根源にまでさかのぼり、社会と人間の関係の多様性を学習し、後半ではそれをふまえて、現代日本の社会の諸問題をとらえる手がかりを用意したい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/12 8	社会とは何か	「社会」ということばによって、どのようなことが意味されるのであろうか。この地球上に生きている百万以上の生物界ぜんたいを見わたし、「種」社会をそのなかでの個体の役割を、ひろく生物社会学の立場からとらえてみる。	加 藤 秀 俊 （学習院大学教授） 今 西 錦 司 （京都大学名誉教授）
2	15	動物の社会 人間の社会	動物はかなり素朴な段階から社会を形成してきている。そうした動物社会の諸相を具体的事例によって紹介しながら動物社会と人間社会とが、どのような点で連続し、どのような点でちがうのか、についての問題点を整理する。	加 藤 秀 俊 日 高 敏 隆 （京都大学教授）
3	22	メラネシアの 人間と社会	メラネシアの大部分は、まだ国家形成をとげる以前の部族社会である。ここでは、主としてニューギニア高地の人びとが形成する社会をとりあげ、はげしいリーダーシップの交替の背景にある諸要因をさぐることをこころみる。	加 藤 秀 俊 畑 中 幸 子 （金沢大学教授）
4	58/1 5	アフリカの 人間と社会	人類は、その初期の段階で、いわゆる狩猟・採集社会のなかで生活していたとおもわれる。そうした、定着社会以前の人びとの姿にちかいものが、こんにちの世界にも存在する。それをアフリカの事例を中心に考察する。	加 藤 秀 俊 山 口 昌 男 （東京外国語大学教授）
5	12	ヨーロッパの 人間と社会	「社会」と「個人」という二分法は、近代ヨーロッパから生まれた。このふたつの概念によって意味されるものを、北イタリアの村落の事例に即して検討し、その歴史的背景と現代における展開をあきらかにすることをこころみる。	加 藤 秀 俊 谷　　　　泰 （京都大学教授）
6	19	東南アジアの 人間と社会	日本の稲作文化は東南アジアからつたわったものとされている。農業的に定着した社会のひとつの事例として、タイの農村をとりあげ、安定した村落社会と、そのなかでの人間の行動様式の諸特徴をとらえることをこころみる。	加 藤 秀 俊 飯 島　　茂 （東京外国語大学教授）
7	26	インドの 人間と社会	人間の社会は、大規模な定着化とともに分化をとげるようになってきた。そうした分化のひとつに階層分化がある。インドのカースト制度はその一例であろう。その事例をつうじて、階層社会での人間の生きかたをさぐる。	加 藤 秀 俊 佐々木 高 明 （国立民族学博物館教授）

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/2	アメリカの 人間と社会	多くの社会は、たんなる階層分化のみならず、さまざまな人種と民族の混住によって成り立っている。そうした多民族国家の一例としてアメリカ合衆国がある。その多民族国家社会の諸問題と、将来への展望を考察する。	加 藤 秀 俊 David Plath or J. Bailey (アイオワ大学教授)
9	9	拘束としての社会	われわれの日常生活をふりかえってみても、社会はしばしば拘束的である。法律だの、制度、慣習、あるいはしきたりと呼ばれるものはどのようにして生まれそれらはひとりひとりの人間の行動とどうかかわるのかを検討する。	加 藤 秀 俊
10	16	近代の組織原理	かつて、人間は地縁・血縁という原理によって生活していた。しかし、近代社会は、そのような人間関係の組み方を根底からくつがえすことによって成立したとかがえてよい。その社会変化の過程を主題として考察する。	同 上
11	23	シンボルと社会	人間は、社会への帰属意識をすくなくとも潜在的に抱いている。それを顕在させ、かつ強調するために、社会は、たとえばトーテムのような共同経験の対象としてのシンボルをつくってきた。そうしたシンボルと社会を考察する。	同 上
12	3/2	ひき裂かれる自我	近代から現代にかけての人間は、複数の集団に所属し、それぞれの集団で特定の役割をうけもたなければならぬ。そこでは「自我」とはなにか、という問いが浮き上がってくるしまた、そこから社会病理的な問題も派生してくる。	加 藤 秀 俊 小比木 啓 吾 (慶応義塾大学教授)
13	9	社会をかえる力	人間と社会とは相互刺激的な性質をもつ。社会は人間にたいして拘束的だが、同時に、人間こそが社会をかえる力の唯一の源泉だ。技術革新をもふくめて、そもそも社会の「進歩」とはどのようにして生まれるのか、を問題とする。	高 橋 徹 (東京大学教授)
14	16	日本の人間と社会	まえにみた世界のさまざまな社会についての事例や、現代社会の特質に関する考察をふまえて、いまの日本社会で、ひとりひとりの人間がもっている行動様式や、それと関連する諸問題を整理して、生きた学問としての社会学を論ずる。	加 藤 秀 俊
15	23	社会と社会学	これまでシリーズは、人間と社会のすべての問題をあきらかにしたわけではない。最終回では、これから受講者がみずからかんがえ、研究をつづけてゆくための問題領域を示唆し、主体的な学習のための手がかりをしめす。	青 井 和 夫 (津田塾大学教授)

＝ 社 会 生 活 と 法 ＝

〔主任講師：伊藤正己（東京大学教授）〕
 放送時間：午前6時15分～午前7時
 放送局：テレビ朝日

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	54/8 21	法　と　常　識	日本人は、法に対して親近感が薄く、権利の意識が明確ではない。しかし、法は常識に基礎をおくものであり、一般の人でも法の常識をそなえ、また、法や裁判も常識と遊離しないことが必要である。	伊　藤　正　己 （東京大学教授）
2	28	法　を　学　ぶ　意　味	法学の中心をなすのは、法解釈学である。それが科学であるのかどうかは争いがあるが、これを学ぶことによって、法的なものの考え方を習得し、論理的な判断力を養うことができる。	同　上
3	9/4	法　と　は　何　か	法を定義することは難しいが、それは、風習、集団内部のしきたり、道徳などとならんで、人間の行動を規律する規範であり、それらのうち最も強制力の強いものである。	同　上
4	11	法　と　道　徳	法と道徳とは、行為規範として密接な関係をもつとともに、異なる役割をはたしている。この両者を区別するものが何かを考えることにより、法の特質を明らかにすることができる。	同　上
5	18	法　は　必　要　か	「社会があるところに法がある。」といわれるが、古くからいろいろな根拠で法は必要でないという主張がある。これに対して、法は必要であることをどう論証するか。	同　上
6	25	法　と　強　制	実際に行われない法は意味がない。そこで、法がどのようにして強制されるかが問題になる。法はそれぞれの目的や任務にしたがって多様な強制手段をそなえている。	同　上
7	10/2	悪　法　と　は　何　か	悪法も法であるという考え方と悪法は法ではないという考え方は、古くから対立しており、特に日本では悪法論議がさかんであるが、何が悪法なのかを考えてみる必要がある。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	9	悪法は法であるか	悪法も法であるかどうかを考えるには、法の目的、機能の理解が必要である。そこに法実証主義と自然法論という法思想の二つの潮流の対立をみることができる。	伊　藤　正　己
9	16	悪法を防ぐもの	抽象的な議論よりも、悪法をどう防ぐかが實際上重要である。近代の国家は、議会制や司法審査制などの仕組みを通じて悪法を防いでいる。最も問題になるのは抵抗権である。	同　上
10	23	裁　判　の　働　き	法は具体的事件に適用されねばならないが、近代国家は、それを主として裁判所の任務としている。そこで、現代の法を明らかにするために、司法権のあり方を考えることが重要になる。	同　上
11	30	裁　判　の　基　準(Ⅰ) — 成　文　法 —	裁判は法を基準として行われる。そこで裁判の基準となる法が何かを考察する必要がある。まず、近代の国家では、法のうち成文法が重要であり、その種類を明らかにせねばならない。	同　上
12	11/6	裁　判　の　基　準(Ⅱ) — 慣　習　法　と　判　例　法 —	成文法を補うものとして、慣習法と判例法とがある。それらは、どのような意味をもち、どのような働きをするのだろうか。	同　上
13	13	裁　判　の　基　準(Ⅲ) — 学　説　と　条　理 —	学説は法となりうるか。さらに、適用すべき法のないとき、条理によって裁判ができるか。現代の法は、一般条項を通じて、実際には条理による裁判の道を開いているともいえよう。	同　上
14	20	法　の　解　釈	法は、それを適用するにあたって解釈しなければならない。法の解釈とはどういうことか。正しい解釈をどうして選べるのか。法を作った人の意思をどうみたらよいのか。	同　上
15	27	解　釈　の　方　法	法の解釈には、文理解釈、論理解釈、目的論的解釈など多くの方法があり、法の概念も相対的である。法を生かすための正しい価値判断をするために、法的なものの考え方が重要になる。	同　上

＝ 比 較 政 治 I ＝

主任講師：河合秀和（学習院大学教授）
 齊藤 真（国際基督教大学教授）
 百瀬 宏（津田塾大学教授）
 放送局：ラジオ関東

全体のねらい

国家を単位として、政治の比較研究を行う。国家は各々個性的であるが、「似たもの同士」で国家群に分類し、国家群間の比較、国家群内の比較を行う。このような比較を通じて、各国についての知識を得るだけでなく、政治という現象の多様な問題点をより深く理解するようにしたい。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	56/8 24	序 論(1) —目的と方法—	この比較政治Iで扱うのは、東欧を含めた欧米、つまり（日本を除く）先進工業諸国である。それはさらに自由民主主義国家群とソ連を中心とする社会主義国家群とに分けることができる。このように国家を分類し比較することにどんな意味があるのかを、これまでの比較と尺度とを合わせて考える。比較の基準としては、国家の独立と統一という意味での国民主義、自由主義、民主主義、社会福祉を含めた社会主義の四つを選び、各国について、その四つがどう関連しているかを見る。	齊 藤 真 (国際基督教大学教授) 河 合 秀 和 (学習院大学教授) 百 瀬 宏 (津田塾大学教授)
2	31	序 論(2) —尺度と基準—		河 合 秀 和
3	9/7	イギリスの場合 —島国と連続性— (1)	イギリスは早くに国家統一を実現し、世界最初の産業革命を体験した。革命や戦乱に見舞われることも少なく、いわゆる「不文憲法」のもと、社会は過去との連続性を保ちながら発展した。国民主義、自由主義、民主主義、社会主義は、その順序で順調に、先のものを含み込みながら発展した。この国について、政府機構、代表制（政党、圧力団体）の発展過程をたどり、国家別の比較政治研究にとっての1つのモデルを打ち出したい。イギリスの政治制度と理念は世界各地に拡がったが、イギリス連邦諸国についても展望しておきたい。	同 上
4	14	イギリスの場合 —島国と連続性— (2)		同 上
5	21	アメリカの場合 —連邦制と権力分立—(1)	イギリスの植民地として、アメリカにはイギリス的制度が移植されたが、アメリカ的な風土の下で、その制度は大きく変容する。主として、イギリスと比較しつつ、アメリカの政治制度と機能とを学びたい。前半では、アメリカ人の政府観、憲法観を検討し、その憲法の下での連邦制及び三権分立制の構造を明らかにする。後半では、その制度を実際に動かすものとして、大統領のリーダーシップ、政党の役割、圧力団体の活動、裁判所の政治的機能などを検討したい。	齊 藤 真
6	28	アメリカの場合 —連邦制と権力分立—(2)		同 上
7	10/5	フランスの場合 —革命と伝統—	フランス大革命の伝統は、フランス史の中に何度も再現してくる。フランスは、大革命以後16回も憲法を変えた。この革命的伝統とでもいふべき逆説を明らかにすることによって、イギリス、アメリカとの比較を進めたい。いくらフランス史に立ち入ることになると思うが、それというのもこの国が「比較を絶した」独自性を有しているからである。	河 合 秀 和

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	12	ド　イ　ツ　の　場　合 —先進と後進—	ドイツが統一国家になったのは、1871年、国家の形成には遅れたが経済発展、社会主義運動の発展では、きわめて急速で、遅れた国の早い発展ぶりを典型的に示している。今世紀二度の敗戦ファシズムの出現など、国際政治によって国の進路は大きく左右された。現在のドイツは東西に分割されており、そのことが現在の西欧世界の安定の条件ともなっている。	河　合　秀　和
9	19	北　欧　の　場　合 —中立と福祉—	西欧外周に位置する後進的地域でありながら、列強紛争からの隔離に利せられた急速な工業化を通じて福祉国家を築いたスキャンディナヴィア諸国における、多党政治とそれを機能させてきた「組織社会」について考察する。	百　瀬　　宏
10	26	日　本　の　場　合 —中間のまとめ—	これまで述べてきた比較政治論の方法と英米仏独北欧の事例のまとめを兼ねて、この章では日本を論じる。これまでの考え方と知識からすれば、日本はどのように捉えられるかが、この章の課題である。	河　合　秀　和
11	11/2	ソ　連　の　場　合 —国際革命と一国社会主義—(1)	国際革命への期待を裏切られたソヴィエト政権は、ロシア帝国の多くの負の遺産をかかえながら、かつ敵対的な国際環境のもとで社会主義を建設する課題に直面した。第2次世界大戦後の変化した内外条件のもとでもなお、「一国社会主義」	百　瀬　　宏
12	9	ソ　連　の　場　合 —国際革命と一国社会主義—(2)	時代の体質を脱却しえていない。ソ連憲法に示された理念と現実、ソ連共産党による一党支配がもつ機能、労働組合が果たす役割、多民族国家としての問題点に注目しつつ考察する。	同　上
13	16	東　欧　の　場　合 —団結と多元化— (1)	19世紀から20世紀にかけて多民族帝国の解体の結果独立し、かつ西欧の停滞した外周部分として位置づけられていた東欧諸国は、第2次世界大戦後、「社会主義共同体」としてソ連と強く結びつく反面、一元的な統御に抗して民族的伝統のうえにそれぞれの道を模索してもいる。	同　上
14	23	東　欧　の　場　合 —団結と多元化— (2)	この点を踏まえながら、ソ連政治との、また東欧諸国相互の異同を検討し、また「自主管理社会主義」の理念を掲げるユーゴスラヴィアについても考察する。	同　上
15	30	シ　ン　ポ　ジ　ウ　ム —総括と展望—	以上14回の講義の成果をふまえてもう一度、いわゆる欧米諸国の政治について、その共通性と各国との特殊性とに注目して、総括的に比較討論を行い、さらに比較政治Ⅱへの展望を行う。	斉　藤　　真 河　合　秀　和 百　瀬　　宏

＝ 比 較 政 治 II ＝

〔 主任講師：小田英郎（慶応義塾大学教授）
放 送 局：ラジオ短波 〕

全体のねらい

本書では、発展途上地域（中国、東南アジア、南アジア、中東、アフリカ、ラテンアメリカ）の政治について比較学的考察をおこなう。具体的には、各地域の歴史にも触れながら、主として独立期以後における国家建設と近代化の問題を取りあげ、それぞれの政治文化、イデオロギーと政治体制、国際政治への対応などを比較する。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/8 23	序　　　　　　論 －比較の方法－	比較の方法として、伝統と近代化との緊張関係、国民的統合、政治・社会体制、国際社会に対するイメージと対外行動の四つの側面で、各地域がどのような特殊性と共通性をもっているかを検討し、その総合的把握を試みる。	小　田　英　郎 (慶応義塾大学教授)
2	30	中　　　　国　(1) －革命と近代化－	西欧の衝撃のもとで、伝統社会から近代国家への成長をめざして苦悶した中国の歴史的経験をかえりみる。	岡　部　達　味 (東京都立大学教授)
3	9/6	中　　　　国　(2) －革命と近代化－	社会主義的発展途上国である現代中国が、革命の完成、建設、独立の確保にあたって当面した諸問題を考察する。	同　上
4	13	東　南　ア　ジ　ア －ASEANと インドシナー	人類、宗教、言語……世界のなかでもっとも多様性に富むこの地域の、国民的統合と近代化の努力のあとを、その複雑な国際環境にも触れながら考察する。	松　本　三　郎 (慶応義塾大学教授)
5	20	南　ア　ジ　ア －苦悩する インド半大陸－	9億の人口の圧力と、改善されぬ貧困にあえぐ南アジア諸国の前途は厳しい。古い政治文化とイギリスの植民地としての歴史的経験のうえに、混合革命方式によって国家建設をはかってきたインドを中心に考察する。	同　上
6	27	中　　　　東　(1) －古さと新しさの モザイク－	現代中東の政治を考える出発点として、気候、地勢にも触れながら歴史について概観する。中東の歴史は「ここに歴史始まる」といわれるほどに古いが、そのなかで生まれた伝統や文化に触れながら、中東諸国の独立達成までを考察する。	青　木　一　能 (日本大学助教授)
7	10/4	中　　　　東　(2) －中東政治の 展開軸－	独立後の中東政治を規定してきた中東紛争と、それに対するアラブ諸国の団結と分裂について考察し、さらにサードットのイスラエル訪問とそれ以後に生じた変動を、中東政治の多元化に触れながら検討する。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所　属・氏　名)
8	11	中　　　東　(3) —変動と模索—	社会主義から君主制にいたるさまざまな体制をもつ現代中東諸国の政治について考察し、それぞれの道を模索する状況とそこでの変動要因について、中東地域と国際社会との関係を考慮しつつ検討する。	青　木　一　能
9	18	ア　フ　リ　カ　(1) —歴史的復権の志向とナショナリズム—	歴史的復権への志向が現代のアフリカにおいてなぜ強いのか、そうした志向はナショナリズムにどう反映しているか、といった問題を、植民地時代を振り返りながら考察する。	小　田　英　郎
10	25	ア　フ　リ　カ　(2) —近代化と政治体制—	アフリカ的社会主義、一党支配体制、軍部支配体制など、国家建設および近代化の過程において出現した、イデオロギーや政治体制を考察し、あわせて南部の白人人種主義支配体制にも論及する。	同　上
11	11/1	ア　フ　リ　カ　(3) —団結と多元化—	パン・アフリカニズムの名のもとに大陸全体の統一・団結をめざしている反面、国家的自己主張によって対立を強め、多元化の度合をたかめつつあるアフリカ圏内の国際関係、および非同盟主義を軸とした第三世界連帯運動への反応を考察する。	同　上
12	8	ラテンアメリカ(1) —寡頭支配的政治体制—	序論として、現代ラテンアメリカの政治現象の諸特徴を指摘したのち、それらの歴史的淵源である植民地時代以来の寡頭支配的、権威主義的政治体制を考察する。	加　茂　雄　三 (青山学院大学教授)
13	15	ラテンアメリカ(2) —民衆の登場と政治の近代化—	民衆の政治舞台への登場を契機とする現代国民国家の形成、近代化された権威主義政治体制、現代政治における軍部の役割などの諸問題について考察する。	同　上
14	22	ラテンアメリカ(3) —国際政治の展開—	対米関係の歴史と現段階、ラテンアメリカの地域主義、第三世界主義、および非同盟主義運動との関係などに言及しつつ、ラテンアメリカの国際政治の展開について明らかにする。	同　上
15	29	シ　ン　ボ　ジ　ウ　ム —総括と展望—	14回の講義の成果を踏まえて、もう一度、発展途上諸地域の政治について、それぞれの特殊性と共通性を整理しながら、総括的に比較討論をおこなう。	小　田　英　郎

＝日本経済と産業と企業＝

〔主任講師：磯部浩一（明治学院大学教授）〕
 黒澤一清（東京工業大学教授）

全体のねらい

本講は日本経済の全体の姿（国民経済の構造）を、国民所得勘定を用いて構造的に把握する。次に日本経済を構成する産業と企業の構造的な相互関連を明らかにする。さらに産業組織や企業経営のレベルにおける歴史的、構造的な特徴をうきばりにすることが本講のねらいである。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	日本経済－産業－ －企業－	この講義の導入部として、本講義で論じられる内容がどのような一般的枠組みの中に位置づけられる、どのような問題意識に従って取り上げられるかを明らかにする。	黒　澤　一　清 （東京工業大学教授）
2	日本経済と企業 （国民所得勘定と企業）	最も単純な経済循環モデルから、国民所得勘定（企業部門、家計部門、政府部門、海外部門）の体系を示す。それは日本経済を構成する諸部門の構造的連関を統計的に示すものである。	磯　部　浩　一 （明治学院大学教授）
3	日本経済と企業 （国民所得勘定と産業）	生産国民所得によって、産業の付加価値額の構成比を示し、歴史的な変化を明らかにする（産業構造の変化）。あわせて産業連関表を説明する。	同　上
4	国民経済計算による日本の産業と企業	国民経済計算によって日本経済の全体の姿を展望し、その中に産業と企業部門とを位置づけて、相互の関連を理解する。	同　上
5	日本経済・産業・ 企業の歴史的展開	(1)主として国民所得統計により日本経済および産業の歴史的発展を跡づける。 (2)日本経済、産業の構造的な展開を明らかにする。	同　上
6	日本経済の発達と貿易	日本経済の発展において貿易の果たしてきた役割を明らかにする。とくに、国際収支表によって、その特色を明らかにしたい。貿易摩擦や産業調整問題にもふれる。	同　上
7	日本経済の発達と財政・金融政策	先進資本主義国へ追いつくために、強力な中央銀行のもとで信用創造による資金の調達と、政府主導下の大企業育成策がとられた。資本市場の発達が遅れたために、間接金融が企業の資金調達の方式となった。（資金循環表と国富表を示す）	同　上

回	テ　　ー　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	産 業 構 造 の 特 徴	日本における産業の形成と発展の過程にみる特殊性、第2次大戦後の産業発達、及び第1次オイルショック以降における新しい産業展開を、どのように見ることができるかを考える。	黒 澤 一 清
9	産業組織の特徴(1)	日本産業にかんする産業組織論上の特徴として、本章ではまず独占禁止政策及び寡占問題をめぐる基本的論点をまとめてみる。	黒 澤 一 清
10	産業組織の特徴(2)	前章にひきつづいて、日本産業における技術進歩の基本問題、及び消費者、地域社会等産業をめぐる社会的環境の諸問題を考える。	同 上
11	日本経済における 中小企業問題	相対的な業績資本不足と相対的な労働過剰の下で、急速な成長をした日本経済において、中小企業の問題性が国民経済の構造的矛盾としてあらわれた。中小企業問題の展開の特殊性と一般性を明らかにしたい。	磯 部 浩 一
12	日本企業の経営史 的特徴	戦前までの日本企業の歴史的特徴は、財閥本社を頂点とするピラミッド型で、かつ多角化された企業の資本的管理の展開、労働力の定着のための終身雇用と年功序列型賃金制度による労務管理、さらに先進国から導入された生産管理や予算管理が組織的に展開されたこと、また移植工業における中小企業の下請の利用の展開等があげられる。これらをできるかぎり具体的に把握する。	小 林 靖 雄 (放送大学副学長)
13	日本企業の国際競争力	日本企業は今日極めて高い国際競争力をもち、世界市場に進出している。それは高度の技術・製品開発力、近代的設備の装備、人材育成、経営管理力の強化を基盤としてえられる高い生産性に支えられている。その実態を具体的に明らかにする。	同 上
14	日本的経営の特徴	日本企業の経営管理の特徴は、その歴史、社会的環境に大きく関係しているが、終身雇用と年功序列賃金制度に育まれた集団主義的経営が展開し成果をあげる基盤となっている。この点を先進国との比較において展開する。	同 上
15	日本経済の特色と 今後の課題	政府の軍事費支出の比重の低いこと、民間部門の設備投資が高度成長の促進要因であり、消費支出の増大が国内市場の拡大、日本産業の輸出競争力を高めた。石油ショック以降、低成長経済下の国際化の進展により貿易摩擦の回避、国内市場の開放、産業構造の技術集約化等の課題を示す。	磯 部 浩 一

＝ 地 球 と 宇 宙 ＝

〔主任講師：奈須紀幸（東京大学海洋研究所長）
小尾信彌（東京大学教授）〕

全体のねらい

人間の活動の場としての地球、1個の天体としての地球を取り巻く宇宙について、その全体像がどのように変遷してきたか、現在の地球や宇宙の観測や探査がいかに行われているか、それによって得られた成果にもとづく地球像や宇宙像がどのようなものであるかを学ぶ。人間とのかかわりを含めて広い視野から考察する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	宇　宙　観　の　歴　史	古代から現代まで、人間の宇宙観がどのように変わってきたかを述べる。それは、文化一般の進展、周辺の科学や技術の発展と切りはなすことができないが、ここではさまざまな視点から宇宙観の変遷をながめ、考察する。	小　尾　信　弥 (東京大学教授) 奈　須　紀　幸 (東京大学海洋 研究所長)
2	現代の宇宙観測と探査	昔からの光学観測に加えて、近年は電波や赤外線観測、地球大気圏外からの紫外線やX線観測が宇宙の研究には欠かせない。さらに惑星などの直接探査も盛である。宇宙の観測と探査について、現状と展望を述べる。	小　尾　信　弥
3	宇宙の階層構造	現在の宇宙の特徴の一つは、物質が階層化し、多様化し分化していることである。銀河集団、銀河、星団、恒星、冷たい天体、生物という宇宙の階層構造を概観するとともに、その空間的、時間的な広がりを認識する。	同　上
4	宇　宙　の　構　造 (膨張宇宙)	有限な天球に恒星がちりばめられていると考えられた昔から今日まで、宇宙全体の構造についていろいろなモデルが考えられてきた。現在一般に受け入れられている膨張宇宙について、理論的な基礎と観測的裏付けをもとに概説する。	同　上
5	宇　宙　の　進　化	およそ200億年前に爆発的に開闢したわれわれの宇宙では、膨張に伴って温度や密度が下がるのにつれて、元素が形成され、銀河や恒星がつけられてきた。その意味で膨張宇宙は、進化宇宙であるといえる。そのような宇宙を概観する。	同　上
6	宇宙進化と地球	地球が誕生したのは約46億年以前であるが、それまでには長い宇宙進化の歴史がある。ここでは、地球を含む太陽系の誕生に至る背景を述べるとともに、その形成の過程を概観し、われわれの地球が存在する宇宙的な意味を考える。	小　尾　信　弥 奈　須　紀　幸
7	地・球　間　の　歴　史	古代から現代にいたるまでの間の人々の地球観の変遷について述べる。例えばギリシャ時代すでに地球の大きさを測ったエラトステネスの業績などを紹介する。科学・技術の進歩とともに人類の地球観は最近飛躍的な進展をみせている。	奈　須　紀　幸 小　尾　信　弥

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	現代の地球探査	地球についての観察や研究を行うに際して、現在どのような探査が実施されているのか、その内容について概説する。例えば、地球内部の構造の推定には主として地震波による測定が行われていることを紹介する。	奈　須　紀　幸
9	地　球　の　構　造	地球は固体地球と、その表層に分布する水圏と、さらに高空までを覆う気圏によって構成されている。固体地球の内部を含めて地球は層状構造を形成している。この層状構造に注目して地球の構造を学ぶ。	同　上
10	岩　石　と　鉱　物	固体地球の内部の構成物については種々推定はなされているが不明な点も多い。一方、固体地球の表層を構成するのは岩石であり、その最小単位の構成物が鉱物であることはよく知られている。これら岩石や鉱物の種類や特徴について学ぶ。	同　上
11	大　気　と　海　洋	固体地球の表層を覆う大気と海洋はそれぞれ独特の性質と特徴を示す。一方、大気と海洋の間の相互作用も密接なものがある。大気および海洋の特性をそれぞれ学んだ上で、大気と海洋の相互関係まで立入って学ぶ。	同　上
12	地　球　の　歴　史	地球はその創性からほぼ50億年に近い歴史を編み続けてきたといわれる。その間にどのような事柄が起きたのか、主として生物界の変遷と地球表層の変動の跡を辿って地球の歴史を学ぶ。地質時代の歴史に主眼を置いて学習する。	同　上
13	プレートテクトニクス (現代の地球観)	1967年から68年にかけて提唱されたプレートテクトニクスは、固体地球の表層の変動に関する実体をほぼ解明したと云える。その内容と、そこにいたるまでの研究の足跡について、大陸移動説の提唱の時点から辿ってみる。	同　上
14	火　山　と　地　震	地球の表層では火山と地震が生起する場所がある。これら火山や地震は主として火山帯と地震帯の中に集中している。何故、このように限定された地域に火山や地震が集中するのか、その原因を探りかつ火山や地震の実体について学ぶ。	同　上
15	人間と地球・宇宙	地球・宇宙の中における人間の存在という事実をまず認識し、そのかわりについて思考する。そのような基礎認識の上に立って、人間生活や科学・技術、さらに社会と、自然としての地球・宇宙の関係の深さを学ぶ。	奈　須　紀　幸 小　尾　信　弥 他

＝ 物 質 と エ ネ ル ギ ー ＝

〔主任講師：池上雄作（東北大学教授）〕
放 送 局：ラジオたんぱ

全体のねらい

物質とエネルギー、そしてそのかわりあいを広い視野から解説し、自然界におけるそれらの重要性和自然科学的なものの見方を把握する。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	57/8 24	自然界をつくる 物質とエネルギー ―序論として―	自然界にはいろいろな物質とエネルギーがある。力学的、熱、光、電磁気、化学、原子核エネルギーは多様な仕事をし、変換する。物質とエネルギーのかわりあいを概括的に述べる。	池 田 雄 作 (東北大学教授)
2	31	物 質 の 構 成	物質の分類や構成をどう理解するか、純物質、混合物、元素、原子、原子量、分子、イオン、モルの概念を簡潔にまとめ、無機、有機物質のいくつかを化学式とともに解説する。	同 上
3	9/7	力学的エネルギー・熱	運動エネルギー、位置エネルギー、仕事、熱、温度、エネルギー保存則はエネルギー論の基本になる。熱力学の基本法則についても触れたい。	同 上
4	14	物質の状態とその変化	物質の三態は分子の運動と深いかわりあいがあり、状態の変化はエネルギーの変化を伴う。相図、潜熱、エントロピー変化を実例とともに解説し、気体について分子運動論の要点を述べる。	同 上
5	21	溶 解 と 溶 液	“溶ける”ということは自然界の重要な現象である。溶解度、溶けるときのエネルギー変化、溶液のもつ諸性質について解説する。	同 上
6	28	原 子 の 構 造	原子の構造、その模型、核外電子の配置、イオン化ポテンシャル等について概説する。電子のようなミクロの粒子の世界を理解するには、エネルギーが不連続であるという量子概念が必要である。	同 上
7	10/5	化学結合とエネルギー	共有結合と電子、 δ 結合、 π 結合、原子間距離、またイオン結合、金属結合、水素結合等について、解説する。化学結合はいろいろな大きさの結合エネルギーをもつ。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	12	電磁波のエネルギーとスペクトロスコピー	光で代表される電磁波は宇宙線からラジオ波まで広範な周波数を持ち、 $E = h\nu$ のエネルギーをもつ。物質は発光したり、電磁波と相互作用して吸収したり、いろいろなスペクトルをみせる。実例を挙げて簡潔に解説する。	池　上　雄　作
9	19	燃　　　　　　焼	燃焼はきわめて身近な化学エネルギーの変換である。発火や爆発を含め、熱化学方程式、反応熱等による化学的解釈を平易に述べる。	同　上
10	26	化学変化とエネルギー	反応速度、活性化エネルギー、反応座標と自由エネルギーの関係、遷移状態、反応中間体、触媒や酵素の働きは、物質の化学変化を理解するうえで基本になる。	同　上
11	11/2	電気化学的エネルギー	物質の酸化還元的应用として、標準電極電位、電池の原理、起電力、実用電池について電気化学の基本を理解する。電気分解についても言及したい。	同　上
12	9	原子核エネルギーと太陽	原子核分裂と核融合反応は多量のエネルギーを放出し、また太陽エネルギーの源泉になっている。超高温プラズマ状態では「質量とエネルギーは転化する」という $\Delta E = \Delta mc^2$ の考えが重要になる。	同　上
13	16	生体とエネルギー	生体物質、生物の利用するエネルギー、生体におけるエネルギー変換の基本的な部分を、呼吸、解糖を例により、高エネルギーリン酸化合物ATPの構造と機能を含めて解説する。	同　上
14	23	光　　　　　　合　　　　　　成	生物におけるエネルギー転換の代表的なものに光合成がある。緑色植物による光合成のしくみ、葉緑体の役割、光リン酸化、光合成におけるエネルギーの収支について述べる。	同　上
15	30	物質とエネルギーの循環	自然界における物質の循環とエネルギーの循環をその相互関係を含めて概説する。そして化学エネルギーとしての物質について言及したい。	同　上

＝生物と人間＝

(→人間の生物学)

主任講師：太田次郎（お茶の水女子大学教授）
放送時間：午前 6 時10分～午前 6 時55分
放送局：テレビ朝日

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	53/12 4	人　間　と　は	このシリーズの導入として、生物界における人間の位置や生物としての人間の特徴などを紹介する。	太　田　次　郎 (お茶の水女子 大　学　教　授)
2	11	人類の誕生と進化	化石人類から現代人に至る進化の道筋を、近年の成果を交えてたどり、人間の文化の発達についてもふれる。	同　上
3	18	人体の成り立ち	人間を含めてすべての生物体の基本単位となっている細胞の構造を中心にして、細胞から3個体への成り立ちを述べる。	同　上
4	54/1 8	人　体　の　働　き	人体で行われている働きを血液の循環を中心にしてとりあげ、消化・呼吸・排出・循環などの系のまとまりを解説する。	同　上
5	15	脳　と　神　経	神経系の構造と機能を概説し、脳と神経による調節作用を述べる。また他の動物と比較して、人間の脳の特徴を説明する。	同　上
6	22	ホ　ル　モ　ン	人間のおもな内分泌器管及びそこから分泌されるホルモンについて述べ、ホルモンによる調節作用を説明する。	同　上
7	29	学　習　と　知　能	生物学的にみた学習や知能の意味を説明し、人間を中心に動物の行動が学習や知能とどう関連するかを説明する。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/5	バ　イ　オ　リ　ズ　ム	動物の行動が、体内時計に支配されて、一定のリズムをとる例を紹介し、人間のバイオリズムについても説明する。	太　田　次　郎
9	12	生　殖　と　発　生	動物の生殖と発生の経過を説明し、人間の生殖や発生の特徴を述べ、受精卵から個体が形成されていく道筋を解説する。	同　上
10	19	遺　　　　伝　(I)	生物の遺伝を支配する法則性、遺伝の本質などを説明し、そのような法則が人間に適用できる例を紹介する。	同　上
11	26	遺　　　　伝　(II)	人間の遺伝を調べる方法とその成果を述べ、人間がどの程度遺伝に支配されているかを説明する。	同　上
12	3/5	個　　と　　集　　団	集団を支配する法則性をもとにして、生物の個と集団の関係をとりあげ、そのような観点から人間を見る。	同　上
13	12	自　然　と　人　間	自然環境が人間におよぼす影響、および人間の生活が自然環境に与える影響について述べ、今後の人間生活のあり方を考える。	同　上
14	19	健　康　と　病　気	生物学的にみて、健康とは何か、病気とは、などについて述べ、免疫・感染などの問題をとりあげる。	同　上
15	26	人　間　の　未　来	今までに学んだことをもとにして、今後の人間の生活に関する問題を広い角度からとりあげる。	同　上

＝数 学 と 人 間 生 活＝

主任講師：赤 堀 也（立教大学教授）
 放送時間：午前 7 時45分～午前 8 時30分
 放 送 局：ラジオ短波

全体のねらい

数学は、日常生活、科学、技術等々と密接に関連し、互いに強い影響をあたえあって来た。この様相を概観し、数学が人間にとって何であるのかを考える資料とするのが目標である。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	57/12 7	記 数 法	十進位取り記数法を他の種々の記数法と比較し、前者の特徴について考える。筆算との関連にとくに注目する。	赤 堀 也 (立教大学教授)
2	14	代 数 学	四則応用問題の算術的解法と代数的解法とを比較し、代数的解法が強力である所以を考える。また、記号化の他の意義についても考察する。	同 上
3	21	ユークリッド幾何学	ユークリッドの「原論」の成立の過程、およびその構成の概要を紹介する。	同 上
4	28	幾 何 学 的 精 神	ユークリッドの「原論」は西欧の合理主義に強い影響をあたえて来た。パスカルの「幾何学的精神」その他を引きながら、このことを説明する。	同 上
5	58/1 11	解 析 幾 何	解析幾何は、幾何を代数的に研究しようというものである。その概要を紹介し、その意義について考える。	同 上
6	18	ニ ュ ー ト ン 力 学	ニュートン力学は、のちに優勢となった機械論的自然観の基盤であるとともに、いわゆる解析学の発展を強力に促した要因でもある。ケプラーなどの業績からニュートン力学が生まれ出るまでのいきさを明らかにする。	同 上
7	25	解 析 学	ニュートン力学が解析学の発展をどのように促したか、他方、解析学がいかにしてその独自の課題をもつに至ったかを考察する。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/1	射　影　幾　何　学	数学では、例外をなくし、理論を単純化するために、「理想的要素」を導入することが多い。その典型的な例として射影幾何学を紹介する。	赤　　摂　也
9	8	非ユークリッド幾何学	ユークリッド幾何学の平行線公準は、19世紀に至って非ユークリッド幾何学を生んだ。さらに、後者は、数学思想を公理主義へと根本的に変革する原因となった。これらのいきさつと意義とについて考察する。	同　上
10	15	確　　率　　論	パスカルとフェルマによりはじめられ、ラプラスによって大幅に発展させられた確率論は、公理主義の誕生によってあざやかに衣がえをした。その概略を紹介する。	同　上
11	22	構造主義と数理科学	構造主義は公理主義を深化したものである。構造の概念は、諸科学と数学との関係を明確にし、多くの科学に数理化するきっかけをあたえた。これらのことを解説する。	同　上
12	3/1	電　子　計　算　機	電子計算機は、現今の社会を急速に変えつつある重大な存在である。これが、おおよそいかなる構造をもつものであるかを紹介する。	同　上
13	8	数　理　統　計	確率論の応用としての数理統計学は、電子計算機の登場によって、その適用範囲を一躍ひろげた。その数理統計学とはどのような原理にもとづくものであるかを解説する。	同　上
14	15	計　画　数　学	社会に大きな影響をあたえはじめた、“New Math”の一つに計画数学がある。そのうちもっとも初歩的な線型計画法について、その原理を紹介する。	同　上
15	22	帰　納　的　関　数	電子計算機は巨大な存在ではあるが、あきらかな限界がある。それがどのようなものであるか、また、それを克服するためにどのような努力がなされているかを説明する。	同　上

＝ 哲 学 の 基 礎 ＝

〔主任講師：山本 信（東京大学教授）〕

全体のねらい

哲学は我々の日常生活に根ざし、人生観や世界観の問題に連なるものではあるけれども、学問として理論的にやってゆくためには、どうしても抽象的な概念や問題設定を扱うことができなければならない。そのための最も基礎的な道具立てを整えておきたい。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	哲　学　と　は　何　か	「哲学」という言葉そのものの意味を考えることから始め、この学問がもっている独自の性格と、それを学ぶときの特殊事情について述べる。	山　本　　信 (東京大学教授)
2	哲　学　と　哲　学　史	他の諸学とは事情を異にして、哲学の研究は常にその歴史との内的な連関において行われなければならない。哲学を西洋から移入し、しかも自国の思想的伝統をもっている日本人には、この点でも特別の問題が課されている。	同　上
3	哲　学　の　諸　部　門	普通哲学に属すると考えられている諸学問を列挙し、それぞれについて多少の説明を加え、それら全体にわたって見とおしをつける。	同　上
4	存在論の基本問題	「ある」ということをめぐる古来の論議をふまえ、「実体」「形相」「体質」など、歴史的にも体系的にも哲学にとっても最も基本的な諸概念を取りあげる。	同　上
5	主　観　概　念	「主観」あるいは「主体」と訳される概念の形成過程をかえりみることによって、現代にいたるまでの近代的な思考体制の原点を究明する。	同　上
6	近　代　的　二　元　論	近世における心と物、精神と物体の二元論は、それ自体が本質的に不安定なものであり、観念論と唯物論という対立的立場もそのことの所産にほかならない所以を論ずる。	同　上
7	認　識　論　の　系　譜	近世以降の哲学を特徴づける認識論の問題設定について、その端緒における歴史的意義を明らかにし、その後の展開を跡づける。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	主体性の形而上学	認識し行為する主体としてのあり方をもって原理とする立場が、近代の合理性をになう一方の柱としてどのように展開されてきたかを考察する。	山　本　　　信
9	近代科学の歴史的意味	現在われわれが「科学」とよんでいる知的形態が、近代の合理性をになうもう一方の柱として、思想的に何を意味しているかを考察する。	同　上
10	科学的思考の諸性格	科学的な思考法、それはまたわれわれが小学校以来の教育で叩きこまれてきて常識になっている考え方でもあるが、その特質と帰結とを、いくつかの項目にわけて露わにする。	同　上
11	生　命　と　人　間　性	科学の進歩は、生命現象をも物理的・化学的な過程にひきもどし、また人間に対してはその尊厳を剥奪してゆくかのようにみえる。こうした事態に関してどう考えたらよいか。	同　上
12	自　然　と　必　然	人間の自由に対立するものとして、運命、自然因果性、社会的制約などが語られる。これらの必然的支配を説く決定論に対して、どう考えたらよいか。	同　上
13	心　身　問　題	からだとの関係において心とは何なのかということ、人類にとって古くからの関心事であり、哲学の主要問題の一つでもあった。特に近世的二元論の文脈のなかで現在どう考えたらよいか。	同　上
14	真　理　論	何を考え何を語るにせよ、それは真なのかという問が最後までつきまとう。ではそもそも真理とは何か。そして、何かが真であるということはどうやって確かめられるか。	同　上
15	現代の哲学的状況	哲学の歴史から見てわれわれがどのような状況におかれ、いかなる問題に直面しているか、ということを知るために、現代の諸学説に現われている思想的動向を概観する。	同　上

＝ 中 国 思 想 の 流 れ ＝

(→ 古代・中世の思想)

〔 主任講師：戸川芳郎（東京大学教授）
放送時間：午前 7 時 45 分～午前 8 時 30 分）
放 送 局：ラジオ短波 〕

全体のねらい

中国古代中世に生れた思想の歴史を概観する。その源流を追って、発現のすがたと現実に果たした役割またその後世への影響をえがきつつ、中国思想のいとなみを把握したい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	57/12 6	“仁” と 孔 子	東洋思想は、中国文明のはじまりとともにある。古代宗法制の世界再編にさしかかった春秋期の、時代様相とそこに出現した孔子－儒家の開祖の思想を説きあかす。	戸 川 芳 郎 (東京大学教授)
2	13	墨家集団の思想	儒家の思想的基盤をおびやかした墨家の“兼愛交利”の考えと宗教結社の性格をおびるその行動集団の軌跡をたどる。“天志”“尚同”の政体論や“薄葬”“非攻”の社会批判にも言及する。	同 上
3	20	孟子の王道論	社会体制の変動するただなかで“聖人”の徳治を遊説する孟子の“王道”国家論を、人間“性善”説とともに紹介する。楊朱・墨子や告子らその論争の対象となった諸思考をも考える。	同 上
4	27	荘子と老子	人為を排した全性保身の“養生”論と相対世界を脱して“斉同”の真実在をもとめた荘周の夢は古代観念論の極致である。後続の「老子」の“自然無為”を標榜した黄老思想をあわせ論ずる。	同 上
5	58/1 10	“礼” と 荀 子	古代中国は荀子の指さす方向にすすんだ。天人の分離、後王思想、性悪説によって“礼法”秩序を支える根源を現実の実力者“聖王”の權威に帰した。この法家思想を導いた内容を考える。	同 上
6	17	諸 子 百 家	宋鉞・尹文の精気論や恵施・公孫龍の論理学、「墨弁」や荀子の正名思想、また申不害・商鞅・慎到の法術思想を、鄧析から韓非までを紹介しながら概論する。	同 上
7	24	「易伝」と陰陽思想	中国の生んだグローバルな思想とは、けだし陰陽二元と五行終始の説であって、それを採用して“変易”の原則を立てた「易伝」であろう。多岐にわたる変遷・変化の概念を整理してみよう。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	31	司馬遷と董仲舒	「史記」にみえる司馬遷の考え方をその列伝と書を中心にうかがう。また董仲舒の国家思想―“天人相関”の災異説がもつ意味を述べる。両者の後代に及ぼした影響力をも考える。	戸　川　芳　郎
9	2/7	生成論と運命論	統一帝国の宇宙観を「緯書」や揚雄・張衡をつうじて見るとともに、王充を代表とする徹底した命定論を紹介する。できれば後漢の政論をもふくめたい。	同　上
10	14	経　学　の　展　開	学官や学校制度の整備にともなう学術の分化と論争、また統一解釈への動き。後漢の許慎・鄭玄、魏晉の王肅・何晏の学術について、またかれらの経書解釈を再解釈する。“義疏”―訓　・音義の学に言及する。	同　上
11	21	玄　学　の　成　立	六調思想を特徴づける「易」と老荘の三玄の学について、その義理の易学と“無”の存在論、裴頠の崇有論、郭象の名教自然の主張などを追ってゆく。嵇康・阮籍や楊泉・鮑敬言にも及ぼす。	同　上
12	28	仏　教　の　受　容	中国仏教の受容と定着について概述する。“格義”による伝統思想との習合またそれへの批判が展開されるなかで、仏教理解が深まってゆく、そのありさまを説明する。	同　上
13	3/7	道　教　の　形　成	道教前史の神仙思想、後漢期の五斗米道などをつうじて老子の神格化・宗教的性格がすすむ。葛洪の理論と寇謙之・陶弘景の教義を見てゆく。	同　上
14	14	気　の　思　想	人間を人間をとりまく社会や自然を成りたたせ運動させている生命体や万物のエネルギーとしての“気”は、ひろく伝統医学（方枝）の診断や文芸思想の評価にも用いられた。いまその一二を例示する。	同　上
15	21	近代日本と中国思想	以上の中国思想の流れを概括するとともに、わが国の古代社会に中国文明を支えた世界観がどのように受け入れられたか、そのあらましを述べる。	同　上

＝ 近 代 の 思 想 ＝

〔 主任講師：中 埜 肇（筑波大学教授） 〕

全体のねらい

西欧近代の思想的特質を、その主題（神・人間・自然）と時期（ルネサンス期、知性の時代、啓蒙の時代、ロマン主義の時代）との関連において、明らかにしながら、ひろく近代的なものの本質を考える。講義では、時間的な順序よりも主題の展開に重点を置く。

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	「近代」の概念	「近代」という概念の内容、その由来および思想のレベルにおける近代の開始と終末について述べる。	中 埜 肇 (筑波大学教授)
2	中 世 と 近 代	近代思想の特徴をそれに先行する中世との関係において考える。	同 上
3	神 について (1)	近代初期の神学と哲学および科学との関係について述べる。	同 上
4	神 について (2)	宗教改革、神秘思想、ピエティズムなどの思想的意義について考える。	同 上
5	神 について (3)	理神論や無神論について考える。	同 上
6	神 について (4)	汎神論と理性宗教について述べる。	同 上
7	人間について (1)	新しい人間像をヒューマニズムやフランス・モラリストの仕事を通して考える。	同 上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	人間について(2)	自然と精神が近代思想の核心であるゆえんについて考える。	中　埜　　　肇
9	人間について(3)	自然法思想と市民社会の近代性について述べる。	同　上
10	人間について(4)	近代国家と歴史哲学の思想的意義を考察する。	同　上
11	自然について(1)	新しい自然像としての「開かれた宇宙」が世界観に与えた影響について考察する。	同　上
12	自然について(2)	力学と唯物論が近代的自然観の結果であることについて考える。	同　上
13	自然について(3)	生命的自然と身体の問題について考える。	同　上
14	自然について(4)	美的自然という考え方の意味について述べる。	同　上
15	近　代　と　現　代	近代と現代とが思想的にどちらがうかという点を考察する。	同　上

＝ 現 代 の 思 想 ＝

〔主任講師：今道友信（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代を20世紀後半と規定し、1983年現在の思想状況を哲学的に明らかにし、21世紀への展望を試みることとする。テーマには、常に問われている永遠の課題と特に現代で問われ始めたものがあるが、前者では方法の新しさに、後者では問題内容に重点を置く。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	近代から現代へ	時代区分として現代をいかなる理由で1950年前後とするかを明らかにするとともに、19世紀末から20世紀前半にかけての思想を現代思想への助走として論理的に反省する。	今　道　友　信 (放送大学教授)
2	過　渡　期　の　苦　悩	実存主義、マルクシズム、プラグマティズム 1930年代からしばらく、世界的な危機が全体主義の高揚となって具体化して来たが、この時期の思想的な運動として現象学の深化としての実存主義と社会思想の実践原理としてのマルクシズム、道具連関における認識方法としてのプラグマティズムをあげる。	同　上
3	科学哲学と論理学の変貌	新カント派の科学批判とは異なった別種の科学哲学と数学に接近した論理学の再編が大戦前後の世界に流行したが、その思想的背景と哲学的特色をのべる。	同　上
4	歴史の再考と比較研究	人間への反省が、神話や歴史への注目を呼ぶ。ここでは、考察の次元の拡大とともに成立しかけた本格的な比較研究への手がかりを探索する。	同　上
5	言　語　哲　学	相互伝達の可能性の根本に言語性があるからこそ、人間同士の理解が期待されるのである。それゆえ、言語の構造的省察を事とする言語哲学が成立する。	同　上
6	分析哲学の展開	分析哲学の自律的展開の過程の中で、初期には問われなかった諸問題が新たに探究されるようになって来た。そういう問題として、芸術や倫理に対する態度決定と方法上の試みを考える。	同　上
7	構　造　主　義	言語による意味指示の構造は一般化すれば文化全体をテキストとして構造的にとらえる考え方につながる。歴史主義の相対性に対立する非時間的な考察方法として構造主義が抬頭した。	同　上

回	テ　　ー　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	修　　辞　　学	立場や見解の差異に対する寛容が、共存 (co-existence) の条件として新たに要求されるとき、説得の論理としての修辞学が見直されて来る。新たな再興を示した修辞学が見直されて来る。新たな再興を示した修辞学の哲学的検討を試みる。	今　道　友　信
9	宗　教　哲　学	1940年頃からの神学の動向は注目に値いするものがあり、これが哲学に及ぼした影響も見逃しえない。また、禅に集結する仏教哲学への西欧からの近接も見逃してはならない。イスラーム神秘思想も注目されている。	同　上
10	芸　術　思　想	芸術が、その豊かな表現可能性を以て、思想界を先駆けることは過去にもあったが、現代においてはどうかを、芸術の各ジャンルにわたる作品を基にして芸術家や作曲家、詩人たちの証言を参考にしつつ考えてみる。	同　上
11	日本の現代の思想家について	日本の思想界は特に現代世界の中でどのように位置づけられるのか、広い視野から公正に考えてみる必要がある。	同　上
12	metatechnica —技術の哲学—	自然だけが環境であった時代とは異って、技術が環境となった現代、人間は環境との対応の仕方としては、古代に回帰したも同然で、新しい哲学が要求される。それがmetatechnicaである。	同　上
13	urbanica —都市の哲学—	都市が、巨大都市化するにつれて、国家の編限形態としてのcivitasとは違った新しい(urbs)についての学urbanicaが要求される。新しい都市哲学は国家哲学や法哲学とも違って、独特の社会哲学となる。	同　上
14	eco-ethica —生圏道德学—	人間の生態の変化とともに、新しい倫論学が要求されて来る。その必然性と新しい徳目や新しい人間関係、物質観や生命観について考えてみたい。	同　上
15	将　来　へ　の　展　望	二十一世紀に向けて、どのように生きべきか、また思うべきか、を具体的に考えてゆく。	同　上

＝世界史と時代意識＝

〔主任講師：和田久徳（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講では、歴史を理解しやすくするため、その基礎となる紀年法と歴史書編纂の概要を説明する。さらに、この理解を通じて、歴史的な物の見方、歴史的センスを会得できるようにしたい。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	序　　　　　　説	世界諸民族の時代意識、とくに紀年法などの展開を概観する。	和　田　久　徳 （放送大学教授）
2	東アジアの時代意識（中国，1）	中国における紀年法など、とくに元号の発達。	和　田　久　徳 浜　口　允　子
3	同（中国，2）	元号の展開と近接諸民族に対する影響。	同　上
4	東アジアの時代意識（朝鮮，ヴェトナム）	東アジア文化圏内の有力な民族として、朝鮮およびヴェトナムにおける紀年法、とくに元号の受容と展開。	和　田　久　徳
5	同（日本）	わが国における紀年法、とくに元号の発達。	和　田　久　徳 笠　原　一　男 （予定）
6	中国の歴史記述(1)	中国における歴史書の編修の中で、紀伝体の成立と展開、とくに「史記」著作の意義など。	和　田　久　徳 浜　口　允　子
7	同(2)	中国における編年体史書の発達、とくに「資治通鑑」とその影響。実録などについても解説。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	中国の歴史記述(3)	中国における紀事本末体史書、その他の歴史的文献の発達。以上3回のまとめ。	和　田　久　徳 浜　口　允　子
9	朝鮮，ヴェトナムの歴史記述	朝鮮およびヴェトナムにおける史書編修、とくに中国的歴史記述の受容の意味	和　田　久　徳
10	日本の歴史記述(1)	わが国における史書編修、とくに大国史など成立の意味。	和　田　久　徳 笠　原　一　男 (予定)
11	同　　　　　(2)	いわゆる鏡物その他の成立とわが国の歴史記述の特性。	同　上
12	南アジア(インド)の時代意識(1)	インドにおける伝統的な歴史意識のあらわれ、とくに紀年法。	和　田　久　徳
13	同　　　　　(2)	インドにおける歴史的文献の展開。	同　上
14	東南アジアの時代意識	インド文化圏としての東南アジアの時代意識、とくに紀年法、歴史記述。	同　上
15	結　　　　　　論	日本および近隣諸民族における伝統的な年代観、歴史観とその意義。近代における欧米の時代意識との対比。	同　上

＝ 比 較 文 化 論 ＝

〔主任講師：中村 元（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

もし小生が講義するのでしたら、先般藤田健治理事長が講義なさったような諸問題を、東洋思想の立場から論じてみたいと思います。これは、どの大学でもやっていないはずです。

〔参考：＝比較文化論＝〕

＝ 比 較 思 想 論 ＝

〔主任講師：中村 元（東京大学名誉教授）〕
放 送 局：テレビ朝日

全体のねらい

人間の思想の発展に関して、単に知識を伝えるというのではなく、世界が一つになり、万事がグローバルに考察されねばならぬ時代になったので、＜思想＞そのものを取り上げて、東西を通じて発展史的に述べて行きたい。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	54/12 3	比較思想論とは何か	従来思想に関する研究は、それぞれの文化圏の思想潮流に即して行なわれて来た。しかしグローバルな見方が出現しつつあるので、従来の見方に代わって新しい視点が必要とされるに至った。	中 村 元 (東京大学名誉教授)
2	10	比較思想論の発展	比較思想論は欧米においても長い発展史があるが、東洋においても過去にそのあとをたどることができる。	同 上
3	17	古代思想の特徴	どの文化圏においても最古代には民族宗教が成立し、多くの神々を崇拝していたが、やがて哲学的思惟が出現するようになった。	同 上
4	55/1 7	自由思想家の出現	諸の文化圏のうちでも特にギリシア・インド・中国においては伝統的な思想に反抗して、唯物論、快楽論、道德否定論、宿命論、懷疑論、などを唱える自由思想家が出現した。	同 上
5	14	人 間 の 反 省	人間の現実のすがたをまともに直視し、人間はいかに生きるべきかということを考えて、真の自己を探究する動きが起った。ここに人類にとっての普遍思想乃至普遍宗教が出現する。	同 上
6	21	普遍宗教の生活倫理	普遍思想乃至普遍宗教と呼ばれるものは、互いに伝統を異にするにもかかわらず、人間の生き方については意外に共通のことを説いている。しかし相違も存する。	同 上
7	28	世界共同体の理想	都市国家から広域国家へ、さらに世界国家をめざす動きによって世界共同体の理想がかかげられるようになった。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/4	普遍的國家の成立	普遍思想乃至普遍宗教の理想を現実のうちに実現することを標榜して統一的國家が諸文化圏において成立した。しかしそれらもやがて挫折して、中世世界へと移って行く。	中　村　　　元
9	11	中世社会の思想的特徴	中世には諸国の社会を通じて、身分的階位制、武士道、宗教の現世超越的性格、宗教の権威の確立、神学的思惟の成立などが認められる。	同　上
10	18	＜慈悲－愛＞の道	普遍宗教は人々をわけ隔て無く愛することを説いた。ここに＜慈悲－愛＞の道が成立する。	同　上
11	25	＜瞑想＞の道と哲学的思想	中世においては、諸文化圏を通じて、＜慈悲－愛＞の道と並んで＜瞑想＞の道を実践する人々が現われ、哲学的思策も深められるようになった。	同　上
12	3/3	自我の自覚と批判的精神	中世の伝統的権威を合理主義をもって批判し、自我を自覚するところに近代的思惟が登場する。東洋の若干の思想家はこの点でも徹底的であった。	同　上
13	10	人　間　の　平　等	人間はすべて平等であるという主張は近代において特に顕著になった。しかし東と西とではこの点で相違も認められる。	同　上
14	17	宗教と資本主義	近世初期の宗教が資本主義的精神を基礎づけたと言われるが、諸文化圏ごとに相違も存ずる。	同　上
15	24	未　来　へ　の　展　望	過去における思想の発展を回顧し検討することを通じて、未来に向かってどのようなことが期待され得るか、それを検討したい。	同　上

＝言語とコミュニケーション＝

(→コミュニケーションと言語)

〔主任講師：沢田允茂（慶応義塾大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間だけが生物の進化の過程で言語によるコミュニケーションという手段を獲得した。このことで人間は何ができるようになったのか、それは人間の生活にどのような特殊性をもたらしたのか、それは人間にたいしてどんな意味をもつか、などの問題を分析して言語の側面から人間への理解の途を探るのが本講座全体のねらいである。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	「生きること」と コミュニケーション	生きているということはその生物の内部やその環境との間に何らかの形のコミュニケーションが行われていることを意味する。それは人間だけでなくすべての生物にとって「コミュニケーション」がもっている意味の根源であることを明かにする。	沢　田　允　茂 (慶応義塾大学名誉教授)
2	環境世界とコミュニ ケーション	すべての生体はそれを取り巻く自然的、社会的環境と何らかの形のコミュニケーションを行っている。そしてそれぞれの生体にとってその環境世界とはコミュニケーションによって構成されて始めて存在するものだ、ということができらるだろう。	同　上
3	言語によらないコ ミュニケーション	人間以外の動物ではコミュニケーションはフェロモンとよばれる化学物質の刺激とか啼声、ある特殊な動作などの知覚を通じておこなわれる。人間の生活においても言語によらない、知覚によるコミュニケーションは重要な役割を果している。	同　上
4	言語の進化について	言語というものは霊長目の一つの種としての人間がその進化の過程で適応と自然淘汰を通じて獲得してきたものである。この過程を（実証的でなくとも）理論的に再構成することによって人間の言語の本来の意味を探ることができるだろう。	同　上
5	言語の環境その 1	言語は人間の存在をあまねく包み、物理的に与えられた環境世界と人間との間にあって、一種の中間世間を構成している。だが強いて言えば、与えられた環境に比較的よく対応する部分と、それを余り反映しない部分に分けることが出来る。	鈴　木　孝　夫 (慶応義塾大学教授)
6	言語の環境その 2	牧畜を主とする人々の言語に、家畜を細かく分ける表現が多いといったことは、外的対応の好例であるが、反面、生物としての人間が共通に持つ新族関係が、民族により甚しく違って把握されるなどは極めて人間的な言語のしくみと言える。	同　上
7	言語の構造その 1	人間がことばを聞いて意味が理解できるのも物理的な音の流れの中には現れない不連続な単位や区切りなど抽象的な構造を知っているからにはかならない。文の要素間の統語構造に焦点を合わせてそのような構造や規則について明らかにする。	西　山　佑　司 (慶応義塾大学助教授)

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
8	言語の構造その2	文の意味は、その文を構成している語の意味や、文の統語構造と密接な関連をもつ。文の意味構造や規則を明らかにしたあとで、意味の曖昧性とは何か、それは意味解釈にまつわる不明瞭性と同一視してよいかといった問題について考える。	西 山 佑 司
9	言 語 と 論 理	自然言語に内在するそれ固有の論理的推論には形式論理だけでなく、文の意味構造が重要な役割を果たす。「意味論的含意」や「前提」という概念を明らかにすることを通じて、論理的思考と言語構造との間の密接な関連について述べる。	同 上
10	発話の解釈と推論	話し手が文を用いて聞き手に伝えようとしている内容は文の言語的意味と必ずしも一致しない。そこには話し手・聞き手の背景的知識や文脈的要因が介入してくるからである。言語を用いて現実に行っている推論を発話状況との関連で考える。	同 上
11	言語による世界の形成	言語は人間の環境に適応するように作られているが同時に言語の構造に合わせて世界を見、そのような世界を自から作りあげるという側面をもっている。この章では思想とか世界観というものがいかに言語に関係しているかを明らかにする。	沢 田 允 茂
12	言語的世界の進化	人間が言語を通じて作りあげた世界は不変のものではなくて自然環境や社会環境の変化に応じて進化する。原始宗教の世界から今日の科学的に見られた世界への進化はどのような環境の変化との関連の下で生じたのかを探究してみる。	同 上
13	思想の混頓と言語	私たちが日常生活で遭遇する考え方や思想の色々な問題とその混乱が(無意識にはあるが)いかにして言語のからくりの中で生じてくるかを明らかにすることを通じてそのような混頓をさけるためにはどうすべきかを考えてみる。	同 上
14	言 語 と 行 為	言語とは単にある情報を受取るだけでなく、それにもとづいて行動するときの仕方をも決定する。しかし我々の行動のすべてが言語的思考によって決定されているものでもない。私たちの行動の中で果す言語の役割と意義について考える。	同 上
15	言 語 と 理 解	言語は理解されねばならない。しかし異なった国語で語られたことを完全に理解することができるか。また言語の理解は言語で云われたことの真偽判定の問題にもつながっていく(認識論の問題)。これらの問題について要点をのべる。	同 上

＝ 思 考 と 論 理 ＝

〔主任講師：大森荘蔵（放送大学副学長）〕

全体のねらい

「思考」と「論理」の意味分析。

主な項目

(1) 「思考」とは？

広義には「何かを心に浮べること」、従って、想起、想像、予期 etc もすべて含む。

(2) だが狭義には、何かを「整合的に（首尾一貫）」思い浮べること。例、作戦計画、病気診断、理論建設、犯罪推定。この「整合性」が「論理的整合性」として論理と呼ばれる。

(3) 論理学の性格

(イ) 記号論理学（命題論理）の概説的説明（アリストテレス三段論法を含む）

(ロ) 心理法則、存在法則ではない。

(ハ) 言語使用規則である。そのことを、現代記号論理学の骨組を実際に構築することによって証示する。

(4) 複数の論理学

(イ) 弁証法と形成論理

(ロ) 多値論理、量子論理、等非標準論理学の提示

(ハ) 論理機械（Turing Machine）とコンピュータ

(ニ) 帰納法の問題

(5) まとめ

「論理的」とは？繰り返し言に他ならず、etc.

＝ 人 文 地 理 学 ＝

（主任講師：西川 治（東京大学教授））
（放送局：テレビ朝日）

全体のねらい

人文地理学は、人間が風土に適応して生活環境を組織し、自然生態系を人間生態系へと改変し、自然地域の上に人文地域を展開していく過程として人間の営みを捉え、その地域的差異の要因を究明する学問である。ここでは主に日本の風土、村落の都市、経済活動の地域システムを考察し、人文地理学的方法的特徴について説明する。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/8 24	日本の風土と国民性	人文地理学的思考法の導入部として、風土論を取上げる。日本列島の多彩で精巧な地生態構造と生活様式、とくに社会、経済、文化の発達に基本的な役割を果たしてきた水田稲作に視点を定め、歴史的風土と日本人の思考の特徴を論じる。	西　川　　治 （東京大学教授） 鈴　木　秀　夫 （東京大学助教授）
2	31	日本国論の変遷(1)	わが国では古来、小国論と大国論とが繰返し現われてきた。それぞれの論旨を時代的背景、地理思想、外国人の日本論、日本地図・世界地図の発達などとの関連において考察する。	西　川　　治
3	9/7	日本国論の変遷(2)	明治以降、ナショナリズムの昂揚を警戒する小国論も現れたが、大国意識が強まる。戦後は資源小国論が流行したが、最近では経済大国論が復活する。これらの論拠を検討し、高度経済成長が残した問題点を指摘し、以下の導入部とする。	西　川　　治 高　崎　正　義 （日本地図センター）
4	14	日本の国土開発と 景観変化	わが国の大部分の文化景観は、農地開発とくに開田と土地改良によって形成されてきた。国土の開発史を社会環境、地形配列、水利技術、村落立地などとの関係において歴史地理的に考察する。	西　川　　治 山　田　安　彦 （千葉大学教授）
5	21	日本の農業地域	世界における日本農業の特色、高度成長期に生じた農業地域の変化とその要因分析、とくに都市化、脱農化、兼業化、機械化、農業政策、農産物市場の自由化などとの関係について考察し、農業立地論の適用範囲についても論じる。	西　川　　治 竹　内　啓　一 （一橋大学教授）
6	28	村落と土地制度の 比較研究	村落地理学は、社会地域を構成する一つの基礎単位である村域を対象とする。村域は、村民が土地制度を運用し、社会生態系として組織している土地空間である。日本とアジアの農村の事例を示し、比較研究の意義について述べる。	西　川　　治 荻　口　善　美 （駒沢大学教授）
7	10/5	近代化による村落 の変貌	ヨーロッパにおける村落の諸形態とその分布を概観し、村落共同体の解体に伴う農村の激変（エンクロージャー、二次的散居化）、第二次大戦後の農村構造改善事業について紹介し、日本農村の変貌との差異についても言及する。	西　川　　治 竹　内　啓　一

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	12	人口移動の趨勢と 地域人口問題	日本の人口史、明治中期以降の人口移動、大都市集中傾向を、都道府県別の転入、転出収支と人口密度順位モデルによって考察し、とくに1970年代の転換期の意義を指摘し、人口構造の地域的差違と問題点について論じる。	西　川　　治 浜　　英　彦 (成城大学教授)
9	19	日本の工業構造と 地域的展開	わが国における工業の発達過程を地域的に考察し、とくに高度成長期における工業立地の動向、基幹工業の立地による地域の変貌、企業城下町の特色を扱い、工業立地が地域経済と生活環境に及ぼす影響についても論及する。	西　川　　治 青　野　寿　彦 (中央大学教授)
10	26	日本の地場産業	わが国には地域的特色を示す地場産業が多く、地理学者による研究成果が豊富にある。その中から類型別の研究事例を紹介し、国際化時代における零細工業の問題、中小企業団地の意義等についても考察する。	西　川　　治 竹　内　淳　彦 (日本工業大学教授)
11	11/2	都市の類型と都市 システム	都市の機能と形態に基づく類型、ヨーロッパと日本の歴史的都市の差違、近代以降における都市機能と階層分化、および都市システムに関するW・クリスタラー理論について説明し、それに関する日本の事例研究を紹介する。	西　川　　治 山　口　岳　志 (東京大学助教授)
12	9	大都市地域の構造	大都市の成長は、都市化地域の拡大と地区別の住み分け、および機能分化を伴い、中央業務街(CBD)を中心とする同心円的ならびに扇形的地域分化が現われる。その事例と古典的理論モデル、および最近の研究法についても紹介する。	西　川　　治 山　口　岳　志
13	16	日本の地域構造と メガロポリス論	人口ポテンシャル分布の変化、大都市郊外の発展とニュータウン、コナーベーションの進展と地方行政問題、地方都市の盛衰、高速輸送サービスの発達、観光・レクリエーション地域の発展などとの関連においてメガロポリス論を考察する。	西　川　　治 浜　　英　彦 井　内　　昇 (お茶の水女子大学教授)
14	23	都市化と自然災害	高度成長期には各地で工場団地、宅地、公共用地等の造成のために大規模な地形の改変が行われた。これに大都市の過密化や地盤沈下等、洪水、高潮、地震による災害を助長する要因がふえている。災害対策における地理学の役割を説明する。	西　川　　治 大　矢　雅　彦 松　田　盤　余 (東京都立大学助教授)
15	30	国際化時代における 人文地理学の役割	人文地理学的考察をふまえて、日本列島はそれぞれ個性を有する諸地域の機能的統一体、動的な地域システムとして理解し、地球社会における日本の地位を見定め、その発展に対する日本の貢献の仕方について考える。	西　川　　治 竹　内　啓　一 大　矢　雅　彦 鈴　木　秀　夫

= 行 動 科 学 =

〔主任講師：小川 隆（明星大学人文学部教授）〕

全体のねらい

行動科学はこのカリキュラムでは心理学概論と並んで基礎科目として置かれているので心理学概論の内容を充分、調整して計画する。

行動科学を行動の科学として広い意味で扱うので、その特徴である学際研究との関連を扱わねばならない。それぞれの斯方面の担当者の参加が必要で、それがどの程度可能かを充分、検討して計画する。

主な項目

- (1) 行動の系統発生・個体発生
- (2) 生得的・習得的行動の機制
- (3) 社会環境と行動
- (4) 対人行動
- (5) 集団・集合行動

＝ 心 理 学 概 論 ＝

{ 主任講師：大山 正（千葉大学教授）
 詫摩武俊（東京都立大学教授）
 放送日：テレビ朝日 }

全体のねらい

人の心と行動のはたらきを理解するために、まず、人が環境の状態を感覚を通して知り、それによって得た情報を処理して、自分の要求の実現に役立てていく過程を考えてみる。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	54/12 4	心　理　学　と　は	心理学とは何かについて、2回以降の内容を説明しながら具体的に述べ、つぎに、心理学の課題、対象、方法などをめぐって、歴史的発展の過程と現況を述べる。	大　山　　正 （千葉大学教授） 詫　摩　武　俊 （東京都立大学教授）
2	11	環　境　の　認　知 Ⅰ　感　覚	人間が環境の中で生活し行動し、環境に適応していくためには、まず環境の状況を把握する必要がある。その手段としての感覚の特性について考える。	大　山　　正 （千葉大学教授）
3	18	環　境　の　認　知 Ⅱ　知　覚	われわれが環境の状況を見、聞き、感じる場合、それは単なる感覚のよせあつめでも外界の忠実な反映でもない。この観点から、知覚の法則、錯覚、空間と運動の知覚について述べる。	同　上
4	55/1 8	情　報　の　処　理 Ⅰ　注　意　と　探　索	われわれが日々接している情報の量はきわめて膨大であるが、その一部しか利用していない。この観点から、注意と知覚的探索について述べる。	大　山　　正 （千葉大学教授） 御　領　　謙 （千葉大学助教授）
5	15	情　報　の　処　理 Ⅱ　記　憶	人間が利用している情報のかなりの部分は記憶として保存されている過去の情報である。この記憶の成立、保持の検索、変容などについて述べる。	大　山　　正 （千葉大学教授） 小谷津　孝　明 （慶応義塾大学助教授）
6	22	情　報　の　処　理 Ⅲ　思　考　と　言　語	選択され、検索された情報を用いて、ある目的のために、人が問題を解決していく過程が、思考である。その際には、人々が長年にわたり作り上げ、個人が幼時より習得してきた言語の体系が大きな役わりを演ずる。	大　山　　正 （千葉大学教授） 東　　　　洋 （東京大学教授）
7	29	経　験　の　効　果 学　　　　　　習	多くの生物とともに人間は、過去の多くの経験によって、行動の習慣を獲得し、変容している。この学習の過程を、条件づけの原理に基づいて考えてみる。	大　山　　正 （東京大学教授）

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/5	要　求　と　感　情	人が行動を起こすのは何らかの要求にもとづいている。要求には、多くの動物と共通している生物的要求と、人間の社会生活にもとづく社会的要求がある。またこれらの要求が実現される過程にさまざまな感情と情動が生じる。	大　山　　正 (千葉大学教授) 詫　摩　武　俊 (東京都立大学教授)
9	12	心　の　発　達 Ⅰ　乳児期 幼児期	他の動物に比べて、人には本能的行動が少なく豊かな可塑性をもって生れてくる。赤ちゃんがまわりとのかかわり合いの中でどのように成長していくかを述べる。	詫　摩　武　俊 (東京都立大学教授)
10	19	心　の　発　達 Ⅱ　青年期から 老人期	青年期から老人期にかけての心の変化、すなわち他人との関係、自分自身についての考え方や感じ方の変化の過程を述べる。	詫　摩　武　俊 (東京都立大学教授)
11	26	個　人　差 Ⅰ　知　能	知能とは何か、どんな働きの知能があるのか、その測定は可能か、天才とは何かなどについて述べる。	詫　摩　武　俊 (東京都立大学教授) 伊　藤　隆　二 (神戸大学教授)
12	3/4	個　人　差 Ⅱ　性　格	性格の個人差の形成過程、性格の類型、性格の測定法、性格の好き嫌いなどについて述べる。	詫　摩　武　俊 (東京都立大学教授)
13	11	社　会　的　行　動	人はつねに他人とかかわりをもって生きている、個人と集団との関係、人々との距離感、人間関係にみられる日本人の特徴などについて述べる。	詫　摩　武　俊 (東京都立大学教授) 加　藤　義　明 (東京都立大学助教授)
14	18	心　の　異　常	情精神病、神経症、性的倒錯、非行、自殺などの実態、原因、対策などを取り上げる。	詫　摩　武　俊 (東京都立大学教授) 福　島　　章 (上智大学教授)
15	25	心　理　学　の　応　用	現在の心理学は個人の生活とも社会の諸事象とも密接に関係している、心理学の研究法が実際にどのように応用されているかを事例をあげながら述べる。	大　山　　正 (千葉大学教授) 詫　摩　武　俊 (東京都立大学教授)

＝ 教 育 学 概 論 ＝

〔主任講師：田浦武雄（名古屋大学教育学部教授）〕

全体のねらい

教育学は、教育現象を学問的に研究し理論体系化したものである。教育は、文化・社会の動態と、人間の成長・発達の接する面で、文化と人間との現実構造を探究し、よりよい未来を創出するのを助ける営みである。低年齢化しつつある自殺や非行等を含め、多くの問題に対処して、教育はどのようなべきかを検討し、どうしたら改善し解決することができるかを究明したい。

主な項目

- (1) 教育の意義
- (2) 教育の歴史・動向
- (3) 教育学の動向
- (4) 現代教育学の類型
- (5) 生涯教育と学校の機能
- (6) 現代社会と教育
- (7) 学校教育の現実と課題 ― 発達と教育、教育目的、教育課程・方法、生徒指導・道德教育、教育評価、教育経営
- (8) 教育制度と学校 ― 教育制度、教育行政、教師論

＝ 日 本 語 の 基 礎 ＝

（主任講師：阪倉篤義（京都大学名誉教授）
放送局：ラジオたんぱ）

全体のねらい

母国語である日本語は、われわれが“言語”というものについて考えるための、最適の材料である。ここでは、特に日本語における特徴的な事実を取上げて、その意味を解明しつつ、実際的な問題にも触れて、日本語の基礎的な問題について、ひとわたり述べたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/8 26	日　本　語　と　は　何　か	何を指して日本語というか。世界の諸言語の中で、日本語は、どういう位置をしめているか。また、それはどういう位置をしめているか。また、それはどういう系統の言語か、等の問題について述べる。	阪　倉　篤　義 （京都大学名誉教授）
2	9/2	日　本　語　の　い　ろ　い　ろ	同じく日本語と言われるものの中にも地方的な違い、位相的な違い、さらにはまた歴史的な違いがあり、“話しことば”と“書きことば”との違いがある。そういう日本語の種々相について述べる。	同　上
3	9	日　本　語　の　コ　ミ　ュ　ニ ケ　ー　シ　ョ　ン	一般に、ことばによるコミュニケーションは、どのようにして成立するか。特に日本語のコミュニケーションの特色は何か。それが日本語の構造とどう関係するか、等について述べる。	同　上
4	16	敬　語　と　“　や　る　・　も ら　う　”　表　現	敬語は日本語の特色の一つとして、よく問題にされるが、その本質は何なのか。“読んでやる”“見てもらう”などの言い方とともに、こういう物言いの生れてくる理由はどこにあるのか、について考える。	同　上
5	23	“　は　”　と　“　が　”　の 使　い　分　け	“は”と“が”との使い分けは、実践的には容易であるが、両者の違いを説明することは、なかなかむづかしい。これの解明は、日本語の構文論（シンタックス）の基本的な課題の1つである。	同　上
6	30	語　順　の　問　題	日本語は、語順の比較的ゆるやかな言語であると言われる。しかし、そこにはやはり一つの法則がある。それはどういうものか。また、日本文の句読点は語順とどのように関係するか、などについて述べる。	阪　倉　篤　義 樺　島　忠　夫 （大阪府立大学教授）
7	10/7	日　本　語　の　語　彙	語彙とは何か。語の種類には、どういうものがあるか。特に使用率の大きい語と小さい語との性格・機能はどう違うかなどの点を考え、日本語の語彙の特色を述べる。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	14	和語・漢語・外来語	和語の文章の中での役割はどういうものか。それに対して漢語が日本語において果たす役割はどういうものか。特に造語という面から考えた場合の両者の特色。さらに、いわゆる外来語の役割について述べる。	阪　倉　篤　義 樺　島　忠　夫
9	21	語の意味と辞書	語の意味は、どのように記述されるか。また、それを集めた“辞書”というものについて、その種類と、利用法について述べる。	阪　倉　篤　義
10	28	日本語の文字と表記	漢字・ひらがな・カタカナ・Romaji と4種類の文字を使う日本文の表記には、特異な問題がある。その役割の分担、分かち書きの問題、更には外来語の表記やワードプロセッサなどとの関係から考えられる。将来の日本語表記について。	阪　倉　篤　義 樺　島　忠　夫
11	11/4	かなづかい・送り がな	仮名遣いとは何か。特に現代仮名遣いにおける、“とお”と“とう”“こうし”は格子か子牛かという問題などを考え、また、送り仮名の問題点などを述べる。	同　上
12	11	日　本　語　の　発　音	日本語の音韻組織は比較的簡単で、アクセントも、他の言語に比較して意義弁別の役割が軽い。その体系の概略と、方言的・歴史的な差異について述べる。	阪　倉　篤　義
13	18	語　史　と　慣　用　句	現代日本語は、過去の日本語の変遷の結果として生れてきたものである。現代語の単語が、かつてはどのような形や意味を持っていたかを、二三の例によって説明し、併せて慣用句の発生について説く。	同　上
14	25	日　本　語　の　過　去	日本語の歴史が始まって以来、今日まで千数万年の間に、内発的な原因と、また外国語との接触による外発的な原因で、日本語はどのような方向に変化してきたか。その大要を述べる。	同　上
15	12/2	日　本　語　の　将　来	日本語は、将来、発音・語彙・文字など、どのような面で変化する可能性があるか。それは日本人の言葉に対する態度によるが、将来の日本語はどうあるべきかという点をも含めて語りあいたい。	阪　倉　篤　義 樺　島　忠　夫

＝ 短 歌 と 俳 句 ＝

(→ 作詩・作歌・作句)

(主任講師：井本農一 (聖心女子大学教授))
(放 送 局：テレビ朝日)

全体のねらい

短歌・俳句を知的に理解するだけでなく、それらを創作する試みによって、文学に対する共感と理解を深める。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所 属 ・ 氏 名)
1	54/12 5	短歌と俳句の成り立ち	古典和歌・俳諧から現代短歌・現代俳句までの歴史的展望を述べ、短歌と俳句の文学的特質について論ずる。	井 本 農 一 (聖心女子大学教授)
2	12	風 雅 へ の 共 感	短詩形文学における作者と読者の同一性の問題を論じ、何等かの意味において風雅への共感が必要であることを述べ、いわば国民詩ともいふべき短詞形文学創作への導入を計る。	同 上
3	19	なぜ歌をつくるか	現代に生きる日本最古の詩形である短歌の特性と、短歌をつくることの意味を述べる。	井 本 農 一 (聖心女子大学教授) 前 田 透 (成蹊大学教授)
4	55/1 9	現 代 短 歌 の 傾 向	現代短歌にさまざまな傾向が見られるが、おのおのの作歌思潮を、具体的な作例によって示す。	前 田 透 (成蹊大学教授)
5	16	言 葉 と リ ズ ム	作歌の根本は感動であるが、感動の把握は言葉によってなされ、言葉が短歌の韻律をつくる。短歌の言葉とは何か。	同 上
6	23	写　　　　　　生	作歌技法のおもなものが写生であるが、写生とは生を写すことであって、たんなる模写ではない。写生の歌とはどのようなものか。	同 上
7	30	比 喩 の 用 法	現代短歌における比喩の技法とその重要性とを、実作に即して述べる。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/6	理解と批評と推高	作品のよさを感じとる力を養うことが作歌上必要であり、一歩進んだ批評の態度を確立することがさらに重要である。関連して推高の添削等を述べる。	同　上
9	13	なぜ俳句を作るか	芭蕉の「古池や」の句をめぐる「俳」の意味を探り、俳句の特性を考えるとともに、現代人が俳句を作ることの意義について考える。	井　本　農　一 (聖心女子大学教授) 川　崎　展　宏 (明治大学教授)
10	20	近代俳句の出発	子規の俳句革新運動とそれによって切り捨てられたものの意味を、芭蕉の句を例にして考え、句作の「場」の問題、先行の文芸との関係などを考える。	川　崎　展　宏 (明治大学教授)
11	27	写　　　　　　生	明治という時代の中で子規が文学や俳句をどう考えたかを明らかにしながら、子規の写生について述べ、さらに写生の現代俳句における意義を論ずる。	同　上
12	3/5	花鳥諷詠と季語	虚子が俳句と俳人の在り方を規定した「花鳥諷詠」と、その方法としての「客観写生」について述べ、さらに季語について考える。	同　上
13	12	対　話　の　世　界	挨拶の句は、連句の第一句目としての発句のはたらきが、近代の社交の場に生かされているものだが、挨拶句を鑑賞して俳句の対話性に着目する。	同　上
14	19	俳句の近代化の過程	子規の俳句革新の試みが、その後いかに継承され、俳句の近代化がいかに推進されたかを具体的に考える。	同　上
15	26	創作の根源にあるものとその形象化	この講座の結びとして、短歌・俳句の根源にあるものと、その形象化について話し合い、短詩形文学の未来についても展望する。	井　本　農　一 (聖心女子大学教授) 前　田　透 (成蹊大学教授) 川　崎　展　宏 (明治大学教授)

〔参考：＝現代の経済と経営分析＝〕

＝ 経 済 学 概 論 ＝

〔主任講師：嘉治元郎（東京大学教授）
放送時間：午前6時～午前6時45分
放送局：ラジオ日本〕

全体のねらい

現代経済学の概要について説明し、現実の経済に関する理解を深めると共に、経済の有るべき姿について考える能力を養う。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	56/12 8	経済学の諸領域	現代の経済学が主として資本主義体制の下での経済現象を分析の対象とすることを明らかにする。そしてその内容としては個別の経済主体の行動に関するミクロ理論と国民経済の実態に関するマクロ理論があることを説明し、経済学の全貌を示す。	嘉　治　元　郎 (東京大学教授)
2	15	消費者の行動	消費者あるいは家計の行動を、効用極大化の原理にもとづいて説明する。	同　上
3	22	市場の機能	私的企業の行動を、利潤極大化の原理にもとづいて説明する。	同　上
4	57/1 5	市場の失敗	競争市場の作用を説明し、価格の果している役割を明らかにする。	同　上
5	12	市場の失敗	市場の機能の限界を論じる。具体的には外部効果、公共財などの問題をとりあげる。また市場の機能をさまたげる要因独占についても触れる。	同　上
6	19	国民経済の構造	国民所得理論の基礎を明らかにし、集計された家計と企業の関係と雇用水準の決定についての考え方を示す。	同　上
7	26	消費関数	マクロ的に見た消費の決定について論じる。また消費と貯蓄の関係、乗数の考え方についても述べる。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/2	投　資　の　決　定	マクロ的に見た投資の決定について論じる。粗投資と純投資、自発的投資と誘発投資の諸概念を明らかにする。	嘉　治　元　郎 (東京大学教授)
9	9	総供給能力の決定	一国の経済の総供給能力が、労働力、物的資本、技術水準によって定まることを示し、この能力の拡大である経済成長について論じる。	同　上
10	16	貨　　　　　　弊	貨幣とは何かを論じ、それが経済全体との関連で果している役割を明らかにする。	同　上
11	23	金　　　　　　融	現代の金融制度の骨組みを示し、金融政策の目的と手段について説明する。	同　上
12	3/2	財　　　　　　政	政府の経済に関する役割を、その支出と収入の両面について明らかにする。また所得分配の問題にも触れて経済政策の在り方を論じる。	同　上
13	9	国　際　貿　易	国際貿易と国内経済との関係を明らかにし、自由貿易の利益と、その限界について論じる。	同　上
14	16	国　際　金　融	今日の世界経済の金融面について論じ国際金融機構、外国為替制度に関して説明する。	同　上
15	23	現代の資本主義経済	総括の目的を持って、現代の先進諸国に見られる経済上の諸問題を理論的に検討する。	同　上

= 会 計 学 I =

〔主任講師：江村 稔（東京大学経済学部教授）〕

全体のねらい

会計学の講義は、企業会計（とくに財務会計）の「しくみ」と「はたらき」を明らかにすることを目的として、体系的かつ構造的な説明を行うように企図されている。会計学Ⅰは、その前半部分に相当するので、ひきつづき、会計学Ⅱを受講する必要がある。会計学Ⅰにおいては、企業会計における会計処理、すなわち、複式簿記の技法による経済活動の記録についての説明に、相当の時間があてられることとなる。

主な項目

- (1) 決算書とその役割
- (2) 複式簿記と複式記帳
- (3) 複式記帳の法則
- (4) 決算のしくみ（その１）
- (5) 決算のしくみ（その２）
- (6) 決算書の様式（その１）
- (7) 決算書の様式（その２）
- (8) 利益の処分と留保
- (9) 企業会計の法的規制
- (10) 期間損益の計算方法
- (11) 発生主義と現金主義
- (12) 商製品の売上高
- (13) 役務提供による営業収益
- (14) 資産の取得価額と払出価額（その１）
- (15) 資産の取得価額と払出価額（その２）

= 会 計 学 II =

〔主任講師：江村 稔（前掲）〕

全体のねらい

会計学Ⅰに引きつづく講義として行われるので、すでに、会計学Ⅰを受講しておく必要がある。
会計学Ⅱでは、主要な財務諸表項目につき、その会計処理とくに期間損益計算における取り扱いを詳述する。したがって、固定資産の減価償却や繰延経理と引当経理のような高度の問題につき、説明が加えられる。そして、最後のまとめとして、財務諸表による財務状況の開示、および、財務諸表監査さらには、企業会計の国際化などの諸問題を解説する。

主な項目

- ⑩ 商製品の売上原価
- ⑪ 商製品の貸借対照表価額
- ⑫ 製造費用と製造原価
- ⑬ 有価証券の貸借対照表価額
- ⑭ 固定資産の減価償却（その１）
- ⑮ 固定資産の減価償却（その２）
- ⑯ 繰延資産とその償却（その１）
- ⑰ 繰延資産とその償却（その２）
- ⑱ 引当金の設定
- ⑲ 資本金と資本項目
- ⑳ 利益配当の法的規制
- ㉑ 連結財務諸表の作成
- ㉒ 企業内容の開示と財務報告
- ㉓ 株式会社の監査制度
- ㉔ 制度会計の諸課題

＝ 社会科学の成立と発展 I ＝

主任講師：松田智雄（図書館情報大学長）
放送時間：午前 7 時 45～午前 8 時 30 分
放送局：ラジオたんぱ

全体のねらい

社会科学は、自然科学と比較すればおくれで成立した新しい科学である。しかし、自立的な科学となる迄にも、哲学、自然科学の発展のなかに、その基本概念の基礎は与えられた。そして、社会的現実の実態を認識し、その発展の法則性を明らかにしてきた。これに基づいて未来像を、批判的科学としての成立史をたどりたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	57/12 11	社会科学について (I)	社会科学とは何か。社会集団は、政治経済、文化などを結合の軸として、歴史的な序列において編成される。その社会集団を正確に、科学的に把握すること、従って、その発展の動きの法則性を捉えようとする。	松　田　智　雄 (図書館情報大学長)
2	18	社会科学について (II)	社会的現実を組織的な法則体系のなかで把握する。従って発展してきたものとして歴史的に捉える。先ず自然法則の下にあるものと仮定し、次いで固有の社会法則の下に在るという認識論的な意味で社会科学の方法の成立史を述べる。	同　上
3	25	社会科学について (III)	社会的現実の実態を認識し、さらにその未来像を描くことによって現代批判が生まれ、批判的科学として成立するに至る。ユートピアの諸説から、社会理想の提案を追い、最後にマックス・ウエーバーの理念型に及ぶ。	同　上
4	1/8	ド　イ　ツ　思　想	思想的前提を明らかにするために、まずドイツ思潮を辿る。カント、新カント派としてのウィンドルバント、リッケルト、マックス・ウエーバーへ。さらに、ヘーゲルとマルクスを対比し、歴史学派とカール・メンガーに至る。	同　上
5	15	啓　蒙　期　の　思　想	啓蒙期に、はじめて社会に対する法則的組織が始まる。自然法の光りのもとに自然と人間社会とを観察し、社会に対する最初の科学的見地をうち立てる。	同　上
6	22	科　学　の　成　立	Natural History という概念は、自然史などをいう訳語は誤訳の惧れがある。自然についての歴史または叙述をいみするもので、生物学、物理学、地質学、鉱物学など自然を全体として把握する。	同　上
7	29	自　然　科　学　の　意　義	Natural Philosophy は、自然全体を研究し、とくに物理学を中心として学問を確立する。さらに Natural Science は、成立し、自然を観察し把握するのであるが、自然のなかには人間が含まれ、人間の社会が考察される。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/5	カール・マルクス	人間は自然に従属するものとして、人間論が科学的思考の対象となる。念のため、Karl Marx の「経済学批評」は経済の対象を <i>naturgeschichtlicher Prozess</i> とするが、これが自然史的過程を誤訳された。社会科学とは人間と人間社会の科学である。	松　田　智　雄
9	12	哲学思潮と社会科学	社会科学。科学としての成立。プラトン、アリストテレスの思想を前史とする。ダンテの社会批判とデカルトの人間論、人間の意味と人間に関する批判の基準として「社会的正義」とくに配分的正義論が再生する。	同　上
10	19	市民社会の研	社会に関する思想 — イギリス近代社会における市民的社会の自己認識が進められ、ベイコン、ホッグス、ロックによって、自然法の社会生活を貫徹する意義を発見する。社会批判と、社会改革、社会進歩の思想が生み出される。	同　上
11	26	経済学の父、スミス	市民社会の経済的組織を科学的に把握したのが、アダム・スミスであり、社会科学としての経済学が成立する。経済学は、すべてスミスを源泉とする。これに続くマルカス、リカードウ、J. S. ミル。ついに経済学は、　　な科学となる。	同　上
12	3/5	フランス啓蒙思想	フランス啓蒙思想のもとにおいては、ルソー、モンテスキュー、ヴォルターン、ケネーに至る個人的自由、近代国家論、自然法則のもとにある経済社会が、科学として形成される。	同　上
13	12	社会科学と社会主義	社会思想の発展の系譜について。ベンサムから J. S. ミルへの功利主義は、最大多数の最大幸福を理想とした。しかし、その結果は社会主義に接近する。ヘンリー、ジョージ、ラスキン、モーリス。フランスではサン・シモン、ブルードン。	同　上
14	19	新　カ　ン　ト　派	カントは経験科学をあとづけ、次いで新カント派は、ウインデルバントが歴史科学を、リッケルトが経済改学を基礎づける。カール・マルクスは、古典主義経済学とヘーゲルを前提として、基本的には人間的科学としての社会科学を提起。	同　上
15	26	マックス・ウェーバー	市民社会への批判的科学として、マックス・ウェーバーは、社会法則を理念型によって、発展法則を具体的因果帰属として把握する。資本主義を「鉄の如き外衣」として表現したことは、その批判の集約であった。	同　上

＝ 現 代 社 会 論 I ＝

主任講師：辻村 明（東京大学教授）
 放送時間：午前6時～午前6時45分
 放送局：テレビ朝日

全体のねらい

現代社会論Iでは、現代社会を基本的に規定している諸条件を、世界的視野のなかで眺め、現代社会が歴史的にどのように位置づけられるかを検討する。そのためには、資本主義か社会主義かといった社会体制という条件と、近代化という条件との絡み合いのなかでみていく必要がある。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/12 10	現代社会のとらえ方	人類の発展過程を5つの社会類型でとらえるマルクスとロストウの理論を紹介し、両者の比較を通して、現社会のとらえ方の典型を検討する。	辻　村　　明 （東京大学教授）
2	17	現代社会と大衆社会	現代社会を階級社会とみるか大衆社会とみるかで、意見は大きく成立するが、日本での大衆社会論とアメリカでの大衆社会論を比較しながら、コーンハウザーの大衆社会論を検討する。	同　上
3	24	社会体制と近代化	現代社会を規定している最も基本的な条件である「社会体制」と「近代化」について、それぞれの定義をおこなったのち、両者の絡み合いのなかで、現代社会を分析することの必要性を説明していく。	同　上
4	1/7	資本主義社会のメカニズム	そのまず初めとして、資本主義社会を動かしている根本的なメカニズムを明らかにする。ウェーバーの初期資本主義のエーストやスミスの自由放任や予定調和の説を紹介する。	同　上
5	14	資本主義社会の近代化	その資本主義社会が、「機械化」と「民主化」を内包とした「近代化」が進展まることによって、どのように変貌してきたかを検討する。	同　上
6	21	社会主義社会のメカニズム	次いで、資本主義社会の対極をなす社会主義社会の基本的メカニズムを明らかにする必要がある、具体的にはソ連をとりあげて、国家機構、経済機構、党機構、言論機関などの現状を報告する。	同　上
7	28	社会主義社会の近代化	その社会主義社会も、資本主義社会と競争していかなければならず、「機械化」という「近代化」は大いに推進されてきた。それが社会全体にどのようなインパクトを与えているか、「民主化」の可能性を検討する。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/4	収斂理論と拡散理論	その結果、資本主義社会と社会主義社会とは、類似した社会に接近していくであろうとみる収斂理論と、両社会は根本的に対立し続けるとみる拡散理論とを比較検討する必要がある。	辻　村　　明
9	11	現代社会と官僚制	以上の他、大規模組織には不可欠の官僚制というメカニズムが、資本主義社会にも社会主義社会にも出現してくるのでその病理現象を検討することが、最終的な体制選択をするために必要な参考となるであろう。	同　上
10	18	発展途上国の近代化	これまでは、両社会体制の先進国間での比較ということになるが、近代化の遅れている発展途上国も近代化を指向しているので、その近代化途上におけるさまざまな難問も検討しておく必要がある。	同　上
11	25	機械技術の発達	「近代化」の定義として、「機械化」と「民主化」ということを設定していくが、特に「機械化」が中心概念となるので、機械技術の発達の跡を回顧しておく必要がある。	同　上
12	3/4	機械技術発達の功罪	その機械技術の発達は、人類に多くの利益をもたらした反面、過度の発達から逆に最近は不利益をもたらしている面があり、功罪の両面を検討する。	同　上
13	11	高速社会と人間	特に機械技術のうちでも、交通機関の発達はめざましく、その総合的な結果として、「高速社会」とも呼ばれるべき状況が出現し、それが人間にどのようなインパクトを与えているかをみる。	同　上
14	18	情報社会と人間	また機械技術の発達は、単に交通機関においてばかりでなく、最近では通信機関や情報処理機関での発達がめざましく、「情報社会」が人間にどのようなインパクトを与えているかも検討しておく必要がある。	同　上
15	25	総　括　討　論	以上を踏まえて、「社会体制」と「近代化」との絡み合いを視座において、現代社会の今後の動向を、比較体制論の専門家3人で討論する。(現代社会論Ⅱでは、よりミクロな現象的な問題を取りあげていく)。	辻　村　　明 加　藤　　寛 (慶応義塾大学教授) 寺　谷　弘　壬 (青山学院大学教授) (予　　定)

= 現 代 社 会 論 II =

〔主任講師：辻村 明（前掲）〕

全体のねらい

現代社会論Ⅱは、Ⅰのマクロの視点にたいして、ミクロな視点にたった現代社会の現象的な諸問題を取りあげる。いゝかえれば、より心理学に接近する。前半は主としてコミュニケーションに関して次いでその特殊な形態として流言やパニックの問題を取りあげ、そのあとにコミュニティ論、最後に日本社会論と日本人論とする。

主な項目

世論とマスコミ、国際コミュニケーション、文化摩擦と異文化間コミュニケーション、人種的偏見とステレオタイプ、流言と噂話、パニック、流言と伝授普及過程、コミュニティの崩壊、地方の復権、大衆文化論、社会病理現象、国民性論、日本社会論、日本人論、戦後日本の大衆心理。

＝ 社 会 調 査 ＝

〔 主任教授： 甲田 和衛（放送大学教授）
直井 優（東京大学助教授） 〕

全体のねらい

社会調査は（ⅰ）歴史、ⅱ）方法、ⅲ）経験社会学の成立という3つの側面をもっている。社会調査の範囲は、センサスから個人の日記・書簡に及ぶ。ここではわれわれの日常生活に社会調査がかかわる問題を通して、この3つの側面をできるだけ同時にとりあげていきたい。

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 （ 所 属 ・ 氏 名 ）
1	社会調査とは	ⅰ）社会的事実と社会的現実、ⅱ）社会調査は科学たりうるか、について論議する。	甲 田 和 衛 （放送大学教授） 辻 村 明 （東京大学教授） 直 井 優 （東京大学助教授）
2	国 勢 調 査	国勢調査の実施、集計、結果の利用から基本的統計調査としての国勢調査の歴史に及ぶ。	井 出 満 （総理府統計局） （国勢調査課長）
3	人 口 問 題	人口学的分析の基本的な方法と、人口構造に影響を与える諸要因を探究する。	阿 藤 誠 （厚生省人口問題 研究所） （人口資質部長）
4	社会調査と経験社会学	社会調査の対象と方法、とくに事後実験と機能的説明について概説する。	甲 田 和 衛
5	社会調査の展開 1) ヨーロッパ	社会調査の創始者としてのⅰ)Boothの貧困調査、ⅱ)Durkheimの自殺論をとりあげる。	同 上
6	社会調査の展開 2) アメリカ	3つの業績、ⅰ) Myrdal の黒人問題、ⅱ) Adorno はかの権威主義的性格、ⅲ) Stouffer はかのアメリカの兵士、をとりあげる。	同 上
7	社会調査の展開 3) 日 本	戦前日本の社会調査の典型として、戸田貞三「家族構成」を検討する。	同 上

回	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	事例調査と統計調査	事例調査と統計調査の2つの方法は社会調査における古典的課題であり、こゝではその対比を問題とする。	甲　田　和　衛 直　井　　　優
9	世　　論　　調　　査	世論調査は、社会調査に大きな技術上の革新をもたらした。ここでは、世論調査の沿革を辿りつつ、無作為標本抽出や構造化された質問票の意義を明らかにする。そして指数化された情報が、人々の行動の予測や公共政策へ反映することを示す。	直　井　　　優
10	産　業・労　働　調　査	近代の工業化は、新たな社会問題をもたらしただけでなく、オートメーションなどの技術革新は、勤労者の仕事や労使関係にたえず影響を及ぼしている。勤労者の仕事や動機づけの測定法を紹介することにより、社会調査の応用を明らかにする。	同　上
11	社会階層と社会移動	近代社会は、機会の均等と現実の不平等が両立している社会である。そのため、社会全体に、不平等がどのように分布しているか、そしてどれだけ機会の均等が達成されているか、という問題に関して、縦断調査の方法と測定法を説明する。	同　上
12	集　団・組　織　調　査	近代社会は、多元的な社会といわれるように、たんに家族の一員であるだけでなく、各種の集団や組織に属している。こうした集団や組織の社会的なネットワークや集団・組織が人々に及ぼす集合効果を測定する方法を説明する。	同　上
13	地　　域　　調　　査	地域調査は、一地域に関する調査から、地域間の相互連関を明らかにする調査へと発展してきた。ここでは、地域を調査単位として、集計量による指数を作成し、それによって、地域間格差の是正をはかろうとする社会指標運動について説明する。	同　上
14	国　際　比　較　調　査	社会調査による結果の妥当性と信頼性は、たえず他の調査結果との比較によってのみ評価することができる。こうした比較調査の最も大きい設計が、国際比較調査である。具体的な調査事例をもとに、日本社会の普通性と個別性を説明する。	同　上
15	社会調査の課題	科学としての経験社会学の成立に果すべき、社会調査における方法上の課題について説明する。	甲　田　和　衛 直　井　　　優

＝ 数 理 計 画 法 入 門 ＝

〔主任講師：加瀬滋男（大阪府立大学工学部教授）〕

全体のねらい

現行の各種数理計画法のうち最も一般的でしかも重視されている線形計画法（LP）につき、具体例を挙げながら平易に解説する。すなわち、1～13章にてLPの基礎から各手法の実際までを講述し、14、15章で産業界における若干の応用例を紹介する。その応用例に関する印刷教材作成およびテレビ放映には、三菱石油㈱から参加、協力の内諾を既に得ている。（関連科目：「経営戦略」、「生産管理とOR」、「経営科学」等）

主な項目

- (1) 数理計画法概説
- (2) LPの具体例
- (3) LPの構造
- (4) シンプレクス法(1)
- (5) 同 (2)
- (6) 特別な場合の解法
- (7) 2段階シンプレクス法
- (8) 実施上の検討(1)
- (9) 同 (2)
- (10) モデルの改変
- (11) 特殊問題の解法(1)
- (12) 同 (2)
- (13) CPMの解法
- (14) 産業界における例(1)
- (15) 同 (2)

＝ 基 礎 数 学 ＝

（主任講師：田村二郎（元東京大学教授））
（放送局：テレビ朝日）

全体のねらい

数学の明瞭さをそこなうことなく、乾いた形式の背後にある具体的・直観的なイメージを伝えるために、わたくしたちは微分積分学と力学の境界をたどってみたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/8 25	導関数と原始関数	高等学校で学ぶ数学のなかから、今後必要と思われる最少限の知識を整理しておく。内容は初等的な微分積分法の基礎概念だけである。	田　村　二　郎 （元東京大学教授）
2	9/1	時　刻　と　位　置	すべての自然現象は空間のなかで起こり、時間とともに推移する。それゆえ、われわれはまず時刻と位置を“数”によって表わさなければならない。その手続きを考えてみよう。	同　上
3	8	ベクトルとベクトル量	最終的にはすべての量を数で表すとしても、いくつかの量はひとまずベクトルで表す方がはるかにわかりやすい。ここでは、ベクトル量とベクトルそのものを明確に区別し、後者を前者の数学的表現をみなすのがよいと思われる。	同　上
4	15	速　さ　と　速　度	小学校で学習した“速さ”を考え直す。これによって、新しい量の単位を定める手続きがわかる。さらに、ベクトル量としての速度を導入する。数学から見れば、ベクトル値関数の微分法である。	同　上
5	22	加速度と運動の方程式	速度がわかれば、加速度の理解に困難はない。そこで質量と力の概念を導入すると、ニュートンの第2法則は数とベクトルによって表現される。同時に、古典物理学における三つの基本量（長さ、質量、時間）が出そろふことになる。	同　上
6	29	数による量の表現	ベクトルを三つの数で表せば、古典物理量はすべて数に翻訳される。この際、座標系とともに単位系を固定しなければならない。この前提のもとに、はじめて量と数の同一視が意味をもつであろう。	同　上
7	10/6	回　転　と　円　運　動	いわゆる一般角は、平面上の回転という量を角によって測ったものである。さらに、等速円運動を考えると、三角関数の微分法について、具体的なイメージが得られる。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	13	無　限　小　と　微　分	実際の現象をとり扱うときには、極限としての変化率(微分係数)よりも、微小変化を用いる方が有効である。ただこの際、物理学の考え方と数学の理論とのあいだに、微妙な相違が現れる。このギャップを数学の側から埋めておきたい。	田　村　二　郎 (元東京大学教授)
9	20	積　分　と　道　の　り	がんらい、積分とは微小変化の集積(の極限)である。ここでは、運動の概念から出発して、積分と原始関数の関係、曲線の長さなどに言及したい。	同　上
10	27	仕　事　と　線　積　分	力学にもどって、仕事とエネルギーの概念を明らかにする。これによって、ベクトルの内積と線積分の意味が自然に理解されるであろう。	同　上
11	11/3	テイラーの定理	“1変数の微分積分学”を締めくくりにあたって、テイラーの定理を取り上げる。この際、多項式近似”から見たこの定理の意味と、使用上の注意を明らかにしたい。また、できるだけ自然な初等的証明をくふうしたいと思う。	同　上
12	10	スカラー場の変化	時刻の関数から位置の関数に移ると、多変数(3変数、2変数)の関数が現れる。これは物理学でいう“場”である。いわゆる偏微分法は、場の変化を計算するための手段と考えられる。	同　上
13	17	重　力　の　法　則	第2法則とともに、重力の法則は力学におけるもっとも基本的な原理である。またこれから導かれる重力場とニュートン・ポテンシャルは、ベクトル場とスカラー場の典型である。	同　上
14	24	複　素　数	平面ベクトルの変換とみなせば、複素数も決して“仮想的な数”ではない。それどころか、物理現象を記述し、処理するためにしばしば有効な手段を提供する。数学における複素数の役割はさらに重要である。	同　上
15	12/1	惑　星　の　運　動	惑星は太陽を焦点とする楕円の軌道を描く、この事実を発見したのはケプラーである。さらに、ニュートンは彼の第2の法則と重力の法則から、ケプラーの法則を導いた。この業績を紹介して、本講を終わる。	同　上

＝ 基 礎 物 理 学 I ＝

主任講師：戸田盛和（横浜国立大学教授）
 放送時間：午前6時～午前6時45分
 放送局：テレビ朝日

全体のねらい

自然現象をできるだけ少数の基本概念と法則によって理解しようとするのが物理学の立場である。重要な概念と法則がどのようにして確立されてきたか、古典物理学の範囲でこれを明らかにしたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	57/12 12	科学のはじまり	自然現象を理解しようとする知的な努力から科学が生まれた。エジプトのピラミッドに代表される技術、ユークリッド幾何学、アルキメデスによるこの釣り合いの静力学の研究は数量的な科学のはじまりを物語っている。	戸　田　盛　和 (横浜国立大学教授)
2	19	浮力と水の圧力	アルキメデスは風呂の中で浮力の原理を発見したと伝えられる。パスカルは大気の圧力が空気の重さによるものであることを明らかにした。これにより自然には真空が存在することが明らかにされたが、これは自然を理解する上で大きな発見であった。	同　上
3	26	落　下　運　動	ガリレイは落体の運動を研究し、速度が変化する場合は運動を明確に捉えた。実験と数理的な推論を組み合わせることで自然現象を理解する方法がはじめられた。放物体の運動、振り子の等時性についても触れる。	同　上
4	1/9	地　　　　　球	ガリレイは望遠鏡によって木星の衛星や太陽の黒点などを発見し、地球もこれらと同じように天体であることを明らかにした。地球が球形であることは古代ギリシャ時代にも考えられたが、この時代にこれが確認された。コペルニクスの地動説が提出された。	同　上
5	16	太　　陽　　系	ケプラーの法則の発見について述べる。月までの距離、太陽までの距離はどのようにして知られたか。	同　上
6	23	運　動　の　法　則	ニュートンは運動の法則、それを有効に扱う数学、それに万有引力の法則をもって太陽系の問題と取り組んだ。地球をまわる月の運動はそのテストケースであった。	同　上
7	30	力　と　運　動	力に対する身近な例といろいろな運動の具体的な例。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/6	回　　転　　運　　動	多くの日常的な運動は回転を含んでいる。玉の衝突、円板の回転、潮汐、体操などにおける身体の回転、ネコの空中における回転、コマの運動。	戸　田　盛　和
9	13	仕事とエネルギー	ワットは蒸気機を発明し、馬力という単位を作った。エネルギーの概念は力学においても重要である。永久機関の夢にも触れる。	同　上
10	20	熱　　　　　　　　量	熱はエネルギーの一つの現れであることがわかってきたのは19世紀半ばである。熱現象に関する学問、低温の物理学も19世紀後半にはじまった。	同　上
11	27	物　質　と　分　子	物質の分子の構造は今世紀になってから明らかにされたものであるが、ここでは原子分子に対する理解の進歩、気体・液体・固体のちがひ、結晶の構造などについて述べる。	同　上
12	3/6	流　体　の　運　動	飛行機の翼やヨットの帆に働く揚力をはじめ流体の運動は大変興味深い現象が多い。台風などの運動には地球の回転もからんでくる。	同　上
13	13	波　　　　　　　　動	波は重要な運動の形態である。音の波、光の波、水の波、ドップラー効果などについて述べる。	同　上
14	20	電　流　と　磁　気	電流は磁気的な作用がある。その研究は独特な歴史をもち、ファラデーを経てマクスウェルによって完成された。	同　上
15	27	電　波　と　光	マクスウェルの研究は電波の存在を预言した。一方で光速の測定と熱放射の研究は物理学の20世紀における大きな変革につながるものであった。	同　上

＝ 基 礎 化 学 I ＝

（主任講師：伊能 敬（武蔵大学教授））
（放送局：テレビ朝日）

全体のねらい

化学は自然化学の一分野であるが、その究めようとする対象が物質（その性質と変化）であるため、人の日常生活や社会と深いかわりを持つことになる。その辺の問題を明らかにすることを目標としながら、基礎化学Ⅰでは、化学のもつ性質、化学を支える基礎理論を、できる限り平易に追求して行きたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/8 26	化学とは（その1） －身近の化学－	台所、自動車など、われわれの周辺にある親しみやすいものが、いかに化学とかかわっているか、実物と対応させながら化学におけるミクロな見方、考え方にはいりこんで行く。	伊　能　　敬 （武蔵大学教授） 綿　拔　邦　彦 （東京大学助教授） 務　台　　潔 （東京大学助教授）
2	9/2	化学とは（その2） －自然界の化学－	自然界において、化学変化がどのような形で見出せるか。化学変化イコール実験室、白衣、ビーカー、試薬瓶といったイメージを、ここで改めて見直したい。	同　上
3	9	物　質　の　構　造	固体物質の構造から発展させて、エネルギーと物質の不連続の問題、さらに原子の構造へとつないで行く。	伊　能　　敬 綿　拔　邦　彦
4	16	原　子　の　構　造	原子を構成している電子、陽子、中性子の本性を調べ、さらに水素原子の構造、同位体、原子の電子構造などを明らかにする。	伊　能　　敬
5	23	化　学　結　合	イオンの本性、イオン結合、共有結合、金属結合など原子の主な結合方式、分子構造の表現などを学ぶ。	同　上
6	30	物　質　の　三　態	気体の性質からはいって、液体、固体の特徴を明らかにし、それらの状態の相互変換について調べる。	伊　能　　敬 綿　拔　邦　彦
7	10/7	コ　ロ　イ　ド　状　態	物質の三態から見れば、いろいろな意味ではんばな状態がコロイドである。ところが、われわれを取り囲む自然界、衣食住を支える多くの物質が、実はコロイドの状態にある。	伊　能　　敬

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	14	溶　　　　　液 (1)	溶液はどのようにしてできるか。純物質としての液体と、どのように違うか。溶液の特徴、溶解という現象にかかわる諸問題を解明する。	伊　能　　　敬 綿　拔　邦　彦
9	21	溶　　　　　液 2 (2)	前回に引き続き、溶解度の関係をわれわれは、どのように利用するか、など問題を展開する。	同　上
10	28	化　学　反　応 (1)	化学反応とは何か。それをわれわれはどのように表現するか。化学反応にともなうエネルギーの出はかりについて、また化学反応の速度を決定するものは、などを追究する。	伊　能　　　敬
11	11/4	化　学　反　応 (2)	沈澱反応、酸・塩基反応、酸化・還元反応など、諸反応の本質を明らかにし、また、それがどのように応用されるかを知る。	同　上
12	11	化　学　反　応 (3)		同　上
13	18	有　機　化　学 (1)	基礎化学Ⅱにおいて活躍する有機化学関連の諸分野の話を理解するためにも、知っておかなければならない有機化学の基礎を学ぶ。	伊　能　　　敬 務　台　　　潔
14	25	有　機　化　学 (2)	前回に引き続き、炭素化合物の主な族、官能基に従って行なう物質の分類、代表的な化合物などを知る。	同　上
15	12/2	核　　　　　化　学	放射能とは何か、から始まって、核反応のあらわし方、人工核転換、核分裂、核融合、原子力利用、放射性同位体など、核反応という他の化学分野と違う特異な領域について学ぶ。	伊　能　　　敬 綿　拔　邦　彦

＝ 基 礎 化 学 II ＝

主任講師：伊能 敬（前掲）
放送時間：午前 6 時～午前 6 時 45 分
放送局：テレビ朝日

全体のねらい

基礎化学Ⅰでは、化学理解に必要な基本的な原理を解説した。基礎化学Ⅱでは、それを受けた応用面として、化学がわれわれの日常生活や現代社会とどのようにかかわっているか、いくつかの角度から興味ある話題を取り上げる。初学者に理解しやすいよう平易に、しかも可能な限り新しい情報を取り入れながら解説を進めたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/12 9	生 体 の 化 学 (1)	生物の体内には、どのような物質が見いだされるか。そしてそれらの物質の間ではどのような反応が起こるか。生物体を形づくる物質の多くは巨大で複雑な分子であり、それらの間に起こる化学変化も完全に解明されてはいない。究極的には生命現象のなぞ解きに結びつくこの研究分野は決して容易な仕事ではないが、近年、新しい知見がいくつも得られており、大きな成果があがっている。その概要を 2 回にわたって探る。	伊 能 敬 （武蔵大学教授） 務 台 潔 （東京大学助教授） 大 島 泰 郎 （三菱生命科学研究所）
2	16	生 体 の 化 学 (2)		同 上
3	23	食 物 の 化 学 (1)	人間が生き続けるために不可欠な食物。ことに近年の世界人口の急増にともない世界の食糧供給問題は深刻の度を増して行く。食物、それにかかわる肥料、食品添加物などと、化学との関連を 2 回にわり追求する。	伊 能 敬 福 島 博 保 （お茶の水女子 大学教授）
4	1/6	食 物 と 化 学 (2)		同 上
5	13	化 学 と く す り (1)	化学といえば薬品を連想する。そしてくすりは当然医療につながる。くすりには天然物利用のものもあれば、合成医薬もある。化学療法、消毒、殺虫あるいはビタミンなど広くくすりに関する化学の役割を調べてみよう。	伊 能 敬 務 台 潔 森 謙 治 （東京大学教授）
6	20	化 学 と く す り (2)		同 上
7	27	化 学 と 産 業 (1)	学問としての化学は、いわゆる化学工業を成立させただけでなく、材料を媒介として他の産業分野にも貢献してきた。その歴史と現状を概観し、化学技術開発における指導原理の展開を探る。	伊 能 敬 平 沢 冷 （東京大学助教授）

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/3	化学と産業(2)	物質の性質や機能は分子の構造だけでは規定されない。原子・分子の集合状態物質の配置やその構造等物質の構成にかわる他の要因も重要である。ニーズに適合する素材をどのようにして設計するか合成高分子等を例にして調べる。	伊　能　　　敬 平　沢　　　冷
9	10	化学と産業(3)	材料の開発はまたその合成法の開発でもある。設計された「物質の構成」を実現するためにどうアプローチするか。その指導原理を探る。	同　上
10	17	化学と産業(4)	物質の極限状態、または極限条件下における物質の性質を追求する過程で、画期的に新素材が生み出されている。新素材開発の動向とそれが産業に与える衝撃を予測し、化学工業の将来を展望する。	同　上
11	24	エネルギー資源(1)	いわゆる化石エネルギーの、これまでの利用法について、環境と結び付けながら調べてみよう。	伊　能　　　敬 綿　抜　邦　彦 (東京大学助教授)
12	3/3	エネルギー資源(2)	将来のエネルギー資源として、何が残っているか、新たにどんなものが利用できそうか考えてみよう。	同　上
13	10	化学と環境(1)	人類が誕生してから現在まで、環境はどのように移り変ってきたか。化学の立場場で追ってみよう。	同　上
14	17	化学と環境(2)	現在、地球的スケールで人為の影響は大きい。それが環境をどのように変えつつあるか。将来にむけて、われわれは環境をどのように維持しようと努めなければならないか。	同　上
15	24	化学とは 一分ける・つくる・ 考える一	今世紀の化学の進歩はまことに著しい。あらためて振り返り、われわれの身近で化学はどのように役立っているか、いくつかの話題をひろってみよう。	伊　能　　　敬 綿　抜　邦　彦 務　台　　　潔

= 基 礎 生 物 学 =

〔主任講師：毛利秀雄（東京大学教養学部教授）〕

全体のねらい

専門課程生物への橋渡しとして、生物（学）の基本となる一般的事実や概念をできるだけ分かり易く
のべることをねらいとする。高校課程までの教育では、生物を暗記物とする傾向が強い。しかし実際
の生物学は実験科学の一つで、日々新たな発見や考えが出されており、まだまだ分らないことばかり
である。また医学、農学、工学など応用分野との関連も拡がっており、これらをひっくるめたライフ
サイエンスの研究は人類の将来にも大きな影響を与えつつある。生命の探究がきわめて魅力に富んだ
ものであることを伝えられれば幸である。

主な項目

- (1) 生命の単位としての細胞
- (2) エネルギーの獲得と利用
- (3) 恒常性の維持
- (4) 遺 伝
- (5) 発生と形態形成

（生命の誕生を最初か最後に入れるか？）

（生態や系統進化、分類は？）

＝ 基礎宇宙地球科学 ＝

〔主任講師：小尾信彌（東京大学教養学部教授）
奈須紀幸（東京大学海洋研究所長）〕

全体のねらい

この科目は「自然系」の中の基礎科目である。基本科目である「地球と宇宙」を学習したことを前提として本科目を学ぶ。「地球と宇宙」の内容を、より高次の視点から捉え、かつ、より細分された立場から深めて学習する。

地球は宇宙の一員であり、そこにわれわれ人類は日常の生活を営んでいる。とくに最近のように宇宙科学と地球科学が飛躍的な進展を遂げつつある時期においては人々の宇宙・地球に関する理解への要求も高まって来ている。そのような関心に応えるべく当該分野の基礎を学ぶことを目標とする。

主な項目

宇宙、銀河系の天体と構造、恒星、星と宇宙の進化、太陽系と惑星、太陽、月、地球の自転と公転、地球の物理的性質、地球の構造と構成物質、地殻の構成物質、地球内部のエネルギー、太陽エネルギー・大気、海洋、地球の歴史など。

＝ 確 率 論 ・ 統 計 学 ＝

〔主任講師：林知己夫（統計数理研究所長）〕

全体のねらい

「統計学に必要」という立場から、絞って確率論を説明する。統計学の基礎的事項の説明、確率論と統計学との結び付きについて詳しく解説する。このところが、従来の統計学の書物において、曖昧にされていたところである。統計学については、そのミニサム、エッセンシャルについて立ち入った説明を試み、今後勉強を進めるに際しての基礎を与えることを目標とする。説明に当って「科学的態度とは何か」を常に念頭において方法を講じ、科学各分野に応用するときの仕方に誤りがないように努める。

主な項目

- (1) 確率とは何か
- (2) 確率論の初歩
- (3) チェビシェフの不等式
- (4) 確率と統計との結び付き
- (5) データのまとめ方
- (6) データを獲るための理論
- (7) データを分析するための理論
- その 1 統計的推論
- (8) その 2 データ解析の考え方

＝ 自 然 系 実 験 ＝

〔主任講師：宮代彰一（放送大学教授）〕

全体のねらい

他の多くの自然系科目がそれぞれの実験テーマを含んでいるのに対し、本科目においては、それらに共通した、いわば横割りのテーマで編成する。この筋書きに沿うような具体的実験例をとりあげる。より広くは、各分野の担当教官と打合せ学習センターで行うことを考える。なお放送では有名、重要または高度な例を多く紹介する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	序　　　　　　論	・オリエンテーション ・科学における実験の意義 ◇歴史に残る科学実験の例 ・実験の種類－純粋研究（R）と応用研究D）	宮　代　彰　一 （放送大学教授）
2	実験の企画・計画	・研究実験の企画について ・実験の計画…R研究とD研究での性格 ・二、三の手法…K J法、PERT法など ・研究管理、チームワーク ◇各種の研究所の紹介	同　上
3	文　献・資　料	・文献、資料の必要性 ・情報の種類、ありか ・資料の整理、文献ノートなど ・検索の方法、機械検索 ◇図書館、機械検索の例（JICST等）	同　上
4	実験の心得・観測	・観測～記録～判断 ・実験ノートのあり方 ・機械、器具、材料の工夫 ・ひとの感覚はすべてのもとになる ⑩人間の感覚実験（ex. Weber-Fechner の法則を出してみる。）	同　上
5	分　　　　類　　法	・分類は科学法則の出発点 ・分類の視点、分類のしかた。 ・符号化 ⑩ホールソートカードによる実習 ・各種の分類法…ex .UDC、LPC～UPC等	同　上
6	単　　位・次　　元	・測定と単位 ・基本的な量 ・国際単位系 ・次　　元 ◇各種の標準原器などの実際を紹介	同　上
7	測　　定・計　　算	・計測法：偏位法（ex.物さし）～零位法（ex.天秤） ・読取り：目盛、指針、バーニヤ ・いろいろな基本計測器 ⑩形状、質量、力学……などに関連した簡単な測定とデータの整理計算 ⑩電卓のつかい方	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	誤差データ処理	・誤差の種類、原因 ・測定精度 ・有効数字 ・データの整理 ㊦最小自乗法、実験式 ◇計測精度に関する実例若干の紹介	宮代彰一 (放送大学教授)
9	"	・偶然誤差、統計ゆらぎ ・誤差の理論 ㊦統計ゆらぎのある実験と結果の処理 (ex・熱、気圧、光、放射線……などに関連したもの……㊦にできるか？)	同　上
10	器具・設備安全性	・機械、器具の選定、調達、製作 ・機械工作、材料の知識 ・安全性の問題：毒性物質ほか ・化学実験での注意 ㊦水質(水道、河川水)の検査	同　上
11	電子計測	・基本計器(電流、電圧計、テスタ等) ㊦基本的電気測定の実習 (ex) 抵抗値の測定、半導体ダイオードなどの測定、ハンダ付けの要領等) ・オシロスコープの使い方：各種波形の観測(音、交流波形、リサージュ……)	同　上
12	電子計測・電算機の利用	・センサの話 ・光、圧力、……などの測定(ものによっては㊦を考慮) ・マイコンによる数値処理 ◇マイコン制度、ラボラトリオートメーションの例を紹介	同　上
13	数　値　実　験	㊦モンテカルロ法： π の値を求める ・数値計算でのシミュレーション実験 ・簡単な電子回路(ex・RC回路)や人工衛星の軌道(単純な場合) ◇計算物理の実例(ex・Laureuce Rivermore 研編集のフィルム)の紹介	同　上
14	報　　　　　告	・技術報告書のあり方、書き方 ・技術発表の仕方 ・図表の書き方 ・技術英文(?)	同　上
15	し　め　く　ゝ　り (オリジナリティ)	・実験研究のまとめ ・学会：学会とは、学会発表 ・発明：発明とは、研究の実用化 ・オリジナリティの尊重	同　上

= 英語 I — Introduction to Living English Speech =

主任講師：鈴木 博（東京大学助教授）
国吉丈夫（千葉大学助教授）

全体のねらい

英語 I では、副題に Living English Speech とあるように、話されている英語のありのままの姿を学習の対象とする。教材としては主として、標準的な英語が使われているテレビドラマまたは劇映画を 2～4 作品用い、ことばが使われている場合や身体的動きなどの非言語情報と関連させながら言語表現の真の意味を理解させ、聴解力の養成を図る。話す力の訓練は聴解力養成の練習の一環として行うことになる。

主な項目

作品を少しずつ視聴する間に次のような聴解に役立つ事項を取り上げる。

- (1) スピーチにおける音変化
- (2) 文法の知識
- (3) 語彙および語法
- (4) 文化的背景に関する知識
- (5) 非言語情報に関する知識
- (6) 文脈から推察する力
- (7) 話の内容に関する予備知識
- (8) 一般常識

＝ 英 語 Ⅱ - A ＝

主任講師：山内久明（東京大学助教授）
放送時間：午前7時45分～午後8時30分
放送局：ラジオたんぱ

全体のねらい

英語ⅡAでは、大学の一般教養課程における英語講読に相当する程度の英文を読むことになっている。さまざまな文体に慣れるために、(I)事実についての論述、(II)文学作品の想像的散文、(III)論述的要素と想像的要素とを兼ね備えた散文を選んで読む。英語の修練と同時に、新知識を得たり、想像の世界を垣間見るのがねらい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	57/12 10	I. The British Life and Institution: Walter Perry, <u>The Open University</u> (1)	英国の社会・教育制度の中で、「放送大学」がいかんして生成発展して来たかを探る。①成人教育の必要性、②教育放送の発達、③教育における機会均等主義の三つの要因のうち、まず成人教育の実態が辿られる。	山内久明 (東京大学教授)
2	17	The British Life and Institution: Walter Perry, <u>The Open University</u> (2)	①の話題を続けて、英国における成人教育のための機関が、正規の教育機関に比して不充分であったこと、また従来の教育機関がこの目的のために有効でないことを論ずる。	同　上
3	24	The British Life and Institution: Walter Perry, <u>The Open University</u> (3)	②英国における従来からあった教育放送番組が、放送大学発足の機運にいかに関わったかを論ずる。	同　上
4	58/1 7	The British Life and Institution: Walter Perry, <u>The Open University</u> (4)	③エリート主義に対する機会均等主義の理念が、「放送大学」の発足にいかに関結びついたかを論ずる。	同　上
5	14	II. The Work of Imagination: E. M. Forster, <u>The Story of a Panic</u> (1)	経済学者Maynard KeynesらとともにThe Bloomsbury Groupの一員であったE. M. Forsterの初期の短編The Story of a Panicを読む。イタリアに滞在中の慣習的な英国人観光客の一行に混じって、嫉や慣習から逸脱した少年Eustaceが登場する。	同　上
6	21	The Work of Imagination: E. M. Forster, <u>The Story of a Panic</u> (2)	散策に出かけた山中で、突如得体の知れない「恐怖」(Panic)に襲われてわれ先に山を駆け下りる、慣習に凝り固まって鼻持ちならない英国人観光客の俗悪さと、不合理な恐怖心から遁走する愚かしさとの皮肉な対照性。	同　上
7	28	The Work of Imagination: E. M. Forster, <u>The Story of a Panic</u> (3)	山を駆け下りる途中、Eustaceがいないのに気付いた大人たちは、元の場所へと引き返す。大人たちの恐怖と不安をよそに、ひとり山中で平然として、山羊の足跡の上を駆け廻るEustaceの姿には、大人たちの理解を絶する何かがある。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	58/2 4	The Work of Imagination:E. M. Forster、The Story of a Panic (4)	帰る途々、喜々として山中を跳びはね 自然界と一体化したかに見える Eustace の姿は、大人たちには不可解である。さ らに、ホテルのイタリヤ人使用人に馴れ 馴れしく振舞おうとする Eustace は、階 級意識にとられた大人たちの　　を買う。	山　内　久　明
9	11	The Work of Imagination:E. M. Forster、The Story of a Panic (5)	その日の真夜中、ひとり闇の中でホテ ルの庭を徘徊する Eustace に再び狼狽す る大人たちは、室内に監禁しようと、使 用人 Gennaro を買収して、Eustace を連 れ戻す。	同　上
10	18	The Work of Imagination:E. M. Forster、The Story of a Panic (6)	二階に閉じ込められた筈の Eustace と Gennaro は、窓から庭に飛び下りる。 Gennaro の死。あとには、庭の塀を跳び 越えて逃げ延びた Eustace の笑いが、下 方の谷間からこだまして響いて来るのだっ た。	同　上
11	25	Ⅲ．Civilization: Kenneth Clark、The Worship of Nature from Civilisation(1)	原著は、英国を代表する著名な美術史 家による BBC の連続テレビ番組で、わが 国でも放映された。十八世紀後半から十 九世紀前半にかけて生じた自然に対する 興味の覚醒を、文学と美術に即して論じ た一章。第一回は十八世紀詩人の場合。	同　上
12	58/3 4	Civilization:Kenneth Clark、The Worship of Nature from Civilisation (2)	J ean-Jacques Rousseau、Johann Wollgang von Goethe、Samuel Taylor Coleridge の場合。	同　上
13	11	Civilization:Kenneth Clark、The Worship of Nature from Civilisation (3)	William Words worth の場合。	同　上
14	18	Civilization:Kenneth Clark、The Worship of Nature from Civilisation (4)	前回の話題のつづき。	同　上
15	25	Civilization:K enneth Clark、The Worship of Nature from Civilisation (5)	自然に対する興味と絵画との関係。	同　上

＝ 独 語 I ＝

〔主任講師：諏訪 功（一橋大学教授）〕
放 送 日：ラジオ日本

全体のねらい

まったくの初歩から出発し、順を追って文法の学習を積み重ねることによって、ドイツ語の基本構造を理解させる。耳からの学習という特徴を生かしつつ、単なる知的理解にとどまらず、聞く、話す、読む、書くなど、総合的な語学力の涵養をはかりたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/12 9	発　　　　　音	簡単な日常会話を題材に、ドイツ語のつづりと発音の関係を学ぶ。	諏　訪　　功 （一橋大学教授） ゲ　ス　ト Volker Hetsch （慶応義塾大学講師）
2	16	sein の 現在人称 変化	発音の復習と練習を兼ねて、動詞 sein の現在人称変化を学ぶ。	同　上 ゲ　ス　ト Hilli Hetsch （慶応義塾大学講師）
3	23	haben の 現在人称 変化	動詞 haben の現在人称変化を学ぶ。	同　上
4	57/ 1 6	規則変化動詞の現 在人称変化	lernen、arbeiten など、規則変化＜弱変化＞動詞の現在人称変化を練習する。	同　上
5	13	定冠詞と不定冠詞 名詞の性	冠詞類と名詞との関係、および名詞の性について学ぶ。	同　上
6	20	duとSie 不規則変化動詞の 現在人称変化 命令形	fahren、sprechen、werden など、不規則変化＜強変化＞動詞の現在人称変化及び du、ihr、Sie に対する命令の表現を学ぶ。	同　上
7	27	不定冠詞 kein 決定疑問文の答え方	不定冠詞 kein 及び決定疑問文に対する答えの ja、nein、doch について学ぶ。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	57/2 3	格	名詞類の格について	諏　訪　　功 (一橋大学教授)
9	10	前　置　詞 人　称　代　名　詞	格支配を中心として主要な前置詞を分類・整理し、続いて人称代名詞の格変化を学ぶ。	同　上
10	17	名　詞　の　複　数　形	複数形を作るための4つの主要なタイプを学ぶ。	同　上
11	24	話　法　の　助　動　詞	können、müssenなどの助動詞の形と意味を学び、ドイツ語のいわゆるワク構造についての理解を深める。	同　上
12	57/3 3	dieser型とmein型 副文	冠詞類の格変化についてまとめ、形容詞の格変化の学習に対する準備をおこなう。	同　上
13	10	非　人　称　の　es	さまざまな非人称表現に触れる。非人称主語esの省略、非人称熟語も学ぶ。	同　上
14	17	分　離　動　詞	ドイツ語のワク構造についての理解をいっそう深める。	同　上
15	24	形容詞の用法と変化	いわゆる形容詞の格語尾について学ぶ。	同　上

= 独 語 I (その2) =

〔主任講師：諏訪 功（前掲）〕
放 送 局：ラジオ日本

全体のねらい

動詞の過去人称変化から始めて、接続法に至るまで、初級文法の後半を概観する。さらに、中級への橋渡しとして、最後の数回では、さまざまな文体の現代ドイツ語を読んでもみるほか、すこし古い時代のドイツ語にも触れてみたい。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所 属 ・ 氏 名)
1	57/8 25	動 詞 の 過 去 形	弱変化動詞、強変化動詞、混合変化動詞の過去形と過去人称変化を学ぶ。動詞の三基本形についても学ぶ。	諏 訪 功 (一橋大学教授) フォルカー・ヘッツェ (慶応義塾大学講師) ヒリー・ヘッツェ (慶応義塾大学講師)
2	57/9 1	完 了 形	現在完了形の作り方を学び、haben 支配の動詞と sein 支配の動詞との区別、過去形と現在完了形の用法に触れる。	同 上
3	8	再帰代名詞、再帰動詞	3 格と 4 格の再帰代名詞に触れ、それらとともに用いられる再帰動詞の形式と用法を概観する。	同 上
4	15	形 容 詞 の 比 較 級	形容詞の比較級の述語的・付加語的用法を学ぶ。	同 上
5	22	形 容 詞 の 最 上 級	形容詞の最上級の述語的・付加語的用法を学ぶ。	同 上
6	29	Z U + 不 定 詞	Z U をともなう不定詞のさまざまな用法を学ぶ。	同 上
7	57/10 6	受 動 態	受動文の作り方、受動文と能動文との対応関係などについて学ぶ。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所　属・氏　名)
8	57/10 13	関　係　文　(1)	不定関係代名詞によって導かれる関係文の形式と用法を学ぶ。	諏　訪　　功 フォルカー・ヘツチュ ヒリー・ヘツチュ
9	20	関　係　文　(2)	不定関係代名詞によって導かれる関係文の形式と用法を学ぶ。	同　上
10	27	接　続　法　(1)	いわゆる非現実話法について学ぶ。	同　上
11	57/11 3	接　続　法　(2)	間接話法について学ぶ。	同　上
12	10	接　続　法　(3)	接続法のその他の用法を概観する。	同　上
13	17	読　　章　(1)	現代ドイツ語で書かれた時事文などを読む。文法の捕説も兼ねる。	同　上
14	24	読　　章　(2)	現代の文学作品、論文をいくつか読む。文法の捕説も兼ねる。	同　上
15	57/12 1	読　　章　(3)	古い時代の文学作品、ルター訳聖書の一節などを読む。文法の捕説も兼ねる。	

＝ 独 語 II － A ＝

〔主任講師：辻 理（放送大学教授）〕

全体のねらい

言葉は、人間ないし生活そのものと同じように、各種各様の層を持ち、それをさまざまな文体で表現しているものである。若い夫婦クラウスとガービに、日独文化を比較してもらい、その対話を枠にしながら、各種の文章形態に習熟していくことをねらう。ドイツ語を通じて、自分の外へ出てみよう、抽象化への道へ歩みだしてみよう。

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	手 紙 一町に見る人々	ガービの両親にあてた手紙。日本に無事到着したことを知らせる。そしてドイツ人の目に映った日本人の姿― 女性、男性、子供たち。カルチュア・ショック？	辻 理 ニゲシュティヒ夫人
2	対 話 ― 日本 の 先 生 ―	日本の先生とクラウス、ガービの若夫婦。「何でも好きな風に教えてくれ」という日本の先生。もっとカリキュラムやきまった方法があるはずだと思って怒るクラウス、なだめるガービ。	同 上
3	対 話 ― 何 を 教 え た ら ―	テキストだのドイツ語だのと言っても、実に千差万別。そして内容は必ず形式に表われる。日本人のロマンチックなドイツ像にちょっと困りながら、テキスト選びをする若夫婦。	同 上
4	日記について (エリクス・カネティ)	クラウスとガービは、自分たちの変化の足跡を書きとめるために日記をつけようとする。カネティの日記についての一文が想起される。相当むずかしい文章。でも短かいから恐れることはない。	同 上
5	『出発』 (カフカ)	カフカの小品『出発』を読んでみる。言葉が分っても、内容は分らないかもしれない。想像力を大いに使って、自分で文学を完結させることが必要。	同 上
6	逸 話 二つ。 (考慮中)	できるなら音楽家と哲学者の逸話を二つ出したいと思っています。	同 上
7	『シューマンのよう』 (トーマス・ベルンハルト)	たった一つのセンテンスから出来ている物語。どこからどうやって調理したらいいのだろう。ドイツ語のまま飲みこんでしまうのが一番だ。	同 上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	『目的の違う脳』 (ハイマール・フォン・ ディトフルト)	脳は、客体をそのまま認識するために出来ているのではなく、私たち人間が、生きぬいていくために出来ているという主張。	辻　　　　　理 ニゲシュティヒ夫人
9	小　説 (次回につづく)	ここ二課は、筋のしっかりした小説を探し出すつもりでいます。	同　上
10	小　説 (前回のつづき)		同　上
11	文化について (ノルベルト・エリ アス)	1930年代のエリアスの名著の一節。 文化という概念がいかにドイツの特産物であるかを示している。	同　上
12	新　聞　記　事 考慮中 (何年たっても古ぼけ ない記事というのが あるのでしょうか?)	緑の党とは何者か?その綱領をガービに解説させるかもしれません。	同　上
13	笑　話　総　括 この課も半ば考慮中。	各課に配置されている約十点の笑話を一度総括してみる。なるべく日本語を使わず、図面で解説を試みたい。	同　上
14	『小　説』 (ベーター・ビクセル)	もっとも現代的な小説の一つと言える小品。 起きた事象をただ短い文章で並べてゆき、あとはすべて読者の解釈に任せている。	同　上
15	カルチュ・ショック (コンラート・ロー レンツ)	カルチャー・ショックというものが、いかに本来的な実存の不安から由来しているか、いかに私たちは安定を望んでいるかを、ローレンツが解説。	同　上

＝ 独 語 II－ B₁ ＝

〔主任講師：辻 理（放送大学教授）〕

全体のねらい

独語II－Aで各種の文体にふれ、抽象的な思考への糸口が掴めたものと考え、II－B₁ではその程度をさらに高め、テキストの量もふやしていきたい。テキストの種類としては、想像力を必要とする文学的要素を減らし、社会科学、自然科学、思想史の分野を増加、また時代的には一部啓蒙主義時代にまでさかのぼる。何といても扱うテキストの絶対量が少いので、短いテキストを有効に機能させるためには reflexiv（文省的）な取扱いをしなければならない。聞くこと、話すことに大きな重点をおくことは、不可能となろう。

主な項目

II－Aにつづき、クラウスとガービの枠小説構造は、部分的にはなお堅持するが、この枠は各学問分野に対峙する生活世界の表現となってゆく。人文科学、社会科学、自然科学の論述がほぼ10項目、一部に小説、新聞記事、笑話などを配置する。

= 独語Ⅱ－B₂ =

〔主任講師：岩崎英二郎（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

日本語とドイツ語という、言語そのものも、その背景をなす文化圏も大きく異なる二つの言語圏の特殊性をつねに意識しながら、両者を対照的にとらえて授業を進めてゆきたい。ドイツ語から日本語へといういわゆる訳読主義に偏することなく、むしろ日本語をドイツ語に移植する独作文のほうに重点を置いてみたいと考えている。外国語を受動的に理解するだけでなく、外国語で自分の考えを発表する力をつけることの重要性を強調したいと思う。

主な項目

具体的に未定。

＝ 仏 語 I ＝

〔主任講師：福井芳男（東京大学教授）〕
放 送 局：ラジオ関東

全体のねらい

フランス語の基本構造を理解し、耳からの習得を中心にして単なる知的理解にとどまらず、話す、書くなどの言語運用能力を習得せしめたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	55/ 8 31	会 話 と 発 音 (1)	簡単な基礎会話を習得しつつフランス語の発音訓練をする。	福 井 芳 男 （東京大学教授）
2	55/ 9 7	会 話 と 発 音 (2)	発音訓練を続けるとともに綴り字の読み方を勉強する。	同 上
3	14	動詞の変化と否定文・疑問文	－ er 動詞の現在形を通じ基本文型とその変形の基礎を習得する。	同 上
4	21	名詞と名詞グループ	冠詞類と名詞との関係を覚えかつ名詞の性・数および機能を習得する。	同 上
5	28	復 習 と 応 用	以上の習得したものを復習し、かつ応用の諸文を通じて知識の展開をはかる。同時にフランス語とフランス文化について簡単な紹介を行う。	同 上
6	55/10 5	avoir と être	基本的な2つの動詞の現在形を学びそのさまざまな用法を学ぶ。	同 上
7	12	時と場所の表現および形容詞	副詞、副詞句を通じて数もこの際に習得し、さらに形容詞の女性形を学ぶ。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	55/10 19	名詞句と文型；動詞の現在形(1)	文型の考え方を深め、また基本的な不規則動詞の変化を学ぶ。	福 井 芳 男 (東京大学教授)
9	26	非人称構文と動詞句	天候、時間などの表現、さらに動詞と不定法とのむすびつきなどを習得する。	同 上
10	55/11 2	復 習 と 応 用	さまざまな応用文を通じて復習し、併わせてフランス語・フランス文化について述べる。	同 上
11	9	疑問文；動詞の現在形(2)	さまざまな疑問の文型、および重要な動詞の変化について述べる。	同 上
12	16	否定文；動詞の現在形(3)	否定のさまざまな動詞の変化、ここでまた動詞句の型に触れる。	同 上
13	23	代名詞；比較・最上級	むずかしいと言われるフランス語の代名詞を学び、また比較級最上級に触れる。	同 上
14	30	代名動詞；中性代名詞 en と y	代名動詞というよく用いられる種類の動詞を勉強し、かつ中性代名詞の使い方を学ぶ。	同 上
15	55/12 7	復 習 と 応 用	復習と共に文の読解へと進むよう努める。	同 上

＝ 仏 語 I ＝

— その 2 —

〔主任講師：福井芳男（前掲）〕
〔放送局：ラジオ関東〕

全体のねらい

時制並びに副文の収得を通じてフランス語の基本構造を理解させる。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/ 8 28	基　礎　の　ポ　イ　ン　ト	現在まで勉強した諸項目のうち、大切な点を復習する。(イントネーション・動詞変化〔現在形〕・動詞と不定形の結びつき・代名詞・代名動詞)	福　井　芳　男 (東京大学教授)
2	56/ 9 4	動詞の未来形とその用法	変化がやや複雑な未来形とその用法について説明し、前未来形にも触れる。	同　上
3	11	複合過去形と半過去形	二つの過去の表現様式を説明し、その形を覚える。大過去形にも触れる。	同　上
4	18	文　の　構　造	基本文型とその展開の諸様式を学習しまた副文とは何かについて説明する。また受動形についても軽く触れる。	同　上
5	25	復　習　と　応　用	実際の文、会話文に接して1～4回までに学習したことを確実なものとする。併せて二、三の大学の学生よりフランス語学習の実状をインタビューする。	同　上
6	56/10 2	関係代名詞と形容詞節	フランス語の関係代名詞のしくみについて。	同　上
7	9	副　詞　節　と　条　件　法	副詞節について述べ、条件法の形と用法を勉強する。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	56/10 16	名詞節と間接話法 および時制の一致	間接話法の説明とともに名詞節のしくみを説明し、時制の一致に触れる。	福 井 芳 男 (東京大学教授)
9	23	現在分詞とジェロンディフおよび慣用句	副詞節に代わるジェロンディフ、形容詞節・副詞節に代わる現在分詞について述べ、また重要な慣用句について説明する。	同 上
10	30	復 習 と 応 用	6～9回までに学んだ事項を実際の文に即して身につけるよう学習する。 フランス語を用いて仕事をしている人二、三人にインタビューする。	同 上
11	56/11 6	接　　続　　法(1)	従属節内でのみ出てくる接続法の形と名詞節内での用法について。	同 上
12	13	接　　続　　法(2)	形容詞節、副詞節内における接続法の用法を学ぶ。	同 上
13	20	単 純 過 去 の 体 系	小説、歴史書その他の過去の記述文を読むために欠かせない単純過去形について説明。またその体系に属する前過去、接続法半過去、大過去にも触れる。	同 上
14	27	語 彙 (い) の 研 究	フランス語の語彙について造語法その他に触れながら、書かれた文に接するための準備を行なう。	同 上
15	12/4	復 習 と 応 用	いくつかの文を読み、11～14回で学んだことを復習する。なお以後の勉強のすすめ方について特に文法の勉強の話を専門家にインタビューする。(東京大学 井村助教授の予定)	同 上

＝ 仏 語 II － A ＝

〔主任講師：福井芳男（前掲）〕

全体のねらい

フランス語Ⅰにおいて習得したフランス語能力を基に基本的なコミュニケーションに役立つ会話文、報道文などの読解を通じて、聞きとり、発表、一読解力を養成し、併せて文法諸項目（基礎的な動詞活用の復習、語学の習得などを含む）を復習する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	会　　話　　(1)	標準的フランス語会話文の間取り、発表練習。	福　　　井 （15回を通じて）
2	会　　話　　(2)	日常的なだけでなく会話の聞きとり、フランス語の構文練習（ただし練習に用いられるフランス語は標準のものとする）	
3	会　　話　　(3)	上記のつづき	
4	会　　話　　(4)	俗っぽい会話と上品な会話（フランス語のさまざまな階層について）	
5	復　習　と　ま　と　め	今までの会話文を再び聞き、理解を深める。 またフランス人ゲストを迎えて会話の実例を聞かせる。	
6	文　章　解　読　(1)	手紙文の読みかた。書きかた。	
7	文　章　解　読　(2)	天気予報、事実の報道。	

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所 属 ・ 氏 名)
8	文 章 解 読 (3)	簡単な伝記文、軽い笑い話。	
9	文 章 解 読 (4)	軽い笑い話、インタビュー記事。	
10	文章読解・まとめ	書き言葉への移行、各詞の名詞化、フランス人ゲストとの対話。	
11	フランスと日本 (文章読解と会話)	パリについての簡単な紹介文、それをめぐっての会話文。	
12	フランスと日本(2)	フランス事情についての文、それをめぐっての会話文	
13	フランスと日本(3)	日本紹介の文、それをめぐっての会話文。	
14	フランスと日本(4)	日本紹介の文、それをめぐっての会話文。	
15	フランスと日本 復習とまとめ	フランス語の詩と日本語訳(永井荷風)、 ゲスト：フランスにおける日本紹介の現状	

＝ ロシア語（前半2単位） ＝

〔主任講師：浅岡宣彦（大阪市立大学講師）〕

全体のねらい

ロシア語Ⅰでは名詞の格変化と動詞の人称変化に的を絞り、基本的文型、文例をえらんで分かり易い内容のものにしたい。そのために最少限必要な文法の基本的事項を厳選し、使用語彙を制限し、ロシア人に吹き込みをお願いして、耳からの学習の利点を生かしていきたい。

回	テ　　ー　　マ	内　　　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	文　字　と　発　音	アルファベット、母音、アクセント、有声子音と無声子音、子音の同化、硬子音と軟子音、分臨符としての <i>ъ</i> と <i>ь</i> 、特殊な子音結合の発音、正書法の規則。	浅　岡　宣　彦 (大阪市立文学部講師)
2	単　　　　　　文	動詞を含まない文、疑問文、肯定文、否定文、否定の小詞 <i>He</i> の位置、イントネーション、接続詞 <i>a</i> 、 <i>uw</i> 。	同　上
3	名詞の性、数、格	名詞の性（男性、女性、中性）、数（単数、複数）、格（主格、生格、与格、対格、造格、前置格）、人称代名詞、所有代名詞(1)	同　上
4	動詞の現在変化(I)	動詞の不定形、不定形の用法、直接法現在(1)第一正則変化、(2)第一特殊変化、語結合(1)動詞の格支配、 <i>J ge ? Kyga ?</i> をもつ疑問文とそれに答える副詞。	同　上
5	動詞の現在変化(II)	直接法現在(3)第二変化、(4)歯音変化、信音変化；命令法、動詞 <i>xomomo</i> 、 <i>yuemo</i> 、 <i>r nosumo</i> のあとの動詞の不定形、個数詞 1 ～ 10。	同　上
6	形容詞の長語尾形	形容詞の長語尾形、形容詞の定語的用法と述語的用法、疑問代名詞 <i>kakou</i> 、 <i>reu</i> 、指示代名詞 <i>Jmom</i> 、 <i>mom</i> 、順序数詞、所有代名詞(2)、語結合(2)性、数、格の一致。	同　上
7	形容詞の短語尾形	形容詞の短語尾形、短語尾形の用法、短語尾形 <i>go im eH</i> (ねばならない)、 <i>-o</i> に終る副詞述語的副詞、無人称文(1)	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	動詞の過去、格の用法(1)、主格、前置格	動詞の過去時制、動詞の過去形、動詞 So rmo の過去と未来、場所を示す前置格、前置詞 B と Ha、時の表現(1)、月の表現(8月に);思考、発言の内容を示す前置格、前置詞 0; yge の構文。	浅　岡　宣　彦 (大阪市立大学部講師)
9	男性、中性名詞硬変化	名詞の硬変化、軟変化;男性、中性名詞硬変化、人称代名詞の格変化、接続詞 u と Ho、否定の小詞 Hu。	同　上
10	男性、中性名詞軟変化	男性、中性名詞軟変化、疑問代名詞 Kmo、Uto の格変化、過去時制の述語と Kmo、Ymo の主語との一致、Kmo、Umo の構文、不定人称文。	同　上
11	格の用法(2)、生格、対格	属性を示す生格、数量生格、数詞と用いられる生格、否定生格、部分生格、所有を表わす生格、HeT、He Souo、He SygeT の表現時の表現(2)、行為の対象を示す対格、方向を示す対格、時の表現(3)、曜日、Kyga の構文。	同　上
12	女性名詞の硬・軟変化	女性名詞の硬変化と軟変化、個数詞 11 ~ 100、iHSumo と Hpafumoc1、接続詞 komopor u の構文。	同　上
13	運　動　の　動　詞	定動詞、不定動詞、－動詞、方向を示す表現、前置詞 B、Ha + 対格、K + 与格 (Kyga?) 場所を示す表現、前置詞 B、Ha + 前置格、y + 生格 (Jge?)、逆方向を示す表現、前置詞 u、c、om + 生格 (Omkyga?)	同　上
14	名詞の特殊変化、格の用法(3)、与格、造格	－6に終る女性名詞、－Mに終る中性名詞の格変化、間接補語を示す与格、年令を表わす構文、無人称文(2)と与格、述語としての造格、手段を表わす造格、共同行為を示す造格、Kak の構文。	同　上
15	総　ま　と　め	動詞の人称変化、名詞の格変化、簡単な読み物。	同　上

＝ ロシア語（後半2単位） ＝

〔主任講師：浅岡宣彦（前掲）〕

全体のねらい

前期の継続で、基本的文法事項をとりあげます。主な内容は次の通りです。

主な項目

- (1) 形容詞と副詞の比較級、最上級
- (2) 形容詞単数、代名詞 какой の格変化
- (3) 所有代名詞、疑問代名詞等の格変化
- (4) 名詞複数の格変化、前置詞
- (5) 形容詞複数の格変化、形容詞の名詞化
- (6) 運動の動詞、定動詞と不定動詞
- (7) 接続法 еw δor の用法、接続詞 rmoδor
- (8) 個数詞の格変化、集合数詞、時の表現
- (9) 定代名詞、不定代名詞、否定代名詞
- (10) 関係代名詞、複文
- (11) 能動形動詞現在と過去
- (12) 被動形動詞現在と過去、能動相、被動相（受身の表現）
- (13) 副動詞構文
- (14) 直接話法、間接話法
- (15) 格変化の総復習、動詞の格支配

＝ 中国語（前半2単位）＝

〔主任講師：頼 惟勤（お茶の水女子大学教授）〕
 〔平松圭子（大東文化 大学助教授）〕

全体のねらい

漢字は表異文字であるから、表音文字を利用しつつ前半では発音練習に重点をおき、かつやさしい文型を通して中国語のリズムを習得できるようにする。後半では動詞を中心とした慣用句型に初歩的な文法の説明を加える。全体を通じ、語順が大切なので、基本表現の文例をできるだけ多くして語順を習得しやすいようにする。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	第1課　発音Ⅰ	はじめに、普通話（標準語）について 拼音字母（発音記号） 母音（その1、単母音） 声　調 母音（その2、複合母音、鼻母音、特別母音）	頼　　惟　勤 平　松　圭　子
2	第2課　発音Ⅱ	子　音 発音標記のまとめ 声調の変化	平　松　圭　子
3	第3課　請多帮忙 （どうぞよろしく）	人称代名詞 動詞“是”（主語＋是＋名詞） 疑問文①“嗎”	同　上
4	第4課 这本　很好 （この本はとても よい）	形容詞述語文 造句助詞“的” 疑問文②反覆疑問	同　上
5	第5課 今天几月几号？ （今日は何月何日 ですか）	数のいい方 年、月、日 疑問文③疑問詞のいろいろ	同　上
6	第6課 我有两个中国朋友 （中国の友人が二 人いる）	量詞（ものを数えることば） 動詞と目的語 動詞の否定①“不”	同　上
7	第7課 画得很象我 （わたしにそっくり に画けている）	程度補語“得” 程度補語の否定と疑問文 目的語の前置	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	第 8 課 正在听音乐 (いま音楽を聞いています)	進行、持続の表現 “正在” “着” “呢” 疑問文④ 選択疑問 動詞の否定② “没”	平 松 圭 子
9	第 9 課 看 中国 影 (中国の映画を見たことがある)	経験を表わす “过” 完了を表わす “了” 経験、完了表現の否定 語気助詞 “了”	同 上
10	第 10 課 我能看中文报 (中国の新聞を読むことができる)	能願動詞 “能” “会” “可以” “要” “应该” 単純方向補語 “来” “去” 方向補語と目的語の位置	同 上
11	第 11 課 什么时候看完了? (いつ読み終わりますか)	結果補語 結果補語を伴う動詞の否定 処置式 “把”	同 上
12	第 12 課 你一个人搬得搬不动? (君一人で動かせますか)	可能補語 “得” 可能補語を伴う動詞の否定と疑問文 複合方向補語① 複合方向補語と目的語の位置	同 上
13	第 13 課 比以前好多了 (以前よりずっとよくなった)	比較表現① “比” 比較表現② “跟” “……” “样” 比較表現③ “有” 介詞のはたらき	同 上
14	第 14 課 刚学了一个多月 (ちょうど二ヶ月余り勉強したところだ)	時間補語 時間補語を伴う動詞の目的語の位置 複合方向補語②	同 上
15	第 15 課 请朋友去吃饭 (友人を食事にさそう)	兼語式構文 使役表現 “叫” “让” “使” 受身表現 “叫” “让” “被”	同 上

＝ 中国語 I （ 後半 2 単位 ） ＝

〔主任講師：平林圭子（前掲）〕

全体のねらい

入門篇篇では主として動詞を用いた表現の文型を中心に学んだが、その二では、連詞（接続詞）介詞（前置詞）副詞を用いた、複雑な文型、複文の文型を学ぶことをねらいとする。比較的容易な散文、新聞記事などから教材を選び、常用語の語彙をふやすことと読解力の基礎を習得させる。

主な項目

- (1) 介詞を用いた文型
- (2) 連詞を用いた慣用文型
- (3) 副詞のはたらきについて

＝スペイン語（前半2単位）＝

〔主任講師：山口羔正（上智大学教育研究所）〕

全体のねらい

聞く、話す、読む、書くの基礎的訓練を行う。

元来ともすると、語学の学習は読んで意味をとることのみに理解され勝ちであるが、外国語を「自分のものにする」ということは、単語の意味なり、文法の規則なりを「頭だけの知識」に止めておかず、実際の言語行為の中でそれらを困難なく用いて行くことである。そのためには、できるだけ多くの練習をこなして修得して行くことが必要である。

また、スペイン語は日本語と構造が違うので、初歩の簡単な文章で文型をきっちり学習しておかなければならない。そのためにも主語の省略があり、語順の比較的自由的なスペイン語にあつては、動詞の活用が非常に重要で、まずこれをマスターすることが、スペイン語学習の第1歩となる。

主な項目

発音、文の基本構造、動詞（人称による活用、時制、予定詞、再帰動詞等）名詞、形容詞、副詞、前置詞、冠詞、人称代名詞（特に目的格）、関係代名詞、疑問文（詞）。

＝ 保 健 体 育 ＝

〔主任講師：平沢彌一郎（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

「からだ」の価値観の確立

古代思想にあらわれた「人とからだ」の関係からはじまり、それぞれの時代および民族がどのような「からだの価値観」をもって今日に至ったか、を講義内容の主軸とする。

主な項目

- (1) 「直立人」にいたる人類の進化の過程を系統発生的見地から考察する。
- (2) 立生から「立ち」「歩き」「走り」「跳ぶ」、そしてあらゆる動作を個体発生的見地からも考察する。
- (3) 知覚の内省的把握を基礎とし、他覚的症状を併せて確立する健康管理法。
 - 〔1〕 体育原論：からだの価値観の変遷。宗教と体育。社会と体育。教育と体育。（1単位）
 - 〔2〕 体育応用篇：働くからだ。遊びとからだ。言語とからだ。音楽とからだ。舞踊とからだ。（1単位）
 - 〔3〕 健康管理と体育処方：直力能力を基本とする体育処方。（1単位）
 - 〔4〕 体育実技：（1単位）

＝ 生 活 史 ＝

〔主任講師：中鉢正美（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい、主な項目

(1) 生活史、生活学、生活構造論

生活構造論は、生活の構成を論ずるもの。

(2) マクロとミクロの生活史

マクロの生活史は広く人類史につながり、ミクロの生活誌は各人のケース・レコードにつながる。

(3) 共同体の生活史

例えばバプア・ニューギニアの生活史。

(4) 文書記録の生活史

例えばエジプトより現代まで。

(5) 都市の生活史

例えば川添登著、「裏側から見た都市」。

(6) 産業化に於ける生活史

19世紀の欧米。

(7) 諸文化の生活史

現代。

(8) 衣食住の生活史

家計調査。

(9) 教育、医療、住居、養護の社会化

謂る社会福祉。

(10) 意識と無意識のかかわり

生活空間に於けるマクロとミクロの接点。

(11) 戦後日本の生活史（１）

生活水準より。

(12) 戦後日本の生活史（２）

人口構造より。

(13) 日本に於ける生活の文化的特質

現代生活の再構成。

(14) 参加者の発言と討議。

＝ 生 活 の 社 会 学 ＝

〔主任講師：副田義也（筑波大学教授）〕

全体のねらい

Ⅰ生活構造論は、生命の日日の創造として、人間の生活の本質をとらえ、その人間らしいありかたを考える。Ⅱ生活問題論は、生活の人間らしさが失われる問題状況を学問的にとらえる工夫をする。Ⅲ生活保障論は、生活の人間らしさを維持・回復する政策・制度・運動・実践を論じて、福祉国家・福祉社会のありかたまでを考える。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	Ⅰ　生活構造論 1. 生活構造	生活の本質を人間の生命の日日の生産過程として把握する。また、それは、労働者のばあい、労働力の生産→労働力の販売→労働力の消費→生活手段などの生産→生活手段などの購買→生活手段などの消費→…という循環となるのを示す。	副　田　武　也 （筑波大学教授）
2	2. 生活水準	生活水準は賃金水準、貨幣消費水準、物量消費水準に区分される。第2のものに注目して、最低生活費研究の現状を結介し、生活費目の分類を論じる。また、生活機会、生活資源などの新しい概念を紹介する。	同　上
3	3. 生活関係	夫婦関係は具体的には分業関係であり、たがいの労働力、性的成熟、愛によって成立する。親子関係は具体的には扶養関係であり、子の無力性、愛、その他によって成立する。あわせて、世帯の概念にふれる。	同　上
4	4. 生活時間	生活構造の時間的形式としての生活時間を、生活周期、家族周期、日常の生活時間などで論じる。日常の生活時間では、生活主体の性別、年齢、職業などによる構成の変化にとくに力点をおきたい。	同　上
5	5. 生活空間	生活構造の空間的形式としての生活空間を、活動空間、資源空間、意識空間などで論じる。資源空間からシビル・ミニマム論をみちびき、意識空間からコミュニティ論、地方自治論をみちびきたい。	同　上
6	Ⅱ　生活問題論 1. 生活問題	社会問題、生活問題の概念規定をする。生活問題とは、人びの生活のうち、社会が解決、予防が必要な問題として指定するものである。その指定は一定の価値意識にもとづいておこなわれる。あわせて、生活問題の担い手の類型を論じる。	同　上
7	2. 諸範疇の関係	生活問題の政策的範疇、実践的範疇、運動的範疇、科学的範疇を規定したうえで、それらの関係を論じる。政策的範疇は、抽象的・統計的であるが、実践的範疇は具体的・個別的である。また、運動的範疇、科学的範疇の限界にもふれる。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	3. 貧 困 問 題	貧困問題の政策、運動、科学の三範疇の関係を分析して、科学的範疇のうち、欧米の相対的剝奪の概念や日本の不安定階層の理論多少くわしく述べる。貧困の多元的把握をめざしながら、それを無限定に拡大してゆく一部の動向は批判する。	副 田 武 也 (筑波大学教授)
9	4. 非貨幣的問題	保育問題、老人問題などを例にとり、非貨幣的問題の政策、運動、科学の三範疇の関係を分析する。この問題はニーズと扶養の函数であることを示し、家族形態、婦人労働などとの関連をあきらかにする。	同 上
10	5. 諸類型と原因	生活問題を階級問題、階層問題、地域問題、家族問題、個人の問題などとして把握する見方を紹介し、それぞれのばあいで、成立過程を理解する枠組が異なることを指摘する。	同 上
11	Ⅲ 生活保障論 1. 生活保障	生活保障の体系を紹介し、福祉国家の条件のひとつに位置づける。生活保障と英国でいう社会政策、米国でいう社会保障の異同にもふれる。福祉国家への批判、生活の自助責任などをも論じる。	同 上
12	2. 所得保障	社会保険、公的扶助、家族手当、資金貸付、損害補償などについて、原理的性格をあきらかにし、前の三者について、日本での現状を紹介し、問題点、改良の方向・試案を提示する。	同 上
13	3. サービス保障	児童福祉、老人福祉、身体障害者福祉、精神薄弱者福祉、母子福祉の五領域で原理的性格をあきらかにし、コミュニティ・ケア・専門的処遇などに焦点をあわせつつ、現状を分析する。	同 上
14	4. 医療，住宅などの保障	医療、住宅、環境保護、消費者保護、厚生保護などの諸領域を擁護し、前二者でその原理的性格、日本での現状を紹介し、問題点、改良の方向・試案などを論じる。	同 上
15	5. 生活保障運動	生活保障の政策、実践の向上を要求・期待する運動、その実践に参加する運動を論じる。それらが、生活問題、生活保障について学習する運動＝教育運動であり、また、研究する運動＝科学運動である可能性を追求したい。	同 上

＝ 衣 服 論 ＝

〔主任講師：徳井淑子〕

全体のねらい

一旦物理的機能を満たした衣服は、社会の様々のレベルで、象徴機能を有するに到る。或る場合には、一つの記号として機能する。記号として制立されない場合でも、個人の感情、社会思想の表現の場として機能する。すなわち衣服の歴史は、時代精神或いは美意識の理解なくして考えることはできない。古代から現代に至る西洋服飾から、顕著な象徴の例をあげ、衣服表現の諸相をみる。

主な項目

- (1) 社会的象徴機能一例、中世封建社会における衣服の象徴性・仏革命下の服飾と政治理念等。
- (2) 美的象徴機能一例、ダンディズム、異国趣味と懐古趣味、プレシオジテ等。

＝ 食 物 論 ＝

(→食生活論)

〔主任講師：宮崎基嘉（国立栄養研究所）〕

全体のねらい

食物そのものは食生活物資（総論）（各論）において教育するので、この科目においては食生活論の内容とする。食生活は生活を基盤とすると同時に、保健の分野とも密接な関係にあるため、「生活と福祉」部会において十分論議したい。

主な項目

- (1) 食文化、食の歴史
- (2) 食と生活環境
- (3) 食形態の変化
- (4) 嗜好の多様化
- (5) 食と栄養・健康

= 住 居 論 =

〔主任講師：東 修三（京都府立大学教授）〕

全体のねらい

授業科目「住居論」の内容として、昭和 55 年度に放送教育開発センターで実験番組として放送した＜住居の科学（次頁参考）＞の内容を考えております。住居は住生活の場ですので、快適な住生活を営む前提として、住居に関する諸事象についての科学的理解を深めることをねらいとしました。したがって、講義題目として＜住居の科学＞を選んだ次第です。

主な項目

住居の機能、住居の計画、住居の室内環境、住居の敷地環境、地域の住環境、住居の構造と形態、住居の維持管理、住居の法律。

〔 参考：＝住居論＝ 〕
＝ 住 居 の 科 学 ＝

〔 主任講師：東 修三（前掲） 〕
〔 放送局：テレビ朝日 〕

全体のねらい

住居は住生活の場である。快適な住生活を営む前提として、住居に関する諸事象についての科学的理解を深める。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所 属 ・ 氏 名)
1	55/12 10	住 居 の 機 能	住居とは何か。住居はわれわれの生活に対してどのような機能を持ち、どのような役割を果たしているのだろうか。生活者の立場で考えてみる。	東 修 三 (京都府立 大学教授)
2	17	住 居 の 計 画 (1) 生活圏区分など	生活者の住居の計画をたてるというのは、住居の機能が十分に果たせるようにその平面計画、すなわち間取りを考えることである。そのために必要な基本的事項について考察する。	同 上
3	24	住 居 の 計 画 (2) 平面計画	前回の生活圏区分などについての考察をふまえて、住居の平面計画の型、平面計画のたてかたなどについて述べる。	同 上
4	56/ 1 7	住居の室内環境(1) 室内気候	住居の機能である気候緩和作用によって、住居内には緩和された気候状態が作りだされている。これを室内気候という。気候緩和、調節の機構、室内気候要素と体感との関係などについて述べる。	同 上
5	14	住居の室内環境(2) 人工気候調節	冷暖房、空気調和などの設備によって快適な室内気候を実現しようとするのが人工気候調節である。温度調節設備の容量と住宅構造体の断熱性との関連などを中心に、その考え方を述べる。	同 上
6	21	住居の室内環境(3) 自然気候調節	自然状態でも住宅はある程度の気候調節を行っている。特に、温度調節が顕著であり、この場合、住宅構造体の熱容量が重要な役割を果たす。省エネルギーの立場から注目したい。	同 上
7	28	住居の室内環境(4) 通風と換気	通風、換気はともに現象的には室内空気の入れかわりを指すが、自然通風は、夏季、在室者に涼感を与える重要な要因であり、換気は冷暖房時の空気汚染対策に不可欠なものであることなどを述べる。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	56/ 2 4	住居の室内環境(5) 採光と照明	室内に適度の照度を確保するのに、昼間は側窓、天窓などから採光する。採光の不十分なときや夜間は人工的に照明をする。採光および照明設計について述べる。	東　　修　三 (京都府立 大学教授)
9	11	住居の敷地環境(1) 微気候	住宅が整備されていても周囲の敷地環境が劣悪では住居としては十分ではない。敷地の微気候をとりあげ、特に敷地の土地の性状と微気候との関連について述べ敷地の選定に役立てる。	同　上
10	18	住居の敷地環境(2) 日照	住宅の日照は、南側の建物などで障害を受ける。住宅の南側の敷地の広狭が問題になる。日照権に関連して日照障害の調査法を述べる。	同　上
11	25	地　域　の　住　環　境(1) 住居地の選択	居住者の生活条件によって住居地の選択の条件が異なってくるが、ここでは公害、交通事情や教育、医療などの公共施設といった社会的条件に注目して考える。	同　上
12	56/ 3 4	地　域　の　住　環　境(2) 大気汚染と騒音	都市は大気汚染、騒音などによってその住環境が著しく悪化して多くの公害問題を発生している。これらの公害の実態とその対策を中心に述べる。	同　上
13	11	住居の構造と形態	木造、鉄骨造、鉄筋コンクリート造など、住宅の構造に応じた機能上の特徴を考えてみる。また、都市住居の独立住宅から集合住宅への変容についても、その理由、根拠を探る。	同　上
14	18	住居の維持管理	住宅の機能を維持し、その耐用年数を延長するためには、住宅や設備などの適切な管理を行う必要がある。これらの維持管理に関する事項を述べる。	同　上
15	25	住　居　の　法　律	快適な住生活を保障するため、住宅などの建築に対して法規制が行われている建築基準法、都市計画法などに定められている道路、敷地および建物に関する事項を解説する。	同　上

＝ 家 庭 経 営 学 ＝

— これからの社会と家庭経営 —

〔主任講師：今井光映（金城学院大学長）〕

全体のねらい

家庭経営はそれをめぐる生活環境から影響を受け、適応を迫られるとともに、他方では、そのあり方が生活環境を醸成し、変えていく。これからの社会の動きの中で、家庭経営が考えておかなければならない内在的、外在的諸問題を取りあげ、家庭経営がその本来の目的を実現するための問題解決のすじ道を考えることとする。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	家庭経営の本質と目的	家庭経営は、最も根源的にして中核的なエコシステムである。それは何を本質とし、何を目的とするか、企業・国・自治体などの派生的なエコシステムとの関係はどうかなど、家庭経営の根本問題を考える。	今 井 光 映 (金城学院大学長)
2	家庭経営のシステム	家庭経営はインプット、プロセス、アウトプット、フィードバックの4つのマネジメント要素から成る。それら4要素の内容と関連を、具体的な例で考え、合理的な家庭経営行動の基礎とする。	同 上
3	家庭経営の意思決定の過程	新しい家庭経営において「家庭経営とは意思決定のことなり」と考えられ、意思決定こそ家庭経営の中核とされる。家政の意思決定のプロセスを具体的な例をあげながら考える。	同 上
4	家庭経営と価値とライフスタイルの設計	家庭経営のシステムにおいて、価値は最も中核的なインプットとして意思決定のプロセスを方向づけ、それぞれにライフスタイルを形成する源となる。価値の意義とその家庭経営への影響の過程を考える。	同 上
5	家庭経営と経済生活の設計	家庭経営の理論をふまえて、家族・個人のライフサイクルにそった家庭の経済生活の設計を考える。	同 上
6	家庭経営と食生活の設計	食物・栄養の理論をふまえて、家族・個人のライフサイクルにそった食生活の設計を考える。	同 上
7	家庭経営と衣生活の設計	繊維・衣料の理論をふまえて、家族・個人のライフサイクルにそった衣生活の設計を考える。	同 上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	家庭経営と住生活 の設計	「住まう」ことに視点をおいた、家族・個人のライフサイクルにそった住生活の設計を考える。	小　沢　紀美子 (東京芸術大学助教授)
9	家庭経営と生活時 間の設計	家庭や個人の生活時間の構造がどのような変化をたどっているか、またその変化の中で家庭経営はどのような問題に迫られているかを考える。またその有効な活用のためのマネージメントの方法を考える。	同　上
10	家庭経営と家事労 働の設計	家事労働は、従来、時間的要素と身体的要素によって、労働生理学的に把握されてきたが、それに加えて、情感的と認知的の二つの要素を加えて、トータルにとらえられる必要がある。それとともに、それを経済的に評価する方法も考えておく必要がある。	同　上
11	家庭経営と家族関 係の設計	現代の家庭経営における庭族関係の諸問題を解決し、あるいは問題化しないように予め管理して、家庭経営の目的を十全に実現する方策を考える。	山　口　久　子 (椋山女学園大学教授)
12	高齢化社会と家庭 経営	世界に類をみない早やさと水準ですすんでいるわが国社会の高齢化によって、家庭経営がどのような影響を受けるかを自覚し、それに対応する方策を家庭経営の立場で考える。	同　上
13	情報化社会と家庭 経営	従来、家政の意思決定は経験的に行われてきたが、ハウスホールドコンピュータの開発によって、それを科学的に行うことができるようになった。その活用例を考えるとともに、他方ではその導入に伴っておこりうる家政の問題も考える。	小　沢　紀美子
14	家庭経営と消費者 問題	家庭経営がその目的を達成するうえで問題としなければならないものに消費者問題がある。その構造を明らかにし、問題を解決するための生活環境醸成的な家庭経営を考える。	今　井　光　映
15	家庭経営と消費者 教育	今日の家庭経営をめぐる外部環境条件の大きな問題として消費者問題があるが、その問題解決の担い手として消費者教育を位地づけ、その考え方と方法を考える。	同　上

＝ 家 庭 経 済 学 ＝

〔主任講師：今井光映（前掲）〕
放 送 局：ラジオ日本

全体のねらい

家庭経済の本質機能と課題をつぎの三つの面から理解する。

- (1) 生活福祉の充実・向上は経済を無視してはありえない。全体としての経済の循環と成長に、個別経済としての家庭経済はどのようにかわるかを、システム目で認識する（1回～5回）。
- (2) 家庭経済の本質機能を、その構造に内在する法則・理論及びその実践としての生活設計を通じて認識する（6回～11回）。
- (3) これからの家庭経済をめぐる環境の変化に目をすえ、それへの対応を考える（12回～15回）。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/12 11	現代経済の構造と 家庭経済	経済の安定と福祉の向上をはかるためにとられたいわゆる混合経済のメカニズムを理解し、家庭経済が政府や企業とともに、どのように国民経済の循環と成長にかかわるかを認識する。 家庭経済を経済の循環の中でシステム的にとらえることの必要性の重要性を考えたい。	今 井 光 映 (金城学院大学長)
2	18	賃金・税と家庭経済	家庭経済とくに勤労者のその源である賃金はどのようなメカニズムや政策によってきまるのか、また、高負担社会を迎えて、そこから差し引かれる税のシステムと政策は、国民経済と家庭経済にどのような意味をもつのかを理解する。	堀 田 剛 吉 (岐阜大学教授) 今 井 光 映 (金城学院大学長)
3	25	物価・価格・料金 と家庭経済	現代のインフレーションの発生原因とそのメカニズムを一般的に、また公共料金や一般商品の価格の決定のメカニズムを理解し、家庭経済・企業・政府がそれぞれ安定した物価・価格・料金のためになにをすべきかを考える。	山 口 久 子 (相山女学園大学教授) 今 井 光 映 (金城学院大学長)
4	57/ 1 8	産業組織・マーケ ティングと家庭経済	競争的、寡占的、独占的な市場構造など、市場構造や市場行動の違いが家庭経済に与える影響について考え、独禁政策を含む競争促進対策の役割を理解するとともに、広告・宣伝などの機能について、家庭経済の立場で考える。	小 木 紀 之 (市邨学園大学助教授) 今 井 光 映 (金城学院大学長)
5	15	流通機構と家庭経済	複雑かつ多様化した流通機関の特性と問題点を解明し、百貨店、小売店・スーパー・生協・産地直結などの流通組織、及び自由公正な取引制度が家庭経済に及ぼす影響関係と対策を考える。	同 上
6	22	家庭経済の構造と 推移	家庭経済を組みたてる収入と支出にはそれぞれどのようなものがあるか、この両者のフローの構造関係はどうか、それはどのように移りかわってきているかを理解する。 また収支というフローだけではなく、資産というストック関係についても認識する。	今 村 幸 生 (奈良女子大学教授) 今 井 光 映 (金城学院大学長)
7	29	家庭経済の分析手法	家庭経済を分析する手法にどのようなものがあるか、また、その分析の基礎資料にどのようなものがあるか、さらに分析に必要な基本的な概念としてどのようなものを理解しておくことが必要かを認識する。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	57/ 2 5	家庭経済の法則	家計の支出のメカニズム、消費者行動にどのような定率性・法則性がみとめられるかを、支出全体的ならびに費目別に認識し、生活設計への資料とする。	堀 田 剛 吉 (岐阜大学教授) 今 井 光 映 (金城学院大学長)
9	12	家庭経済の理論	家計における支出の決定メカニズムと消費者行動を解明する古典的ならびに新しい理論を認識し、合理的家計支出行動の資料とする。	同 上
10	19	家庭経済の診断	家庭経済の構造・法則・理論を理解するのは、短期・長期の家庭経済の管理、生活設計の基礎資料として必要だからである。生活設計のための生活設計診断の基本的な考え方と方法を考える。	同 上
11	26	家庭経済と生活設計ポリシー	家庭経済の管理は短期のそれにとどまらず、ライフ・サイクルを考慮に入れた長期のそれへの配慮が必要である。ライフ・サイクルのステージにそった私的個別的生活設計の考え方と方法を理解する。それとともに、社会の責任による公的社会的な生活設計すなわち生活設計ポリシーの必要性を認識する。	今 井 光 映 (金城学院大学長)
12	57/ 3 5	消費者問題と家庭経済 (生活の質を求めて)	消費者は技術革新、大量生産システムの定着化、高圧的・低圧的マーケティングの一般化、消費者情報のたち遅れなど、市場関係で構造的に従属的關係におかれてきている。このいわゆる消費者問題が家庭経済にどのような問題をなげかけているかを、またその解決の方法を考える。	小 林 紀 之 (市邨学園大学助教授) 今 井 光 映 (金城学院大学長)
13	12	資源・エネルギー制約社会と家庭経済	今後ますます厳しさをます国際経済社会にあつて、わが国経済の根幹の問題であり、国民的課題である資源・エネルギー問題が、家庭経済にどのような影響を及ぼすかを認識するとともに、個々の家庭経済がそれぞれに資源とエネルギーを有効に活用する方策を考える。	同 上
14	19	キャッシュレス社会と家庭経済	ローンや消費者信用の制度の発達あるいは銀行振替システムの定着化は、キャッシュレス社会の到来を思わせるが、それに対して家計記入などのシステム化はたち遅れている。キャッシュレスの制度が家庭経済に及ぼす影響を認識し、それに対応する家計管理方法を考える。	山 口 久 子 (岡山女学園大学教授) 今 井 光 映 (金城学院大学長)
15	26	高齢化社会と家庭経済 (活力ある福祉社会のために)	いままで世界のどの国もが経験したことのないような早さでの、かつ高い水準での高齢化社会の到来は目前に迫っている。この高齢化社会が家庭経済にどのような影響を及ぼすか、それに対して家庭経済はどのような生活設計をたてておくべきかを考える。	今 井 光 映 (金城学院大学長)

＝ 家 族 関 係 ＝

〔主任講師：森岡清美（成城大学教授）〕

全体のねらい

- 1) 戦前から戦後をへて現在に至るまでの、日本家族の構成と機能にみられる変化を、主として統計によって明らかにし、将来の動向を予測する。
- 2) 日本の家族関係の現状を、ライフサイクルの過程に沿って解説する。そのさい、戦前の家族関係および欧米の家族関係と比較して考察し、日本の家族関係の特色を明らかにする。
- 3) 高齢化社会における家族関係の問題点を探り、それへの対策を検討する。

主な項目

家族の類型と分類、家族構成の変化、家族機能の変化、配偶者選択、結婚、子どもの社会化、家族のライフサイクル、家族の内部構造、家族の危機、離婚、再婚、老親扶養、家族の未来、など。

＝ 母子保健・成人の保健・老人の保健＝

〔主任講師：本間日臣（放送大学教授）〕

全体のねらい

保健シリーズ（次頁）の目的を達成するためカリキュラムを以下の如き基本原則に基づいて構成する。

日常遭遇する身近な現象やエピソードを導入部に取り上げ、その際、生体の *vital organ system* がどのように反応し、生命を維持するかを解説する。

（*vital organ system*とは、心血管系、呼吸器系、神経系、内分泌系、防御免疫機構とする。）

主な項目

（凡例）成人保健

(1) 時差ボケ——体内時計・自律神経

内分泌

睡眠パターン

(2) マラソン——ランナーは何故

口呼吸をしないか？

鼻呼吸か

(3) 石神井中事件（Smoke fog）

(4) 風呂に入ると指先に皺が出来るのは何故か？

(5) 眼鏡が合わなくなる。

} 防御機構

循環：血液量

加齢変化とは？

(参 考)

人間のからだと健康＝ (保健シリーズ)

全体のねらい

胎生期から老年末期までの生体の形態学的、生物学的、心理学的・経済変化の理解を基礎として、家庭、社会、職場、都市、自然現象の環境における多種多様の刺激因子と生体との不断の反応のメカニズムについての判断力を養成する(付図参照)。

以て先端テクノロジー革命の進展に伴い失われつつある人間主体性の回復向上を目指す。

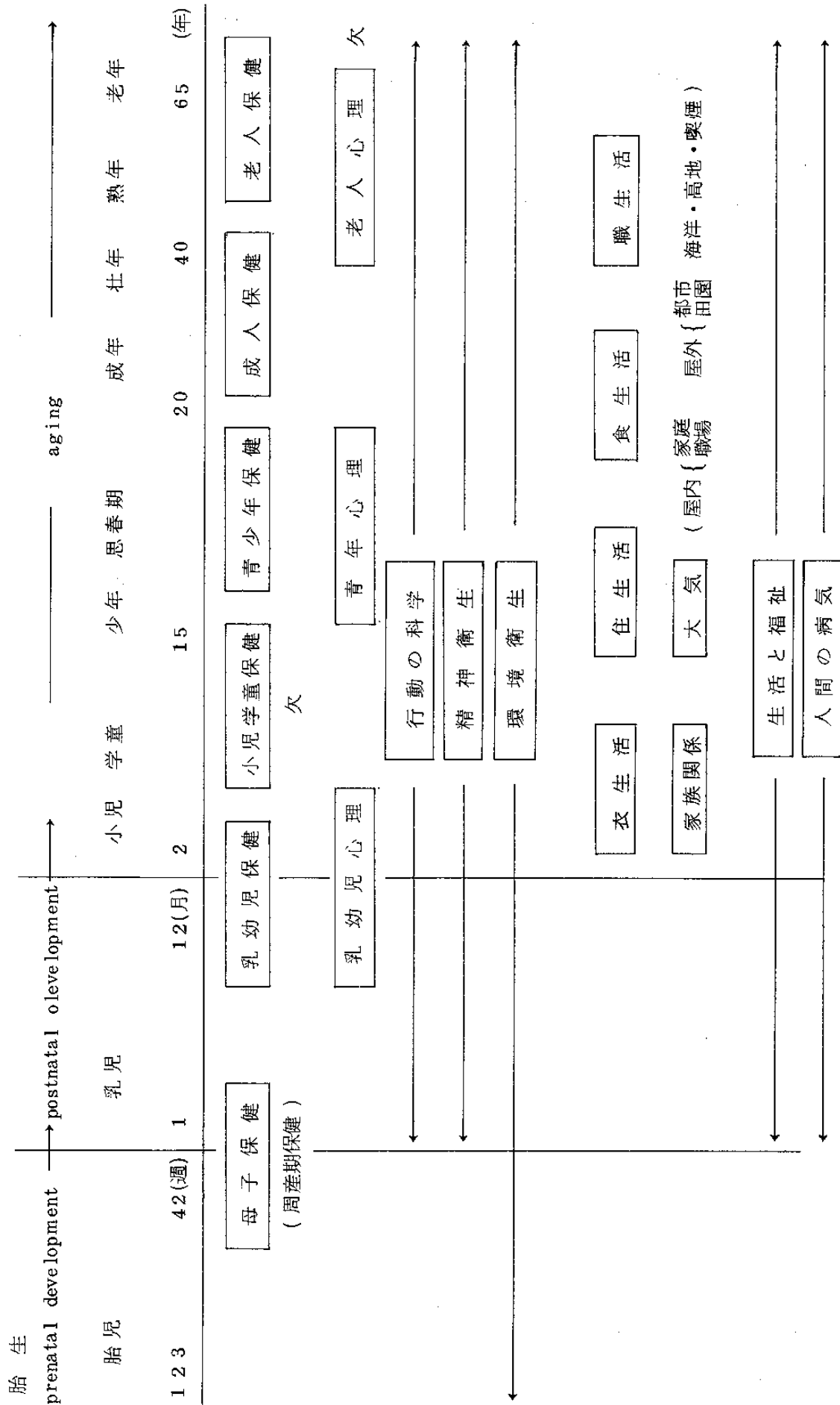
主な項目

母子保健(周産期保健)、乳幼児保健、小児学童保健(欠)、青少年保健、成人保健、老人保健、
〔乳幼児心理〕〔青年心理〕〔老人心理(欠)〕、加齢(欠)
〔環境衛生〕、〔精神衛生〕

〔 〕内は関連科目

欠：設置審申請時項目中欠の意

人間のからだと健康（保健シリーズ）



＝ 青 少 年 の 保 健 ＝

〔主任講師：黒川良康（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

保健に関連する講座は、母子保健に続いて青少年の保健、さらに成人の保健と、年令の順に保健について考える構成となっている。

従って、この項は、学童期から成人するまで、つまり肉体的に成長の頂点と考えられる 25 才位までの、成育期の保健と考えて全体を構成してゆきたい。成育期とは又未調和の時期でもあり、未調和の中で肉体的に、精神的に成長する健康状態を正しく把握し、調和のとれた成長とは何かの理解を深めさせたい。

主な項目

学童期のからだ。学童期の発育。知能の発育と教育。学童期の事故傷害。保健と健康増進。思春期とは（肉体的面と精神的面、その両者の調和）。性教育。情緒及び社会性の発達と精神活動。

＝ 環 境 衛 生 ＝

〔主任講師：黒川良康（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

ヒトは環境に影響を受け、同時に環境に影響を与えながら生活している。個人の場合でも、地域集団の場合でも、地球的規模においても、この両者の関係は変りない。

又、過去から未来にわたって変りない。この事実を直視し、健康について考え、健康な生活について考え、生活環境全般の衛生について理解を深める。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	講　座　の　は　じ　め　に	「生活科学」特に「生活と福祉」の課程での環境衛生の位置づけについて考える。環境衛生の歴史について述べたのち、特に個人の疾病との関係について考え、生活条件の把握、認識について考える。本講座のすすめ方について概説する。	香　月　秀　雄 本　間　日　臣 黒　川　良　康 以上 放送大学
2	環　境　衛　生　概　論　1	環境とは何か。考え方とその変遷。個人、地域の人口集団、地域規模の、それぞれについて、環境を考える。 一方、健康とは何か、その考え方と変遷、個人の健康、集団の健康について考える。	以下 25 回迄 黒　川のみ口演
3	環　境　衛　生　概　論　2	ヒトと環境との関係、つまり人間－環境系について考える。この場合、社会環境、労働環境、等々多くの環境が考えられる。この環境に生存するヒトの健康のための環境基準の設定が現実求められる。これらについて考える。	同　上
4	環　境　衛　生　概　論　3	ヒトを取巻く環境は、バランスが保まれつゝ、変化している。ヒトは科学的にそのすべてを理解、把握しているわけではない。環境基準設定について、この問題を考える。以下25回までは、具体例をあげ、説明を試み、判断の助けとする。	同　上
5	歴　史　的　変　遷　1	地球的規模においても、地域の人口集団においても、自然環境の変化は、時々刻々存在し、ヒトの生活も変っている。 日本に於いても、生活環境は時代と共に変化し、ヒトの骨路や生理的条件も変化していることについて考える。	同　上
6	歴　史　的　変　遷　2	飢えや伝染病に悩まされていた人類は科学技術の進歩により、悩みの様相を変えた。疾病としての癌、循環器疾患、精神的負担などに悩まされている。 この歴史的変遷を例示的に回顧し、現在生活のバランスについて考える。	同　上
7	地　域　的　問　題	地球的規模においては、地域的な特徴変化は不問には附されない。経済発展と自然環境のバランス。微生物を含めた、有機物、無機物の生活輪廻と自然環境のバランス。所謂南北問題を含めて、環境問題について考える。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所　属・氏　名)
8	ヒトの住む環境	主として、産業革命以後、自然環境に対するヒトの対応は大きく変化し、自然環境も変化した。自然環境の自主調整能力を越えた変化も現われている。この変化の中で、ヒトの生活と環境要因と調整について考える。	以下 25回迄 黒　川のみ口演
9	出　生　と　生　存	世界的に人口動態に変化が見られる。多産多死型から少産少死型に移行している国も多い。妊娠調査や、家族計画について現状を概観し、健康指標としての生存数曲線について考え、増加しつつある交通事故を例に死亡率について考える。	同　上
10	寿　　　　　　命	ヒトの寿命について考える。寿命に関係する多くの環境要因。長寿とそれに関連すると考えられる要因。平均寿命、平均余命とは何か？。以上の諸々の時代的変遷。各国の寿命、他の動物の寿命などの比較。	同　上
11	正　　　　常　　　　値	健康は単に疾病の対語ではない。健康についての意見は多く、確定していない。しかし、健康な状態にあると思われる人々の正常値についての報告はある。正常値の示す幅、変動について考え、健康についてさらに考える。	同　上
12	伝　染　性　疾　患	伝染性疾患は、環境衛生を考える場合の大変重要なテーマの一つであった。多くの人々の生命が奪われていた。開発途上国ではなお類似の様相が見られるが、所謂先進国では様変わりしている。変遷と実態について考える。	同　上
13	大　気　と　生　活	対流圏、成層圏、圏外との関係。対流圏における気象現象、地上からの高低による変化。大気汚染とその影響と制御、自浄作用、酸素、二酸化炭素、一酸化炭素などの影響、職場環境における侵襲要因などについて考える。	同　上
14	水　　と　　生　　活	地球に存在する水。日常生活における水の必要性。水の利用、再生、循環について考え、水と生物、水と農耕、牧畜、飲料水、上水道、下水道、下水処理、水質基準、環境基準などについて考える。	同　上
15	熱　　と　　生　　活	気温、気候、暑さと寒さ、最適温度、気候因子、日本の気候、世界の気候、気候図表、都市気候について考え、基礎代謝、体温調節、温度など生体に及ぼす影響、温度に対する順応性について考える熱中症についてもふれる。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
16	音　と　生　活	音とは、感じられる音、音の単位、音の感覚受容器、快音か騒音か、都市騒音、産業騒音、騒音の影響、騒音の発生防止騒音に関する環境基準などについて考える他、生活環境中の振動について、その発生、生体への影響について考える。	以下 25回迄 黒　川のみ口演
17	光　と　生　活	太陽の輻射エネルギーとしての光の到達過程、スペクトル分布、可視光線の生物作用、日照の意義と影響、採光と照明、人工照明、照度、光の認知、明順応、暗順応、色の生理的心理的作用、色の調和、色覚工変化させる条件、色彩調節について考える。	同　上
18	非電離放射線と生活	光線、レーザー、紫外線、赤外線、電波、超短波など電離作用を持たない、電磁波を総称して、非電離放射線として扱っている。非電　放射線は生活の中に、次第に多く取り入れられている、現状の一部の紹介とヒトの関係について考える。	同　上
19	電離放射線と生活	電離放射線の種類、天然放射性物質と人工放射性物質、放射線の利用と効果、放射線の人体に及ぼす影響、国連科学委員会報告による存在放射線源の現状、放射線防護の考え方の基礎と実際、放射性廃棄物の処理分	同　上
20	化学毒と生活(I)	化学薬品、劇毒物、食品添加物、農薬などを化学毒として考える、この項では主として、微量元素の存在、劇毒物の影響、許容量の考え方、劇毒物の防護と解毒、量との関係において生体への影響について考える。	同　上
21	化学毒と生活(II)	環境汚染物質、肥料と農薬、食品などの存在と、その形態、量、影響などについて例示的にしかも具体的に考え、毎日 6,000 種も新合成物質の出来ている現実に対応する考え方について考える。	同　上
22	生活の中の精神活動	ヒトと他動物との相違の大きなものは意志の伝達方法として豊富な言語を持ち、精神活動による身体的反応を起こし得ることにあると思われる。精神衛生については別講座があり、こゝでは例をとりあげて、生活の中の精神活動について考える。	同　上
23	生理現象と生活のかゝわり	個人、個人の生活リズムにおける、個人の生理現象(栄養摂取、睡眠、運動など)が生活に与える環境効果について考える。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
24	他の生物と生活 生活廃棄物処理	衛生生物とヒトの生活関係、生物濃縮循環輪廻、バクテリアの関与、各生物間のバランス等について考える。 生活に廃棄物はつきもので、その種類と処理、処分について考えると共に、その影響について考える。	以下 25回迄 黒　川のみ口演
25	温　泉　と　生　活	日本は温泉に恵まれながら、健康な生活に充分活用しているとは云えない。日常生活において緊張緩和の効果があり、温泉とは何か、泉質による温泉の種類、温泉の効果などについて考える。	同　上
26	研　究　的　接　近　法	集団を対象として、疫学的に調査する方法を中心に、症例集約、実験的方法などについて留意すべき点を考える。 特に疫学的調査方法については、母集団と標本との関係、疫学的方法の利点と欠点などについて考える。	前　田　和　甫 (東京大学教授)
27	衣生活と健康	気候等生活環境の変化によって、衣生活は強い影響を受ける、生活環境と衣生活との関係について考える。 矢部教授担当の衣生活に関連する講座との関係を考え、衣生活と健康について考える。	矢　部　章　彦 (放送大学)
28	食生活と健康	食生活は時代と場所によって異っている。しかし、そこには、それぞれの環境に適した食生活が存在する。 宮崎教授担当の食生活に関連する講座との関係を考え、食生活と健康について考える。	宮　崎　基　嘉 (放送大学)
29	住生活と健康	アメリカンインディアンとサハラ砂漠の原住民の住居には類似点が見られる。 時代と場所で住生活は変化する。 「生活と福祉」の住生活に関係する講座との関係を考え、住生活と健康について考える。	? (放送大学)
30	終　　　　り　　　　に	個体が環境の中で、如何に適応しているかについて、総括的に考える。健康な生活の中での、自主調整について考える。 本草学、漢法医学、生薬についてもふれて考えてみたい。	同　上

＝ 精 神 衛 生 ＝

〔主任講師：織田尚生（鳥取大学医学部講師）〕

全体のねらい

精神衛生は、本来社会における精神障害の予防と治療を目的としているが、さらに広義には健康者の精神健康の保持向上をも目指すものである。これを達成するため精神障害について概要を理解させると共に、予防・治療論に及ぶ。対象としては、乳幼児期から老年期までの各ライフサイクルにわたる精神衛生の実際、また家庭・学校・職場・地域社会という多様な生活環境での精神衛生のあり方について講じる。本講義全体として、従来の精神衛生学の枠組みを、新しい精神力動的な視点から見直してみたいと考えている。

主な項目

- (1) 精神衛生の定義とその歴史的展開
- (2) 精神障害論（診断・予防・治療）の概要
- (3) ライフサイクル（乳幼児期・学童期・思春期・成人期・初老期・老年期）と精神衛生
- (4) 家庭・学校・職場・地域社会における精神衛生活動（児童相談所・家庭裁判所の役割を含む）
- (5) 現代日本社会と精神衛生の課題

＝ 病 気 ＝
(→ 人間の病気)

〔 主任講師：川喜田 愛郎 (千葉大学名誉教授)
放 送 局：ラジオ関東 〕

全体のねらい

人間の一生において重い意味をもつ病気の科学と今日の医療技術をめぐる諸問題を、現今の医学専門教育の形式を離れた枠組みによって概観しようとする。ある意味でそれを一つの医学概論とみることもできるだろう。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	55/ 8 31	常識の中の病気と近代医学	人間の生活の中で、医学がもつ重い意味にもかかわらず人々がそれを眺める視座は、とかく安定を欠いているようにみえる。それを分析して本講の目的と構想を明らかにする。近代医学の成立の経過。	川喜田 愛郎 (千葉大学名誉教授)
2	9/7	医師との出会い	どういう状況において、病人と医師との出会いがおこるか。病人にとって病気とは何か。与えられた臨床的事実への自然科学的アプローチとその前提について。	同 上
3	14	人体生物学概観(1) ー「生きている」 とはどういうこと かー	病気の科学の前提としての現代生物学 ヒトから微生物まで「生命」は1つの原理に貫ぬかれていること。微生物(または細胞)にとって、生きるとはどういうことか。	同 上
4	21	人体生物学概観(2) ーヒトはどのように して「生きる」かー	ミニマスの生き方と手のこんだ生き方。 システムとしての人体。細胞・組織・器官。微生物と比べられる基本的な諸器官。生殖と発生の生物学。	同 上
5	28	人体生物学概観(3) ー人体の「管理的 な」諸機構ー	中枢的な管理機構について。内分泌、免疫、神経系。ホメオスタシス。神経系の構築と進化。神経細胞のはたらき。反射とその複雑化。	同 上
6	10/ 5	病気の理法とその種々相(1)	上述の機械論的性格の強い現代生物学の上にひとまず機械の故障と対比しながら病気の理法と特質について考える。本章では、病気の「屈服」像と「逸脱」像について。	同 上
7	12	病気の理法とその種々相(2)	「反撥」像としての炎症。「内因」病としての遺伝病。(癌の諸相とその生物学)生物学の枠内での病気概念の再検討。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	19	病気の理法とその種々相(3)	器官のレベルでみた病気。病気がしばしば逐次展開する生物学的過程であること。自然治癒、慢性化、病気の変貌、生物学的にみた死。	川喜田 愛郎 (千葉大学名誉教授)
9	26	精神と病気そして精神の病気	「こころ」と「からだ」という古今の難問に医学は、どう対処するか。現代病としての神経症(ノイローゼ)精神医学とその方法について	同 上
10	11/2	病 気 の 診 断	通念的な診断と診断の本義。臨床的な病気とは何か。操作的なカテゴリーとしてのいわゆる病名の医学的意味。診断(予後判定を含む)を支える2つの柱としての病理学とテクノロジー。	同 上
11	9	病 気 の 治 療 (1) —自然治癒力と治療—	治療の前提としてのいわゆる自然治癒力について。治癒の歴史、呪術、前科学と科学。内科的治癒ことに薬物療法の現代の変貌。いわゆる医原病について。看護の意味。いわゆるチーム医療の諸問題。	同 上
12	16	病 気 の 治 療 (2) —外科的治療—	外科の医学史的意味。外科的療法に現代の変貌をもたらした諸要因(細菌学、麻酔術、輸血、抗生物質、現代テクノロジー、その他)。現代外科手術の諸相。放射線療法。	同 上
13	23	医師・患者関係	話は再び第2講に戻る。病人から病気の生物学を抽出した近代的手続の科学的意義。医術の人間学的・倫理的な意味。現代の科学技術を背景として、新たにうまれた諸問題について	同 上
14	30	医 療 の 社 会 学	文化現象の1つとしての医療(付・漢方医学論)。医業の形態の時代的変遷。現行医療制度とその功罪。現代医療のはらむ諸問題(医学の専門化、現代病院、製薬産業、その他)。	同 上
15	12/7	病気の予防、健康の意味	衛生学略史。伝染病の予防。健康をまもるといふこと。環境、とくにいわゆる公害の問題。健康の真義。むすび。	同 上

＝ 衣 生 活 物 資 ＝

(→ 衣生活概論)

〔 主任講師：矢部章彦（放送大学教授） 〕

全体のねらい

“生活の中の衣服”という視点から、今日の衣生活にかかわる諸問題を、多くの事例をあげて通観する。

流れの筋を、衣服が語る人間（2～5回）、衣生活を支える科学（6～14回）に大別し、それぞれの立場から概説し、さらに高度な専門への橋渡しとする。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	生活の中の衣服	衣服は人体を覆い隠すとか、寒暑を防ぐという単純な道具立てではない。むしろ着る人間がその根源にある。衣生活のもつ意味を、原点に立帰って吟味してゆく筋立てを、種々の観点から予告的に論じ合う。	矢　部　章　彦 （放送大学教授） 酒　井　豊　子 小　池　三　枝
2	衣服の意味	人間にとって衣服とはどのような役割を果たすものなのか。われわれは衣服を着ることによって、どのように自己を他人に示しているのだろうか。衣服を着ることの意味を考える。	小　池　三　枝 矢　部　章　彦 （放送大学教授）
3	衣服のかたち	特に礼服や制服のように、社会の慣習や制度によって定められた衣服を着るとき、堅固しく窮屈と感じる人もあれば、逆に心地よく思う人もある。衣服のかたちとそれを着る人間の心情のさまざまな関係を考える。	同　上
4	衣服の色（1）	衣服から受ける印象の中で、色の果たす役割はきわめて大きい。日本独特の色、季節をあらわす色、官職や地位を示す色、時々の流行の色などをとりあげ、衣服の色に托される心情について考える。	同　上
5	衣服の文様	衣服につけられた文様は、見る人にどのような働きかけをするだろうか。衣服のかたちとその中に置かれる文様の場所、文様表現の技法、文様のかたちと意味、などをとりあげ、それらが訴えるものについて述べる。	同　上
6	衣服と人体	衣服は体温調節や運動性などの人体の機能をどのように助けているか、また妨げとなるのはどのような場合かを、衣服の素材、かたち、着方などの面から考察する。	酒　井　豊　子 矢　部　章　彦 （放送大学教授）
7	衣服の素材（1）	絹・毛など天然繊維からポリエステル・アクリルなど合成繊維までの各種繊維の特質を、衣服の実用上の諸特性との関係をとらえ、それらの改良の工夫、また一そう天然繊維に近づけようとする化学繊維の改質の方向について述べる。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	衣　服　の　素　材 (2)	衣服を構成する代表的素材である織物と編物について、それぞれの特徴と相違点を認識し、衣服の丈夫さ、形の安定性、取扱いやすさ、着心地のよさ、などの性能の上に、それらの特質がどのようにかかわっているかをしらべる。	酒　井　豊　子 矢　部　章　彦 (放送大学教授)
9	衣　服　の　色 (2)	色の感覚と知覚とをどのように区分するかは、ニュートン、ゲーテの時代からの課題である。ここでは、先ず、色票や表色素による色の客観的なあらわし方について述べ、次いで各種繊維の染色法の原理につき略説する。	矢　部　章　彦 (放送大学教授)
10	衣　服　の　色 (3)	染織物の色は、うつろいあせてゆく宿命をもつ。天然染料、合成染料を問わず、それらで染めた染色品の堅ロウ度(日光・洗濯・汗・マサツなど)は、衣服にとって大切な特性である。その判定法と表示法について解説する。	同　上
11	衣　服　の　製　作 (1)	衣服デザインに対し、人体の体型・サイズに応じて衣服パターンが作られるまでの過程の諸問題を扱う。素材の伸縮性のちがいによるゆとり量の相違、剛軟性のちがいによる衣服の形の演出効果の相違などについてもしらべてみる。	酒　井　豊　子 矢　部　章　彦 (放送大学教授)
12	衣　服　の　製　作 (2)	衣服はいくつかの布片を、縫い合わせ、貼り合わせ、とじ合わせなどして作り上げられる。ここでは各種の縫製条件、接着条件などにおける出来上りの丈夫さ、美しさなどについて考える	同　上
13	衣服の手入れとい たみ	新しい衣服を長持ちさせる手だてについては、生活者の主体性によって研究が進められねばならぬ。損傷の種類(変形・風合の劣化・変退色・強度低下など)について考え、それぞれに対策を講ずる必要があろう。	矢　部　章　彦 (放送大学教授)
14	衣　生　活　と　環　境	不要となった衣服の廃棄・再利用の問題、手入れの過程で用いる洗剤排水のゆくえ、など資源・環境にかかわる衣生活の側面を考えたい。	同　上
15	衣生活の総合的考察	衣服のもつ内面的なもの、流行などの社会的なもの、さらに技術の進歩による科学的なもの、はそれぞれ独立に論じても自づと限界があろう。これらの総合されたものが衣服であり衣生活であることを、まとめとして論じ合う。	矢　部　章　彦 (放送大学教授) 酒　井　豊　子 小　池　三　枝

(参 考)

= 衣 生 活 の 科 学 =

〔主任講師：矢部章彦(前掲)〕
放送局：テレビ朝日

全体のねらい

衣生活と衣服の機能との関係に焦点をあてて、快適な衣生活の科学的側面を考えてゆきたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	56/8 26	衣　服　の　機　能	総合科学としてとらえられる衣生活の科学の組立てとその流れにつき概説する。 衣服の機能の自然科学的側面(物理・化学・生理学・衛生学)を、素材の科学と対応させて考えてゆく組立てである。	矢　部　章　彦 (お茶の水女子大学教授)
2	9/2	ヒトの体温調節と衣服	衣服の機能をまずヒトの側から考えてゆくための基本事項について解説する。 ヒトの体温調節のしくみとその限界、衣服による気候調節(衣服気候)、ヒトの環境への適応、馴化などが主題となる。	田　村　照　子 (文化女子大学助教授) 矢　部　章　彦 (お茶の水女子大学教授)
3	9	冬を暖かく夏を涼しく	衣服による保温と放熱の機構を、物理と衛生の両面から考察する。水分の吸収と放散も重要な課題であり、これら諸性能と素材の物理的、化学的性質との関連に多くの問題が隠されている。	同　上
4	16	拘束性とゆとり	着衣のシルエットと、からだの運動や動作との他、矛盾した関係を、衣服の拘束性とゆとり量としてとらえ、衣服圧の許容限界や快適域を、衣服の形と素材の伸縮性とも併せ考えてゆきたい。	同　上
5	23	水にかかわる性質	肌着の吸湿、吸水性。レインコートの撥水性など、種々のかたちで要求される衣服と水とのかかわりを、繊維の化学的性質にさかのぼって考える。ぬれやすさ、乾きやすさが主題となろう。	酒　井　豊　子 (都立川崎大教授) 矢　部　章　彦 (お茶の水女子大学教授)
6	30	熱にかかわる性質	合成繊維は熱により収縮、融解しやすい反面、熱固定によるブリーツ加工ができるなどの利点もある。これら衣服の熱的な性質と繊維を構成する高分子の物理的性質との関係を述べる。	同　上
7	10/7	型くずれ、寸法変化と素材の性質	収縮、伸長、型くずれの原因となる繊維の性質や、織物、編物などの構造的特徴を知り、防縮加工、形態固定加工などの原理を、羊毛の防縮加工や、パーマネントプレスとして著名な樹脂加工を例に解説する。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	14	布　か　ら　衣　服　へ	布から衣服への造形過程で用いる、縫う、かがる、刺す、いせるなど種々の仕立ての技法について、解析的な概観を試みたい。またこれら単位技術の機械化の意義についても考える。	酒　井　豊　子 (都立立川短大教授) 矢　部　章　彦 (お茶の水女子大学教授)
9	21	既　製　服　と　サ　イ　ズ	自家製作、注文服から既製服活用へ、衣生活の転換は、満足度の高い既製服の供給が課題であった。日本人の体格調査の諸数値をもとにした既製服寸法のJIS化と国際規格への同調の方向を述べる。	同　上
10	28	衣　服　の　手　入　れ (1) 洗　浄　理　論	新しい衣服を、いかに長もちさせるかという衣生活の大切な課題を、洗濯を中心に、3回にわたって解説する。 洗浄理論は、汚れる→汚れを落とす、過程の界面化学的考察を中心とする。	矢　部　章　彦 (お茶の水女子大学教授)
11	11/4	衣　服　の　手　入　れ (2) 洗　濯　の　条　件	洗浄温度、洗浴濃度、洗浄時間、などの基本的条件と洗浄理論との対応から、一般的な洗濯に有利な条件を考える。 洗浴の疲労やすすぎなど、洗濯に関係深い応用作業の解析も試みたい。	林　　　雅　子 (お茶の水女子大学教授) 矢　部　章　彦 (　　　　　　　)
12	11	衣　服　の　手　入　れ (1) ドライクリーニングほか	水を媒体とする洗濯と、ドライクリーニングを対比して論ずる。新繊維や新加工が、ドライクリーニングで引き起こすトラブル、および繊維製品の取扱い表示についても論じたい。	同　上
13	18	衣　服　の　い　た　み	衣服の入手から廃棄までの過程を考え、衣服の損傷の原因を分類検討する。 廃棄の理由は必ずしもいたみによるばかりではない。使用実態調査からのややくわしい解析を試みたい。	同　上
14	25	衣　生　活　と　環　境	環境科学の大きな主題となっている洗剤(石ケンおよび合成洗剤)の問題を、とりあげる。水質汚濁、環境汚染にかかわるリンや蛍光増白剤にも言及する。家庭洗濯の排水は大きな社会問題となろう。	矢　部　章　彦 (お茶の水女子大学教授)
15	12/2	衣　服　の　安　全　性	環境科学のもう一つの側面である安全性の観点から、衣生活を見つめ直す。有害な繊維加工剤の追放を志し、ホルマリン、ディルドリン等の規制を達成した成果を中心に解説する。	同　上

＝ 食生活物資（総論）＝

（→食物総論）

〔主任講師：稲垣長典（共立女子大学教授）〕

全体のねらい

食物を理解するには基本的には食品を理解しなければならないが、そのみでは食物全体を理解することにはならない。食物の最終目的は人間が食物として栄養素を受け入れ健康を維持することで、それには栄養問題が必要で、それに到達するには調理の知識が必要である。豊かな食生活を送るには栄養・食品・調理の三本の柱が必要である。

主な項目

- (1) 食物とは何か
- (2) 食物の科学
- (3) 食物の栄養
- (4) 食物の調理

＝ 食生活物資（各論）＝

（→食物各論）

〔主任講師：宮崎基嘉（国立栄養研究所）〕

全体のねらい

食生活物資（総論）における知識を土台として、日本における日常食品について、その生産、流通方式、含有成分、栄養価、品質、調理加工適性、貯蔵法、家庭における利用方法などにつき各論的に教える。食品をめぐる諸情勢、とくに法規制についても触れる。ねらいは食品についての正しい教育の一語につきる。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	日　本　の　食　品	わが国の食品全般の供給システム、日常食品の種類、種別特色、食品成分表の解説などを通じ、食品群全体についての概念を教える。	宮　崎　基　嘉 （国立栄養研究所）
2	穀　類　食　品	米、小麦、大麦、そば、とうもろこしなど穀類の原料、一次加工品、二次加工品を中心に教育する。特に食生活における穀類食品の位置づけについても教育する。	同　上
3	いも、でん粉食品	各種いも類、同加工品、各種でん粉類、でん粉を原料とする食品について教育し、栄養価の面からの見直しを述べる。	同　上
4	豆類、種実類食品	大豆、小豆等豆類の種類は多く、近年この面の知識が欠けてきているので、その特色、利用法、栄養価などにつき教育する。	交渉中
5	野菜、きのこ類	野菜の実態を明らかにし、流通問題、栄養価の正しい認識、新しく出回っている新規野菜についても教育する。きのこ類については名称等が混乱しており、知識を整理する。	同　上
6	果　実　類	果実の種類は極めて多く、新規出回りのものを含めて、生産実態、栄養的特色、品質などを重点に教育する。また果実類の加工、貯蔵についても触れる。	同　上
7	水　産　食　品	魚類、貝類等多種類に及ぶが、近年、新品種も出回り、名称なども混乱している。また天然もの、養殖ものの差異など教育すべき内容は極めて多い。鮮度、調理の問題にも触れる、藻類もこの時間において含める。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	肉　　　　　　類	肉類の消費は増大しているが、その実態はよく知られていない。食肉の種類、部位別調理、部位による栄養価の違い、肉の品質など教育する。また肉類の加工食品についても教育する。	交渉中
9	乳　類　、　卵　類	乳類、乳製品は多様化のはげしい部門で、従来の知識では対応できない。現状の認識をめざして多様化の実態、内容の実態を教育する。卵類についてはとくに加工品を中心に解説する。	同　上
10	調味料、香辛料	食生活の近代化に伴い調味料、香辛料の種類は激増している。現在の実態を教育し、利用上の注意を教育する。	同　上
11	油　脂　食　品	油脂類は日本人の食生活の変化の中心をなす食品である。種類はそれ程多くないが、油脂加工品はかなり多様化しており新規食品を含めて教育する。健康との関係についても触れる。	宮　崎　基　嘉 (国立栄養研究所)
12	甘　味　食　品	砂糖、甘味料、人工甘味料等の違い、栄養上の注意、利用法などを中心に教育する。また菓子類もこの時間に含めて教育する。	交渉中
13	し　好　食　品	近年、嗜好食品類は著るしく多様化しており、アルコール飲料、茶、コーヒー類、清涼飲料などにつき各論的に教育する。栄養上の注意についても述べる。	宮　崎　基　嘉 (国立栄養研究所)
14	加　工　食　品	近年、ますます増加、利用頻度も高い各種のインスタントもの、冷凍食品、レトルトパウチ食品など一般には中味のよく分らない食品についてその実態を教育する。	同　上
15	特殊食品及び食品 の法規制	栄養強化食品、育児食、医療食、等特殊な食品について教育する。また食品の安全性、成分規定などを中心に、わが国における法規制について述べる。	同　上

＝ 余暇生活 — 日本人の休暇 — ＝

〔主任講師：一番ヶ瀬康子（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

いまや余暇生活問題は、国民の大きな生活課題としてうかびあがってきている。寿命が延び、生涯のなかで余暇生活の時間が増加したことや、労働時間短縮などで余暇時間がふえたことなどが、その理由であろう。その中で、ただ受け身の余暇生活ではなく、自発的な余暇活動をもつよう、その探求のための視点と視座を明らかにする。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	1. 余暇とは何か	余暇とは何か。その概念、語源などについて述べる。また、現在の日本においては、いかなる範囲の生活行為を余暇生活ととらえているかにふれる。そして、この講義の目的をのべ、講義全体の導入とする。	一番ヶ瀬 康子 (日本女子大学教授)
2	2. 余暇生活の歴史 ① 歴史的展開	ある社会の余暇生活のありようは、その社会の歴史的特質を反映する。近代以前の社会から現代社会に至るまで、余暇の意味内容がどのように変化してきたかを、それぞれの社会の特質とのかかわりで検討する。	牧 野 暢 男 (日本女子大学教授)
3	② 戦後の推移	余暇生活が戦後、どのように変化してきたかについて検討する。余暇生活を昭和30年以降の高度成長時代の「大衆レジャー時代」と昭和48年以降の第一次石油危機以降の「多様で個性的レジャー時代」に分けて、その背景と特質について探る。	松 山 美保子 (機械振興会経済 研究所・調査役)
4	3. 余暇生活の条件	余暇生活を規定する条件は、歴史的・社会的にさまざまである。現代日本人の余暇生活を条件づけている諸要因を検討するとともに、余暇生活の内容との関係について考察する。	牧 野 暢 男 (日本女子大学教授)
5	4. 余暇生活の構造 ① 時間・空間・手段	余暇時間を、まず共同体における「時間の共有制」から「時間の私有制」への移行の視点からとらえる。次に余暇活動を可能にする余暇空間のひろがり（モータリゼーション）とパーソナル化（テレビ）との両面から余暇の実態をみる。	岩 崎 隆 治 (社会評論家)
6	② 階　　層	余暇生活は、労働時間と関連する余暇時間、家計のなかでのレジャー・教養費など経済階層的条件によって影響される経済階層的条件がどのように余暇生活に影響を及ぼしているか、各階層の余暇生活にどのような特徴があるか検討する。	山 手 茂 (茨城大学教授)
7	③ 余 暇 歴	余暇生活に大きく影響を及ぼす余暇歴、つまり、人々が過去にどのような余暇活動を行ってきたかが、いかに現在の余暇活動の豊かさ、あるいは貧弱さを左右しているかについて検討する。	松 山 美保子 (機械振興会経済 研究所・調査役)

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所　属・氏　名)
8	5. 余暇生活の実態 ① 子　　ども	子ども時代の余暇生活は、生涯における余暇生活の在り方に影響する。その子ども時代の余暇生活の中心である「遊び」が、現在どのような状態であるか、時間「場」仲間との関係で現状をとらえ、そのあり方を検討・考察する。	一番ヶ瀬　康子 (日本女子大学教授)
9	② 青　　　　年	青年の余暇実態を生活意識の変化－労働中心から生活中心へ、オカネ重視から時間重視へ、職域から地域、または第三の空間へ－を中心にみていく。とくに夫婦中心型のレジャーの登場にスポットをあてる。	岩　崎　隆　治 (社会評論家)
10	③ 勤　　労　　者	中高年サラリーマンが、週末、夏期休暇、年次有給休暇をどう活用しているか。勤労観やレジャー観の変化をあとづけながら、余暇の実態をみていく。とくに「レクリエーション」から「ホビー」への移行を中心に考える。	同　上
11	④ 主　　　　婦	主婦は、核家族化・少産化・寿命の延長・家事労働軽減化など生活周期と生活構造の変化によって余暇時間が増加し、多様な余暇活動を行っている。ライフ・ステージ別分析をふまえて、中年期主婦の活動タイプ別分析を試みる。	山　手　　　茂 (茨城大学教授)
12	⑤ 高　　齢　　者	高齢者の余暇生活の実態調査から、その特徴と問題点について検討する。また高齢者は、ライフ・ステージのなかで余暇がもっとも重要になるという点に着目し、高齢者の余暇生活を豊かにするための条件について探る。	松　山　美保子 (機械振興会経済 研究所・調査役)
13	⑥ 家　　　　族	人びとの余暇生活は、個人単位および家族単位に営まれている。家族の生活条件がどのように個人の余暇生活に影響しているかを考察し、さらに家族単位の余暇活動の実態を、①家族内活動、②家族そろっての外出、③家族旅行に分け探る。	山　手　　　茂 (茨城大学教授)
14	6. 国　際　比　較	世界各国の余暇生活の実態を紹介するとともに、国際比較調査の結果にもとづき、日本人の余暇生活の特質をあきらかにする。	牧　野　暢　男 (日本女子大学教授)
15	7. 余暇生活を 高めるために	以上述べてきた日本人の余暇生活の歴史、実態や問題点をふまえ、さいしょに述べたこの講座の目的との関係で、自らの課題として、どのように余暇生活を高めるか。その検討課題について述べ、“まとめ”とする。	一番ヶ瀬　康子 (日本女子大学教授)

＝ 教 育 思 想 ＝

〔 主任講師：村井 実（慶応義塾大学教授）
放 送 局：ラジオ関東 〕

全体のねらい

教育思想とは何を、何のために、どういう形で考えるものであるか。これを、歴史上の代表的な思想家の思想の紹介と解説を通じて明らかにしたい。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所 属 ・ 氏 名)
1	56/8 25	教育思想のはじまり (一) －教育ということば－	教育ということばが作られるということとは、教育が問題として人々の意識に上ることを意味する。それは、人間の歴史の上で、いつごろ、どのようにして起ったか。	村 井 実 (慶応義塾大学教授)
2	9/1	教育思想のはじまり (二) －子どもを善くする－	子どもを善くしたいというところから、そもそも何が善いのか、また、どうしたら善くすることができるか。さらにまた、いったい善くすること自体ができるのかなどが問題として生ずる。これが、教育思想のはじまりである。	同 上
3	8	ソ ク ラ テ ス	「善さ」とは何か、「善くする」とは何か、などの問題を生涯かけて問うと同時に、人々にその問いをすすめ、またその問い方について、「産婆術」「問答法」などの主張を行ったソクラテスの歴史的意味は何か。	同 上
4	15	プ ラ ト ン	ソクラテスの弟子として、プラトンは、ソクラテスの思想を理論的に整えることに力を注いだ。だが、その思想はソクラテスのそれに対して、対極ともいえるべき特徴をもつに至った。その吟味。	同 上
5	22	クインティリアヌス	ローマの共和制社会では、討議と説得の教養としての雄弁をもって教育の理想とするに至った。その思想の集大成としてのクインティリアヌスの「雄弁家の教育」の特色。	同 上
6	29	アウグスティヌス	キリスト教が社会に力を強めるに至って、そのキリスト教的「神」との関わりにおいて人間の教育が考えられる。ギリシア・ローマの時代の教育思想との比較を試みたい。	同 上
7	10/6	ル タ ー	「神」との関わりの中での教育の思想は「神」についての人々の受けとめ方の変化と共におのずから変化する。いわゆる宗教改革の中心となったルターの場合はどうであったか。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	13	コ　メ　ニ　ウ　ス	「知る」という働きの普遍的な重要性、万人にとっての可能性への着眼を中心として、それを現実化するための方法と組織がどう考えられたか。近代を支配するに至った教育思想のスタート。	村　井　実 (慶応義塾大学教授)
9	20	ル　　　　ソ　　　　ー	「造物主の手を出るときはすべてが善いのだが、人間の手にかかってすべてが駄目にされている」という革命的な宣言……その教育思想的意味は何か。	同　上
10	27	ペ　ス　タ　ロ　ッ　チ　ー	政府への関心、経済への関心と教育への関心との関係、したがって、政治思想、経済思想と教育思想との関係、こうした関係がペスタロッチーの思想としてどう把握されていたか。	同　上
11	11/3	フ　レ　ー　ベ　ル	アウグスティヌス・ルターの場合の教育思想の中心にあった「神」が新しい意味をもって出現する。子どもの中の「神」それが教育の歴史にどういった新しい動きを作り出したか。	同　上
12	10	デ　ュ　ー　ー　イ	国家と知識技術と市民と人間と、この四者の必然的なもつれ合いをどういう方向に解決して理想の教育を実現するか。この視点から、デューイの教育的民主主義の思想を吟味する。	同　上
13	17	森　　　有　　　礼	日本における国家と教育との関係をどう考えどう調整するか。森有礼の国家主義的教育思想の誕生を吟味する。	同　上
14	24	福　沢　諭　吉	森有礼と同時に、同じ意図をもってスタートした福沢諭吉の教育思想がどういった異った主張に結晶していったか。その両者の相異の意味	同　上
15	12/1	教　育　の　民　主　主　義	明治以来百年にわたる日本での教育思想の流れ。敗戦。米国教育使節団報告書。教育基本法と新教育。新教育の運命。現在の日本の教育現実を含む上記の諸問題は、教育思想上の問題として何を意味するか。	同　上

＝ 児 童 観 ＝

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

子どもについての見方を多角的にとらえるのを目的とする。具体的には、①欧米の教育にみられる児童観、②日本の児童観の変遷、③心理学の進歩からみた児童観の3つのアングルから、児童観の変遷を跡づけてみたい。

まず、①からは、ペスタロッチーやルソー、フレーベル、②では、貝原益軒や福沢諭吉、③はフロイドやユング、エリクソンのように大きな思想学の児童観を中心としてとりあげていきたい。そして、最初と最後に、児童観の現状とその問題点を探る形の要約をつけたいと思っている。

主な項目

- (1) 欧米の教育から＝ペスタロッチー、フレーベル、ルソー、デューイなど
- (2) 日本の児童観＝貝原益軒、福沢諭吉、森有礼、沢柳政太郎など
- (3) 心理学から＝フロイト、ユング、エリクソン、ピアジェなど

＝ 発 達 心 理 学 ＝

〔主任講師：宮川知彰（東北大学教授）・星 薫〕

全体のねらい

単細胞動物から類人猿にいたるまでの発達経過（系統発生的な精神発達）と人間の誕生から乳幼児・学童・青年・成人を経て老人にいたるまでの変化ないし発達の経過（個体発生的な精神発達）を概観し、精神発達とは何かということを考察したいと思うが、もちろん、特に後者に講義内容のほとんどを当てなければならない。そして青年心理学や児童心理学 — 特殊な発達心理学としての — への導入的内容のある講義を構成したいと考えている。

主な項目

- (1) 発達心理学とは何か
- (2) 動物の進化にみる精神発達
- (3) 人間の精神発達を研究するための基礎的な方法
- (4) 発達と学習
 - a) 遺伝と環境・成熟と学習
 - b) 発達と生活条件
 - c) 発達の原動力
- (5) 変化過程としての発達
- (6) 質的变化としての発達
- (7) 発達と教育

= 学 習 心 理 学 =

〔主任講師：小口忠彦（放送大学教授）〕

全体のねらい、主な項目

1. はじめに

学習心理学とは

学習とは、現実の環境のもとで、生活体（人間）が、経験を通じて、適応の仕方を変化させること。

学習心理学は、この学習に関係する心理現象について研究する科学である。

- (1) どこまでも学習しつづける心理現象
- (2) 慣れた段階のところで停滞する心理現象
- (3) ゆがんだ方向へ進行する心理現象
- (4) ゆがんだ方向から回復する心理現象
- (5) 学習指導法の研究

環境 経験 適応 学習意欲 記憶力 思考力 応用力 協力 人間性 自己実現 心理療法

2. 学習と勉強

いわゆる「勉強」をめぐって

(1) 学校教育の場合

学習指導要領（義務教育の段階）

- (A) 教 科
- (B) 道 徳
- (C) 特訓活動

勉強とは、(A)が中心である。

(B)・(C)は、勉強とはよばれていない。

(2) 意図的学習と偶然的学習

勉強は、意図的学習であるが、学習には、偶然時学習もふくまれる。予想もしないことをおぼえるのは、偶然的学習。

(3) 学習と勉強との一致

自分から進んで、自分を、当面している場合に打ち込むこと、つまり、自分自身への挑戦という点では、学習と勉強とは、一致する。

3. 学習と発達

経験と成熟

(1) 野生児の事例

アペロンの野生児、少女など、経験の役割

(2) 発達の最近接領域

経験によって、成熟が変化する。

(3) 経験による特殊性

国民性 …………… 文化の型と性格

役割性格 …………… 職業と性格

性役割 …………… 男らしさ・女らしさ

(4) 成熟による普遍性

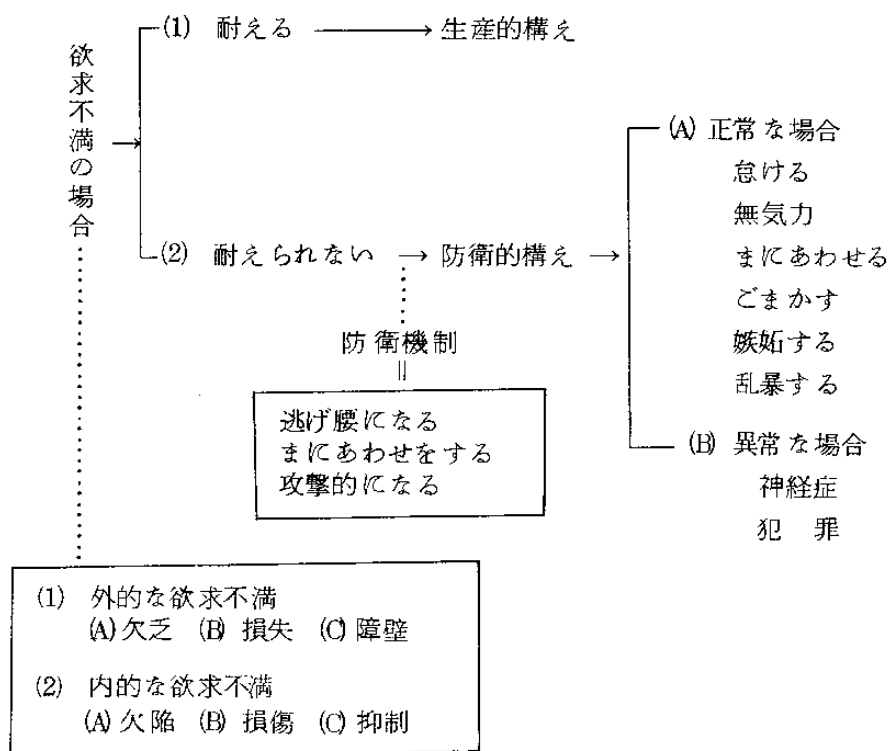
エリクソン (Erikson, E.H.) の「人生周期」

(5) 経験と成熟の相互補完性

4. 学習の方向

望ましい方向の学習・ゆがんだ方向の学習

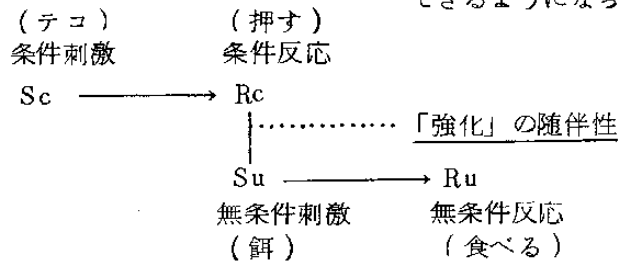
学習には、ゆがんだ方向の学習もある。



5. 学習の成立

条件づけ (I)

スキナー箱 (Skinner Box) → テコを押すと、餌が出てきて、食べることができるようにしている。



特定の条件のもとで、特定の反応が形成される。

経験を通じて形成されるので、学習されることになる。

スキナー (Skinner, B. F.)	パブロフ (Pavlov, I. P.)
道具的条件づけ	古典的条件づけ
オペラント条件づけ	レスポナント条件づけ
R型条件づけ	S型条件づけ

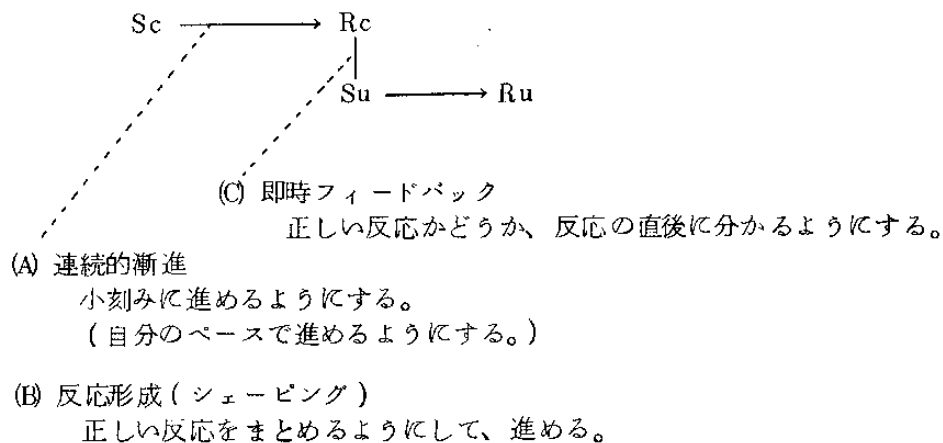
正しい反応 (期待されている特定の反応) ならば、欲求の充足につながっており、このために、正しい反応が形成されることになる。

動物の「調教」の原理でもある。

6. 学習の成立

条件づけ (II)

(1) プログラム学習 (programmed learning)



〔問題点〕

(2) 水路づけ (canalization)

最初の充足、反復、消去されない。

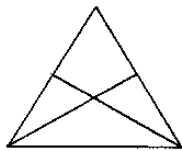
(3) 刻印づけ (imprinting)

初期学習 (early leaning)、消去されない。

7. 学習の成立

認知構造の変化

環境がどのように認知されるか、その認知のされかたには、それなりの構造がある。その構造が認知構造である。



この図形に、三角形はいくつあるか。(正解 8つ)

3つとか、4つとか答える場合にしても、8つと答える場合にしても、それなりの認知構造が成立している。

認知構造は、認知地図ともよばれ、この地図によって行動が選択される。すなわち、認知構造によって、学習の成立は左右されるのであり、適切な学習の成立には、適切な認知構造が必要になる。

8. 外発的動機づけ

生活体(人間)が、特定の方向へ行動するように、その生活体の外部から働きかけること。

代表的なのは、「賞と罪」である。

賞は、行動を促進させ、罪は、行動を禁止させ、回避させる。

しかし、賞の場合、ほめる、報酬を与えるだけでなく、「承認」の欲求の充足にかかわるような条件ならば、ふくめる必要がある。同様に、罪の場合、叱る、体罪などだけでなく、承認の欲求の否定にかかわるような条件ならば、ふくめる必要がある。

希望のもてるような環境ならば、賞に屈することになり、希望のもてないような環境ならば、罪に屈することになり、要は、こうした点にある。

9. 内発的動機づけ

生活体(人間)が、特定の方向へ行動するように、自分の内部において、自分に働きかけること。

興味、関心、解決の喜び、発見の喜び。

これらの他に、「認知的葛藤」も、注目されている。

驚き 確信している知識に「ずれ」を生じる状態

当惑 答えがいくつでもある状態

矛盾 両立できない状態

認知的不協和 …………… 信じていたことが信じられなくなった状態

混 乱 …………… 混沌としてつかみどころのない状態

不適切 …………… 答えの出しようのない状態

しかし、内発的動機づけが、必要で、かつ十分な効果を示すには、「自信」の裏づけを欠くわけにはいかない。

10. 学習と模倣

問題解決 (I)

問題解決過程には、次の四つの段階がふくまれている。

- (1) 問題場面
- (2) 試行錯誤
- (3) 手がかりの選択
- (4) 見通しの成立

しかし、問題解決過程ではあるが、問題解決とはいっても、問題の提出者には、すでにして、問題は解決されている。すなわち、この問題解決過程をたどっても、問題の提出者の水準以上に出ることは難しい。「模倣」以上に出ることは難しいのである。

系統学習の限界性。

11. 習得と習熟

問題解決 (II)

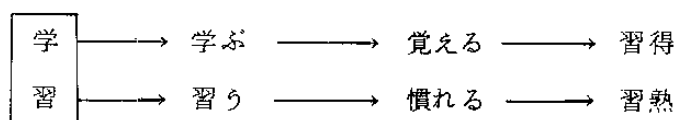
問題解決といっても、創造ということになると、与えられた問題の解決ではなく、問題そのものをつくり、その問題の解決をすることが必要になる。

発明、発見、創作などは、このような問題解決である。問題解決学習の必要性。

ブレインストーミング (brain storming) とよばれている方法には、独創的な新しいアイデアをつくり出す際の必要条件がおりこまれている。

- (A) 5 - 10 名程度のグループ
- (B) 40 - 60 分程度の時間
- (C) ルール
 1. 批判禁止
 2. 自由奔放
 3. 質より量
 4. 改 良
- (D) 課 題 (例) 新聞紙の活用法

12. 習得と習熟



(1) 覚える

(A) 機械的に覚える

(B) 図式的に覚える

(C) 論理的に覚える

(A) → (C) は、暗記 → 理解になっている。

(2) 忘れる

(A) 理解（分かる）すると、忘れない。

(B) 干渉 …………… 順向抑制・逆向抑制

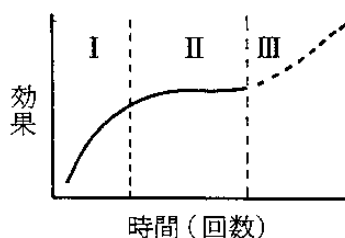
(C) 抑圧 …………… 不快なことは無意識化されやすい。

(3) 慣れる

(A) ドリル学習、過剰学習

(B) 練習曲線 ……………

(C) 練習の分配



全習法 分習法 直接反復法

漸進反復法 集中法 分散法

(4) 身につく（自己拡大）

13. 転移

(1) 正の転移

(2) 負の転移

に大別され、「応用」が効くというのは、正の転移の場合。

その転移の条件について。

(A) 構成要素の一致

(B) 一般化（般化）

(C) 構造の等価

(D) 学習方法の学習

14. 学習と個人

(1) 個人差

(A) 個人間差異

(B) 個人内差異

(2) 個性

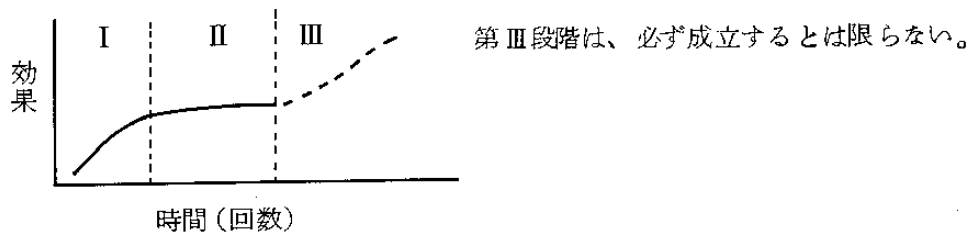
(A) 全体性としての個性

(B) 独自性としての個性

(3) 個別学習

(A) 時間制限法

(B) 作業制限法 …………… (どこまで可能か)



(4) 自己實現

価値の多様性

15. まとめとして

(1) 学 習 = (内的条件) ~ (外的条件)

生活体（人間）の側面 環境の側面

(2) 教授 - 學習過程

(3) 教授 — 學習理論

＝ 異 常 心 理 学 ＝

〔 主任講師：村瀬孝雄（立教大学教授） 〕

全体のねらい

他の関連科目（たとえば、人格心理学、異常心理学、発達心理学等）の知識をどの程度前提としてよいかは不明なので、構想は立てにくい。一応これらについては知っているものとして、臨床心理学的実践にとって必要最小限の基本的観点と態度をまず話し、次いでアセスメント、心理療法、コミュニティ心理学の技法の輪かくについて、具体例を用いて解説する。独りで実習可能な部分については、できるだけ実習させたいので、そのための工夫や知識を伝える予定。ただし、この実習はあくまでも、体験学習を意図しており、専門的実践につながるものではない。

主な項目

- (1) 臨床心理学とは何か
- (2) 心理臨床家について
- (3) 精神衛生の特質
- (4) 心理学的アセスメントの狙いと過程
- (5) 各種心理検査の特質
- (6) テスト・バッテリー
- (7) 心理療法の一般的特質
- (8) 三つの代表的な立場
- (9) 心理療法の効果
- (10) 日本の心理療法
- (11) コミュニティ心理学とは何か
- (12) 危機介入の特質
- (13) コンサルテーションについて

= 深 層 心 理 学 =

〔主任講師：織田尚生（鳥取大学講師）〕

全体のねらい

19世紀末以来のフロイトおよびユングなどによる、人間の無意識に対する探究を歴史的に跡付ける。深層心理学は神経症の治療という臨床的な経験にその基礎を置くことを理解させる。また精神分析学や分析心理学など深層心理学各派の理論・技法を学習することによって、健康者個人の心理の理解、さらには現代文明および日本人心性の深層心理学的考察のための視点を得させる。

なお、文化人類学・宗教学・神話学・民俗学など隣接諸科学との関連についても触れる。

主な項目

- (1) 深層心理研究の歴史
- (2) 意識と無意識の構造
- (3) 精神分析学と分析心理学
- (4) 心理発達の深層心理学的理解
- (5) 現代文明と日本人心性
- (6) 隣接諸科学との関連

＝ 教 育 と 社 会 ＝
(→ 教育社会学)

〔 主任講師：河野重男（お茶の水女子大学教授）
放送時間：午前6時15分～午前7時
放送局：テレビ朝日 〕

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所 属 ・ 氏 名)
1	54/8 23	人間の発達と社会	発達とは単なる心理学的・生物学的現象ではない。人間の発達には社会的・文化的環境からの働きかけが不可欠である点を解説する。さらにこの社会・文化的環境の働きかけによってうながされる発達には適時性があり、それぞれの時期に果たされなくてはならない発達課題を明らかにする。	河 野 重 男 (お茶の水女子 大学教授) 新 井 郁 男 (東京工業大学助教授) 山 村 健 (大正大学助教授)
2	30	人 間 の 社 会 化	生物的存在としてのヒトが、社会的な存在としての人間にまで高められる過程は社会化と呼ばれるが、ここではとくに日本人の国民性の形成を手がかりとして、社会化のメカニズムを解説する。	河 野 重 男 (お茶の水女子 大学教授)
3	9/6	幼児の発達と家庭	家庭における幼時期の体験は、人間の基礎的な形成に大きなかかわりをもっている。ここではとくに親子関係とのかかわりから幼児の発達を考察する。	河 野 重 男 (お茶の水女子 大学教授) 山 村 健 (大正大学助教授)
4	13	子どもの生活と発達	家庭とならんでとくに戸外での仲間集団とそこでの遊びに着目して、子どもの発達にとって仲間集団での生活体験が果たす固有の教育機能を明らかにし、さらに現実の問題点を浮き彫りにする。	同 上
5	20	青年の生活と発達	青年の生活の場として、家庭、学校、職場及びそれ以外の余暇活動の場の三つをとりあげ、それぞれの場において青年が達成すべき基本的な発達課題とその問題状況を解説する。	同 上
6	27	発 達 の 病 理	現在のわが国では、青少年はさまざまな要因によって望ましい発達を阻害され、多様な病理現象を露呈している。非行、自殺、登校拒否、家庭内暴力等がそれである。これら青少年の発達の病理を明らかにし、あわせて病理発生のメカニズムを考察する。	河 野 重 男 (お茶の水女子 大学教授) 山 村 健 (大正大学助教授) 星 野 周 弘 (科学警察研究所 環境研究室長)
7	10/4	成人の生活と発達	学習は青少年期にとどまらず、成人期にも必要であるが、それは何故か。現代の成人の生活と学習要求、能力発達の可能性、学習環境などの問題と関連させながらこの問いについて考える。	河 野 重 男 (お茶の水女子 大学教授) 新 井 郁 男 (東京工業大学助教授) 神 田 道 子 (東洋大学助教授)

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	11	団体活動と人間形成	わが国にはさまざまな青少年団体が存在し、多彩な活動を展開しているが、トータルに見たとき、青少年の団体活動への参加は必ずしも盛んでない。ここでは、青少年ののぞましい人間形成にとって団体活動がになり固有の役割を明らかにし、さらに現状の問題点を検討する。	河　野　重　男 (お茶の水女子 大学教授) 山　村　健 (大正大学助教授)
9	18	発達と地域社会	地域社会の変貌は、人間の発達に大きな影響を及ぼしている。その実態を明らかにし、これからの地域社会のあり方について考える。あわせて地域社会の中で社会教育の役割についてもふれる。	河　野　重　男 (お茶の水女子 大学教授) 新　井　郁　男 (東京工業大学助教授)
10	25	発達と映像文化	テレビなどの映像文化を離れて現代人の生活は考えられない。映像文化は人間の発達にとってどのような意味があるかについて解説する。また「児童文化」の実態・意味・あり方についても考える	同　上
11	11/1	学校と人間形成	学校というものが人間形成にとってどのような機能を果たしているか、またどのような機能を果たすことを期待されているのか、について学校というものの特質と関連させながら考える。	河　野　重　男 (お茶の水女子 大学教授)
12	8	社会と学校制度	学校制度は社会と密接に関連している。その関連の仕方を歴史的に、また比較教育学的に検討し、日本の学校の特質を明らかにする。	河　野　重　男 (お茶の水女子 大学教授) 新　井　郁　男 (東京工業大学助教授)
13	15	現代社会と学校	情報化社会、学歴社会、大衆社会などと呼ばれる現代社会における学校の役割について考える。	河　野　重　男 (お茶の水女子 大学教授)
14	22	国際化時代の教育	日本人であることと国際人であることとの関係はどのように考えたらよいのか。国際理解の教育、海外子女、帰国子女の教育などの諸問題を具体的にとりあげながら、国際化時代の教育のあり方を考える。	河　野　重　男 (お茶の水女子 大学教授) 新　井　郁　男 (東京工業大学助教授)
15	29	生涯教育論	これからの学校教育のあり方を、家庭教育、社会教育、職場教育といった教育の全体構造の中に位置づけて、「生涯教育論」の観点から検討する。	河　野　重　男 (お茶の水女子 大学教授) 新　井　郁　男 (東京工業大学助教授) 山　村　健 (大正大学助教授)

＝ 道 徳 教 育 ＝

〔主任講師：宇佐美 寛（千葉大学教授）〕

全体のねらい

「道徳」と呼ばれる社会的事実の中心部分は、社会的問題状況における意志決定である。この意志決定の能力を育成するのが道徳教育である。このためには、具体的にはどうしたらよいのかを論ずる。

主な項目

- (1) 道徳と非道徳
- (2) 道徳的価値
- (3) 道徳的判断
- (4) 道徳教育の方法
- (5) 道徳教育の可能性と限界

＝ 情 操 教 育 ＝

〔主任講師：片岡徳雄（広島大学教授）・高萩保治（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

情操の教育は、知識や道徳の教育に比べ、軽んじられてはいなかったか。また、それらと切り離された、狭い芸術教育としてのみ考えられてはいなかったか。

そのような誤りのために、現代の日本の教育が、また、日本の大人や子どもの心が、荒廃したともいえる。

情操の教育を、みずみずしい人間の形成として、どう考え、どう進めてゆくか。様々な事例や体験を手がかりに、進めてゆこう。

主な項目

- (1) 情操と情操教育
- (2) 情操と科学・道徳
- (3) 美的情操と芸術
- (4) 情操教育の意義
- (5) 情操教育の課題
- (6) 文学と情操(1) — 文学教育の意義
- (7) 文学と情操(2) — 文学教育の方法
- (8) 音楽と情操(1)
- (9) " (2)
- (10) " (3)
- (11) 美術と造形
- (12) マスコミと情操
- (13) 情操と想像力
- (14) 情操と総合性
- (15) 情操と人生 — 遊びと自己実現

＝ 家 庭 教 育 ＝

〔 主任講師：山村賢明（筑波大学教授） 〕

全体のねらい

家庭内のあれこれの場面で、子どもをどうしつけるかといった単なる技術論としてではなく、より広い視野に立って、家庭教育の本質的機能をとらえたい。そのために、家庭教育を人間の社会化過程の一環として位置づけ、そこにみられる問題を、日本の文化や現代社会のあり方との関連で考えてゆく。

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	I 家庭教育の考え方 (1)人間の発達と社会化	子どもはどのようにして、一人前の大人へと社会化されてゆくのかを述べる。とくに人間が最初に遭遇する集団としての家族の役割をとりあげ、家庭教育が個々の家族の日常生活の現実 に即して考えられなければならないことを示す。	山 村 賢 明
2	(2)日本人の形成と家庭	親が意図すると否とにかかわらず、日本の家庭においては、子どもは極めて幼時から日本人として形成されることを述べる。とくに基本的生活習慣や日本語の獲得を通して、日本の文化の本質的な部分が伝えられることを指摘する。	同 上
3	(3)家庭の教育・学校の教育	家庭や村落社会における自然な教育から、学校という専門的教育機関への移行という歴史的变化をふまえて、学校教育とは異なる家庭教育本来の機能は何か両者の関係はどうあるべきかを明らかにする。	同 上
4	II 家庭における人間形成 (1)母 親 の 役 割 － 愛の原体験	乳幼児期から青年期へという子どもの発達に対応した、母親の役割の変化を考える。そして母親の役割の中心が、将来様々な対象に拡大してゆく愛の感情を原初的に形成する点にあることを述べる。	同 上
5	(2)父 親 の 役 割 － 権威の原体験	子どもにとって、母親とは異った関わりをもつ父親の役割の諸相をとりあげる。そして結局父親の重要な役割は、規範や道徳意識の基礎にある権威の感覚を、子どもに最初に与えるところにあることを示す。	同 上
6	(3)性別役割と子ども	男女の性別役割が、まず家庭の中で父親・母親をモデルにして子どもに獲得されることを示す。さらに性別役割が社会や時代を通して不変のものでないこと。これからの男の子・女の子のしつけのあり方について考える。	同 上
7	(4)きょうだい関係の意義	親のもとでの親和と競争、対等を庇護といった微妙な関係を経験するところに、きょうだい関係の重要性をみる。同時に、そのような経験の乏しい、今日の一人っ子的状況のもつ問題点を考える。	同 上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	Ⅲしつけの日本の 特質 (1)性善説的子ども 観	しつけの基礎にある子ども観を考える。日本の性善説的子ども観のもとでは、子どものコントロールにむずかしい点が出てくることを、とくに現代の状況から論じ、子どもに対する明確な言葉による要求の必要性を指摘する。	山　村　賢　明
9	(2)母子関係への偏 り	日本の親子関係においては、とくに母子の関係が濃密であることを示し、それが結果として、子どもの甘えを助長し、父親の影響を弱めて、規範意識をうすくさせるように作用することを論じる。	同　上
10	(3)家庭の中の集団 主義	日本的集団主義の行動様式が、まず家庭生活の中でつくられることを示し、地方で、いかにして個人の自律性や主体性をのばすようなしつけを行うかについて考える。	同　上
11	Ⅳ現代家庭のひず み (1)育児不安と過保 護	核家族化と情報過多は育児不安を、さらに子ども数の減少と生活水準の向上は過保護を、ほとんど必然的にもたらすことを述べ、それから脱出する方法や、祖父母との関係を考える。	同　上
12	(2)母親による支配 と管理	伝統的な母子関係の濃密さに加えて、ますます顕在化する母親、その母親によって先廻りしてすみずみまで管理される子どもの生活を述べそれが子どもに及ぼす影響を考える。	同　上
13	(3)受験体制と家庭	社会全体にみられる受験体制の中で偏差値信仰にとらわれた家庭をとりあげる。そして教師とは異なるはずの子どもを見る親の目、子どもをとらえる勉強以外の多様な物指の必要性について考える	同　上
14	(4)見えない父親と 子ども	現代の工業化社会のなかで、子どもたちから見えなくなる父親の存在、経済中心の生活のなかで子どものことを忘れる父親を問題にする。そしてそのような父親の回復なしには、子どもの問題行動の解決はありえないことを論じる。	同　上
15	Ⅴ結　　　　　　び ー新しい家庭教育 の創造	本講座のしめくくりとして、社会・家庭・子どもをめぐる現代の問題状況のなかで、どのような形で家庭教育を再生させるか、その可能性をさぐる。そしてそれは、親自身の生き方の再検討をせまるものであることを指摘する。	同　上

＝ 学 校 教 育 ＝

〔（主任講師：深谷昌志（放送大学教授））〕

全体のねらい

本講では、学校教育の現状をふまえつつ、学校教育のあり方を理論的に深めていきたいと考えている。

全体の構成としては、1、2回で学校の紹介をした後3～6回を通して、学校の歴史的な系譜をたどる。7～10回で、学校の制度的な枠組を紹介した後、以下、各論の形で、学校教育の諸側面を検討する形をとりたい。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	子どもの発達と学校	子どもの発達にとって、学校の果たす役割を“いくつかの教育実践”を紹介しつつ考えてみたい。	深　谷　昌　志 (放送大学教授)
2	日本の学校その特色	諸外国の学校の姿との対比の中で、日本の学校の長所、短所をとらえ、問題を掘り下げていく。	同　上
3	近代の社会と学校の成立	学校のあり方は社会の歴史的変化に対応して変わる。ここでは、近代学校をそれ以前にあった藩学や寺子屋などと対比して考えたい。	中　野　　光 (立教大学教授)
4	国家による学校教育の明暗	学校教育の発達とは何かを明治中期の教育政策を歴史的素材として、国家主義的な教育の明暗を解明してみたい。	同　上
5	教育改造を求めた動き	大正デモクラシーの時代といわれた第一次大戦後の教育界に起った教育改造の動きを、画一化と個性との関連でとらえてみたい。	同　上
6	戦後の教育の原点	敗戦を契機とした教育改造の動きを、6・3制の成立を中心に、原点に戻って考えてみたい。	同　上
7	学校をめぐる法規	学校教育と法規との関連を子どもの学習権保障という立場から学校の実態にそくして考えてみたい。	下　村　哲　夫 (筑波大学教授) 深　谷　昌　志

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	教育方法と授業	学校の授業内容はどのようにして編成され、どこに問題があるのかを学力に関連させて考えたい。	下　村　哲　夫 深　谷　昌　志
9	学校経営の仕組み	学校の主体性を求める事が強い。主体的な学校づくりを目指すのに校長をはじめ教職員の協力関係をどう組織化したらよいかを考える。	同　上
10	教育活動の展開	教科書、補助教材、クラブ活動、学校事故など、教育活動の展開に関連して生じるさまざまな問題をとらえる。	同　上
11	学校集団の構造	小学校教育の中心は学級にある。そこで、学校の持つ意味を集団構造の視点からとらえてみたい。	深　谷　昌　志
12	教師の仕事	専門職制との関連で、教職のあり方をとらえてみたい。特に教職の特性を研修のあり方に関連して考えたい。	同　上
13	地域社会と学校	学校の役割を地域社会や家庭との関連で考えていく。教育と学校との違いも視野に置きたい。	同　上
14	学校論の系譜	近代以降に限ってもさまざまな学校論が提起されてきている。そうした系譜を現代の視角から分析し跡づけてみたい。	同　上
15	学校改革の可能性	学校改革の可能性を、諸外国の学校改革の状況を視野においてとらえてみたい。	中　野　　　光 下　村　哲　夫 深　谷　昌　志

＝地域社会と学校＝ (→地域教育論－地域社会と教育)

〔主任講師：溝口謙三（山形大学教授）〕

全体のねらい

最近の教育問題の一つの側面として、発達の実態としての「生活」からの遊離が指摘される。生活との結合は、成人教育、生涯教育にも求められる動向である。

生活の実態の場は「地域社会」であり、ここに教育と地域との関連の再確立が求められる。しかもこのことは、最近の経済、行政の動向の中に求められている“地方化”にも通ずる一つの社会的要請といえる。

地域社会と教育との関連は、地域自体のもつ“教育力”を確認助長するとともに、地域の変貌を見えながら、地域の生活差に応ずる教育計画を樹立することにある。それは学校教育とともに、生涯教育にも貫かれるべき教育課題である。

主な項目

- (1) 社会と教育 ― 原理と歴史
- (2) 地域社会と教育との関係 ― 地域の教育力
- (3) 地域社会学校運動
- (4) 都市と農村との教育問題
- (5) へき地の教育
- (6) 地域教育計画 ― 地域変貌と教育改革
- (7) 地域生涯教育 ― その課題

＝青 少 年 の 指 導＝

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

児童や生徒についての指導を体系だてて考察していく。本講義は4単位のTVを利用した内容だけに、社会的な関心をひく割合が多いと考えられる。見方によれば、本講義は発達と教育、系の中のひとつの中核科目になる可能性が強い。そこで、共同研究チームを発足させ、それぞれの権威を集め、青少年指導の決定版とでもいえるような格調の高い講義を提示したいと考えている。今のところ、臨床心理学者、社会福祉研究者、生徒指導の専門家、非行の権威などの構成を予定している。

主な項目

- (1) 児童理解の視点、遊び、友だち、家族、地域社会、教師、兄弟など
- (2) 臨床からの接近、登校拒否、かんもく、非社会性、非行、青少年犯罪など
- (3) 健全な子育てのために、児童福祉、学校の指導体制、カウンセリング、システムなど

＝ カ ウ ン セ リ ン グ ＝

〔主任講師：佐治守夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

カウンセリング、教育相談、さらに広く、心理治療一般、（プレイセラピー、グループセラピー、成長グループの活動などを含む）、についての理論、及び実践に際しての重要なポイントを講ずる。

主な項目

- (1) カウンセリング、心理治療とは何か
- (2) 人格変化、人間的成長の様相
- (3) カウンセラーの態度と技法
- (4) 人間関係のもつ意味

＝ 人 間 関 係 論 ＝

〔 主任講師：三隅二不二（大阪大学教授） 〕

全体のねらい

人間の心（mind、自我（self））もまた、社会的相互作用乃至人間関係のなかに発生し、形成され、発達する。幼児から、児童期、思春期を経て、親子関係、友人関係のパターンが変化する。組織体における人間関係論は、組織経営・管理との関連で強調されてきた。

組織の人間関係において、リーダーシップ、意思決定、交渉過程、社会的交換の諸側面について考察をすゝめる。また比較文化の程度からの若干の考察を行う。（なお小生は実験番組として「グループ・ダイナミックス」を担当したものであり、その番組の改訂を行う。

主な項目

主な項目という観点から講義内容をまとめることができるのであればそうしたい。

社会的相互作用、人間関係とmindとselfの発生と形成、対人関係のグループ・ダイナミックス、幼児の人間関係、友人形成、ソシオメトリー、家族関係、競争と協調、対人関係のバランス理論、社会比較の理論、コミュニケーションとグループ・ダイナミックス。

（上述の実験番組の改訂として講義内容をまとめるのであれば、その項目は一応提出済である。）

＝ 知 能 と 創 造 性 ＝

{ 主任講師：田中正吾（放送教育開発センター教授）
 放送時間：午前 6 時～午前 6 時 45 分
 放送局：テレビ朝日 }

全体のねらい

ヒトの知能と脊椎動物の知能を比較し、知能の発達の諸様相とその理論、素質・環境論争を概説する。また知能検査の歴史、その理論と応用面について考察する。さらに知能と創造性がどのように人間の文化の発展に貢献してきたか、また人間が当面している諸問題の解決に知能と創造性の教育がいかに重要であるかを考える。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/12 6	知　能　と　は　何　か	知能の定義、知能の種類としての具体的知能と抽象的知能を知能検査の演示により考える。また人間の文化が知能とどのような形でかかわっているかを考察する。	田　中　正　吾 （放送教育開発 センター教授） インタビュー 伊　藤　隆　二 永　野　重　史 芳　賀　　　純
2	13	ヒトの知能・動物 の知能	脊椎動物（アユ、ニワトリ、ネコ、イヌ、サル、チンパンジー、イルカなど）の知能実験を通して、知能的行動の進化のあとをたどり、ヒトの知能と脊椎動物の知能の相違を調べる。また脳の進化との関連にも言及する。	田　中　正　吾 ゲスト 正　井　秀　夫 （大阪大学教授）
3	20	知能検査の歴史	ゴルトン、キャッテルなどビネー以前の知能検査の考え方に始まり、ビネーとシモンの知能検査の作成、ターマンのスタンフォード・ビネー改訂知能検査、ウェクスラー知能検査などの歴史をたどり、教育、産業界などへの利用に言及する。	田　中　正　吾
4	27	知能検査の理論	知能検査における年令尺度の構成、年令尺度の性質、標準化とサンプルの理論、さらに知能検査の妥当性の問題、信頼性の算出法などを説明する。	同　上
5	58/1 10	精神年令と知能指数	精神年令の意味と限界、知能指数の公式、知能指数の意味、知能指数の恒常性、教育や職業指導への意味について言及する。	同　上
6	17	知能の発達　(1)	具体的知能と抽象的知能の発達の諸相を調べるとともに、言語の発達における知能の役割を述べ、知能の発達曲線（クロス・セクショナルとロンジチューディナル）の性質を述べる。	同　上
7	24	知能の発達　(2) 遺伝か環境か	知能の発達におけるネイチャー・ナーチャー問題の論争、一卵性双生児による研究とその研究方法の限界について述べる。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	31	知能とパーソナリティ	パーソナリティの定義と意義、パーソナリティ検査の種類を叙述し、パーソナリティと知能の関連を説明する。	田　中　正　吾 ゲスト 詫　摩　武　俊 (東京都立大学教授)
9	2/7	知能と学業成績	数学、国語、理科、社会科、外国語などの知的教科の成績および図工、音楽科など芸術的教科の成績と知能検査成績の相関を調べるとともに、教授方法の採用如何によってこの相関関係が変ることを説明する。	田　中　正　吾
10	14	知　能　と　教　育	知能と知能検査に対するさまざまな批判に答えるとともに、教育における知能の正しい考え方、知能検査の正しい用い方、知能検査のもっている限界などを考える。	同　上
11	21	科　学　の　創　造　性	科学技術上の創造性がどのようにしてもたらされたか、科学者の基礎的トレーニング、仮説のたて方、問題解決の過程について述べるとともに、そのユニークな解決について考察する。また創造性の発達曲線と知能のそれとの比較を行う。	同　上
12	28	美　術　の　創　造　性	絵画など造型美術の創作過程における主題、構図、表現様式の基礎として、イメージの形成、構造のダイナミックス、およびそのユニークさの原因とその社会的背景について考察する。	田　中　正　吾 ゲスト 川　崎　春　彦 (画　伯)
13	3/7	音　楽　の　創　造　性	ソナタ、交響曲、ピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲などの作曲過程における第1主題、第2主題とそのヴァリエーションなどの考察を通じて、楽想の創造性を考える。	田　中　正　吾
14	14	文　学　の　創　造　性	小説などの創作過程における主題、表現様式、言葉の選択などの考察を通じて、作者の精神構造のユニークさと文学の関連性を考える。	田　中　正　吾 ゲスト 有　吉　佐和子 (作　家)
15	21	創　造　性　と　教　育	科学教育、美術教育、音楽教育、文学教育の諸領域で創造性を伸ばすための個性に合ったカリキュラムの編成法、個別指導の方法、学級編成の問題点などについて検討する。	田　中　正　吾

＝ 認 知 と 思 考 ＝

〔主任講師：中川大倫（放送大学教授）〕

全体のねらい

認知心理学の主たる起源は、ゲシュタルト心理学におかれるが、その発達と展開には、情報理論、コンピューターの技術とプログラム、言語学、ピアジェの認知的発達理論に影響されるところが大であった。そして、最近においては、心理学の各領域に認知的なアプローチがみられるようになった。

本講義では、認知的アプローチの活発な記憶の研究を中心とし、さらに、推理による問題解決の問題にふれたいと思う。

主な項目

- (1) 認知的心理学の歴史
- (2) 情報処理系としての人間
- (3) 感覚的記憶
- (4) 短期記憶
- (5) 長期記憶
- (6) 数学的問題解決

＝乳幼児の健康と心理＝

(児 童 学)

[主任講師：平井信義（大妻女子大学教授）]

全体のねらい

児童を、心理、保育・教育、精神および身体の衛生、福祉、文化の分野から総合的に理解を深めるとともに、心身障害の原因と治療教育の実際について検討する。とくに人格形成については、自発性（意欲）と共感性（思いやり）を中心に、家庭における育児・しつけとの関係、および家族関係の理想と病理について、日本と欧米との対比の中で、未来学的な立場から言及する。

主な項目

- (1) 心身の発達の個人差と個性
- (2) 心とからだの相関と精神衛生
- (3) 児童福祉の現状と理想
- (4) 保育・教育の現状と理想
- (5) 育児・保育の東西の比較
- (6) 障害児論

＝ 児 童 心 理 ＝

（ → 児童の心理と教育 ）

〔 主任講師：東 洋（東京大学教授）
放送局：テレビ朝日 〕

全体のねらい

子どもは、小さな大人ではない。しかし、子どもは大人になってゆく使命をもつ。子どもは、成長する力をもっている。しかし、学習と援助とを必要とする。これらの両面性をふまえて児童心理の理解を試みる。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	55/12 11	子どもの精神発達 をどうとらえるか	講座の導入として、子どもの精神発達 についての概論。（特にそのさまざまな 考え方について）	東 洋 (東京大学教授) 永 野 重 史 (国立教育研究所 第3研究部長)
2	18	最 初 の 一 年	active な反応の発達、環境との相互 作用、道具への反応などの問題も含む。	永 野 重 史 (国立教育研究所 第3研究部長)
3	25	母 と 子	出生前後から子どもへの期待、母性意 識の形成、母子相互作用、愛着の形成、 母親の仕事。	東 洋 (東京大学教授) 上 村 菊 朗 (伊豆通信病院 小児科医師)
4	56/1 8	言 葉 の 誕 生	ジェスチュアや喃語からどのように形 式的な面と機能的な面との両面において 言語が発達するか。	永 野 重 史 (国立教育研究所 第3研究部長) 村 石 昭 三 (国立国語研究所 言語教育研究部長)
5	15	知能・その概念と 測定	知能とはどういうものか。その知能検 査と意味。	東 洋 (東京大学教授)
6	22	子ども時代の始ま り	赤ちゃんと子どもはどう違うか。子ど も時代の発達課題。	永 野 重 史 (国立教育研究所 第3研究部長)
7	29	表象能力の発達	イメージの世界、イメージによる思考。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/5	言　語　の　発　達	言語と思考、言語発達における問題や異常。	永　野　重　史 (国立教育研究所) 第3研究部長
9	12	論理的思考の発達	表象的思考から具体的概念的思考を経て論証的な思考の能力が形成されるまで。	同　上
10	19	子　ど　も　と　友　達	自己中心性からの脱却、競争と協力、友達関係のひろがり。	東　　　　　洋 (東京大学教授)
11	26	行動基準の形成と発達	社会は、その社会の成因としての行動の型を各個人について形成していく。つまり社会化の働きをもつ。この社会化の働きを行動の基準の形成との関係で考えてみる。	同　上
12	3/5	教　育　の　適　期	課題によって、その学習に適切な発達上の時期があるという考え方の紹介と、それを教育上どう考えるか。	永　野　重　史 (国立教育研究所) 第3研究部長
13	12	自　我　の　発　達	依存から独立へ、心理的離乳の問題、児童期の精神衛生。	東　　　　　洋 (東京大学教授)
14	19	子どもから大人へ	11、12歳(小五)の段階での論理的思考力の発達や、社会関係、情緒面での諸問題。	永　野　重　史 (国立教育研究所) 第3研究部長
15	26	精神発達と教育	すこやかな精神発達を助けるためにどういうことをすべきか。	東　　　　　洋 (東京大学教授) 永　野　重　史 (国立教育研究所) 第3研究部長

＝ 青少年の心理と教育 ＝

〔 主任講師：宮川知彰（東北大学教授） 〕

全体のねらい

「青年期」とは人生経過の中で、どのような意義、使命、役割をもつ時期なのであるか、また、どのような「問題」をかかえているかを、主として教育心理学・発達心理学・社会心理学等の諸分野の立場から多面的に検討し、青年教育のあるべき姿を展望する。

主な項目

- (1) 青年心理学の歴史
- (2) 青年期研究の方法
- (3) 青年期の始まりと終わり
- (4) 性 — 青年の心とからだ —
- (5) 反抗 — 人生の中の青年期
- (6) 余暇活動 — 青年の生活構造
- (7) 仲間・友情 — 青年の対人関係
- (8) 学習 — 青年の学力・人格形成
- (9) 非 行
- (10) 登校拒否・家庭内暴力・自殺
- (11) 校内暴力
- (12) 進路の選択 — 学歴社会と青年
- (13) 青年の生きがい等

＝ 障害児の心理と教育 ＝

〔 主任講師：寺田 晃（東北大学助教授） 〕

全体のねらい

障害児の教育は、人間の尊厳を問ひ教育の本質にせまるものである。本コースでは、前半に総論として、まずそうした障害児がどんな子どもなのかと診断・判別の方法、研究法を検討すると共に、後半の各論では、障害の種類別に、心理の発達の特徴と教育の方法、福祉の在り方などを一連に考え、障害児への一般的理解を深める。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	障害児とその教育 目標	障害児とはどのような子どもか、その定義と類型を主に心理学的、社会学的、医学・生理学的な見地から総合的に解説し、あわせて障害児教育と福祉の理念・目標、ならびに障害児教育一般の歴史的なあゆみ等について言及する。	寺　田　　晃 （東北大学助教授）
2	障害児の診断・判 別	主に医学・生理学、心理学の見地で、障害児の心身に関する病理と障児の一般的様相を述べ、かつ医学、心理学による測定・評価の方法を説明することによって、科学的な診断の実際的技法と問題点とを解説する。	寺　田　　晃 村　井　憲　男 （東北大学助教授）
3	障害児の研究課題 と研究法	障害児の病理（身体・諸器官、大脳ほか）、心理（認知、人格・情動、社会的行動ほか）、教育（指導内容、方法、評価ほか）の各分野にわたり、従来の研究とその傾性を概括し、現下の障害児教育・心理の研究の課題性を指摘する。	寺　田　　晃
4	発　達　と　障　害 (I) 心身発達の仕組み と機能	発達とは一般にどのような機構のもとに、どんな段階を経て展開するのかを系統発生、個体発生、両側面から検討し、従来の発達理論を各種紹介すると共に、発達に対峙して障害がいかに位置づけられるものであるかを考察する。	同　上
5	発　達　と　障　害 (II) 障害児と親・家庭	発達における親の役割と意義、障害にかかわる家庭的条件などをとりあげ、さらに障害児の親子関係の一般的状況を考察することにより、発達と障害の特に第2次的（環境的）な効果に言及し、家庭教育の適切な在り方を検討する。	同　上
6	発　達　と　障　害 (III) 障害児と学校・社会	前章とならび学校教育（教師・友人を含む）の意義、学校における障害児の行動状況の実態等に言及すると共に、社会生活での障害児の状況をとらえ、発達と障害に及ぼす第2次的な効果、ならびに指導の在り方等の一般を考える。	同　上
7	感　覚　障　害　論 (I) 視覚障害児の心理 と教育	視覚障害児の身体、認知能力（感覚・知覚・思考ほか）、学習能力、人格・情動および社会的行動などを通して、視覚障害児の心理的な発達と特徴を概観し、医学的所見をも加えて、主に盲学校教育の現状と適切化を検討する。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	感　覚　障　害　論(Ⅲ) 聴覚障害児の心理 と教育	聴覚障害児(言語障害を含む)の身体と認知能力(特に感覚・知覚、思考と言語との関連で)、学習能力、人格・情動と社会的行動の各発達と特徴を把握し、主として学校教育の現状と最適化を考えることにより、感覚障害論をまとめる。	寺　田　　晃 (東北大学助教授)
9	身体・運動障害論(Ⅰ) 肢体不自由児の心理 と教育	主に医学・生理学、心理学の立場で、肢体不自由児の身体・運動の能力の障害特徴をとらえ、認知能力、人格・情動等の発達をも論ずることにより、治療教育ならびに職業的リハビリテーションの現状と養護学校教育の最適化を考える。	同　上
10	身体・運動障害論(Ⅱ) 病弱児・虚弱児の 心理と教育	前章とならび主に医学・生理学、心理学の見地から、病弱児・虚弱児の身体・運動上の障害特徴、ならびに心身発達の相互関連性を論じ、健常児への復帰、養護学校教育の現状と指導の最適化を考察し、身体・運動障害論をまとめる。	同　上
11	精神発達障害論(Ⅰ) 知能障害児の心理 と教育	知能障害児の身体・運動の能力、認知能力(思考と言語の両活動を中心に)、人格・情動ならびに社会的行動の障害特徴を述べると共に、特殊学級、養護学校および施設での教育・訓練・養育の現状と指導の適切化、社会適応等を論じる。	同　上
12	精神発達障害論(Ⅱ) 情緒障害児の心理 と教育	主に心理学、医学、社会学的な見地から、自閉傾向、登校拒否、施設症ほか情緒障害の子ども達の心身の諸特徴を述べ、学校教育での現状と、家庭教育を含めた指導の在り方、教育相談等について考察し、精神発達障害論をまとめる。	同　上
13	学　習　障　害　論　— 学業不振児の心理 と教育	学業不振児の定義、診断および類型を述べ、心理的(人格を中心)、環境的(家庭、学校、社会)な側面からの特徴と不振の原因を指摘し、学校教育および教育相談を中心とした指導の効果、適切な措置の在り方について論ずる。	同　上
14	重　複　障　害　論　— 重複障害児の心理 と教育	重複障害(重症心身障害)の各類型別に、医学的、心理学的な諸特徴を指摘すると共に、主に感覚・運動面の訓練を通しての早期指導と、コミュニケーションの確立化および人格行動上の自立化を中心とした教育の現状、在り方を考える。	同　上
15	総　　括　　— 障害児研究・教育 の展望	第7章から第14章までの各種障害型の特徴を総括し、『“障害児”とは(そして“人間”とは)何か』を論及しつつ、障害児研究と教育の意義ならびに今後の問題点を展望する。	寺田　晃・村井憲男 新　谷　　守 (東北大学助教授) 仁　平　義　朗 (東北大学助教授) 大　山　正　博 (東北大学教授)

＝ 生 涯 教 育 論 ＝
－生涯教育学の成立をめざして－

〔主任講師：麻生 誠（大阪大学教授）〕
放 送 局：ラジオたんぱ

全体のねらい

生涯教育理念は、わが国でも漸次、教育政策や教育制度、教育組織、教育課程などに影響を及ぼすようになった。だが生涯教育は、教育の自由と平等、学習と教育との間の矛盾に代表されるような二律背反的要素を内にふくんでいる。このような生涯教育理念を現代の教育現実と関連させながら、新しい生涯教育学を構想してみよう。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/8 27	生涯教育の理念	生涯教育は、人々の自己実現を達成させるために、人々の全生涯を通して人間的、社会的、職業的な発達を援助する教育の仕組みである。ややもすれば抽象的な言葉の遊びに終わってしまう恐れのある生涯教育理念を総合的・統一的な観点からとらえ直してみよう。	麻 生 誠 （大阪大学教授）
2	9/3	生涯教育の社会的背景	人間は「生涯にわたって学ばねばならぬ」ということは古くから言われてきた。この意味で、生涯教育は古き理念である。しかし最近生涯教育論が唱導されてきたのはこの古き理念の新らしき意義を要請する社会的条件が発生してきたからである。	同 上
3	10	生涯教育と学習要求	生涯教育は、何よりも国民の生涯にわたる学習要求を前提としている。だが、あらゆる人間が生涯教育を享受しうる継続的な学習要求や学習能力を持っているものであろうか。この問題を考えてみよう。	同 上
4	17	日本の生涯教育のルーツを探る	生涯教育理念は、それぞれの社会や国によってこのニュアンスが異っている。その理由の一つは、国々の文化的、教育的伝統が異っているからである。わが国の生涯教育のルーツを幕末の教育書に探ってみよう。	同 上
5	24	教育政策のなかの生涯教育	わが国の国レベル、地方レベルの教育政策のなかにどのような生涯教育課題がどのような文脈で現れてきているかを明らかにするとともにそれに批判を加えてみよう。	同 上
6	10/1	生涯教育を欧米に見る －アメリカの生涯教育－	欧米の生涯教育政策・制度を概観しながら、生涯教育の教育政策や教育制度上の課題を考えていこう。まず、アメリカの生涯教育の特徴をみてみよう。	同 上 ゲスト 天 野 郁 夫 （東京大学助教授）
7	8	イギリスの生涯教育	イギリスでは、歴史的に学校卒業後、継続教育が整備されており、これを中核とした生涯教育構想が注目される。	同 上 ゲスト 市 川 昭 午 （国立教育研究所部長）

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	15	フランスの生涯教育	フランスでは、教育制度はエリート主義が強く成人のための継続教育も専ら企業内教育に限られていた。だが1968年の五月革命以後、種々の教育革新がみられるようになり生涯教育の体制づくりが進んでいる。	麻　生　　誠 ゲスト 本　問　政　雄 (総理府青少年 対策本部)
9	22	スウェーデンの生涯教育	福祉国家として名高いスウェーデンの生涯教育は学ぶべき点が多い。高等教育の開放、北欧の伝統的成人教育としての学習サークル有給教育休暇や奨学金政策などの種々な学習保障活動をみてみよう。	同　上 ゲスト 市　川　昭　午
10	29	ソビエトの生涯教育	社会主義体制下の生涯教育の事例としてソビエトをみてみよう。そこでは、政府主導型官僚制、画一性などのデメリットが生じやすい。 これらが如何に克服されているのであろうか。	同　上 ゲスト 川野辺　　敏 (国立教育研究所)
11	11/5	生涯教育の体系と行・財政問題	生涯教育論には、行・財政論が欠けていると批判される。誰でもが「何時でも何処でも学習できる」という生涯教育シユラムの行・財政的基盤を検討しよう。	同　上
12	12	地域社会と生涯教育	私たちの生活は、私たちの生活国としての地域社会を基盤としておこなわれている。このような地域社会のなかで地域住民に対してどのような教育機会が提供され住民の学習要求をどのように充足させているであろうか。	同　上
13	19	発達課題と生涯教育	人間の発達過程のそれぞれの時期に現われる達成すべき課題を発達課題という。これらの課題を首尾よく達成することによって健康な人格が生まれる。現代日本の発達課題とその解決に生涯教育のはたす役割を考えよう。	同　上
14	26	成人教育学（アンドラゴジー）を求めて	これまでの教育学は子どもを対象とするものであった。生涯教育の時代とともに、成人が対象とする教育方法論や教育課程論が必要となる。このような要請に答えて誕生した成人教育学（アンドラゴジー）である。その成果を紹介しよう。	同　上
15	12/3	日本の生涯教育の必要性和可能性を求めて	わが国の学校教育システム、社会教育システム、職業訓練システムの実態とこれからの社会の教育課題をふまえて生涯教育の可能性をきわめよう。	同　上

＝ 言 語 障 害 ＝

主任講師：内須川 洸（筑波大学教授）
 田口恒夫（お茶の水女子大学教授）
 谷 俊治（東京学芸大学教授）
 放送局：テレビ朝日

全体のねらい

人間生活の科学の一領域としてみた場合の言語障害学の入門講座。人間が社会生活を営むうえに不可欠な機能である“ことばによるコミュニケーション”という働きに障害を持つ人の問題を、(1)人間の発達、(2)人間関係、(3)医学との関連において論ずる。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	56/12 11	言語障害の問題	言語障害とはどのような問題であるかについて考える。言語障害の定義、種類出現率、人間生活上の問題性学問領域としての「言語病理学」臨床業務としての「言語治療」等に触れ、今後の講義計画の概要を説明する。	田 口 恒 夫 (お茶の水女子大学教授) 内須川 洸 (筑波大学教授) 谷 俊 夫 (東京学芸大学教授)
2	18	発達と言語障害(1) ＜言語の発達＞	言語の正常発達輪郭の概要について述べ、発達障害の原因、診断法、治療方針等についての従来の臨床における考え方を紹介した後、出生以来の母子相互作用にみられる前言語的やりとり行動を重視した新しい見方を紹介する。	田 口 恒 夫 (お茶の水女子 大 学 教 授)
3	25	発達と言語障害(2) ＜言語発達遅滞児＞	最近20年間に急激に増加しつつあるといわれる“ことばの遅れ”の問題について考察する。親の訴え、特徴的病状、生育歴上の問題点、従来の診断・治療法などに触れ、育児法その他、問題発生の社会文化背景について論ずる。	同 上
4	57/1 8	発達と言語障害(3) ＜発達遅滞の理解＞	正常な前言語的コミュニケーション能力の発達経過と対応させてみた場合の、言語発達遅滞の発生のメカニズムについて考察し、あわせて、最近の新生児・乳児の行動発達研究、動物行動学研究等の貢献に触れる。	同 上
5	15	発達と言語障害(4) ＜言語発達の臨床＞	言語発達遅滞児の面接、検査、診断法指導の方針と方法およびその臨床的経過について述べ、具体的事例をあげて解説すると共に、今後に残された課題に触れこの種の問題についての将来の展望を試みる。	同 上
6	22	人間関係と言語障害(1) ＜人間関係と話し方 およびその障害＞	さまざまな人間関係のうち、言語関係について解説する。とくにその構造、特性など。そのなかで音声言語について、話し方（音声・発音・リズム）と言語関係が密接不可分の相互関係にあることを述べ、次回以降のテーマの導入とする。	内須川 洸 (筑波大学教授)
7	29	人間関係と言語障害(2) ＜人間関係と音声 およびその障害＞	人間関係の音声のかかわりについて述べ、パーソナリティと音声、人間関係にかかわる音声障害とくに心因性失声症などについて、その要点を述べる。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/5	人間関係と言語障害(3) ＜人間関係と音声、 およびその障害＞	発音(調音または構音)について解説し、その仕組、内容、学習条件などについて触れる。構音障害、幼児語と人間関係とくに言語関係との係わりの重要性を指摘し、診断・治療法・予防などの諸問題について述べる。	内須川　　洸 (筑波大学教授)
9	12	人間関係と言語障害(4) ＜人間関係とリズム およびその障害＞	人間関係がもっとも大切な言語障害に吃音がある。その他のプロソディーの障害、早口症、摩性発語を含めて解説する。とくに吃音の病因・症状・診断・治療法について、その要点を述べる。	同　上
10	19	医学と言語障害(1) ＜言語機能の生理 的機構＞	言語の表出と理解のための生理学的機構について解説しそれぞれの器官の本来の生理学的機能について概説する。その上で、これらの器官の異常と言語障害の発生との関係について述べる。	谷　　　俊　治 (東京学芸大学教授)
11	26	医学と言語障害(2) ＜感覚器官の異常 と言語障害＞	言語機能が正常に営まれるための生理的条件の一つに正常に機能している感覚器官があげられる。この回では、主として聴覚と言語との関係について論じ、聴覚障害に判り言語障害について、具体的な症例にもとづいて解説する。	同　上
12	3/5	医学と言語障害(3) ＜中枢神経系の異 常と言語障害＞	中枢神経系の働きも、言語機能にとって極めて重要である。この回では、失語症を中心として、中枢神経系の異常に判り言語障害と、そのリハビリテーションの諸問題について論ずる。	谷　　　俊　治 (東京学芸大学教授) 笹　沼　澄　子 (横浜国立大学教授)
13	12	医学と言語障害(4) ＜発語器官の異常 と言語障害＞	聴覚や中枢神経系の働きが正常でも、発語器官に大きな異常があると正常な言語機能が損なわれやすい。この回では、口蓋裂を中心として、発語器官の機能異常に伴う言語障害の特徴について解説しその対策について論ずる。	谷　　　俊　治 (東京学芸大学教授) 萩　野　洋　一 (聖マリアンヌ 医科大学教授)
14	19	医学と言語障害(5) ＜音声の障害＞	音声も話し言葉による伝達にとって重要な役割を果たしている。小児と成人、男性と女性との音声の差、思春期に起こる変声の意義などについて解説し、さらに、さまざまな音声障害とその対策についての最近の進歩について述べる。	谷　　　俊　夫 (東京学芸大学教授) 山　下　公　一 (金沢医科大学教授)
15	26	人間生活と言語障害	コミュニケーションの時代と言われる現代における人間の社会生活や人間関係の中で、言葉の障害が演ずる役割と意義についての、3人の講師による全体の要約と補遺および展望。	田　口　恒　夫 (お茶の水女子大学教授) 内須川　　洸 (筑波大学教授) 谷　　　俊　治 (東京学芸大学教授)

＝市 民 と 法＝

(→ 犯罪と法)

[主任講師：内藤 謙 (東京大学教授)]

全体のねらい

市民生活における犯罪現象に対して法がどのようにかかわりあうかを、近代刑法の展開という視点から講義する。犯罪とは何か、刑罰とは何かという基本的な問題の検討が中心になるが、現代の社会が犯罪と刑罰について提起しているさまざまな問題を手がかりにして、できるだけ具体的かつ平明に説明することとしたい。

主な項目

- (1) 刑事法の基本問題
- (2) 刑法の機能
- (3) 犯罪と刑罰
- (4) 刑法の実現過程

＝ 現 代 の 裁 判 ＝

{ 主任講師：田宮 裕（立教大学教授）
 放送局：テレビ朝日 }

全体のねらい

法は、六法全書の中から引き出され、裁判の過程を経て、「生きた法」となる。そのからくりを、裁判の担い手たる人の側面、国の制度としての側面、手続き過程としての側面から分析し、文化の一翼を構成する日本の裁判の特色を浮き彫りにしたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/12 9	現代日本の裁判	裁判は、普通理解されているよりは、はるかに人間くさい創造的活動だが、それだけに流動する社会の中で、多方面の社会的機能を果たす。現代の市民生活において、裁判の持つ意義と機能を、序論的に考える。	田　宮　　　裕 （立教大学教授）
2	16	裁判の担い手（1） －裁判官－	裁判所の組織・構成、裁判官の地位・身分、司法権の独立、キャリアの裁判官制度が持つ問題点など、裁判所と裁判官にまつわる今日的課題を探る。	同　上
3	23	裁判の担い手（2） －検察官－	ひとたび起訴すれば99パーセント以上の有罪率を誇る、刑事訴追の有能な法曹集団。検察官をぬきには日本の刑事司法は語れないが、その組織・活動とこれに対する法的規制を検討する。	同　上
4	57/1 6	裁判の担い手（3） －弁護士－	弁護士は、いわば市民の困り事の相談役あるいは、法律生活上の病理現象の予防治療にあたる「法の町医者」。現実にはどのような役割を果たし、また、期待されているのだろうか。	同　上
5	13	民事訴訟の手続き	私人間の紛争を解決するための裁判手続きを解説する。行政訴訟、非訟事件、調停などにも触れる。裁判を実現するための強制執行や仮差押・仮処分もとりあげる。	同　上
6	20	刑事訴訟の手続き	捜査→起訴→事実審理→判決→上訴などの概略を、順を追って説明する。家庭裁判所の少年審判は「刑事」訴訟ではないが便宜上ここで解説する。	同　上
7	27	国民の司法参加	先進諸国では、ほとんど例外なく素人裁判官の制度がみられる一陪審や参審。戦前の日本にも、陪審があった。これらの制度の運用状況や問題点を紹介し、職業裁判官制度と対比しながら、国民と裁判の関係を考える。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/3	違　憲　審　査　制	戦後、アメリカにならって取り入れられた制度で、現行憲法のもとにおける司法の際立った特色を示す。これを支える政治理念を明らかにし、外国と比較しながら、制度のありかたを検討する。	田　宮　　裕 (立教大学教授)
9	10	捜　査　と　裁　判	刑事事件では、裁判が始まるまでに、捜査をつくして犯人をあげ証拠を確保しておく必要がある。捜査は、真相を逃さぬためにも人権保障のためにも、公判に劣らず重要なので、近時制度上理論上の発展がいちじるしい。この見地から、捜査と裁判のかかわりを考える。	同　上
10	17	証拠と事実認定	裁判の生命である事実認定をめぐる諸問題、とくに、裁判官の自由心証主義、証拠法則、科学的知見の応用、自白の取扱いなどを取りあげる。	同　上
11	24	長期裁判の問題	「遅れた裁判は裁判の拒否に等しい」といわれるように、迅速性は裁判の生命。長くかかる裁判の現状とその背景にある問題点を明らかにする。	同　上
12	3/3	誤判とその救済	訴訟法規の大部分は、正しい裁判を願って作られたものだが、「人のわざ」としての裁判に、僅かではあるが、誤判もある。最近の再審事件を手掛りに免罪救済制度について検討してみる。	同　上
13	10	「裁判好き」と 「裁判嫌い」	日本人は、権利、義務の観念で是非を明確にするよりも、義理人情による大岡裁きを好むといわれる。また、市民と裁判所の距離は大きく、その間に準法律家が活躍する。このような裁判の利用関係をめぐって、日本人の法意識の問題を考える。	同　上
14	17	裁判における正義 — 日米の比較 —	当事者主義の極致を示すアメリカでは、刑事事件でさえ、当事者の取引が行なわれるが、日本の裁判手続きは、真実発見の理念に忠実だといわれる。このことを手掛りに、裁判文化の比較を試みる。	同　上
15	24	裁　判　と　立　法	判例による法形成の意義と限界を考える。裁判を法の形成とみる現実主義的立場は、法学にどのような影響を及ぼしたかを検討し、立法による法形成との相互関連に注目して、判例の役割を分析する。	同　上

= 取引と企業の法 =

〔主任講師：龍田 節（京都大学教授）〕

全体のねらい

企業の組織および取引を規制する法の基礎的な部分を説明する。現代の経済活動の主な担い手は企業であり、企業をめぐる取引の法律関係を知ることは重要である。また、企業の多くは会社形態をとっているから、代表者の権限などのように、組織の問題が企業の取引に深く関係する。さらに、組織それ自体の問題としても、企業の行動を決める要因、あるいは投資者の利益を左右する要因であるという点で重要である。このように、商法上の制度の主要なものを、市民の立場から理解できるように説明しようと思っている。

主な項目

- (1) 企業取引
- (2) 約款と消費者保護
- (3) 取引をする権限
- (4) トップ・マネジメント
- (5) 株式への投資
- (6) 企業のグループ
- (7) 倒産
- (8) お金の流れ
- (9) 紙にのった権利
- (10) 企業法の歴史と特色

＝ 国 際 社 会 と 法 ＝

〔 主任講師：横田洋三（国際基督教大学教授）
放送局：ラジオたんぱ 〕

全体のねらい

複数国家の併存を前提とする国際社会は、多様性と不安定性を基調とし、したがって、法を通じての秩序の確保が強く要求されている。このことをふまえて、国際社会における法の意義と役割を、とくに日本とのかかわりを念頭におきつつ、考えることにする。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/8 28	国際社会における 法の意義	国際社会において、法が必要とされる事情を考察し、あわせて、国際社会の構造の特殊性からくる法の存在形態の特異性にも目を向ける。	横　田　洋　三 国際基督教大学教授
2	9/4	国際関係を規律する 法の種類	国際関係を規律する法には、国際法、国際私法、国際組織法など、さまざまなものがある。それらを個々に検討すると同時に、それらの法の相互の関係を明確にする。	同　上
3	11	国　際　法　の　成　立	国際関係を規律する法の中で中心的位置を占めるものが、国際法である。この国際法の成立のいきさつを、16、7世紀のヨーロッパにさかのぼって検討する。	同　上
4	18	国　際　法　の　発　達（1） －新国際法秩序の 確立－	初期の国際法は、自然法の強い影響下にあった。しかし、次第に科学的思考の影響を受け、実証法体系へと移行し、19世紀には、実定国際法体系が確立した。この間のいきさつと、その政治的社会的背景を考察する。	同　上
5	25	国　際　法　の　発　達（2） －新国際法秩序の 形成－	今世紀に入って、戦争の違法化、国際機構の発達、個人の地位の向上など、伝統的国際秩序を根底からゆるがす現象が生じ、それに伴って国際法体系も大きな変容を余儀なくされている。この間の事情を、一つの必然的歴史の流れとしてとらえる。	同　上
6	10/2	国　際　法　の　基　本　問　題	従来、国際法学者の間で、理論上争われてきた基本問題のうち、(イ)国際法の法的性質、(ロ)国際法と国内法の関係、(ハ)国際法の法源、の3つについて考察する。	同　上
7	9	実定国際法規(1) －国際法の定立 に関する規則－	現行の国際法の諸規則の中から、国際法の定立に関する諸規則をひき出して、検討する。とくに慣習国際法の成立の問題と、条約の締結、効力、実効性などに関する諸規則を考察する。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	16	実定国際法規(2) －外交関係法－	国際法の中でも比較的古くから慣習法として形成されてきた外交関係に関する諸規定、とくに、大使、公使をはじめとする外交官の職務、特権、免除などについて検討する。	横　田　洋　三
9	23	実定国際法規(3) －国家に関する 諸規制－	国際法上の重要な主体である国家の成立、種類、領域、主要な権利　義務などについて検討する。	同　上
10	30	実定国際法規(4) －戦争と国際法－	国際法成立の直接の契機を与えた戦争と国際法の問題について、戦争それじたいが合法か違法かという問題と、戦争が起った場合に当事者によって守られるべき規則は何か、という二つの側面から検討する。	同　上
11	11/6	個人と国際法	従来、国際法は、国家間の関係を規律する法として確立されてきたために、個人については直接規定することがなかった。しかし、最近では、個人の地位の向上とともに、個人について直接規定する国際法規則が増えてきた。これを考察する。	同　上
12	13	企業活動と国際法	近年、企業活動の国際化に伴い、国際法も企業活動や経済関係について、さまざまな規律を及ぼすようになった。こうした企業活動に関する国際法の諸規則を概観する。	同　上
13	20	国際機構と国際法	今日の国際社会は、国際機構の存在を無視しては語れない。これらの国際機構は、国際法を基礎として成立し、国際法に従って行動するとともに、みずから、内部に独自の法体系を形成している。こうした国際機構に関する諸法規を概観する。	同　上
14	27	日本と国際法	開国以後の近代日本の歩みは、国際法と深くかかわってくる。また、相互依存の進む中で貿易立国としての日本の将来は、国際社会とのつながりを無視しては考えられない。こうした観点に立って日本と国際社会のかかわりを、法的側面からとらえ直してみたい。	同　上
15	12/4	国際社会の将来と法	技術進歩と国際協力の進展に伴って、今後国際社会はますます複雑になることが予想され、そのために法に期待される。役割もけっして小さくない。こうした、国際社会の将来を考えるうえで、法の果たすべき任務と条件を検討する。	同　上

＝ 政治思想 I ＝

〔主任講師：佐々木 毅（東京大学教授）〕

全体のねらい

政治思想は日本国憲法の前提にしている政治についての考え方を理解する上で重要な役割を持つ。従ってこの点に可能な限り注意しながら講義を進めると共に、近代の民主主義をめぐるさまざまな批判や問題点に言及し、それらを考えていくための素材を提供することを目的にしている。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	ヨーロッパ政治思想の伝統(1) ーポリスの政治学	ヨーロッパの政治思想の骨組を形成する上でギリシャに生まれたポリスの政治学は絶大な影響力を持った。ここではプラトンやアリストテレスに言及しつつ、後代との関連で重要と思われる論点を網羅的に論ずる。	佐々木　　毅 (東京大学教授)
2	ヨーロッパ政治思想の伝統(2) ーキリスト教と中世の政治思想	ポリスの政治学と並んでキリスト教や中世の伝統もまた見のがすことの出来ない重要な役割を持っていた。ここでも前回と同様の観点から、宗教的権威対世俗的権力、法の支配、立憲主義といったテーマに即して重要な論点を解明する。	同　上
3	ルネッサンスの政治思想	近代政治思想の生誕期において何が政治の論点とされ、何が改革すべき問題とされたかを、主としてマキアヴェッリ、モアの2人に即して吟味する。	同　上
4	宗教改革と政治思想	ルター、カルヴァンによって認められた宗教改革がどのような側面において決定的な役割を果たしたかを、例えば、寛容の問題を織り込みながら、多方面から考察する。	同　上
5	主権論と絶対主義	ギダレによって提起された主権という新しい概念が、折から興隆しつつあった絶対主義と結合しながら、王権神授説として定着していく過程を、その政治的意味に即して分析する。	同　上
6	ピューリタン革命の政治思想	近代政治原理の母胎となったピューリタン革命が、いかに多様な政治思想やユートピアを含んでいたかを、重点的に取り上げ、解説する。	同　上
7	ホッブズの政治思想	伝統的政治学の革命転換を行なったホッブズの政治思想を、それがいかなる意味で革命的であったかを、論理学説や社会像、政治権力の成立論などに即して紹介する。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	ロックの政治思想	近代政治理論の父と言われるロックの自然法論、所有権論、社会契約説、革命論、寛容論などを紹介し、それを通して彼の政治思想の全体に接近することを試みる。	佐々木　　毅 (東京大学教授)
9	モンテスキューの政治思想	三権分立論で有名なモンテスキューは18世紀の政治思想家の中で最も奥行きのある思想家である。ここでは三権分立論の背後にある政治自由についての見方のみならず、商業活動と政治、封建制、古代ポリスなどについての論述を検討したい。	同　上
10	文明社会と政治理論	18世紀ヨーロッパの人々は、彼らがそれまでの社会とは異った、物質的に豊かな文明社会に到達したと論じた。フランス啓蒙、スコットランド啓蒙などに見られるこれら文明社会論と、彼らの文明社会に対する評価、態度を問題にする。	同　上
11	ルソーの政治思想	文明社会のメカニズムに対決し、教育や政治の次元で新たな地平を開こうと苦悩したルソーの政治思想を、「学問芸術論」「不平等起源論」「社会契約論」を中心に紹介する。	同　上
12	アメリカ独立革命の政治思想	近代民主主義の制度化の一例としてのアメリカを取り上げ、ベインと「ザ・フェデラリスト」に見られる民主主義論の特徴を明らかにする。特に間接民主主義と権力分立とが中心テーマである。	同　上
13	保　守　主　義	アメリカやフランスでの革命に抗して、王権や貴族制に依りつつ、民主主義の問題点を鋭く指摘したバークやヘーゲルの政治思想を紹介する。ここでは彼らの民主主義批判がむしろ中心になる。	同　上
14	社　会　主　義	18世紀の二つの革命が政治革命であった点を批判し、その基礎にある文明社会そのものの革命を唱える社会主義の流れをマルクス等に焦点を当てながら講義する。その際、政治という営為の行方が重要なテーマとなる。	同　上
15	自　由　主　義	18世紀の二つの革命の原則を容認しつつも、その十分な機能を実現するためにはどのような条件が必要であるか、を問題にしたトクウィルミルを取り上げ、今日の政治理論への展望としたい。	同　上

＝ 現 代 政 治 理 論 ＝

〔主任講師：阿部 齊（筑波大学教授）〕

全体のねらい

政治理論は、分日の政治的現実適切な説明を与え、今後の政治的变化を的確に予測する上で、大きな役割を果たす。現代の政治理論は、大きく分ければ、ヨーロッパで発展した伝統的理論と、大戦後にアメリカで発展した行動論的理論とに分けられよう。以下、これら二つの流れの双方において、政治理論を概観することにした。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	現代国家の理論	19世紀までの代表的な国家理論である一元的国家論やマルクス主義的国家論との対比において、バーカーやラスキの唱えた多元的国家論を考察し、あわせて現代国家の理論的位置づけを明らかにする。	阿　部　　齊 （筑波大学教授）
2	マルクス主義の政治理論	マルクス主義は19世紀の代表的な政治理論のひとつであるが、今世紀に入るとともに、社会的経済的現実の変化に対応して、新たな理論的發展を遂げた。ここでは、レーニン、ベルンシュタイン、グラムシらの政治理論を検討する。	同　上
3	自由主義の政治理論	自由主義は今日なお西欧の政治哲学の根幹を成している。その代表的な哲学者としてバーリンをとりあげるほか、自由主義的立場から独自の政治理論を展開したクリック、アメリカ的自由主義の特質を解明しだいリーツの理論を検討する。	同　上
4	エリートの理論	自由主義に対抗する理論としては、まずエリートの役割を強調するエリート理論をとりあげることができる。その代表的な例として、パレート、モスカの政治理論を紹介、また最近の例として、ミルズのパワーエリート論をとりあげたい。	同　上
5	大衆社会の政治理論	エリートと対抗関係に立つのは大衆であるが、大衆の政治的特性の分析も現代政治学の重要な課題である。大衆社会を分析した政治理論のなかから、ウォーラス、リップマン、デューイらの理論をとりあげ、それぞれの意義を明らかにする。	同　上
6	政治権力の理論	戦後におけるアメリカ政治学興隆の出発点となったのは、メリアムの政治学であり、またそれを継承したラズウェルの政治学であった。ここでは、政治権力の理論に焦点を合わせながら、メリアムとラズウェルの政治理論を検討する。	同　上
7	政治システムの理論	システム論は現代の政治学においても重要な役割を果たしている。政治学にシステム論を導入する上で先駆的役割を果たしたイーストン、構造機能分析によってシステム論を展開したアーモンドらを紹介し、システム論の意義を検討する。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	意思決定の理論(I)	第二次大戦後のアメリカ政治学の二本の柱は、権力論と意思決定論であった。ここではまず、意思決定論の一分野として、ノイマンとモルゲンシュテルンによって開発されたゲームの理論をとりあげ、その政治学的意義を明らかにする。	阿　部　　齊 (筑波大学教授)
9	意思決定の理論(II)	今日の意思決定の最も一般的な方式は、多数決である。しかし、この多数決はさまざまなパラドックスを持っている。なかでも最もよく知られているアローのパラドックスを中心に、多数決の問題点を追求したい。	同　上
10	意思決定の理論(III)	組織内における意思決定の特質を究明したのはサイモンであり、それを発展させたのはリンドブロムであった。ここでは、サイモンの意思決定論やリンドブロムのインクリメンタリズムを紹介しつつ、政治的意思決定過程の特質を解明する。	同　上
11	政治参加の理論	政治参加は現代民主政治の最も重要な特徴のひとつである。しかし、政治参加は決して平等に行われているわけではない。だれが最もよく政治に参加するかを明らかにしたパーバ、ナイ、キム、らの研究を通して、政治参加の問題点を探る。	同　上
12	集団行動の理論	利益集団の圧力活動にみられるように、集団行動は、今日の政治過程における最も重要な要因のひとつである。集団行動の政治的意味について、古典的成果を残したベントレイから今日のオルソンに至る一連の研究を検討する。	同　上
13	投票行動の理論	利益集団と並んで政治過程で中心的な役割を果たすのは、政党と有権者である。政党と有権者の行動様式に関する多くの理論のなかから、ここではダウنزの合理的投票行動論とサルトーリの政党論をとりあげ、それぞれの問題点を探る。	同　上
14	民主主義の理論	ダールは、今日の民主主義の理論的分析を進めてきた政治学者の一人である。彼はまず多元主義の解明につとめ、次いでより厳密な分析のために、ポリアーキーという概念を提起した。その紹介を通じて現代民主主義の問題点を探る。	同　上
15	現代政治理論の課題	第2次大戦後のアメリカ政治学は、行動論的政治学と呼ばれるが、行動論的政治学に対する最も鋭い批判を試みたのは、哲学者のアレントであった。アレントの批判を通じて行動論的政治学の限界を明らかにし、現代政治理論の課題を探る。	同　上

＝ 現 代 の 政 治 生 活 ＝

（主任講師：堀江 湛（慶応義塾大学教授）
放送局 テレビ朝日）

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 （所属・氏名）
1	53/12 7	産業構造の変動と 政治生活	わが国における産業社会の変動がどのような政治問題を生みだし、全体として政治生活にどのような変化が生じたかを産業化、都市化、マスコミ、交通・通信、教育などに焦点を当てながら論じる。	堀 江 湛 （慶応義塾大学） 教 授
2	14	大衆の登場とマス ・デモクラシーの課題	現代政治はまず何よりも大衆現象によって特色づけられる。そこでまず大衆とは何かを公衆・群衆と比較しながら明らかにした上で有権者の増大、マスコミの発達、政治的無関心などを論じる。	同 上
3	21	技術化社会と政治	情報化社会とは何か。管理社会とは何かを明らかにしながら、特徴的な反体制行動の性格、米ソ両体制の収斂イデオロギーの終焉論、ユーロー Kommunismus などについて説明する。	芳 賀 綏 （東京工業大学） 教 授
4	54/1 11	現代社会の病理	巨大組織の発展、疎外、アミノーといった現代社会の病理が政治意識や行動にどのように現われているかを明らかにする。	堀 江 湛 （慶応義塾大学） 教 授
5	18	政治的社会化 （対談）	人間がどのようにして政治的態度を身につけ政治的イデオロギーや価値観がどのように注入され、政治的態度はどのように変化していくか。さらに世代の断絶や社会化の新しい問題などについても論じる。	堀 江 湛 （慶応義塾大学） 教 授 芳 賀 綏 （東京工業大学） 教 授
6	25	政治的パーソナリ ティ	人間のパーソナリティやライフ・スタイルと政治的イデオロギーや意識・行動の関連について考察する。権威主義的パーソナリティ偏見の構造・若者や社会的少数派のアンデンティティの問題などにふれる。	堀 江 湛 （慶応義塾大学） 教 授
7	2/1	イメージ時代の政治行動	現代社会においてはイメージ選挙に代表されるように人々の政治行動は政治的イメージによって大きく左右される。政党や候補者イメージ、ステレオタイプ、イメージ言語などについて論じる。	芳 賀 綏 （東京工業大学） 教 授

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	8	政治参加とエリート	政治参加とは何か。現代政治においてエリートはどのような影響力を行使しているか。エリートと民主政治との関連はどのようにとらえられるべきか。政治的リーダーシップの諸側面などについて論じる。	堀　江　　湛 (慶応義塾大学) (教　　授)
9	15	現代政治と政党	現代政治において政党はどのような機能を果たしているか。名望家政党から大衆政党への変質、政党政治家の社会的背景、政党の派閥などについて論じる。	芳　賀　　綏 (東京工業大学) (教　　授)
10	22	政治活動と 政治資金(対談)	新しい選挙運動の形態、金のかかる政治の実態、政治資金の公営化や政治資金の規制について論じる。	堀　江　　湛 (慶応義塾大学) (教　　授) 芳　賀　　綏 (東京工業大学) (教　　授)
11	3/1	利益団体の圧力行動と住民運動	現代政治における農協、医師会 etc といった既成の利益団体と住民運動、市民運動にみられる新しい利益団体との性格の比較検討、街頭における大衆の圧力行動の考察を行う。	堀　江　　湛 (慶応義塾大学) (教　　授)
12	8	投票行動の政治学	投票行動の科学的研究の発展のあとをふりかえり、基本的な分析の視角について紹介する。	同　上
13	15	有権者を 動かすもの	人々の投票意思の決定における社会的心理的、政治的要因について分析し、争点の操作、マスコミの果たす役割について論じる。	芳　賀　　綏 (東京工業大学) (教　　授)
14	22	現代政治と無党派層の動向(対談)	いわゆる政党支持ばなれ、都市の多党化現象、若者の脱政治的傾向などについて考察する。	堀　江　　湛 (慶応義塾大学) (教　　授) 芳　賀　　綏 (東京工業大学) (教　　授)
15	29	選挙予測とマスコミ	選挙予測の方法について紹介、検討するとともにマスコミの与える影響力について論じる。	堀　江　　湛 (慶応義塾大学) (教　　授)

＝ 現 代 の 国 際 政 治 ＝

〔主任講師：神谷不二（慶応義塾大学教授）〕
放 送 局 ： ラ ジ オ 関 東

全体のねらい

現代の世界を理解するため、第二次世界大戦後から今日に至る国際政治の流れを次の三つの視点より考える。1) 戦後の国際政治の枠組を形成した米ソ関係。2) そのような枠組の中で展開されたアジア地域の国際政治。3) 戦後日本外交の歩み。以上の視点から、現在の国際情勢をより広い視野とより深い視角で把握することを目的とする。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	55/12 14	冷　戦　の　起　源 (1945～1953)	第二次世界大戦後の国際政治を大きく規定した米ソ冷戦の起源を検討する。	神　谷　不　二 (慶応義塾大学教授)
2	21	冷　戦　の　展　開 (1953～1962)	米ソの硬直した対立抗争の展開、国際政治の二極化(双極化)状況、さらにはキューバ危機の歴史的意義等について考える。	同　上
3	28	対決から交渉へ (1962～1976)	米ソ関係における対立から交渉への道程を、国際政治の多極化現象、戦略兵器制限交渉、デタント等の観点から考える。	同　上
4	56/1 11	カーター政権下の 米ソ関係 (1976～)	ソ連の継続的な軍備拡張、アメリカの自由世界における指導力の低下等の問題を検討しつつ、現在の米ソ関係を考える。	同　上
5	18	80年　代　の　展　望	多極世界の国際政治を第三世界の動向をも含めて検討し、さらに80年代の国際政治の構造的特質に言及しながら将来を展望する。	同　上
6	25	朝　鮮　戦　争	第二次世界大戦後のアジアにおける国際政治に一時期を画し、米中対決の原形を形作った朝鮮戦争を考える。	小此木　政　夫 (慶応義塾大学助教授)
7	2/1	ウ　ェ　ト　ナ　ム　戦　争	民族解放戦争、南北ヴェトナム間の闘争、さらには国際的抗争が複雑に交錯する国際内戦としてのヴェトナム戦争を考える。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	8	中　国　の　政　治	1949年に中華人民共和国が成立して以来の中国の政治を「穏歩」と「急進」という二つの路線の揺れ動きの中から考える。	木此木　政　夫 (慶応義塾大学助教授)
9	15	中　ソ　対　立	第二次世界大戦後の国際政治に大きな衝撃を与えた中ソ対立を、両国の国益、イデオロギーなど様々なレベルで検討しその意味を探る。	同　上
10	22	非同盟主義運動	米ソ冷戦下において二つの陣営のいずれにも属さずに、積極的中立を推進しようとする運動がチト、ナセル、ネールらによって始められた。しかし、この運動は、これら指導者を失い現在曲り角に立っている。これらを振りかえりながら今後の方向を考える	同　上
11	3/1	第二次世界大戦の 終結と米国の初期 対日占領対策	日本のポツダム宣言受諾へ向けての連合国側と日本側双方の動き及びアメリカの初期対日占領政策について考える。	片　桐　庸　夫 (群馬県立女子大学 教授)
12	8	アジアの冷戦と 米国の対日占領政 策の修正	アジアに冷戦が波及し中国に革命が起こった結果、米国による日本の位置付けの変更や、それにともなう初期対日占領政策の修正がいかに行われたのかを考える。	同　上
13	15	独　立　の　回　復	アジアにおいて冷戦が顕在化すると、アメリカは対日多数講和の実現を急いだ。その成果がサンフランシスコ講和条約である。これによってわが国は独立を回復した。その結果わが国が置かれた国際的立場、残された問題等を検討する。	同　上
14	22	日ソ国交正常化	向米一辺倒の吉田内閣を後継した鳩山内閣は、日ソ国交正常化に取組んだ。だがこの交渉は極めて変則的性格をおびざるを得なかった。なぜそうならざるを得なかったのか、正常化の結果、何が解決され何が未解決問題として残されたのか等を検討する。	同　上
15	29	「戦後」の終焉と 世界の中の日本	安保改訂を経て経済大国へと成長した日本が沖縄返還、日中国交正常化をいかに果し、また現在どのような外交課題をかかえているのかを考える。	同　上

＝ 政 治 史 I ＝

〔主任講師：山口 定（大阪市立大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ第二帝制の成立から第二次世界大戦前夜にいたるヨーロッパ現代政治史のなかから、できるだけ現代的意味のあるテーマを選んで講述する。かつてのようにヨーロッパを「学びとるべき模範」とするのではなく、また今日一部に見られるように、「かつての先進国」として軽く見るのではなく、批判的摂取の対象として考え直してみたい。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	ドイツ第二帝制の成立	1871年のドイツ第二帝政の成立は、現代ヨーロッパ政治史の起点であるばかりでなく、ビスマルクの強力な指導力とプロイセンの運事力による「国民的統一」の達成、その後の目覚ましい産業の発展を考える時、「後発国型近代化」の一原型といえる。	山　口　　定 （大阪市立大学）
2	イギリスにおける議会制民主主義の確立	19世紀の三回にわたる選挙法改革とそれを通じての近代政党の成立によって生まれる古典的議会制民主主義（ウィクトリア期における議会政治の黄金時代）の諸相を明らかにし、それを可能にした社会的・経済的・文化的諸条件を考える。	同　上
3	第一次大戦前の労働運動と社会主義運動	イギリス労働党とドイツ社会民主党、それにフランスの三分裂（革命派、改良派、サンディカリズム）を比較しつつ、労働者政党の諸類型、労働運動、社会主義運動と政治のかかわりあいの歴史的特質について考える。	同　上
4	「帝国主義の時代」と第一次大戦	イギリス、ドイツ、フランス三国の「帝国主義」政策の性格の違いをそれぞれの国の内政のあり方や社会構造の相違と関連させながら説明し、あわせて、第一次大戦の非劇がなぜ起ったかを当時の「勢力均衡」政策の展開の跡を追いつつ考える。	同　上
5	ロシア革命	ロシア革命がなぜ起ったのか、そしてそれが「社会主義」革命になったのはなぜなのか、また後進国で「社会主義」革命が成功したときにどのような問題が生じるのか、といった諸問題を、ツァーリズム・ロシアの政治・社会構造の特質の解明と関連させて考える。	同　上
6	イタリアにおけるファシズムの勝利	1922年10月のムッソリーニ内閣成立をファシズム型「直接行動の政治」の勝利と考え、そうした事態の生じた原因を第一次大戦直後のイタリア政治の混乱に求めるだけでなく、イタリア統一（1861年）以後の政治の特質のなかに探る。	同　上
7	ヴァイマル共和制の不安定性	第一次世界大戦と第二次大戦のあいだのいわゆる「戦間期」における「議会制民主主義の危機」の古典的事例とされるヴァイマル・デモクラシーについて、その不安定条件を比例代表を初めとする制度的諸要因と政党政治のあり方のなかに探る。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	フランス第三共和 制の政治構造	1871年から1940年にいたるフランス第三共和制は、小党分立のなかに政治的な結合と安定が維持された特異な性格をもっている。その秘密を、中心になった急進社会党の性格やその背景となった小市民的社会構造の解明を通じて考える。	山　口　　定 (大阪市立大学)
9	世界恐慌と 社会民主主義	世界恐慌(1929年～)の衝撃を最初に受けたのは、イギリスの労働党政権、ドイツの社会民主党政権であった。そしてこれら社会民主主義政権の恐慌への対応の失敗と「スウェーデン・ニューディール」の成功との対比によって、一つの歴史的岐路を明らかにする。	同　上
10	ナチスの抬頭と 政権掌握	ドイツにおけるヒトラー内閣の成立(1933年1月)は巨大なファシズムの大衆運動の登場によって可能となったものであったが、この大衆運動の成立の条件と、それに対する既成の政治諸勢力の対応にはらまれた諸問題を考察する。	同　上
11	ヴェルサイユ体制 の矛盾とその展開	第二次大戦は、ヴェルサイユ体制(第一次大戦の戦後処理)にはらまれた諸矛盾が、世界恐慌によって爆発した結果であると考えられる。ここではこの戦後体制の出発点での諸矛盾とそれに対する諸国の対応をドイツ問題を中心に考える。	同　上
12	スターリン独裁体 制の成立とその波 紋	1929年以降のソヴェトにおけるスターリンの独裁権掌握とその後の暗黒政治の展開の背景には何があったのか、そしてそれはコミンテルンの運動にどのような波紋を与えたかという問題を「後進国革命」のたどった道という観点から考慮する。	同　上
13	二つの人民戦線政 府とその苦悩	1936年にスペインとフランスに相ついで成立した人民戦線政府は、前者は内乱と社会革命の狭間に立たされ、後者は経済政策の失敗とスペイン援助問題によって窮地に追いこまれる。その苦悩の実相を明らかにし、第二次大戦との関係を考える。	同　上
14	二つのファシズム 体制とその矛盾	30年代のイタリアとドイツにおけるファシズム体制のらん熟した姿はいまようやく解明の途上にある段階といつてよい。その実相を明らかにしつつ、そこにあらわれた諸問題の現代的意義を考える。とくに軍拡と「破滅経済」に力点をおく。	同　上
15	ソヴィエト外交と 宥和政策	ヒトラー内閣成立後、ソヴィエトは外交政策を転換し、国際連盟に加入し仏ソ相互援助条約を締結する。しかし、イギリス、フランスの宥和政策の展開は結局、スターリンとヒトラーの提携という逆転劇を通じて戦争への道を最終的に開いてしまう。	同　上

＝ 政策科学 ＝

主任講師：吉村 融（埼玉大学教授）
放送局：ラジオ関東

全体のねらい

1960年代後半より急速に発展してきた新しい学問分野である「政策科学」ないしは「公共政策研究」について、その発展の過程、背景、思考のフレームワーク、政策研究の動向などを概観し、経済政策、医療政策、科学・技術政策等との関連性と貢献の諸様相について紹介し、政策科学研究に対する基礎的理解と今後の問題点を提起する。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/8 26	政策科学研究の発祥とその背景	ア) 政策科学研究に対する時代の要請消極的行政から積極的問題解決型行政への転換、予見的政策体系の確立。 イ) 政策科学研究20年の歩みと新しいパラダイム、社会科学における一連の現代化と方法論の革新。新しい研究組織と教育組織の発達過程	吉　村　　融 （埼玉大学教授）
2	9/2	政策形成過程の革新と政策科学	ア) 政策形成過程の構造化と、わが国における問題点。 イ) 政策形成過程への科学的知識・知見の導入とその制度化。 ウ) 法制定主義とその問題点。	同　上
3	9	社会科学政策の課題	ア) わが国における社会科学政策の立遅れ。 イ) 行政府内における革新へのステップ。	同　上
4	16	政策過程の政治社会学	政策過程とは、政策決定と政策実施とを含む過程である。それについて、政治システムと環境、入力と出力、支持と要求、出力フィード・バックなどの基礎的な概念を政治社会学の観点から説明し、基本的な文献を紹介する。	綿　貫　讓　治 （上智大学教授）
5	23	政策決定過程の諸アクター	予算編成と法令制定の両方の場合について、また、日本の場合に焦点をおき、その主要アクターについて解説する。議会、政党、執行部（内閣、首長）、名省と自治体行政をとりあげ、それぞれの行動様式と機能について解説する。	同　上
6	10	行政における諸要因	主として政策実行の担い手としての行政について、その効果的機能に関連する諸要因をとり上げる。組織の効果的運営、情報の役割、国民あるいは住民のニーズについての政治社会学的理論の検討と問題点の指摘とを行う。	同　上
7	10/7	「経済政策」と政策科学的アプローチ(Ⅰ) —経済政策の目的—	政府が経済政策を行なうのは、私的な経済活動だけでは必ずしも社会的に望ましい結果がもたらせないからである。これを、資源配分、所得分配、経済安定化の名観点から整理する。	野　口　悠紀雄 （一橋大学助教授）

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	14	「経済政策」と政策科学的アプローチ(Ⅱ) －経済政策の手段の選択－	経済政策の目的を達成するための手段には、規制、補助金、税など、さまざまなものがある。これらの手段の選択にあたり、いかなる評価基準を用いるべきかという、政策選択の基本理論を学ぶ。	野　口　悠紀雄 (一橋大学助教授)
9	26	「経済政策」と政策科学的アプローチ(Ⅲ) －大きな政府か小さな政府か－	政府の果たすべき機能についてはそれをしてできるだけ積極的に広げようとする考えと、逆にできるだけ限定化しようとする考えとが、従来から対立していた。これについて、代表的見解を紹介し、各国の事例をみる。	同　上
10	30	医療と政治科学Ⅰ) －医療において計画とは何か－	医療とは医学の社会適用であるといわれている。一種の社会システムとしての医療システムには、いままで、対策はあっても計画はなしといった傾向がみられた。ここではまず医療における計画とは何かを論ずることとしよう。	藤　正　　厳 (東京大学助教授)
11	11/4	医療と政策科学Ⅱ) －医療と科学技術進歩－	医療に科学技術の進歩が与えるインパクトは大きい。どのような科学技術が医療にどのようなインパクトを与え、さらに、どのように社会と政策上に影響を及ぼしたかを述べ、科学技術と人間生活のかかわりあいを考えよう。	同　上
12	11	医療と政策科学Ⅲ) －科学技術政策の現状－	医療費の高騰は、どの先進諸国においても解決を要する問題である。ここでは、わが国の医療構造を経済面よりながめ、その未来を予測し、どのような問題が発生し、その解決策は何であるかを一つの政策科学の応用例として解いてみよう。	同　上
13	18	政策科学と科学技術政策(Ⅰ) －科学技術政策の現状－	日本における科学技術政策がどのように行われているかについて概観する。過去20年間は、日本にとっては激動の時代であった。科学技術政策も大きな変遷を遂げた。そこで、科学技術政策の分野において起きた主要な変化について解説する。	児　玉　文　雄 (埼玉大学助教授)
14	25	政策科学と科学技術政策(Ⅱ) －技術革新に関する研究－	科学技術政策を政策科学的に分析する場合の基礎となるのは、技術革新に関する研究である。そこで、技術革新に関する最近の研究成果を紹介し、それらが科学技術政策に対して何を意味するかを考えてみる。	同　上
15	12/2	政策科学と科学技術政策 －技術政策の今後の方向－	技術の面でも欧米諸国水準に追いついた日本において、技術政策も質的に変化しなければならない。そこで、あらためて、政府が技術開発に対して何ができるかを問い直すことにより、今後の技術政策のあり方を考えてみよう。	同　上

＝ 中 小 企 業 論 ＝

〔主任講師：礎部浩一（明治学院大学教授）〕

全体のねらい

中小企業論の対象領域は、経済学、商業学、経営学などの研究分野にまたがっており、各専門分野の研究者の共同研究の対象とされることが多い学際的分野である。この科目は、1人の研究者の視点から、この学際的領域を総合的に把握しようとする試みであり、専門科目の水準を保持しつつ、入門者にも分かり易く、と願っている。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	中小企業論の課題	中小企業論に対する視点には、経営的視点、政策的視点、研究的視点がある。中小企業論の課題は、研究的視点から国民経済における中小企業の全体像を客観的にとらえ、経営と政策の対応に役立つ基礎的認識を与えることである。	礎　部　浩　一 (明治学院大学教授)
2	中小企業問題の展開と政策の推移	わが国において中小企業問題が発生したのは、第一次世界大戦後であり、独占的な大企業や、百貨店などの大規模小売業の発展を契機としている。一部の中小企業の問題にとどまらず、経済全体の問題として認識が広がり、政策が形成される。	同　上
3	中小企業理論の形成	中小企業問題の発生は、伝統的な経済理論に対する疑問をひきおこす。何故、現実には理論どおりにはならないのか。また、問題の分析と対策の立案のために、これまでの理論でよいのか、こうして、中小企業をめぐる理論構築が進められる。	同　上
4	中小企業の定義	中小企業とは何か、これが中小企業研究の出発点である。しかし、また、同じ問いが到達点においても問われる。中小企業は試験管の中で観察されるのではなく、動態的な国民経済の中で構造的な存在として追求されるのである。	同　上
5	中小企業の地位と役割	日本の中小製造業は事業所得では99.5%、従業員数では74.3%、出荷額では52.1%、付加価値額では56.9%（何れも昭和55年）と、きわめて大きな比重を占め、消費財の生産、大企業の下請、輸出、雇用の上で大きな役割を荷っている。	同　上
6	日本経済の構造的性質と中小企業	日本経済の特質を、製品市場、労働市場、金融市場、資本市場において大企業と中小企業の相互関連の面において明らかにし、日本経済における中小企業の役割分担と、その問題性を考察する。	同　上
7	流通機構と中小企業	日本の流通機構を考察し、その問題点を明らかにしたうえで、中小工業の流通問題と、中小商業（卸売業、小売業）の流通問題を明らかにして、その対応策としての組織化にもふれる。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	中小企業の存立条件と存立分野	中小企業が大企業との競争に敗退してしまわないで、残存している条件は何か。また、ある分野では中小企業が成長しているが、その条件は何か、大企業の中小企業分野への進出は、如何に対応すべきか等の諸問題を検討する。	磯　部　浩　一 (明治学院大学教授)
9	中小企業の存立形態と下請・系列	多くの中小企業が大企業の外注あるいは下請企業として存在している。中小企業の下請としての存在形態は、どのような性質のものか。独立形態の場合とどこが違うのか。下請制の問題点は何か。その国際競争力における役割は何かなど。	同　上
10	中小企業の経営者	中小企業の経営者は、創業者と継承者に区分される。創業者は他企業の営業あるいは製造の仕事に従事した経験を持ち、独立開業したものであり、二代目等の継承者と、その意識行動には差がみられるが、所有経営者という点では同じである。	同　上
11	中小企業の経営(1)	中小企業経営の特質を、企業規模の中小性について、経営管理、財務管理、マーケティングなどの諸側面において考察する。とくに大規模経営の利益、最適現換の利益などが主要な対象となる。	同　上
12	中小企業の経営(2)	中小企業経営の特質を業種側面から考察する。伝統的な地場産業における経営と、近代的工業型の業種の経営との比較考察、さらに、ベンチャービジネスについてもふれる。	同　上
13	環境変化と 中小企業	中小企業をめぐる経済的環境変化として、日本経済および国際経済の構造的変動があり、社会的環境変化として公害問題、都市化、さらには経済社会全体としての成熟化、高齢化、国際化等の諸要因と中小企業との関連、対応について考察する。	同　上
14	中小企業の組織化と協業化	本質的には競争相手である中小企業の同業者が、何故、組合を作るのか、大企業と部品企業との系列化は、何故、中小企業の組織化には含まれないのか。中小企業者の組織化の本質は何かなどについて考察が行なわれる。	同　上
15	中小企業政策	明治以来の産業政策の中心における中小企業政策の推移、とくに、第二次世界大戦後の政策形成過程を、独禁法や中小企業基本法などについて考察し、現段階における問題点を明らかにし、21世紀の中小企業ビジョンをもとりあげる。	同　上

= 日 本 経 済 史 =

〔主任講師：三和良一（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

近代日本の経済構造の歴史的展開過程を講義するなかで、次の3点を明らかにしたい。

- (1) 日本史上に登場した諸社会の経済的構成のなかで、近代の資本制社会が如何なる特質を持つか。
- (2) 日本の資本制社会はその誕生いらいどのように構造変化をとげてきたか。
- (3) 近代日本の経済は、その構造と成長力の点で、他の諸国と比較して如何なる特徴を持つか。

主な項目

- (1) 近代以前の日本社会の経済構造
- (2) 開港の影響
- (3) 明治維新
- (4) 明治初期の経済
- (5) 日本の産業革命
- (6) 日清・日露戦争
- (7) 第1次世界大戦
- (8) 1920年代
- (9) 昭和恐慌
- (10) 高橋財政
- (11) 戦時経済
- (12) 戦後改革
- (13) 高度成長

＝近代西洋経済史＝

(→欧米経済史)

〔主任講師：小松芳喬（早稲田大学名誉教授）〕

全体のねらい

人類の歴史の中で、物質的欲望満足の努力、すなわち、富の増大と貧困の除去とに向かったの苦心のあとを、産業革命以降現代までを中心に考察する。すなわち、西洋が経済史の主役を演じ、経済先進国にあっては飢餓よりの解放が実現しはじめるとともに、西洋の経済覇権は不動のものであるかのうようにさえ信じられるに至ったが、現代においてはその覇権に動揺の色が現われはじめているのを明らかにするとともに、将来の展望についてもヒントを与えるよう努めたい。

主な項目

- (1) 人口の持続的増大
- (2) 工業化の駆動
- (3) 動力革命
- (4) 企業者と労働者
- (5) 都市化と移民
- (6) 経済成長と景気循環
- (7) 国民経済と世界経済
- (8) 自由と統制
- (9) 大衆消費社会
- (10) 西洋の将来

＝ 財 政 と 金 融 ＝

〔主任講師：貝塚啓明（東京大学教授）〕

全体のねらい

通常、財政と金融とに分けて講義が行われるのに対し、できるかぎり統一した形で内容を構成する。さらに抽象的な問題から出発するのではなく、具体的な問題（たとえば新聞の経済面の記事）から話を進め、できるだけ、カレント・トピックスを盛り込む。また、統計を頻繁に利用する。

主な項目

- (1) 財政と金融の仕組み
- (2) 財政と金融のメカニズム
- (3) 財政政策と金融政策
- (4) 今後の財政・金融の課題
（例．財政再建、金融の自由化など）

＝ 社会学の理論 I ＝

〔主任講師：塩原 勉（大阪大学教授）〕

全体のねらい

社会学は間口の広い、性格のつかみにくい学問である。げんに社会学の内部には様々な立場がある。しかし、社会学が全体として受入れ共有してきた基本的な考え方と理論がある。そのような考え方と理論の特色を明らかにしたい。いわば社会学原論である。なお続編Ⅱでは、現代社会学の内部の様々な立場について論ずる予定。

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	社会学の基本概念	ある学問の特色は、それが愛用する基本的な概念によく表われる。ミクロな社会現象をみるための概念から、マクロなそれのための概念まで、社会学の基本概念を紹介する。	塩 原 勉 (大阪大学教授)
2	社会的行為	1人の人間が他の人間とのかかわりで行なう社会的行為は、一切の社会現象の基本単位であり、社会学の基本概念である。社会的行為の仕組み、構成要素、タイプ、行為者などに言及する。	同 上
3	社会規範と逸脱	社会的行為が実際に規則正しく行われるのは、人びとが社会規範にしたがうからである。しかし、他方では、規範の欠如や逸脱の発生も日常茶飯事である。社会規範の種類、社会化と社会統制、アノミー、逸脱行動などに注目したい。	同 上
4	社会的相互作用	2人以上、複数の人びとの間の相互行為は、社会的相互作用と呼ばれる。社会関係、役割、社会過程といった類縁の諸概念を検討しながら、社会的相互作用の性質を論ずる。人間の相互作用は象徴的な性格をもつことに注意しよう。	同 上
5	社会的交換	社会的相互作用を具体的にみると、まず交換による結合が重要である。日常生活は無数の社会的交換の織りものである。社会的交換の諸相を明らかにし、交換から他のタイプの相互作用が派生する場合のメカニズムにも論及しよう。	同 上
6	闘争と支配	社会生活は親和と結合のみではなく、対立と分離を含んでいる。まず闘争が社会生活に及ぼす影響を説明し、ついで支配服従という相互作用をとりあげ、正当支配と呼ばれるものが、どのように成立するかを分析する。	同 上
7	意思決定と準拠集団	人間は不十分で不確実な情報の下で意思決定をしている。その場合、ある範囲の他者たちと自分ないし自分たちを比較することによって判断を下す。このような他者たちを、自分の準拠集団という。準拠集団の理論を論じたい。	同 上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	社　会　集　団	社会生活は様々な集団によって構成され運営されている。社会集団は社会学のもっとも戦略的な概念である。社会集団とは何か、どのような集団類型が考案されてきたか、そしてどのような実践的な意義があるか、を紹介する。	塩　原　　勉 (大阪大学教授)
9	組　織　の　動　態	集団の内部には、共同目標の達成のために諸活動を調整する組織がある。今日では、大きい組織は官僚制と呼ばれる仕組みを持っているが、現実には変形したり、目標さえも変化させたり、複雑な動きを示す。その動態をみよう。	同　上
10	組　織　と　環　境	組織がダイナミックに動くということは、組織と環境との間に相互作用があるからである。組織の構造と環境条件との間に、どのような適合関係がつくられる傾向があるかを調べてみよう。	同　上
11	社　会　構　造	社会全体の構造をどのように把握するかは、巨視的社会学の大切なテーマである。複雑な構造をみるには、社会をいくつかの部分に分割したり、構造を組立てる構成要素を分析するという工夫が必要になる。社会システム論を役立てよう。	同　上
12	階　級　と　階　層	全体社会は社会的資源の配分と人員の配置をめぐって構造化されている。配分と配置の構造は不平等と格づけによって特徴づけられており、対立をはらんでいる。階級、階層、移動という問題を中心に上げる。	同　上
13	社　会　変　動	社会構造の変動は、社会変動と呼ばれる。社会がどこからどこへ変わってゆくかということは痛切な関心事であるから、社会学では多くの社会変動論が提唱されてきた。主要な変動論を、その社会的背景との関連で整理し紹介しよう。	同　上
14	運　動　と　計　画	社会変動は自動的にすすむわけでない。なんらかの意図をもつ諸主体の作用をうける。社会学には集合行動という独特の運動概念があるが、この問題も含めて、社会変動の中の集団的な変動主体を論ずる。	同　上
15	社　会　学　の　性　格	以上の議論をふまえて、社会学とは結局どのような性格の学問なのか、を総括的に考えてみよう。あわせて社会学の方法についても触れよう。要するに、社会学論である。	同　上

＝ 社会構造と社会変動 ＝

〔主任講師：富永健一（東京大学教授）〕

全体のねらい

最近時における欧米社会学の理論的發展はめざましく、とりわけ社会システム理論ないし構造一機能主義理論を軸とした社会構造・変動論は高度の理論水準に達している。本講義は、それらの理論的發展の上に立ちつつ、先進諸国における近代化と産業化についての一般理論を構築し、かつその一般理論を幕末以後現代までの日本社会の近代化と産業化の分析に適用することを目的とする。なおこの講義は元来「社会変動論」という題目で考えられてきたものに依拠しているが、ここでいう社会変動とは構造変動に他ならないという意味から、社会変動の考察の前提として社会構造論にもふれるように配慮されている。

主な項目

I 社会構造と社会変動の概念化

- 1 社会構造の概念
- 2 構造変動としての社会変動
- 3 産業化と近代化
- 4 社会変動における普遍要素と特殊要素
- 5 社会変動の源泉

II 社会構造と社会変動の諸理論

- 1 趨勢理論
- 2 循環理論
- 3 コンフリクト理論
- 4 歴史主義の諸問題
- 5 構造一機能主義理論

III 近代化と産業化の分析

- 1 近代化と産業化の諸条件
- 2 機能分化と構造分化
- 3 産業社会の機能要件と構造要件
- 4 決定論をめぐる諸問題
- 5 社会変動の制御と計画化

Ⅳ 日本社会の近代化と産業化

- 1 徳川幕藩社会の構造
- 2 明治維新の原動力
- 3 産業化のシステム分析
- 4 戦後改革と高度産業化
- 5 高度産業社会としての転機

＝マス・コミュニケーション論Ⅰ＝

—ジャーナリズムとマス・メディア—

〔主任講師：佐藤智雄（中央大学教授）〕

全体のねらい

マス・コミュニケーション論Ⅰでは、特にジャーナリズムを扱う。まずマスコミの概念を明らかにし、ニュースとは何かを問い、ニュース系情報がマス・メディア伝達の過程で生ずる諸問題をいろいろな角度から検討する。また現代のマスコミの機能への評価を批判を通じて、マスコミと日常的市民生活との関係まで考えてみたい。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	マス・コミュニケーションと ジャーナリズム	マス・コミュニケーションとは何か。マス（大衆）を対象とした情報伝達はどんな社会的要求から生じてきたか。要求された最初の情報はどんなものであったか。またジャーナリズムとはどんな現象をさしているか、などを考える。	佐 藤 智 雄 （中央大学教授）
2	マス・メディア産業 とジャーナリズム	マス・メディア産業の特徴をとらえるためには、①メディアの普及度、②情報の有効消費度、③産業的な規模と構造、の3つの視点から総合的にアプローチする必要がある。そこで明らかにされる特徴はいかなるものかを検討する。	佐 藤 智 雄 広 瀬 英 彦 （東洋大学教授）
3	ニュースの機能と 構造	まずマスコミの伝達内容中に時事（ニュース）系情報を区別し、4つの型に分ける。受け手にとってニュースとは何かを考え、受け手の生活圏との関わりや、ニュース・ヴァリューのもつ意味についても、その重要性を述べねばならない。	佐 藤 智 雄
4	送り手の意識と 行動	ニュースを選別するシステムであるマス・メディアは、どのような選別機構をもつか。そのなかでニュースのスクリーニングにあたるゲートキーパー（門番）たちは、いかなる基準と意識で、選別をおこなっているかについて説明する。	佐 藤 智 雄 広 瀬 英 彦
5	新 ジャーナリズム	新聞は伝統的な活字メディアで社会的に大きな力をもったが、放送の出現で解説ジャーナリズムへと変化する。最盛期の新聞と大ジャーナリスト、新聞報道の問題点、読者の構造やステレオタイプの問題などにもふれる。	佐 藤 智 雄
6	放 ジャーナリズム	ラジオ、テレビはニュースの伝達の形を変え、受け手に速報、迫真、了解をもたらした。が、伝達時間の制限や迫真性からくる問題、電波使用による中立性への要求、またニュースを絵で選ぶ取材や解説の仕方の問題などを取り扱う。	佐 藤 智 雄
7	雑 ジャーナリズム	雑誌は、こんにち、ますます多様化する読者の関心に照応して、タウン誌、情報誌など各種の新雑誌が登場し、細分化が進むとともに、マスコミ批判その他、ホットな議論による活性化もみられる。その変化の実相と特徴とを考えてみる。	佐 藤 智 雄 広 瀬 英 彦

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所　属・氏　名)
8	日常性のなかの 偽　似　環　境	受け手は日常性の中で、目の直接接合の世界しか見えない。遠い匿名の世界を現前とするものがマスコミで、受け手は紙面や映像のうちで匿名の世界を環境に変えている。これが偽似環境。この偽似環境のもたらす問題はなにかを考える。	佐　藤　智　雄 (中央大学教授)
9	欠　陥　報　道	ニュース報道は正確で均衡をえたものでなければならぬ。だが、そういう報道内容に対し、欠陥報道とよぶべきものもある。不正確で不均衡な報道だ。欠陥報道は受け手の判断を誤らせ、不適応をひき起すもので、報道批判の原点をなす。	佐　藤　智　雄
10	情　報　の　流　れ　と オピニオンリーダー	ニュース情報と行動の関係の中で、情報の2段の流れや、新機具の採用時などの情報伝達機能を説明する。またニュース情報の流れを、影響の流れとが区別される場合、そこで機能しているオピニオンリーダーの問題を検討する。	佐　藤　智　雄 飯　田　良　明 (北海道東海大学助教授)
11	世　論　の　動　態	個人的意見が世論に発展していく中で、どんな発展過程があるか。また世論は民主政治や社会正義にどんな関係をもつか。さらに現代の世論はマス・メディアの普及の中で討論集団を衰退させていることによって操作を受けやすい。等々。	佐　藤　智　雄 飯　田　良　明
12	非常災害と環境監視	災害時情報とマス・メディアの関係や、メディア別の効果の検討、およびニュー・メディアの役割などを考える。災害のみならず予知情報の段階で予想される住民の心理的パニックの問題との関係などについても、事例を紹介し、検討する。	佐　藤　智　雄 飯　田　良　明
13	偽似ニュースとしての流言、デマ	作為、無作為を問わず、いろいろの形の偽似ニュースがあるが、無意図な流言飛語や、意図的なデマゴギーは代表的なもの。そういうニュース類似物の恐ろしさを説明し、メディアからクチコミの段階で影響力をもつ噂についても考える。	佐　藤　智　雄
14	受け手の参加と アクセス権	こんにちマス・メディアから疎外されている受け手に、マス・メディアへの参加を保障するものとして、アクセス権、反論権などの新しい受け手の権利が主張されるようになった。これらの新しい権利の意義と問題とについて考える。	佐　藤　智　雄 広　瀬　英　彦 (東洋大学教授)
15	生活の中のジャーナリズム	ニュース系情報の伝達現象が受け手の日常生活の中に濃密な情報環境を構成し、適応の手段としての情報に適応を余儀なくさせられている。そこからくる諸問題を取り上げていろいろと話しあい、この年度の講義を総括する。(座談会)	佐　藤　智　雄 広　瀬　英　彦 飯　田　良　明

＝ 産 業 社 会 学 ＝

〔主任講師：松島静雄（日本大学教授）〕

全体のねらい

今日の産業社会学は戦前の経営社会学、職業社会学等と異り、人間が人為的意図的に構成したアソシエーション、就中社会生活に重要な意味を持つようになった企業及び労働組合等の集団的特徴を分析する所に特色がある。ここでは従来の成果を示しつつ、主として企業経営、あわせて労働組合の集団的特徴を考えて行く。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	産業社会学の性格	①戦前労働社会学、職業社会学等といわれたものの特徴、②今日の産業社会学の性格、③その発生、④その主要内容は①企業、労働組合の組織、②組織と従業員、組合員の関係、③人間関係、④地域社会と企業・組合の関係、⑤企業と組合の関係等	松　島　静　雄 (日本大学教授)
2	企業と組織(I)	①アソシエーションとしての企業、労働組合は集団の構成に組織が先行、②組織の高度化、③最初の社会学的組織論としてのウェーバーのビュロクラシー論、④それとフィヨール、テイラーの経営学的組織論との関係	同　上
3	企業と組織(II)	組織は①職位の先行、②大衆性、③権限も職位に与えられる。④没人格性、⑤階層性、⑥原則の透徹等を特徴とし、⑦集団活動の可能性、結果の予測性、合理的計画の可能性の機能を果たす。	同　上
4	企業組織と人間(I)	①組織人としての行動の要請、②内部の人間に公人と私人の態度の使い分けを求める、③組織の重層化の悩み、④文書主義のもたらす繁文縟礼、⑤形式合理性が求められるあまり、人間歯車となり集団目的が理解され難くなる。	同　上
5	企業組織と人間(II)	①組織の高度化と従業員の疎外感情の発生、②余暇志向の増大、③組織の顕在的機能と潜在的機能、順機能と逆機能、④感情の論理の回復	同　上
6	人間関係論の発生とモラル	①労働科学への反省、②ハーバード・グループとホーソン工場の実験、③照明実験、④継電器の実験、⑤モチールの発見と労働観の変革	同　上
7	人間関係とインフォーマルな組織	①インタビュー、②巻線作業観察室の実験、③職場の実態としての人間関係、④フォーマルな組織とインフォーマルな組織、⑤インフォーマルな組織の性格	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	小集団論と行動科学	①疎外の受け止め手、感情の論理の恢復の場としての仲間集団、②小集団の研究とグループ・ダイナミックス、③行動科学の発生、④マグラガーのX理論とY理論、⑤アージリスのパーソナリティ論と企業経営	松　島　静　雄
9	行動科学とリーダーシップ	①リッカートの人間重視と小集団、②リーダーシップ論、③目標達成機能と集団維持機能、④ヘッドシップとリーダーシップ、⑤リーダーシップ成立の条件、⑥フォロアーの立場に立った見方、⑦企業のリーダーシップと組合のリーダーシップ	同　上
10	組織論の再構築	①マートンからブラウ、ゴールドナーに至る社会学的組織論、②ブラウのウェーバー批判、③フォーマルな組織とインフォーマルな組織の統合、④ゴールドナーの模倣官僚制、懲罰官僚制、代表官僚制、⑤その観点から見た日本の職場構造	同　上
11	企業・労働組合と地域社会	①ホーソン工場の実験への反省、②地域社会の企業経営への影響、③階層分析の発生、④ウォーターナー・ローのカンキーンティ製靴工場ストライキの分析、⑤経営の日本的特質論の発生	同　上
12	経営の日本的特質 (I)	①集団主義的志向の強さ、②能率の論理より従業員の生活保障の論理の重視、③終身雇用の慣行、④定期昇給と年功賃金、⑤福利厚生の重視	同　上
13	経営の日本的特質 (II)	①日本の「人間関係」、②大企業と中小企業の経営、③日本の経営の功罪、④経営組織の混沌化、⑤強い帰属意識の発生、⑥特異な労使関係、⑦争議は多発するが極めて短期間で終結、⑧新技術の受入れ可能性	同　上
14	日本の労働組合	①労働組合の組織論的特色、②組合員の労働組合からの疎外、③企業別組合の優位性、④日本の組合運動の第1期の昂揚、⑤同第2期の昂揚、⑥そのことと日本の経営との関係、⑦日本の経営は1920年ごろ成立	同　上
15	日本的経営の今後	①メカトロニック化の進行、②従業員の高年齢化と高学歴化の進行、③能力主義と年功昇進の変化、④人件費の増大と賃金制度の変革、⑤企業別組合と終身雇用の慣行	同　上

＝ 産 業 地 理 学 ＝

〔主任講師：竹内啓一（一橋大学教授）〕

全体のねらい

地表において展開されている経済活動は、空間的位置関係について見る場合、全く無秩序に展開されているわけではない。また、国民経済というものは、その内部を生産要素がまったく自由に移動する均質な空間でもない。ある場所で、ある経済活動が営まれるのはどのような理由によるのか、そして、その経済活動は他の場所の経済活動とどのような関係をもっているのか、そして、このような関係を通じて空間の構造化、あるいは空間組織の形成がどのようにしてなされているのか、これらのことを理論と現実の分析とから考察するのが産業地理学である。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	産　業　と　地　理	産業地理学とは何かということを、経済活動がもっている空間的側面と、古くからの学問である地理学との関係から考える。それは経済学のみでなく、生態学、さらに文化誘科学と関連する一つの学問になるであろう。人間の経済行動はそのようなひろがりをもっているからである。	竹　内　啓　一 (一橋大学教授)
2	経　済　的　地　域　分　化	経済活動は、あらゆる場所で、質的にも量的にも均等に展開されているわけではない。その不均等な発展は経済的地域分化を生ぜしめ、国内的、国際的な地域問題をひきおこす。ここでは、経済的地域分化の諸理論を検討する。	竹　内　啓　一 磯　部　啓　三 (成蹊大学講師)
3	中心地と地域の重層構造	経済地域内部が、また、経済地域相互がどのように組織されるかということを理論的に検討する。それは、さまざまなフローを結節的に組織する重層的な中心地体系の問題と密接に関連している。同時に、ここでとりあげられる理論が、現実の空間分析において、どのように活用されるかということも問題になる。	竹　内　啓　一 磯　部　啓　三
4	工業の地域的構成とその変動	工業活動の地域的分化を、いくつかの国民経済を事例にして考察する。その際、各国民経済の世界史的な位置づけ、再生産構造の特色の理解を踏まえた上で、工業の地域的分化の実態の確認とともに、それを説明する諸理論の有効性と限界とを考える。	竹　内　啓　一
5	農業の地域的構成	農業活動の地域的分化を、いくつかの国民経済を事例にして、前回と同様の観点から考察する。工業と比較しての広義の農業の特色を念頭に入れた上で、農業の地域分化を説明するための理論の有効性と限界とを考え、現代の農業、農村がかかえている諸問題にも言及する。	竹　内　啓　一 石　井　泰　介 (明治大学文学部教授)
6	商業・サービス業の空間組織	第3章ではかなり抽象度の高い次元で重層的結節構造の形成を分析したが、ここでは、たとえば「身のまわり品」、「買いまわり品」の区別があるように、取り引きされる財貨、サービスをいくつかに分類しながら、その空間的移動が、国民経済、あるいは大部分圏内部でどのようにして重層的、階層的な空間組織を形成しているかを分析する。	竹　内　啓　一 杉　村　暢　二 (文部省主任教科書調査官)

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
7	通信・交通と空間組織	経済的行為としての財貨および人間の空間的移動が交通であり、通信は経済的行為としての情報の空間的移動であるが、空間組織形成において、通信は交通を代替することがある。交通、通信ともに原始時代から存在したが、近年の技術革新あるいは、情報革命によって、その産業としての性格が急速に変化してきている。また、交通、通信ともに、インフラストラクチャーに大きく負うが、同時に、これらの施設が大きな外部経済をつくり出す。以上の諸点がここで問題になる。	竹　内　啓　一 青　木　栄　一 (東京学芸大学教授)
8	労働力の空間的移動	生産諸要素の中で、労働力は中位の空間的可動性をもっていると考えられる。そのことによって生ずる諸問題を、主として空間的移動であると同時に社会的流動性の性格をもつものを中心に考える。具体的には農村から都市への移動、国際的な労働力移動について考察する。	竹　内　啓　一 山　本　健　児 (法政大学経済学部助教授)
9	国内の地域格差	国民経済を構成する諸地域間の経済的格差について、いくつかの事例をもとにして考察し、これを説明するための諸理論の有効性と限界とについても考察する。ここでは、単なる所得格差には解消されえない国内諸地域間の不平等をも問題にする。	竹　内　啓　一 山　本　健　児
10	国際的な地域格差	国家間の経済的格差には、産出高あるいは所得の水準のみでなく、さまざまな社会的ストックあるいは広義の福祉も考慮されなければならない。また、このような格差を専生産するメカニズム、国際的な格差形成の機構と恵まれない国の内部の社会構造、地域構造との関連も問題になる。	竹　内　啓　一 古　賀　正　則 (一橋大学社会学部教授)
11	都市における空間的不平等	都市は経済活動の装置であるとともに住民の社会生活の場でもある。しかし、都市空間内部においては、さまざまな理由によって階級間、階層間の格差には解消されえない空間的不平等が存在する。同時に階級間、階層間の不平等が、空間的な形をとって現象することがある。これらの問題について、理論的および政策論的考察をする。	竹　内　啓　一 磯　部　啓　三
12	権力と産業地理	政治権力はそれ自体さまざまな性格の空間組織を形成し、それを通じて、産業の空間的構成を規定するが、移動、立地などの空間的側面をもつ経済的意志決定にも直接的影響を与える。さらに、公共財、公共サービスの空間的配分あるいは立地を通じて生ずる外部経済もここでの考察の対象になる。	竹　内　啓　一

回	テ　　マ	内　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
13	エコロジーと産業 地理	狭義の産業地理は、経済の論理によって構成される。その論理からすれば、経済活動に及ぼす自然の影響も、経済学のタームで表現されることになるが、人間の活動は、自然界の物質代謝の一部をも構成している。人間活動をそのような側面でもとらえた論理であるエコロジーの論理とも結びついた広義の産業地理を分析する視点を考えるのがここでの課題である。	竹　内　啓　一
14	文化と産業地理	観光関連産業やファッション産業のようにある特定の価値観にもとづく人間行動を前提にして成立している産業がある。ここでは、このような文化的価値観と産業との関連を、いくつかの事例をもとにしながら考察し、そこで有効な理論を吟味する。	竹　内　啓　一 磯　部　啓　三
15	経済体制と空間組織	分権的か集権的か、市場機構がどの程度まで重要な役割をになっているか、これらの点での経済体制の相違によって、経済活動の空間的関連の様子がどのように相違するかということ、地域政策のあり方をも関連させて考察する。	竹　内　啓　一 古　賀　正　則

＝ 産 業 と 情 報 ＝

〔主任講師：加瀬滋男（大阪府立大学教授）〕

全体のねらい

近時企業環境の複雑化に伴い、経営に関する情報の重要性は、以前にも増して広く認識されるようになった。他面、情報の処理や伝達の技術も、目覚ましい進歩を見せつつある。この時流に鑑みて、企業内外の技術情報を中心に、産業と情報の関連を概説する。また随時、社内技術者や一般産業人の情報に対する望ましい心構えにもふれる。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	情　報　と　は　何　か	情報の定義は今のところ確定していないが、情報一般およびビジネス情報についての若干の特徴を述べ、本講を進める上での一応のイメージないしコンセンサスの確立を試みる。	加　瀬　滋　男 (大阪府立大学教授)
2	情　報　の　活　用	情報の探索と収集の具体的方法を講述する。その後、情報の収集から活用を経て、保管・管理に至るまでの実際的手法を解説し、改めて本講全体についての方向付けを行う。	同　上
3	技　術　情　報　の　種　類	技術情報の種類を、形式・生産（発生）場所・加工度から分類し、それぞれについて概要を説明する。1次情報の種類と特徴に関しては、特に他の成書の論説を引用して詳しく紹介する。	同　上
4	情　報　調　査	情報収集に先んじて行われる情報調査の要点を論ずるとともに、2次・3次情報の効果的活用法を示唆する。そのため、国内・国外の主な総合情報機関や各種文献・資料の紹介も行う。	同　上
5	情　報　検　索	他書の論点を随所に援用しながら、情報検索の発展過程と内実について説く。次いで情報検索のオンライン・サービスを受ける場合の問題点を列挙し、受講者の他日の参考に供する。	同　上
6	情　報　産　出　の　意　義	情報の公表・伝達に対する個人ならびに企業の責任は、研究・開発に対するそれと同等であること、および研究者や技術者も情報流通活動に積極的に参加すべきであることを力説する。	同　上
7	新　情　報　の　産　出　例	最近新素材として脚光を浴びているニュー・セラミックスの重要特性でもある曲げ強度データの解析を例に、新情報の創出を解説する。新しい素材とはやされながら、その強度解析の古さに挑戦する様相を述べる。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	関連情報への展開	情報は孤立した存在でなく、他の情報と何らかの関連をもつのが普通である。このことについて、前講で提起された新しい情報から、他の関連情報の産出へと展開されて行った事例を呈示する。	加 瀬 滋 男 (大阪府立大学教授)
9	オフィス・オートメーション(OA)の内容	日米におけるOAの認識の違いから、OAの真のあり方を考える。その期待される形態のOAの導入よりLAN(企業内情報通信網)およびINS(高度情報通信システム)に説き及ぶ。	同 上
10	OA 機器 の 活 用	OA機器のうち主なものについて、活用面での留意事項を検討する。実際には、ファクシミリ、パソコン、オフコンその他現時点で新しい機器類の若干にも話を進める。	同 上
11	デ　ー　タ　通　信	高度情報化社会への足掛りとしてのキャプテン・システムをはじめ、データ通信サービスの要点を概説する。また電々公社によるDRESS(販売在庫管理サービス)とDEMOS(科学技術計算サービス)をも紹介する。	同 上
12	高度情報通信システム	先にふれておいたINSの具体的内容を詳述するとともに、光ファイバー・ケーブル伝送を中心に将来の高度情報通信を展望する。	同 上
13	情　報　活　動	NIST(科学技術情報流通システム)の経過を概説した後、NIST構成機構とそれらの役割について説明する。そのほか、データベースについてもやや詳しく補説し、NIST推進に関する7項目の提言を検討する。	同 上
14	産業人と情報産業	特にわが国の中小企業における人たちが情報産業の動向を知ることの意義を強調する。その手掛りとして法律第90号を細部にわたって解説し、また当該法律に基づく情報処理技術者認定試験にふれ、チャレンジ精神を鼓舞する。	同 上
15	産業の情報化と情報の産業化	近刊の『情報産業の将来像』に基づき、新情報産業の内容を考える。そのうち一般産業と最も関連が深くなると予想されるデータバンク産業、コンサルティング産業、エイジェント産業については、立ち入って論述する。	同 上

＝ 産 業 と 企 業 ＝

{ 主任講師：黒沢一清（東京工業大学教授）
 放送時間：午前 6 時～午前 6 時 45 分
 放送局：テレビ朝日 }

全体のねらい

産業という巨視的現象も、他方企業という微視的・主体的存在も、それぞれ専門的に研究され得る対象であるが、本講では、こうした産業と企業との、まさに交互作用領域をユニークな対象とし、そこに現われる生いきた現象を把握する方法と理論とを与えようとする。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	12/7	序　論： 産業－企業系研究の方法	本講義の対象の特徴を明らかにし、これを把握するための方法について述べる。産業－企業系がある種の多元・重層構造をもった実体であることが述べられ、これを把握するための独特の方法論が展開される。	黒　沢　一　清 (東京工業大学教授)
2	14	産業－企業系の構造 (1)	産業－企業系の内容を構成する“構造”を解明するにあたって、まずはじめに、最も抽象化された水準の構造としてのメタ構造を、人間と自然との相互作用系及び人間と人間との相互作用系との交絡構造として把握する。	同　上
3	21	産業－企業系の構造 (2)	第2回で把握された産業社会一般の構造を、より具体的に、産業と企業との相互作用系として、すなわちマクロな産業水準とマイクロな企業との相互作用として、重層的に把握する仕組みを解明する。	同　上
4	28	産業組織－企業系	ひとつの産業とそれを構成する企業との相互作用関係の在り方が生み出す産業組織の状態をいかに把握するか。その上で、業界に生起する諸問題が、現代産業社会ではどのように解決されてゆくか、を解明する。	同　上
5	1/11	産業－企業系の成果の構造連関	社会経済－産業－企業を結ぶ経済成果としての付加価値の性格を中心に、この系を一貫するような経済成果分析の方法を論じる。付加価値という概念が一般の通念とは違って、かなり複雑な構造を持つものであること、現代の産業－企業をまたがる分析や政策実践におけるこのカテゴリーの運用上に考慮すべき基本問題を論じる。	同　上
6	18	産業－企業系における生産性・収益性の関係とその分析	前章の議論に引き続き産業レベルの経済成果と企業の主体性を表現する経済成果とを統合・連結した成果分析体系を考える。	同　上
7	25	独占禁止政策と企業	独占禁止は、競争経済によって経済の活力と柔軟性との維持を目的とする政策として、市場経済体制の国々に実施されている。この政策のもとでのいわゆる大型合併の例をとりあげる。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/1	中小企業政策と企業	巨大企業の優勢とは対極的に、中小規模の企業は、その経済的・社会的劣勢のために、十分な生産力の拡充を達成し得ず、相対的に低い経済的社会的地位に追いやられる。ここに、産業的・社会的政策としての中小企業政策が提起される。	黒　沢　一　清 (東京工業大学教授)
9	8	中小企業の 組織化・共同化	中小企業問題の自主的解決のひとつの道として、中小企業者による協同運動があり、これを制度的に支持する諸制度がある。制度と運動、及びそこにおける基本問題を考える。	同　上
10	15	産業－地域社会 －企業系	産業－企業系の問題をここでは地域社会という場の上で、よりいっそう具体的に考察する。まず従来の工業立地論を反省してその現代的条件を考える。	同　上
11	22	プロダクティヴィ ティ・スキームと 産業－企業系	生産性向上問題を社会経済－産業－企業系の上にひとつの体系として考える枠組みをプロダクティヴィティ・スキームという。これの世界的・日本的な経験を総括して、現代の基本問題を考える。	同　上
12	3/1	労働生産性・賃金 ・物価をめぐる産 業－企業系の基本 問題	前章までの議論を前提に、それらのより具体化された問題としてここでは生産性・賃金及び物価の問題を取り上げる。	同　上
13	8	伝統産業－近代産 業系における企業	わが国伝統産業と近代化された巨大産業との関係域は、現代日本産業におけるひとつの重要な典型的問題領域である。幾つかの産業を取り上げて論じる。	同　上
14	15	産業と企業の国際 競争力(その1)	日本産業及び企業の国際競争力とは何か。それらの計測論的な接近を試みる。まず最初は、国際諸機関が発刊している統計資料を活用して、先進産業諸国間及び発展途上諸国間の産業水準での比較研究を行う。	同　上
15	22	産業と企業の国際 競争力(その2)	ここでは企業レベルでの国際競争力の計測論的な接近を試みる。	同　上

＝ 産 業 と 環 境 ＝

産業－環境系の構造論的解明

〔主任講師：黒沢一清（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

本講義は産業とその環境との相互作用域を対象とし、そこに生起する現象を構造的に把握し、分析し、さらに問題の解決への洞察を得るための基礎能力を養うことを課題としている。ここでいう産業環境にはいわゆる自然環境だけでなく、文化環境も含まれる。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	産業－環境系研究 の対象と方法	産業と環境との相互作用域に生じる現象をその日常性において観察し、我われの研究対象の特徴と、それを研究することの意義を考える。	黒　沢　一　清 (東京工業大学教授)
2	産業－環境系の構造論 (その1：産業社会のメタ構造)	産業－環境系が、産業社会の中に占める構造的な位置を示し、これを把握するための方法としての構造論の概要を示す。まず最初は産業社会のメタ構造を規定する。	同　上
3	産業－環境系の構造論 (その2：メタ原理)	産業社会のメタ構造を規律するメタ原理及びその構造を規定する。	同　上
4	産業－環境系の構造論 (その3：一般構造)	産業社会のメタ構造の内容を多元・重層構造として描き、その方法論を確立する。	同　上
5	産業－環境系研究における意味論 (その1)	産業－環境系の終局的把握としての意味論を考える。	同　上
6	産業－環境系研究における意味論 (その2)	文化環境の構造を考える。	同　上
7	自然環境問題にかかわる諸原理の構造 (その1)	いわゆる自然環境破壊問題をめぐって論じられる各種の原理を析出する。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	自然環境問題にか かわる諸原理の構造 (その2)	諸原理のカラミ合いの構造を考える。	黒　沢　一　清 (東京工業大学教授)
9	産業－環境系にお ける生産性美学原 理	産業社会のメタ原理における実践的・形態的 原理としての生産性美学の原理の構造とその役 割を論じる。	同　上
10	産業公害問題の構 造 (その1)	いわゆる産業公害の生起する背後の仕組みを 解明し、その解決される条件と解決過程推移 の論理を示す。	同　上
11	産業公害問題の構 造 (その2)	産業公害問題の生起する型を析出して考察す る。	同　上
12	企業水準での環境 問題と環境管理	前章までのマクロな接近を受けて、企業経営 管理に焦点を合わせて考える。	同　上
13	産業－環境系管理 の技術と制度 (その1)	環境管理の技術・技法と環境規制・保全のた めの制度の問題を考える。	同　上
14	産業－環境系管理 の技術と制度 (その2)	実践のケースを考察する。	同　上
15	産業－情報環境系	産業の文化環境を情報環境としてとり上げる。 情報社会における情報が一面では管理情報化さ れ、他面では「情報」洪水という現象を生み出 している。この問題性の構造を解明する。	同　上

＝ 経営学－現代の経営－＝

(→経営学Ⅰ)

〔主任講師：高宮 晋（産業能率大学教授）〕
放 送 局：ラジオ関東

全体のねらい

現代は高度産業社会である。本講義は高度産業社会における現代経営の原理、あり方、方式を体系的にかつ具体的に明らかにしようとするものである。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/4 5	高度産業社会と現代経営 －プロローグ－	高度産業社会における現代経営の特質と問題を述べ経営学の課題を論ずる。	高　宮　　晋 （産業能率大学教授）
2	12	経営学説の発展(1)	経営学説として科学的管理法と人間関係論を述べる。	同　上
3	19	経営学説の発展(2)	経営学説として行動科学と条件適応理論を述べさらに私の経営学の体系を論ずる。	同　上
4	26	経営の概念と枠組み	経営の基礎概念を明らかにし経営活動の枠組みを説明する。	同　上
5	5/3	経　営　の　理　念	経営理念として利潤追求、人間尊重社会的責任の問題を究明する。	同　上
6	10	経　営　政　策　と　戦　略	経営政策と経営戦略を具体的に論ずる。	同　上
7	17	経営管理と経営管理体制	経営管理体制を明らかにし、経営管理の意味と職能を解明する。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	24	経営管理の原理とあり方	経営管理の原理とその具体的なあり方を明らかにする。	高　宮　　晋 (産業能率大学教授)
9	31	経　営　組　織	責任と権限、組織、構造及びコミュニケーションの問題を解明する。	同　上
10	6/7	意思決定と内部統制	経営における意思決定の方式、経営計画の設定、内部統制を述べる。	同　上
11	14	リーダーシップとモチベーション	経営におけるリーダーシップのあり方とモチベーションの方法を述べる。	同　上
12	21	環境適応と戦略的経営	経営行動は意思決定、リーダーシップ及び環境適応であるが、ここではそのうち環境適応の問題をとりあげる。経営はいかに環境に適応するか。環境適応の経営を戦略的経営という。以上の諸問題を論ずる。	同　上
13	28	現代経営のシステム	効率的経営システム、目標による管理システム、戦略的経営システム、創造的経営システムを明らかにする。	同　上
14	7/5	日　本　の　経　営	日本の経営システムの特質と最近の動向を論ずる。	同　上
15	12	現代経営の将来 —エピローグ—	現代経営は将来どのような方向をたどるであろうか、その課題と解決の方向を論ずる。	同　上

＝ 経 営 管 理 ＝

－ 経営管理技法の体系－

（ → 経営学Ⅱ ）

〔 主任講師：小林靖雄（放送大学副学長）
放 送 局：テレビ朝日 〕

全体のねらい

「経営学－現代の経営」では、近代的企業の経営管理の理念、構造、あり方といった原理的考察が中心であるが、本講義はそのような原理をふまえて、経営管理の具体的機能を、そこで用いられる実践的技法との関連において解明し、修得してもらうことを目的としている。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/8 29	経営管理の機納と構造	一般に経営管理の機能は、企業活動の計画、組織、指導、統制とされる。まずそのそれぞれの内容を説明し、さらに経営管理を物的・合理的管理と人的・社会的管理とみる考え方、経営構造管理と業務活動管理として把える考え方を説明する。	小 林 靖 雄 （東京工業大学教授）
2	9/5	経営管理の発展	経営管理の発展の歴史を主としてアメリカについて述べる。前世紀末からのテイラー・システムの展開、フォード・システム、人事管理、人間関係論、予算統制・原価管理、統計的品質管理の発展、および戦後の新分野の発展を概説する。	同 上
3	12	経営管理組織(1)	経営管理組織は、管理の機能として、静態面と動態面の両面からとらえられる。3. では、管理の全体を展望するため、静態的に組織の形態をトップ・マネジメント組織、部門管理組織、事業部制組織等について、その特長を考察する。	同 上
4	19	経営管理組織(2)	経営管理組織の動態面、すなわち組織形成の原則の問題をとりあげる。具体的には、1人の管理者の管理範囲、命令単一の原則、例外の原則をとりあげ、その結合による組織形成のプロセスを説明する。	同 上
5	26	経営戦略と経営計画(1)	企業が環境変化に適応するための経営戦略の問題を、主として多角化問題としてとりあげる。また長期の視点にたった考察を必要とする経営構造計画のうち、まず製品計画と海外進出戦略について、その内容を説明する。	同 上
6	10/3	経営戦略と経営計画(2)	経営構造計画のうち、技術研究開発計画、設備投資計画、要員計画、財務構造計画をとりあげ、さらにそれらを織り込んだ長期経営計画（長期利益計画）の内容を説明する。	同 上
7	10	生産管理の基礎(1)	7. と8. とで、物的合理化を中心とする経営管理の内容をのべる。7. ではそのうち技術的管理、すなわち時間管理、品質管理、物量管理という実体的生産管理の内容を説明する。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	17	生産管理の基礎(2)	「かね」の数値、すなわち貨幣価値的評価による経済的管理をとりあげる。具体的には、原価管理が中心であるが、それが7.の技術的管理といかに密着して理解されるべきかを強調する。あわせて予算・利益管理にもふれる。	小 林 靖 雄 (東京工業大学教授)
9	24	労 務 管 理 (1)	9. と 10. で、経営を構成する人間従業員の管理をとり扱う。9. では、まず経営内の従業員の人事管理にはじまり、人間関係論的管理の内容をとりあげる。	同 上
10	31	労 務 管 理 (2)	従業員が経営者に対する交渉の主体としての役割を果たす労働条件の決定、とくに賃金決定問題について説明し、さらに労働組合と経営者との交渉、経営参加の問題におよぶ。	同 上
11	11/7	マーケティング管理	企業が販売市場との接点において展開するマーケティング活動の管理を、市場調査、広告・宣伝等の販売促進活動との関連を中心として説明する。	同 上
12	14	財 務 管 理 (1)	12. と 13. で、資本調達問題と総合的経済的管理としての利益管理、予算統制について説明する。12. では、資本調達原則、長期資本調達、短期資本調達、自己金融、資金繰り管理についてのべる。	同 上
13	21	財 務 管 理 (2)	総合的経済的管理システムとしての利益計画について損益分岐点図表中心に、限界利益計画の内容を説明し、それとの関連で、予算統制の内容を説明する。	同 上
14	28	コンピュータと経営管理	経営におけるコンピュータの活用は、生産面での自動制御、ロボット化等でも著しいが、ここでは主として経営管理事務のコンピュータ化(オフィス・オートメーション)を中心に、その内容と問題点を説明する。	同 上
15	12/5	総合管理と日本の経営	経営管理の全体像について、これまでの講義の内容を総合的管理の立場から総括し、その重点的基盤を考察する。また長年欧米に学んだ日本の経営管理が、現在もっている特長、今後の努力の重点等について考察し、結びとする。	同 上

＝ 人 事 ・ 労 務 管 理 ＝

〔主任講師：津田真澄（一橋大学教授）〕

全体のねらい

実務経験を欠く人々に人事労務管理を理解しやすいように講義することは非常にむずかしい。そこでこの講義では全体を3部に分け、第1部では企業経営全体の中における人事労務管理の役割を明らかにし、その上で第2部で人事労務管理の内容を説明する。また第3部で人事労務管理にとって重要なトピックを取り上げることとする。

回	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	第1部 総　　論 人事労務管理 とはなにか	開講にあたって（学習の意義） 人事労務管理の定義 人事労務管理の対象 人事労務管理の位置（経営のサブシステムとしての位置と役割）	津　田　真　澄 （一橋大学教授）
2	経　営　シ　ス　テ　ム	経営の組織と管理 経営システムの国際比較 人事労務管理の国際比較 従業員意識の国際比較	同　上
3	日本の経営 システム	日本の経営システムの性質 日本の人事労務管理の性質 日本の企業の性質 日本の企業経営の歴史（戦後）	同　上
4	第2部 各　　論 人　事　制　度	人事労務管理の骨格としての人事制度 経営組織 資格制度と職位制度 人事評価制度 専門職制度	同　上
5	人　事　配　置	採　用 配　置 異動（出向をふくむ） 要員管理 昇進・昇格制度	同　上
6	教　育　訓　練	教育訓練の意義と役割 教育訓練の体系と計画 教育訓練の実施と評価 管理者教育	同　上
7	労　働　時　間	労働時間の制度と種類 休日制度 休暇制度 労働時間の国際比較 女子・未成年者の労働時間	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	賃金・給与制度	賃金・給与の意義 賃金・給与の種類 基本給、職務給、業績給、能率給 諸手当・賞与 人件費 賃金・人件費の国際比較	津　田　真　澄 (一橋大学教授)
9	従　業　員　福　祉	従業員福祉制度の意義 従業員福祉制度の種類 住宅制度－寮、給与住宅、持家制度 文化・体育・レクリエーション 中高年従業員の心身の健康の問題	同　上
10	定　年　・　退　職　金	解雇、日本の雇用慣行 定年制 退職金 企業年金 再就職制度	同　上
11	労　使　関　係	労使関係制度 労働組合 団体交渉と労働協約 企業内組合 労使協議制	同　上
12	第3部 特殊問題 職　場　集　団	職場の人事労務管理 職場集団の活動 小集団活動、TQC、QCサークル 欧米諸国の職場、勤労意欲	同　上
13	高　令　化　問　題	従業員の高令化・高学歴化の問題の意義 人事労務管理の諸施策－役職定年制、能力主義管理、選択定年制、専門職制度、定年前教育、定年延長 公的雇用援助制度の利用 定年制の国際比較	同　上
14	ME 革命 の 影 響	情報技術革命の意義 情報技術革命の進展の状況と展望 情報技術革命の人事労務管理にあたえる影響	同　上
15	パートタイマー・ 派遣社員の増加	臨時従業員の意義－臨時工、季節工、社外工 パートタイマーの管理 派遣社員の管理 最低賃金制の役割	同　上

= 労 働 経 済 =

〔主任講師：古郡鞆子（神奈川大学非常勤講師）〕

全体のねらい

労働市場では労働（“ひと”のサービス）の需要と供給が行われ、労働の対価としての賃金が決定される。労働市場は“もの”や“かね”の市場と同じようにもっとも基本的な市場といえるが、人間により深いかわりあいを持っている。ここでは賃金決定のメカを第一に基礎理論を学ぶ。第二に現実の経済と労働市場に目を向け、労働市場に実際に起こっている種々の現象を分析し、その問題、政策を論じる。

主な項目

- (1) 基礎理論－労働の需要（限界生産力、労働と技術革新）、労働の供給（労働力率と労働時間、労働移動、人的資本）、賃金（賃金決定の構造、賃金格差、賃金変動、労働組合の影響と賃金）、年功制と労働市場、失業と不完全就業
- (2) 理論の応用－労働市場での労働力の女子化、高令化、高学歴化、サービス経済化、情報化と雇用構造の変化

＝ 経 営 分 析 と 財 務 管 理 ＝

〔主任講師：小林靖雄（放送大学副学長）〕

全体のねらい

企業の資本調達および運用の計画・統制活動である財務管理について基礎的考察を行い、企業活動の結果としての財務状態および経営効率についての分析検討を内容とする経営分析に関して、その主要な経営指標の体系と分析手法について論述する。会計学に関する教科目を予め履習しておくことが望ましい。

主な項目

- (1) 企業財務の基本的原則
- (2) 長期資本の調達と設備投資問題
- (3) 短期資本の調達と運転資金問題
- (4) 自己金融問題
- (5) 財務流動性および安全性分析
- (6) 資本収益性分析と生産性分析
- (7) 経営分析の総合化

＝ マーケティング ＝

〔主任講師：大沢 豊（大阪大学教授）〕

全体のねらい

マーケティングという言葉はいつ頃から使われ始めたのか、現在それは一般にどのように理解したらよいのか、さらに学問としてのマーケティング論は、どのように体系づけられるのかを明らかにし、その上で企業のマーケティング活動を取りまく環境と、意思決定者の直面する諸問題を理解し、分析していく上での基礎的な知識について論ずる。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	マーケティング思想の発生と展開	マーケティングという用語の発生のいきさつをたどり、それが企業の具体的な行動を指すものではなく、一つの理念であることを明らかにする。初期のマーケティング理念と現代マーケティング理念との差を、歴史的に検討する。	大　沢　　豊 (大阪大学教授) 以下すべて本人が担当の予定
2	マーケティング論構成の視点	学問としてのマーケティング論を体系づけようとするとき、いろいろな視点に立ってそれを構成していくことができる。米国において一般的なマネジリアル・マーケティングもその一つであるが、もっとマクロな立場で議論することもできる。	
3	マーケティング環境とマーケティング手段	マネジリアル・マーケティングの立場で企業のマーケティング活動をとらえようとするとき、マネジャーにとって与件として考えられなければならない環境と、意思決定の対象となりうる手段とを区別して考案するのが、もっとも便利である。	
4	政府による規制 ーマーケティング環境その1ー	自由主義経済を基幹とする国々では、何らかの形で競争を制限する行為を禁止する法律をもっている。独禁法のうち、マーケティング活動に関連するカルテルや景品・表示の問題に対する政府による規制の現状とその精神を考える。	
5	流通機構とその変遷 ーマーケティング環境その2ー	一企業の立場で、流通機構を変えていくことはできない。それは歴史的、風土的、あるいは法制的に影響を受けながら変遷をくりかえしていく。日米の流通機構の比較を通じて、日本の流通機構の特質を考察する。	
6	市場と競争 ーマーケティング環境その3ー	マーケティング担当者は、競争企業の意思決定を左右することはできない。競争市場での成果を記述するモデルについて概説する。	
7	消費者行動 ーマーケティング環境その4ー	消費者はマーケティング担当者の最終目標である。その消費者は経済学で仮定するような合理的行動をとるとは限らない。しかもすべてが同質であるとはいえない。市場細分化は異質的な市場に対応する企業の適応であるといつてよい。	

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	情報の収集と分析 －市場調査－	意思決定に必要とされる情報は社内で得られるとは限らず、調査によってこれを入手しなければならないことが多い。市場調査技術は、対象の選択（標本調査論）と質問票の作成の両面で、プロフェッショナルな知識の上に成立っている。	
9	需要予測	将来の不確定な状況について、何らかの形で予測を行なうことが要求される。短期的な予測と長期的な予測とでは、自から異ったタイプの手法が適用される。	
10	製品開発	現在の企業では、単一の製品またはサービスのみを提供していることは極めて稀である。製品開発は、市場細分化のための戦略と、多様化を目指した戦略とが考えられる。製品の特性をどう捉えたらよいか、製品属性分析の手段にもふれる。	
11	価格政策	個々の企業にとって価格決定の自由度はその市場が競争的であるか寡占的であるか、また製品が競争企業のそれとどの程度差別化されているかによって異なる。価格決定・基礎となる分析手段のいくつかを概説する。	
12	広告計画	広告実務においては、広告活動を他のマーケティング変数と切り離して論ずることが多い。ここではそれらの実務で多く利用される基準とその問題点を考え、同時により総合的な立場からの意思決定モデルに言及する。	
13	配送問題	物理的な財の輸送、あるいは営業拠点の設定など、物理的なひろがりを対象にした問題を論ずる。ORなどの手法により、またコンピュータを利用した解導出の方法を考える。	
14	マーケティング意思決定とコンピュータ	技術革新、とくにコンピュータと通信技術の発展は、企業の事務部門の活動に大きな影響をもたらしつつある。マーケティング情報の分析方法の上でも、また意思決定過程の上でも、大きな変革が現われはじめている。	
15	企業と消費者	ケネディ大統領による消費者の権利の保護の提唱以来、国や公共団体による施策がとられてきている。国や企業はその権利を保護する責任を負うと同時に、消費者の側でもそれに応じた知識を自ら身につける義務がある。	

＝ 経 営 組 織 論 ＝

〔主任講師：森本三男（横浜市立大学教授）〕

全体のねらい

まず組織一般の性格を、個人と組織の関係を軸に理解させる。ついで、それを基礎にして、経営組織の全体的特質を理解させる。ついで、経営組織の詳細な内容に立ち入り、それを構造論（静態論）と行動論（動態論）に大別して、順次いくつかの柱を立てて講義する。構造論では、形態、ラインとスタッフ、構造制約要因などを取扱う。行動論では、学習、成長、流動化、活性化などを取扱う。最後に、特殊問題として、組織の日本の特性、経営者組織などの部分組織を説明する。現代が組織社会であること、組織が環境適応的システムであることに留意する。

主な項目

- (1) 経営組織の意義と性格
- (2) 組織形態、ラインとスタッフ
- (3) 組織構造と規模および生産技術
- (4) 組織原則
- (5) 組織の学習
- (6) 組織の成長とそのモデル
- (7) 組織環境
- (8) 組織有効性
- (9) 組織の流動化、プロジェクト・チーム、マトリックス組織
- (10) 部分組織、経営者組織、研究開発組織、作業組織、
- (11) 日本の組織の特質
- (12) 組織の活性化など

＝ 生産管理と O R ＝

〔主任講師：秋庭雅夫（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

生産に当って、市場の要求に適合する製品の産出、材料・動力・設備などの効果的な活用、作業者の人間性尊重などの課題に応えるために、生産とその管理の活動を適切に計画し、運用していくための考え方、方式、方法を説き、また、それらを統合するシステムについて示す。さらに方法論としての O R の概要を紹介する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	生産管理の考え方 ととらえ方	生産とは何か。生産管理とはどのようなことをするのか、特性（品質、数量、時間、金額）の管理と作業（材料投入、工程稼働、製品産出）の管理とを組み合わせる考え方ととらえ方を示す。また、今までの生産管理の移りかわりを説く。	秋　庭　雅　夫 (東京工業大学教授)
2	生産方式の区分	生産管理のとらえ方に基づいて、各種の生産方式の区分体系の考え方を示し、また、それぞれの生産方式の特徴を説く。さらに、今までの生産方式の移りかわりと、現在の課題を示す。	同　上
3	製品の企画	市場の要求を分析し、そこから製品に何が期待されているのかを導き出す方式とその結果を示す。さらに、製品のライフ・サイクル・コストの考え方を説く。そこから、製品の品質向上への方向づけを行う。	同　上
4	生産計画のシステム	生産目標から始まり、資材の調達、工程の稼働、製品の産出に至るまでの各計画とその体系を示し、またそれら計画に対する統制の方式を加えて、生産計画のシステム化について説く。	同　上
5	工程分析	工程図記号に基づく工程図の作成・活用の方法を示す。また、ピッチ・ダイアグラムの考え方とライン・バランスの方法、および日程計画表についてその考え方を説き例示する。	同　上
6	作業管理	作業分析、既定時間法、標準資料法などを示し、作業方法・時間の設定と標準化について説く。それに関連した作業環境、労働科学の存り方について示す。また、工程・作業を中心とした原価低減への取り組み方を示す。	同　上
7	資材の調達	資材調達に関する各種資材発注方式について示す。また、それと関連して、在庫を持つ要因の分析とその排除の取り組み方について説く。さらに、外注への考え方と管理の課題を示す。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	生産自動化と管理システム	生産自動化の構造を示し、トランスファ方式、群管理方式などの方式ならびに機器を例示する。さらに、自動化における管理システムの対応の方式とそこでの課題について説く。	秋　庭　雅　夫 (東京工業大学)
9	線形計画法による生産計画	生産管理におけるORの果たす役割りを概括的に示し、その中で生産計画における意思決定の線形計画法によるモデル化をとりあげる。具体的解法的手段として、図式解法、シンプレックス法による解の求め方について説く。	圓　川　隆　夫 (東京工業大学)
10	割当て問題と輸送問題	線形計画法における特別な型の問題である最適割当ての問題、輸送問題を取りあげ、それらの実際の意味を解説するとともに、わずかの計算努力で解くことのできるハンガリア法などのアルゴリズムについて説く。	同　上
11	ジョブショップスケジューリング	n 個の仕事、 m 個の機械があるときにガントチャートによる可能な加工順序を示しながら、問題の意味を説く。解法については、特別な場合に有効なジョンソン法と、ヒューリスティックスを用いる方法、概念について例示する。	同　上
12	プロジェクト・タイプのスケジューリング	プロジェクトに含まれる仕事の先行順位が与えられたときの進度管理を行なう手法としてPERTをとりあげる。アローダイアグラムの書き方、日程計算のやり方、クリティカルパスの求め方とその意味を説く。	同　上
13	ラインバランシング	作業負荷を平準化、効率化するためのラインバランシングの手法について説く。ラインバランス効率、山崩しの考え方とともに、ジャクソンの列挙消去法およびヒューリスティックスを用いる方法について説く。	同　上
14	待ち行列とシミュレーション	設備能力の決定問題について、待ち行列モデルと確率モデルの導入の必要性を説く。 $M/M/1$ 型の待ち行列理論を概論した後、一般の待ち行列問題についてモンテカルロシミュレーションによる方法について説く。	同　上
15	在庫理論	在庫要因の立場から在庫モデルおよび在庫管理方式の考え方を整理する。大量効果に基づく経済発注量の求め方、需要、リードタイムの不確実性に基づく発注点のシミュレーションによる求め方について説く。	同　上

＝ シ ス テ ム 工 学 ＝

〔主任講師：渡辺 茂（東京大学教授）〕
放送局：テレビ朝日

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	53/12 8	システム工学の効用	新しいシステムを設計し、開発し、実施し、評価して、リサイクルするための学問であるシステム工学について学ぶ。例としては教育システムを取上げてシステムの本質を考え、また新システムを作るための手順を論じる。	渡 辺 茂 (東京大学教授)
2	15	目的を設定する	「治に居て乱を忘れず」という古語があるが、現代の欠陥を分析し、将来の危機を予測することによって、やらなければならない目的を設定してゆくプロセスを日本の現状分析の中から考えていく。	同 上
3	22	目的を定量化する	目的を文章で書き、その目的が達成できたかどうかをあとで判定できるようにするため、その目的を明確化し、さらに定量化することが必要である。	同 上
4	54/1 12	候補を探す	目的が明確化されたならば、目的達成のために必要な要素の候補を探しだす段階に進むが、それには、まず文献を調べたり、ブ레인・ストーミングをしたりする。	同 上
5	19	候補を調べる	目的を実現する為に必要な要素としては現在注目されているもの、たとえばマイコン、ネットワーク、無人工場、新エネルギーなどを求めたり、さらに得難い情報を模索していかなければならない。	同 上
6	26	役割の振付け	候補の機能にしたがってシステムとしての役割を振付け、それが適正であるかどうかをシミュレーションという手法によって調査していく。	同 上
7	2 / 2	システムの最適化(1)	システムを組み立てそれを最適なものにするためには線型計画法や動的計画法などの手法が用いられるが、ここでは例をあげ、それらの要点を調べる。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	9	システムの最適化(2)	ゲームの理論を中心として、ミニマックスの考え方を説明したあと、システムを造出するにはいくつかのオータナティブを提示し、比較検討を行わなければならない。	渡　辺　　茂 (東京大学教授)
9	16	システムの造出	システムを発動させるためフローチャートの作り方を考える。また新システムは出発点においては小型であることは当然であるが、その小型システムを成功させる為には、ランチェスターの法則を使用する。	渡　辺　　茂 (東京大学教授) 井　上　博　充 (東京大学助教授)
10	23	システムの実施	システムの実施に必要なガントチャート、フェイムなどの手法を説明し、その流れを管理するためには、流れの将来を予測すること、そしてその予測をするためには、データ収集を巧みに行うことが必要である。	井　上　博　充 (東京大学助教授)
11	3 ／ 2	システムの評価	プランニングにおける評価、マネジメントにおける評価などのための手法としてパートがある。パート/タイム・パート/コストなどにより、計画の進行状況の中間評価が行われる。	渡　辺　　茂 (東京大学教授) 三　浦　宏　文 (東京大学教授)
12	9	システムの信頼性	システムには故障がつきものであるが、故障を前提とした上でシステムの信頼性を考えねばならない。信頼性をいかに評価し、これを向上させるかが問題なのである。	三　浦　宏　文 (東京大学教授)
13	16	システムのアセスメント	新しいシステムが生まれると、さまざまな効果を多方面に与える。マイナス効果を生むことも十分に考えておかねばならない。そこにテクノロジー・アセスメントの必要性がある。	同　上
14	23	システムのリサイクル	研究開発を行って得た成果は、モデルのデモンストレーションによって公開され、さらに社会の中で適用され、評価され、終始決算が行われなければならない。	渡　辺　　茂 (東京大学教授) 三　浦　宏　文 (東京大学教授)
15	30	期待される新システム	石油ショック後の日本が国際社会の中で自立していくためには、新システムの造出が必要である。それはたとえば小型分散システム、伝統工芸システム、垂直フロンティアシステム等である。	渡　辺　　茂 (東京大学教授)

＝ 工学的人間学－人間と機械の共生－ ＝
(→人間工学)

〔主任講師：加藤一郎（早稲田大学教授）〕
〔放 送 局：テレビ朝日〕

全体のねらい

機械と人間の類似性に着目し、人間について問いを発する。人間を工学的に観察しようというのである。有機体として複雑性と多様性をもつ人間に対し動的システムモデルによるアプローチを試みる。その成果がロボットからサイボーグへと展開応用されてゆくことを示す。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	55/12 12	工 学 的 人 間 と は － 人 間 尺 度 －	人間は工学とどのようにかかわってきたか。人間機械論から人間システム論に至る。“工学的人間学”の系譜について述べる。工学的人間学が、人間の解明と福祉とに果たす役割りを通じて、これからの展開に対する理解を深める。	加 藤 一 郎 (早稲田大学教授)
2	19	ブ ラ ッ ク ボ ッ ク ス としての人間 － 自 動 人 形 －	思想的にデカルトに始まる人間機械論は、背景となる技術の進歩に支えられて変遷し近代に至っている。この自然観は人間を外部からながめ一種の機械として理解してゆくのが特長である。その歴史と現状について語る。	同 上
3	26	内 側 か ら み た 人 体 － 生 理 工 学 －	学問の分化が進むにつれて人間を内側から理解することに重心が移ってきた。レオナルドの解剖から近代の電気生理学に至る流れは新たに生理工学として現代的展開をみせようとしている。	同 上
4	56/1 9	脳 の サ イ バ ネ テ ィ ク ス － 人 工 知 能 －	人間の頭脳とコンピュータとの間には大きなギャップがある。しかしコンピュータによって人間の知能を一部代行させることはできる。ここでは人工知能の開発とそれによる脳機能の理解の試みについて述べる。	同 上
5	16	情 報 チ ャ ン ネ ル としての皮膚 － 官 能 検 査 －	皮膚感覚の特異説がしだいに根拠のうすいモデルとなりつつある。これを例として、仮説・検証のプロセスを示す。外界との代行情報チャンネルとしての応用や官能検査能力の人工化などを紹介する。	同 上
6	23	骨 と 筋 の メ カ ニ ズ ム － 人 工 関 節 ・ 筋 －	骨生成の電気機械的メカニズムをしらべ、形と機能について考える。筋についてはその構造特性など特有の性質をしらべる。これらの代替機器としての人工関節や人工筋についても紹介する。	同 上
7	30	身 体 リ ズ ム の メ カ ニ ズ ム － 電 気 刺 激 －	人間の体内では神経によって情報が伝達されている。したがって、神経に電気刺激を与えることにより、心臓、腸管などのリズムを制御し、あるいは痛みをおさえることなど、人工的に身体の制御を行うことができる。	内 山 明 彦 (早稲田大学教授)

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2 ／ 6	血液循環系の メカニズム ー人工心臓ー	全身に血液を供給している循環系は、心臓→血管系→心臓→肺→心臓の一巡閉鎖回路をなしている。これらを構成している心臓、血管、血液流動のメカニズムを解説し、あわせて心不全の外科治療、人工心臓の現況について言及する。	土　屋　喜　一 (早稲田大学教授)
9	13	発声のメカニズム ー人工の口ー	我々は物を見て、その形を知り、意味を理解し、さらには美しい色彩にあふれた三次元の空間を知覚する。この巧みを視覚のしくみ——メカニズム——を、主として機能的に解説する。さらに、このような機能に欠陥のある視覚障害者に対する技術補助の問題について議論する。	白　井　克　彦 (早稲田大学教授)
10	20	聴覚のメカニズム ー人工の耳ー	言語が人間システムの中で持つ様々な特質について、言語の構造言語の習得、思考と言語の関係などを見る。さらに、音声を発生する機構と、人工的に音声を発生する方法について述べる。	同　上
11	27	視覚のメカニズム ー人工の目ー	人間システムの中で、聴覚の果たす役割を見る。生理学的に見た聴覚の機構と聴覚の複雑な心理現象について、今日の聴覚理論をながめ、それを工学の立場から考察する。さらに音声の認知と人工の耳の可能性について述べる。	大　頭　　仁 (早稲田大学教授)
12	3 ／ 6	手のメカニズム ー人工の手ー	手は人間である。感覚系、運動系ともに人間特有のシステムをもっていることが手の巧緻性と深く関連している。その巧緻性についてその機械的構造や運動制御についてしらべる。義手やロボットについて現状を人間機械システムの立場より述べる。	白　井　克　彦 (早稲田大学教授)
13	13	足のメカニズム ー人工の足ー	2足歩行の意義と問題点をさぐる。歩行運動の計測とそれに関連して正常と異常について考える。歩行の制御力学や歩行機械により足のメカニズムを解明し義足への技術波及に言及する。	同　上
14	20	内面からみた人間 ー心理工学ー	人間は心と体をもつ。心理学的知見をもとに人体における情報系と動力系について考察する。人間機械システムの評価の問題やバイオフィードバックなどを例に心と体の関係についてのべる。	加　藤　一　郎 (早稲田大学教授)
15	27	人間と機械の共生 ーサイボーグ社会ー	工学的人間観はロボットモデルからサイボーグモデルへと移行してきた。近代合理主義がよりどころとしてきた知性偏重でなく、知性に感性を加えた新たな現代の価値観をサイボーグ社会という視点から探る。	同　上

＝ 電算機と情報処理 ＝

－ 基本 BASIC によるマイコン入門－
(→ 情報工学)

〔 主任講師：森口繁一（電気通信大学教授）
放 送 局：テレビ朝日 〕

全体のねらい

超小型電子計算機（いわゆるマイクロコンピュータ）を用い、初級言語“基本BASIC”によるプログラム（算譜）の作成を主軸として展開し、文科系・理科系を問わず情報化社会を主体的に生きるために必須の基礎知識を伝えたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/8 28	A 1 単　位　の　換　算 （単純な流れ）	80 坪は何 m^2 か、 $150 m/s$ は何 km/h か、といった簡単な計算問題を例にとり、読んで計算して書くという単純な手順と、これをプログラムするのに必要な基本的な命令、電算機操作の要領等を扱う。問えば答える電算機との出会いである。	森　口　繁　一 （電気通信大学教授）
2	9/4	A 2 数　表　と　グ　ラ　フ （反復処理）	x^2 、 $\sqrt{x}$ 、 $\sin x$ など、簡単な関数について、関数値の表や、関数のグラフを作る。FOR-NEXT による反復処理構造や TAB 機能による打点を学ぶ。少しの入力に対して多くの出力が得られる自動機械らしい使用法の例である。	同　上
3	11	A 3 最　高　点　と　最　低　点 （判断と分岐）	いままでの最高点よりもっと高い点が出て来たら、最高点の記録を更新する。そのためには、大小比較の結果によって処理の流れを変える“判断”機能を表す if-then 文が役に立つ。if-then 文はまた、ループからの脱出の判定にも使える。	同　上
4	18	A 4 は　さ　み　打　ち （反復解法）	方程式 $f(x)=0$ の根を求める反復解法の一つ。 $f(a)<0$ 、 $f(b)>0$ ならば、 a と b の間に根がある。中点 $m=(a+b)/2$ について、 $f(m)<0$ ならば m と b の間に、 $f(m)>0$ ならば a と m の間に根がある。こうして区間の幅を半分にして進んで行く。	同　上
5	25	B 1 偏　　　差　　　値 （配列と添字）	大勢の学生の点数を“配列”に入れておき、その平均値と標準偏差を求め、それを用いて“偏差値”を計算する。最も基本的なデータ構造である配列の使い方を学ぶための例である。	同　上
6	10/2	B 2 興　味　度　と　理　解　度 （2次元の度数分布）	講義のたびに受講者の興味度と理解度を5点法で記入して出してもらおう。これを入力しながら、2次元の配列を用いて度数を数え、度数分布表を作り、平均、相関などを計算する。ヒストグラム（柱状図）も簡単に作れる。	同　上
7	9	B 3 算　数　ド　リ　ル （記録の累積）	小学生の算数、たとえば“九九”の反復練習には、電算機が打って付けである。問題と正解を次々と作り出し、答の正否を判断して適当な応答を出し、正答率の統計を取ったり、誤答の記録を累積しておくなど、いろいろな働きが期待できる。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	16	B 4 板　　並　　べ (後戻りと棚)	いろいろな形をした板を並べて、たとえば 3×8 の長方形を作る。こういう問題の解法の本質は、行き詰まったら後戻りしてやり直す“後戻り算法”にある。ここでは配列が“棚”すなわち“後入れ先出し表”として用いられる。	森　口　繁　一 (電気通信大学教授)
9	23	C 1 電　子　帳　簿 (ファイルの作成と更新)	事務処理の基本は帳簿の維持管理にある。これを電算化すれば、電子帳簿すなわち“ファイル”の作成と更新が問題となる。ここでは簡単な例を、特に更新の論理を中心にして取り扱う。	同　上
10	30	C 2 順　に　並　べ　る (整列の算法)	入学試験の成績ならば総点数の順に、販売統計ならば販売高の順に並べ換える必要が起る。このような“整列”のための算法がいろいろ工夫されているが、ここではそのうちの比較的簡単なものについて述べる。	同　上
11	11/6	C 3 制　御　の　切　れ　目 (報告書の作成)	報告書の作成では一般に大分類・小分類に区分けした明細の表示と、小計・大計および総計の計算と表示が問題になる分類が変わるところが“制御の切れ目”である。それは一つ先を読んで比較すれば分かる。	同　上
12	13	D 1 タ　イ　プ　の　練　習 (文字の処理)	マイコンや電算機の端末機の鍵盤のキーの配列は普通の英文タイプライタのものとはほとんど同じである。だからマイコンを使ってタイプの練習をすることができる。それは“対話形式”でのマイコン利用法の一つの典型でもある。	同　上
13	20	D 2 エ　レ　ベ　ー　タ　と　列　車 (制御の論理)	エレベータの上昇・下降・停止は、各階のボタンやエレベータ内部の行く先ボタンの押してある状態に応じて、自動的に制御されるのが普通である。どういう状態のときにどういう動作をするかをきめる論理を考え、列車の模型で試してみる。	同　上
14	27	D 3 色　の　足　し　算 (図形・着色)	青・赤・緑の三原色を適当に混ぜると任意の色が作り出せる。この原理を示す3円の図形を作り、各領域に色を着ける。その他いろいろな図形の描き方、色模様の作り方などを扱う。簡単なプログラムで、かなり複雑な模様が作れる。	同　上
15	12/4	D 4 音　楽　の　演　奏 (楽譜の文字列化)	楽譜の内容を文字列として入力し、それに対応する音を発生させ、あるいは対応する信号を電子オルガンに送って音楽を演奏する。既製の手続きを使うほか、その手続きに用いられている算法をも吟味する。	同　上

＝ 計 測 と 制 御 ＝

〔 主任講師：森 政広（東京工業大学教授） 〕

全体のねらい

希望どおりの経過や結果や状態を得るために必要な操作をほどこすことを制御という。このためには現状や結果を計測することが必要で、計測なしには制御は成り立たない。本講義では、これらを踏まえて社会における計測制御の活躍状況の解説を背景に、計測制御を学んでゆくための必要最小限の工学的基礎事項を説明する。

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所 属 ・ 氏 名)
1	もし計測と制御が なかったら ー計測・制御がな かったら世の中は ストッパー	計測がなければ、仕様に合った製品は存在しない。また生物にしろ機械にしろ目的を持つ動きを実現するためには、制御がなくては達成できない。この計測・制御がない場合とある場合を対比させ、いくつかの実例を示し解説する。	森 政 広 (東京工業大学教授) 小 川 鑛 一 (東京工業大学助手)
2	生産と計測・制御Ⅰ (加工組立ライン の実際) ー人間行動もシー ケンス制御ー	加工組立ラインでは、さまざまな姿でシーケンス制御が活躍している。シーケンスの概念を人間行動を例に解説するとともに、機械運動や生産ラインとシーケンス制御について述べる。	同 上
3	生産と計測・制御Ⅱ (プラント制御の 実際) ー連続体の自動化 がプロセス制御ー	プロセスとは、原料を受け入れ加熱、冷却などを行い、化学的、物理的な変換を施し目的とする物質を生産するシステムをいい、このための機械、装置全体をプラントという。ここでは、プラント各部の流量・温度などの制御につき述べる。	同 上
4	生産と計測・制御Ⅲ (数値制御N.C.と ロボットの実際) ーメカトロニクス 入門ー	N.C.とロボットは、デジタル計算機と制御技術が有機的に結合した結果今日のように発展した。N.C.は数値信号で工作機械を、ロボットは指令信号で腕や手をサーボ機構を介して制御する。本章では、N.C.とロボットの概要を述べる。	同 上
5	制御の基本方式 (フィードバックとフィ ードフォワード) ー制御のすばらし さー	一般に制御といえばフィードバック制御(F.B.制御)を指すほどにF.B.制御は一般化している。このF.B.制御の本質を理解するため教室の温度制御を例に上げ温度調節係のおじさん物語を考える。また制御の名称分類用語についても触れる。	同 上
6	計測制御の基礎知識 ー制御理論の基礎 の基礎ー	計測・制御は情報の流れを取り扱う学問といえる。この情報の流れを取り扱いやすくするため、制御ではいろいろと工夫がなされている。その基本的なものにブロック線図、伝達関数、ラプラス変換デジベルなどがあるので、解説する。	同 上
7	制御系の過度応答 ー入る信号・姿を 変えて出る信号ー	時間関数として制御系の特性を表わすために、インパルス応答とステップ応答がある。これは、系にインパルスあるいは単位ステップ関数を入力し、その出力を解析するもので、系の特性を理論的、実験的に取り扱うのに有力である。	同 上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	安定・不安定の概念と条件 —制御の安定・不安定—	安定・不安定という概念は、物や人間の心に動きが伴う場合に現われる。物に動きがあつて、はじめて制御が成り立つので、安定・不安定は制御工学にとって大切な概念である。制御系と物理系を対比させ安定、不安定現象を説明する。	森　　政　広 (東京工業大学教授) 小　川　　鑣　一 (東京工業大学助手)
9	制御系の周波数応答 —正強波の魔力—	制御系の特性を表わす別の方法に周波数応答がある。これは、系の入力に周期可変の正弦波を入れ、その出力応答を振幅と位相に注目して解析するものである。任意の時間関数は種々の周波数の正弦波に分解できるので、これらにつき述べる。	同　上
10	制御装置 —頭脳にあたる 制御装置—	制御対象に操作を加え希望通りにすることが制御であるが、この操作を指令するものが制御装置である。ここでは、プロセス制御の装置である調節計、およびサーボ機構の制御装置の基本としての補償回路について説明する。	同　上
11	制御用機器 —制御特有のハードウェア—	制御用機器は種類が多く、プロセス制御シーケンス制御、サーボ機構、数値制御などとその名称分類によって使用制御機器も異ってくる。ここでは、プロセス制御とサーボ機構を例に取り上げ、その代表的制御機器について解説する。	同　上
12	計測の話 —なぜ測るのか—	科学の進歩と計測技術はお互に深い関係を保ち発展した。制御工学においても、計測技術なしには制御不可能である。本章では、物理量を測るためエネルギー変換型センサとエネルギー制御型センサについて説明する。	同　上
13	センサ技術 —センサと頭は 使いよう—	センサの種類は非常に多く、また一つのセンサでも使用目的に応じ工夫を凝らすことにより、多岐にわたる応用が考えられる。ここでは、エネルギー制御型センサの一つである抵抗線歪ゲージを取り上げ、その幅広い応用の一端を紹介する。	同　上
14	最近の制御工学 —理論の世界—	制御理論はここ十数年の間にいちじるしい進歩をとげた。本章では工学における理論とは何か、その有用性、その背景、その体系の美などにつき、現代制御理論に主幹を置いて解説し、学問の世界をかい間見することにする。	同　上
15	まとめ —ますます広がる 計測・制御—	上述の14章を総括し、要点を復習し、計測・制御の未来を展望する。 受講者に将来への希望を与え、勉学努力へのエネルギー源とする。	同　上

＝ 解 析 と 設 計 ＝

(科目名変更を希望)

〔主任講師：阿武芳朗(東京工業大学教授)〕

全体のねらい

本講では、工学的設計の学問ならびに工業技術における意義と位置付けおよび思考過程につき論じ、設計を進めてゆくために、工学的性格として、解析と総合の問題を論じ、実行上の問題として、創造性、信頼性ならびに生産性を論じ、実務上のまとめとして、価値分析、決定論、自動設計、開発・設計管理を論ずる。以上により技術者として、社会に貢献し得る設計とはいかなるものかを、なるべく具体的に会得させるための教養講義とする。

主な項目

工学的設計の基礎、設計と情報、工学的解析、設計と創造性、設計と信頼性、設計と生産性、価値分析、決定論、自動設計、開発・設計管理

補注 講義担当の立場では授業科目名“解析と設計”は、本講義内容よりみて不適当と考えている。

できれば“設計論”、“工学設計”、“設計工学”

③

②

①

(○希望順位)などの訂正希望。

= 物 質 工 学 =

〔主任講師：町田周郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

自然界に存在する物質（元素から化合物まで）のもつ各種の性質に関する基礎知識をもとに、自然界の物質を物理的、化学的手法により人工的に処理し、人類に有効なエネルギーや材料として活用する過程について説明する。特に物質および材料の各種の性質の調べ方や新たに要望される性質とそれを生み出す手法等を現状における新材料等を例に解説する。

主な項目

- (1) 地表を作る物質
- (2) 物質の分類と性質
- (3) 物質から材料へ
- (4) 材料発達の歴史
- (5) 材料の生産手法
- (6) 材料の試験法
- (7) 未来の材料（新材料、先端技術）等

＝ エ ネ ル ギ ー 工 学 ＝

〔 主任講師：丹生慶四郎（東京工業大学教授） 〕

全体のねらい

これまでの人間のエネルギーの利用の歴史をふり返り、現在の使用状況を調べて、今後の使用の見通しを探る。一方エネルギー資源を調べ、新しいエネルギー源の開発の必要性を悟らせる。化石燃料、原子力の特色、推定埋蔵量を述べるとともに、新エネルギー源としての自然エネルギー、核融合の開発の技術の現状を教え、今後の社会の発展がエネルギーの開発と深くかかわっていることを知らせる。エネルギーを有効に利用するための代表的なエネルギー法とその工学、特に効率について述べる。

主な項目

- (1) エネルギーの利用量
- (2) 再生可能エネルギー
- (3) 非再生可能エネルギー
- (4) 化石燃料
- (5) 原子力
- (6) 自然エネルギー
- (7) 核融合
- (8) エネルギー変換工学

＝ サービス産業論 ＝

主任講師：磯部浩一（明治学院大学教授）
古郡鞆子（神奈川大学非常勤講師）

全体のねらい

サービス産業は統計的には第三次産業の「サービス業」として分類される。経済の高度成長と、石油危機により拍車をかけられ「サービス経済化」によって、第三次産業には新しい分野も生まれ、現状は極めて流動的な状況にある。本講では流動的な現状を把握するフレームワークの提供と、現状分析による実態の解明、問題点を明らかにしたい。

主な項目

- (1) サービス産業の概念規定と分類の検討
- (2) サービス経済化とサービス産業の関連のメカニズムの解明
- (3) サービス産業就学者割合の動向、とくに女子パートタイマーの動向
- (4) サービス需要の動向
- (5) 代表的サービス業の実態と問題点

＝ 哲学的人間学 ＝

〔主任講師：藤田健治（お茶の水女子大学名誉教授）〕
〔放送局：テレビ朝日〕

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	54/8 25	哲学的人間学とは何か	世界観人生観の学としての哲学的思考の特質を芸術、宗教、科学のそれと対比して説明し、哲学の新しい分野として現在注目をあびている哲学的人間学への導入を試みる。	藤　田　健　治
2	9 ／ 1	哲学的人間の課題・人間とは何か	人間とは何かという問いに対しては古来さまざまなアプローチが試みられ、現在でも自然科学、社会科学、人文科学などの分野でこの問題の解決にむかって努力が傾けられていゝが、実はその根底に哲学的人間学というものが無ければならないことを明らかにする。	同　上
3	8	人間の根本的・本質的あり方	ではひとしく人間を主題にしながらも哲学的人間学と他の学問の人間研究との間にどのような相違があるかを考え、哲学的人間学が求める人間の根本的・本質的な規定の分析を試みる。	藤　田　健　治 中　埜　肇 （筑波大学教授）
4	15	人間の活動形式・行為と認識の現象学	まず人間を形式の面からとらえるために、実践とか行為といわれるものの本質は「目的実現」にあり、認識とか知識とかいわれるものの本質は「意味表現」にあるという点で区別されると共に、この両面が現実生活では交錯する関係にあることを指摘する。	藤　田　健　治
5	22	人間把握の認識論	従来の認識論が主として物一般についてのものであったのに対して、人間の立場からの認識論、すなわち人間自身にとって最も重要な対象である人間そのものをどのようにしてとらえることができるかという問題を考える。	同　上
6	29	認識目的達成の可能性と現実性	認識の目的である真理把握が達成されるかどうかという可能性については、昔から懐疑論とか相対論に対して絶対論という見方があり、また真理把握の実際（現実性）については、その原理として矛盾律や理由律があり、またこれに対するものとして弁証法とか非論理的な無限処の存在などが問題となるということを論ずる。	同　上
7	10/6	人間の主体的・実質的あり方 その1 生命としての人間	つぎに人間のありかたの最も基本的なものとして、自然的欲求の充足活動があるが、この欲望人を「生命としての人間」と名づけ、そのありかたを明らかにする。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	13	その2 精神としての人間	しかし、人間の活動は欲求の充足だけに尽きるものではない。「生命としての人間」の立場を越え、精神的な生きがい求めて理想や理念を追求する活動の主体を「精神としての人間」としてそのあり方を考える。	藤　田　健　治
9	20	続精神としての人間	理想や理念は真・善・美によって代表される精神的価値であり、その価値の実現が文化(科学・道徳・芸術)であるが、このような価値の分化とその相互関係、また価値間の比較と序列など価値体系に関する問題を考える。	同　上
10	27	その3 実存としての人間	私たちはまずかけがいのない「この私」として生きているが、この人間の個性・主体性の根源にある「実存としての人間」を、とくにその最も顕著な現われとして宗教との関連において明らかにする	同　上
11	11/3	人間のあり方の相互 関係と統一、全人	以上に述べたのが人間存在の分析面である。これに対してその総合面として「全人」が成立するための本質的な法則関係、とくに全人の根本的現象である知・愛・幸福・職業などの哲学的な意義を解明する。	同　上
12	10	歴史的社会的形成	これまでに考えた人間の本質を基礎として、さらに具体的に人間をとらえるためには集団的人間関係(空間的)と時代的发展(時間的)という二つの要素によって可能となる「歴史的社会的」を考察する必要があるが、先ず人間の本質的あり方の集団化について考える。	同　上
13	17	歴史的社会的における 個と歴史的社会的の 動態	個的人間がもつ歴史的社会的に適應する生き方と歴史的社会的から疎外される生き方とを基として歴史的社会的の動態と動因とを究明する。	同　上
14	24	歴史的社会的を超える もの	歴史的社会的においてあり、あるいはそれに深く関わりながら歴史的社会的を超えるものとされる実存と超越者もしくは超越的体験とさらに理念について論究する。	同　上
15	12/1	歴史的社会的における 倫理の役割と世界史 の究極目的	理念中歴史的社会的の現実にも最も直接的関わりをもつ道徳的理念の役割と実践の立場からする世界史の発展の目ざす究極目標の意義とを究明する。	同　上

＝ 知識と学問の構造 ＝

－ 知の構築とその呪縛 －

〔 主任講師：大森荘蔵（放送大学副学長） 〕

全体のねらい

1つの中央構造線が現代学問の中央を貫いてこれを2つに分断している。自然科学と文化科学に、理科と文化に、そしてスノウの言う2つの文化に、更にこの分断は日常生活での人間観をも貫いている。この分断の基底には物と心の分裂があると私は考える。日本と西洋の両方にこの分裂の由来を尋ね、学問と人間観の一体性を回復することを試みる。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	概　　　　　　説	全体の予備的説明。西欧では16、17世紀の科学革命によって世界観の転換が始まった。これを「略画的な世界観」→「細密世界観」への転換とみる。それが幕末維新期に日本で同じ転換を促した。これによって物の死物化、心身の分裂が生じた。	大　森　荘　蔵 （放送大学副学長）
2	略　画　的　世　界　観	略画的とは精密な計測、表面的な論理的整合性にこだわらぬこと。そこでは天地人は一体として共感し、人間は神、霊、死者と共生し、過去と未来は現在に溶融する。動物、岩石も霊を持ち、物は生き生きとして死物ではない。	同　上
3	日本の略画的な世界観	古代神話、本居宣長の国学、江戸時代のインテリを支配した朱子学、そして基流思想としての仏教、における略画世界観について述べる。荻生徂徠、伊藤仁斉、三浦梅園、等にも言及。そして幕末に強くなった洋学受容について。	同　上
4	西欧古代中世における略画的な世界観	イオニア自然学、アリストテレスに例をとる。細密世界観への起動力をもっていたデモクリストの原子論はアリストテレスの圧力で押えこまれた。更に細密化の始動としての天文学、静力学、解剖学にも触れる。	同　上
5	密画世界観の開始	「円」信仰の呪縛からの最初の解放としてのケプラー、アリストテレス的神学に対する挑戦としてのコペルニクス地動説。細密数量描写としてのガリレイの動力学。連続量描写を可能とした微積分学。	同　上
6	密画世界観の成長	ガッサンディによる古代原子論の復活。化学の領域での原子論の確認。それに基づいた「点描法」（原子論的描写）の進展。ラプラスの天体力学。それらにより物はほぼ死物と化した。一方神は遙か天上に死霊は街を歩きにくくなった。	同　上
7	人体の細密化、死物化	外部自然の細密描写が人体に及ぶとき人体の死物化が進行する。レオナルド、ベッサリユウスの解剖学。それがデカルトの「人間論」に至って人体は動物機械となる。当然「心」は分離独立し、「機械の中の幽霊」（ライル）となる。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	生命の機械化、 その緩慢な足取り	だがデカルトの予想が現実化するには300年を要した。血液循環、呼吸、食物消化、発生と遺伝、これらの生命現象の細密描写が完成するまで紆余曲節があった。人体が死物体となるには手がかかったのである。	大 森 荘 蔵
9	意識(心)の機械化	神経伝導、脳の機能の細密描写は今だに進行中である。しかしそれが完成しても心の機械化とはならない。逆に心はますます死物人体から浮き上り人だまのように浮遊している。心身の分裂は増大し現代人の迷いとなっている。	同 上
10	日本における世界 観の転換	西欧の密画世界観の受容は主として江戸期の医師によって行われた(例えば解体新書)。その時以来今日までその人間観が最も抵抗をうけたのは当然である。その抵抗の模様を観察する。	同 上
11	密画世界観の基本的 概念	無限の宇宙の細密描写を現実にはなしえない。そのため公理的方法に近い理論化が必要となる。その理論による説明とは何であるか。一方略画的描法をも併用せざるをえない社会人文科学における描写方法(デュルケム、ウェーバー、リッケルト)。	同 上
12	原子論描法と場描法	細密描写の基本は世界の時間的変化の描写である。この「変化」の概念を分析すると、可能な描法は原子論的描法と場描法としかないと論証する。現代自然科学はまさにこの論理的選択可能性の枠内で展開してきたのである。	同 上
13	略、密、両描法の 「重ね描き」	ここで残された現代の問題、心身問題に入る。まず生命論ではアリストテレスの形相としての靈魂論に還るべきと考える。それは上記の略画、密画両世界観の「重ね合せ」、「重ね描き」として理解できるからである。	同 上
14	心 の 問 題 1	一方心の問題もまた上記二描法の「重ね描き」として理解しうる。密画世界観によって死物化された物はそれによって略画世界観でもっていた生命を取り戻すであろう。これを記憶、感情、想像、美的感覚等において説明する。	同 上
15	心 の 問 題 2	一方、外界からの刺激による脳の興奮それによって生じる知覚像、という生理学の細密描法を批判、それに代えて「脳透視」の見方を提出し、幻像や十人十色を説明する。これによって両描法の「重ね描き」が完成し、心と物は昔の和合に戻る。	同 上

＝ 行 為 と 規 範 ＝

〔 主任講師：黒田 亘 〕

全体のねらい

自然的存在であると同時に社会的、政治的な存在である人間は、さまざまな規範に従いつつ、それぞれの個性に応じた価値の実現を目指して生きる。そういう人間存在の多面性を集約的に表現する“行為”について、基本的な諸概念と諸問題の分析を試み、実践哲学の基礎的な構想を固める。

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	事実・規範・価値	この講義でとくに重要な意味をもつ諸概念につき説明し、全体の構想を述べる。	黒 田 亘 (東京大学文学部教授)
2	価値判断は事実判断から導出できるか	いわゆる「自然主義の誤謬」をめぐる対立する諸立場につき説明し、問題解決の方向を探る。	同 上
3	「規則に従う」ということ	ルール懐疑主義に関する最近の議論を手がかりにして、「規範」の概念の分析を進める。	同 上
4	合理化の限界	行為に関する「理由づけ」ないし「正当化」の論理構造を問い、合理化の営みを支える「非合理」の所存を示す。	同 上
5	行為の構造－１－	因果説の立場から行為の基本構造を論ずる。	同 上
6	行為の構造－２－	「基礎行為」の概念について説明しながら、前講の論旨をさらに展開する。	同 上
7	人格の概念	同じく行為論の基礎概念である。「人格」について説明し、これが行為に関する諸理論の総合の要となることを示す。	同 上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	自由と必然－１－	自由論と決定論の対立に関連してホッブズ、ロック、ヒュームの古典的見解を検討する。	黒　田　　亘 (東京大学文学部教授)
9	自由と必然－２－	前講をうけて、自由と決定の問題を分析的に解明する。	同　上
10	欲望と意志	古典的な「アクラシア」(意志薄弱)の説や倫理的決案説などに論及しながら行為の「動機づけ」について考察する。	同　上
11	社会契約説	ホッブズ、ロック、ルソーの古典的見解を相互に対照しつつ、基本的な問題点を指摘する。	同　上
12	契約説の現代的意義	前講を踏まえ、さらにロールズ、ノジック等の所説を参考にしながら契約説の意義を考える。	同　上
13	権利と義務の概念めぐって	二つの概念の相互関係を考察し、法と道德の境界に位する諸問題につき述べる。	同　上
14	功利主義の再評価	行為の規範の合理的体系化を目指す理論の典型として功利主義の再評価を試み、現代におけるその理論的課題を考える。	同　上
15	回顧と展望	これまでの講義に基づいて実践哲学の基本構想をまとめる。	同　上

= 文化人類学 =

〔主任講師：祖父江孝男（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

一言で言えば、人間が他の動物と異なる特性としての「文化」に集点をあてる。そして人間の特質、文化の特質から出発し、こうした文化が世界の各地においてどのような地域差を持っているか、また文化はどのような構造を持っているかについて、出来るだけ具体的に諸民族を眺めながら考えていく。

こうしてさまざまな異文化の存在を知ることにより、異なった民族との間に相互理解を持つことが出来るようにするのも、大きな目標である。

主な項目

文化人類学とはどんな学問か？ 文化の特質、文化の進化と伝播、さまざまな生業（狩猟採集、農耕、牧畜等）、言語の構造、婚姻・家族・親族、宗教・儀礼、民族性と国民性、文化変化とアカルチュレーション、カルチャー・ショック等

＝ ア メ リ カ 論 I ＝

〔主任講師：猿谷 要（東京女子大学短期大学部教授）〕

全体のねらい

ここでは北米（アメリカ合衆国とカナダ）を取り上げる。日本と違い、非常に多面的な性格をもつ国なので、下記の項目に従がい、3～4人の講師に分担して貰った方がよいと考えている。アメリカについての情報が溢れていながら、実はアメリカの本質がまだ多くの日本人には理解されていないので、インフォメーション・ギャップを埋めるような工夫を具体的に考えてみたい。

主な項目

- | | |
|-----------------|----|
| (1) 歴史（日米関係を含む） | 4回 |
| (2) 政治・外交 | 3回 |
| (3) 経済 | 2回 |
| (4) 社会 | 2回 |
| (5) 生活文化 | 2回 |
| (6) カナダ | 2回 |

＝ ア メ リ カ 論 II ＝

〔 主任講師：猿谷 要（東京女子大学短期大学部教授） 〕

全体のねらい

ここではほとんどラテン・アメリカといってよい中米および南米を取り上げる。たくさんの国を含んでいるので、全体に共通する事項と、国別に特殊な事項をどのように均衡させてカリキュラムを作るかがポイントとなろう。以下はラフな試案にすぎない。

主な項目

- | | |
|--------------|-----|
| (1) 歴史 | 2 回 |
| (2) 政治 | 2 回 |
| (3) 経済 | 2 回 |
| (4) 社会・文化 | 2 回 |
| (5) 各国別 | |
| ① メキシコ | 2 回 |
| ② ペルー | 1 回 |
| ③ ブラジル | 2 回 |
| ④ その他 | 1 回 |
| (6) 国際関係のなかで | 1 回 |

＝ ア ジ ア 論 I ＝

〔主任講師：浜口允子〕

全体のねらい

(I)では東アジアをあつかう。

東アジア世界とは如何なる世界か。その特質はどのように形成されたか。

以上の設問をもとに、本論は、中国を中心とした東アジアの独自性の諸相を、由来に遡って理解することを目的とする。その際、考察の軸としては、歴史上の各時代を集約的に表現する幾つかの物を取り上げる。そして、それらの生産や流通・交易の姿を通して、各社会のあり方や人々の生活、国際関係等を考えることとする。

主な項目

(時期的区分では、中国の各時代に則り)

殷・周の時代、漢の時代、唐の時代、宋の時代、明・清の時代、近代……

(「物」としては、例えば)

青銅器、絹、塩と鉄、陶磁、香辛料、茶、稻(米)、綿(綿布)、アヘン……

また代表的な都市、交易体制等にも触れる。

＝ ア ジ ア 論 II ＝

〔主任講師：和田久徳（放送大学教授）〕

全体のねらい

アジア論においては、アジア諸民族とその文化との発達およびその特性について明らかにし、日本民族とその文化との関連を考慮しつつ述べる。日本と地理的文化的に近接する諸民族の歴史的展開を知ることによって、わが民族文化の形成過程を国際的視野において理解し、さらにわが国の今後の発展方向を探る手がかりをえてもらいたい。

IIでは、東南アジア諸民族の歩みを中心にあつかう。

主な項目

諸国家の展開（扶南、林邑、シュリーヴィジャヤ、バガンなど）、東西海上貿易の発展、ヴェトナム・タイなど諸民族の発展、セイロン仏教、イスラム教の受容、東南アジアにおける中国人社会。

＝ ヨ ー ロ ッ パ 論 II ＝

〔主任講師：阿部玄治（千葉大学教授）〕

全体のねらい

現在、東欧圏の大きな特徴は、社会主義体制及びこれと結びつく独裁政治体制である。ソ連の独裁体制は社会主義体制の必然的結果なのか、文化的に遅くれたソ連の特殊な歴史的背景によるものか議論があるが、少なくともスターリンの独裁を成立し易くした過去の歴史や伝統のあることは否めない。このような歴史的背景をロシア史のみでなく、東欧全体の歴史的絡み合いをも考慮しつつ考察したい。

主な項目

- (1) ソ連・東欧の現情
- (2) スターリン体制の成立事情〔この説明を出発点として過去に遡る〕
- (3) ソ連東欧の地理的環境と歴史への影響
- (4) ビザンツのスラブ世界への影響
- (5) 遊牧社会（モンゴル、トルコ）のスラブへの影響
- (6) ゲルマンの東進とその影響
- (7) ロマノフ朝独裁の成立
- (8) ピョートル独裁
- (9) 19世紀ロシアの独裁体制

＝ ア フ リ カ 論 ＝

〔主任講師：川田順造（東京外国語大学助教授）〕

全体のねらい

アフリカの姿を過去現在にわたってかなりくわしく、しかも全体像がつかめるような形で紹介する。写真、図版、ビデオ、録音（道具、衣服、楽器などの実物も）を豊富に使い、アフリカの姿がいきいきと視聴者に伝わるように工夫する。日本人との関係でのアフリカ、現在から未来へ向ってのアフリカについても十分考えるようにしたい。地域別各論では、それぞれの地域での現地調査経験の長い専門家を適宜ゲストに招いて、川田がきき役になり対談形式で他の地域と対比させながら次第に全体像が作られていくようにしたい。

主な項目

- (1) アフリカとは
- (2) 自然、資源
- (3) 人種、言語
- (4) 文化と歴史（総論）
- (5) 文化と歴史（各地域別）北アフリカ
- (6) 同、西アフリカ
- (7) 同、エチオピア
- (8) 同、東アフリカ
- (9) 同、中部アフリカ
- (10) 同、南アフリカ
- (11) アフリカの都市
- (12) 植民地支配下のアフリカ
- (13) 独立国家
- (14) 「未開」と「低開発」
- (15) 日本とアフリカ

＝ 日 本 文 化 論 ＝

〔主任講師：長谷章久（埼玉大学教授）〕
 〔放送時間：午前 6 時～午前 6 時 45 分〕
 〔放送局：テレビ朝日〕

全体のねらい

「日本文化論」は、日本文化の特質を広く時空にわたって分析し、これを築き上げてきた日本人の長所と短所を理解させるとともに、将来の展望をおこなうことを目的とするものである。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/12 8	世界の中の日本文化	導入は現代的諸事象——高層ビル・出動風景・コンピューター操作・タケノコ族・ファッションショウ等々——の例示。一見どこの国とも判然としない日本の現状にも、伝統文化が息づいていることを実証。文化と文明について論じる。	長　谷　章　久 （埼玉大学教授）
2	15	謎　　の　　古　　代	奈良時代における衣・食・住など実生活関連の分野でさえ、今日その実相を確認することは困難である。ましてそれ以前の時代ともなれば、日本人と原初の文化について不明の部分が多量にある。その謎がいかなるものかを再確認する。	同　上
3	22	日　本　文　化　と　言　語	日本文化の基盤である日本語について、その系統や特質を対談形式で論じる。わが国には「目は口ほどにものをい」とか「いわざるは、いうにいやまさる」とかの俗諺があり、控え目な表現を美德とする風がある。その生因や現状をも考察。	柴　田　　武 （埼玉大学教授 ・言語学）
4	58/1 5	日　本　文　化　と　風　土　性	風土の概念を述べ、日本文化とわが国独特の風土がいかに濃密に関連しているかを考察する。特に自然観についてヨーロッパの人々との相違を追求する。また国内各地の住民性及び地域文化についても言及したい。	長　谷　章　久
5	12	外　来　文　化　の　受　容	漢字の使用をはじめ宗教・制度・文学等外来文化の摂取は、古代日本文化の形成に大きな意義を有していた。ここでは平安遷都にあたり唐音でうたわれた新京賀詩を中心に心酔時の様相を述べ、10世紀以降の国風文化勃興を考察する。	同　上
6	19	生　　　と　　　死	古来日本人が抱いて来た生に対する観念を紫式部日記絵巻・彦火々出見命絵巻の出産場面を示しつつ解説、また死の観念に関しては、これを穢れとして捉えていた時期から近代作家の自殺に至るまで文学作品を中心に考察する。	同　上
7	26	平　安　文　化　の　特　色	わが国の文化は10世紀に及んで漸く独自性を発揮し始める。ここでは主任講師が中心となって作成した教育映画「平安の四季」（東映。上映時間22分）を併用し、平安文化の特色を説明、後世への影響に言及する。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/2	伝　統　と　現　代	平安文化は後世の文化や習俗に大きな影響を及ぼしたばかりでなく、日本人の気質(国民性)にも作用せずにおかなかった。ここでは芥川龍之介の「手巾」を題材に外国人の参加を求め、彼我の文化特性及び国民性について検討する。	長　谷　章　久 ダイアンフェイ (埼玉大学院生) 楊　　慧　珠 (埼玉大学院生)
9	9	あはれ・をかし・ 幽玄・美の理念	平安文学が生み出した美の理念「あはれ(ひいては、もののあはれ)」・「をかし」・「幽玄」について解説、とりわけ四季や色彩との関連を重視し、絵画や庭園を具体例としてあげる。能・狂言・歌舞伎・音曲の類にも言及するであろう。	長　谷　章　久
10	16	無　　　　常　　　　観	世の無常は早く万葉集にもうたわれているが、中世に及ぶと明確な無常観をকাশ出し、これが現代にも糸を曳いている。だが、この観念はわが国のみならず韓国・中国など近隣仏教国にも共通して認められるので、広い視野から追求する。	同　上
11	23	日　本　人　の　信　仰	神道と仏教との関連即ち本地垂迹思想の発生から排仏棄釈に至る過程を通観し併せて切支丹信仰に関して長崎の二十六聖人・踏絵・切支丹燈籠・隠れ切支丹墓等の具体例をもとにその篤さを検討する。	長　谷　章　久 アルムブル スター神父 (上智大学)
12	3/2	現　代　宗　教　的　心　情	日本人の多くは、なぜ結婚式を神式で葬式を仏式でおこなうのか、なぜクリスマスを馬鹿騒ぎで過すのかといった卑近な例から現代人の宗教的心情を探り、他面山岳信仰、お遍路等がおこなわれている事実から、現代人の生の意識を考える。	塩　入　亮　達 (大正大学教授)
13	9	外　来　文　化　の　受　容	近世初頭における南蛮文化及び明治以降の西洋文明の受容と、それによる変貌の状況を分析する。文明開化を標榜して以来わが国の近代化には目覚ましいものがあるが、その反面弊害がなかったわけではない。「菊と刀」等を参照して考察。	長　谷　章　久
14	16	小　さ　な　も　の　の　美　し　さ	古来短詩型化の一途を辿った和歌や美術工芸品の種々相を例にあげ、日本人のもつ繊細さと単一民族としての共感性を分析する。その反面、なにゆえ論理性・創造性に欠ける点があるのかも追求する。	長　谷　章　久 原　　　　　裕 (俳人)
15	23	日　本　文　化　の　将　来　性	現状分析。産業用ロボットなどメカトロニクスの発達における技術革新がもたらす功罪を論じ、経済発展と同時に精神文化の高揚をはからねば世界の中の日本はあり得ないことを説く。	長　谷　章　久 佐　藤　潔　人 (昭和女子 大学教授)

＝ 西 洋 近 代 の 哲 学 思 想 ＝

（ → 哲学思想史 ）

〔 主任講師：中 埜 肇（筑波大学教授）
放 送 局：ラジオ関東 〕

全体のねらい

ルネサンスから19世紀前半にいたるヨーロッパ近代の哲学思想、世界（自然と人間）像と知識（学問）論との展開に重点をおいて概観し、現代の哲学思想への移り行きを考える。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 （ 所 属 ・ 氏 名 ）
1	56/4 5	ル ネ サ ン ス	近代思想の特徴を「開かれた宇宙」と「新しい人間」という観点からとらえ、自然科学の発生と人文主義の展開をたどり、さらに固有の意味での哲学思想として、自然哲学と神秘思想について述べる。	中 埜 肇 （ 筑波大学教授 ）
2	12	Fr. ベ ー コ ン	「経験」にもとづく新しい学問方法論の提唱者としてフランシス・ベーコンが述べた学問の分類、イドラ論、帰納法などの意味とその限界を考える。	同 上
3	19	デ カ ル ト	「普遍学」の基礎を徹底的な懐疑によって達せられる「自戒」（＝理性）の確実性の中に求めたデカルトが、それにもとづいて展開した二元論的な世界観（とくに心身関係論）の問題点をさぐる。	同 上
4	26	ホ ッ プ ス	機械論の立場からする演繹的な思考方法を自然現象よりも、むしろ人間社会の構造に向けたホッブスが社会契約の必然性と国家権力の絶対性に到達した過程を述べる。	同 上
5	5/3	ス ピ ノ ザ	「神に酔える無神論者」と称せられたスピノザの汎神論が、神の絶対的無限性に対する信仰の論理的な帰結であったことを明らかにし、スピノザの考え方が哲学の模範とされる理由を考える。	同 上
6	10	ラ イ プ ニ ッ ツ	17世紀における最大の総合的哲学者であったライプニッツが、無限量で極微の実体「モノイド」にもとづいて構想した連続的で調和的な世界像の本質を明らかにする。	同 上
7	17	ロ ッ ク	哲学を人間学として確立しようとした啓蒙思想の先頭に立つロックが、独断的な理性論に対抗し、近代的知識論の出発点として、初めて人間の認識能力を批判的に吟味し、「経験」にもとづく認識論を確立しようとしたことの意味をさぐる。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	24	バ　　ー　　ク　　リ	ロックの知識論をさらに進めて「在ることは知られていることだ」という経験主義的観念論の立場に達したパークリ僧正の考え方について述べる。	中　　埜　　肇 (筑波大学教授)
9	31	ヒ　　ュ　　ー　　ム	ロックに始まる知識吟味作業の完成者であったヒュームが、経験主義の立場を徹底することによって懐疑論に接近したプロセスを因果の問題を手がかりにして考える。	同　　上
10	6/7	フランス啓蒙思想 とルソー	イギリスに始まった啓蒙思想がフランスに入ると「百科全書派」に見られるようなラジカルなものになった過程及び啓蒙思想の中にある文化と進歩とに対する信頼を徹底的に批判したルソーの考え方について述べる。	同　　上
11	14	ドイツ啓蒙思想と カント	フランスから移入された啓蒙思想のドイツ的なあり方を、その代表者であるフリードリヒ大王とヴォルフについて見たのちに、啓蒙の精神を深め、これをつきぬけて独自の批判哲学を構想したカントの問題意識を、まず「純粹理性批判」についてみる。	同　　上
12	21	カ　　ン　　ト (つ　　づ　　き)	カントの批判哲学の発展を「実践理性批判」「宗教哲学」及び「判断力批判」に即してたどり、カント哲学の意味について考える。	同　　上
13	28	ドイツ観念論哲学	カントの二元論的な批判哲学が、フィヒテやシェリングの思考を通して、次第に一元論的な体系構成へと発展し、それとともに、哲学がロマン主義の色彩を濃くする過程について述べる。	同　　上
14	7/5	ヘ　　ー　　ゲ　　ル	ドイツ観念論哲学のみならず、近代の哲学思想全体がヘーゲルにおいて頂点に達したことを、彼の絶対理性の哲学とその方法としての弁証法とについて明らかにする。	同　　上
15	12	ショーペンハウアー・ キルケゴール マルクス	ヘーゲルの絶対理性の哲学に抗して、新しい哲学の視野を開き、近代から現代への移行を示した三人の思想家の歴史的な意義について考える。	同　　上

＝ 社 会 思 想 史 ＝

〔主任講師：城塚 登（東京大学教授）〕

全体のねらい

近代の民主主義国家・社会、資本主義社会を形成してきた人たちの社会思想、またそうした国家・社会のはらんでいる深刻な諸問題と対決し、その解決をめざした人たちの社会思想を考察し、現代の高度に発展した社会に生活するわれわれが、人間らしいあり方を確保するためには、どのような国家・社会をめざすべきかを考える。

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	近代的人間の登場	近代的な国家・社会は、資本主義経済の発展（産業革命）と市民革命を通じて出現したが、それを担った合理主義的人間はルネサンス期に登場した。マキアヴェリィの社会思想を考察することによって、そうした合理主義的人間の社会観を見る。	城 塚 登
2	個人の自立と自由	宗教改革の指導者ルターの宗教思想のなかには、内面的信仰を通じて神と結びつく個人の自立と自由、職業労働の意義が確認されるなど、近代社会を担う人間のあり方が示されている。それはカルヴィニズム、ピューリタニズムに引継れる。	同 上
3	民主主義思想の成立(I)	イギリスの王権反対派が権力をにぎった「ピューリタン革命」に出合ったホッブスは、個人の自然権から出発し、諸個人が社会契約によって国家・社会をつくったという考え方を提出した。そこに民主主義思想の基礎がある。その問題を考える。	同 上
4	民主主義思想の成立(II)	「王政復古」から「名誉革命」にいたるイギリスで、ロックは社会契約について考えを進め、社会契約によって公共的なものに権力を信託した民衆は、権力者が信託に反すれば解任・更送できるとし「主権在民」の考え方を確立する。	同 上
5	啓蒙思想の展開とロマン主義	ロックの思想はフランス、ドイツなどヨーロッパ各国の思想家に受けとめられ啓蒙思想として展開した。モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、カントなどの思想がそれである。その反動としてシュレーゲル兄弟らのロマン主義が現われる。	同 上
6	「市民社会」への反省	フランス革命が自由と平等をスローガンにかかげたにもかかわらず、流血と専制をもたらしたのを見たヘーゲルは、スミスが自由な活動に委せるべきだとした「市民社会」のあり方に反省を加え、国家が「市民社会」の活動を制御すべきだとする。	同 上
7	初期社会主義思想	イギリスで紡績工場を経営したオウエンは、労働者の生活改善に努めたが、さらに協同生活・協同労働の村を開設して社会主義を説いた。フランスでは科学者と産業者が社会の主導権をもつべきだと説くサン・シモンが現われる。	同 上

回	テ　　ー　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	マルクスの人間解放思想	ヘーゲル哲学から出発したマルクスは、国家は幻想の共同体であるとし、市民社会の自己変革をめざした。そして資本主義の生産においては、労働者は生産物や生産活動から疎外されているとし、人間の自己疎外克服を人間開放の課題とする。	城　塚　　登
9	マルクスの共産主義思想	生産力に照応する生産関係を歴史の土台と考える唯物史観に立つマルクスとエンゲルスは、資本主義が生産力の発展の妨げとなっているとし、生産手段の社会化を中心とする共産主義革命を説く。また資本主義の経済学的解明をおこなう。	同　上
10	フェビアンニズムと社会民主主義	1884年にイギリスの知識人が結成した「フェビアン協会」は、社会的善の実現をめざし、土地や資本の公有、社会福祉・保障の充実をめざす。ドイツ社会民主党もベルンシュタインが議会活動による労働者の権利拡大という路線を出す。	同　上
11	マルクス主義思想の展開	後進国であったロシアでマルクス主義を受けとめたレーニンは、資本主義が帝国主義の段階に達したとし、革命を指導し実現した。他方、西欧では、ルカーチのように、労働者階級の主体的自覚の形成が課題とされる。	同　上
12	合理化と官僚制の問題	社会の近代化を合理化の過程としてとらえたヴェーバーは、官庁・軍隊・会社・工場などの集団が官僚制の特徴を示すようになるとし、それに対し人間は対決しなければならないと説く。彼は社会主義社会も同じ運命にあると考えている。	同　上
13	大衆社会の問題	20世紀にはいり資本主義社会は産業的合理化を進めたが、それとともに非合理的行動や激情に走る傾向をもつ大衆が発言力をもつようになる。その病理を指摘したマンハイム、リースマンの思想を見て、ファシズムについても考える。	同　上
14	管理社会の問題	情報化社会といわれるように飛躍的に増大した知識・情報を統括し、人びとの生活全体を制御しているのは、国家と法人大企業の複合機構であるとするガルブレイス、組織された資本主義がはらむ新しい問題を指摘したハーバーマスを見る。	同　上
15	人間らしい社会をめざして	これまで学んできた社会思想を踏まえて、日本の社会の現状について考える。民主主義、官僚制、大衆化、管理社会などが、日本の特殊性とからみながら、さまざまな深刻な問題をひき起している。これにわれわれはいかに対処すべきか。	同　上

＝ 宗 教 理 論 と 宗 教 史 ＝

〔主任講師：柳川啓一（東京大学教授）〕

全体のねらい

宗教学は、かつて、比較宗教学と称せられたように、特定の宗教を歴史的に明らかにするよりは、宗教一般を通じる理論を求めようとしてきた。本講義はその立場に立ち、宗教に強い関心を持つ人へのみならず、宗教を持たない人々の宗教理解の助けともなってもらいたいという意図をもって、テーマを編成した。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	57/8 27	日　本　人　と　宗　教	一般に、日本人は無宗教であると云われる。ところが、科学、技術の発展した社会の中で、日本ほど宗教に満ちていたところは珍しいとも指摘される。この矛盾をどう解釈すればよいかが、この講義の序論となる。	柳　川　啓　一 (東京大学教授)
2	9/3	宗　教　の　規　定 — 聖と俗 —	宗教学は、もともと、ヨーロッパに成立した学問であり、キリスト教の伝統になっている。しかし、他の宗教を含めた、宗教一般の解明を志した。その立場から宗教の規定の一例を、「聖と俗」の問題として取上げる。	同　上
3	10	季　節　の　祭	狩猟、牧畜、農漁業など、自然とのかかわりの深い生業においては、四季の移り変わりごとに、祭が行われ、豊かな生産が祈られた。現代においても、この形式が生きている。祭は、人々をエクスタシーにまで高める作用ももっている。	同　上
4	17	通　過　儀　礼	人間の生涯においては、誕生、成人、結婚、死亡などの折目がある。このときに、新しい段階、状態になったことを確認する儀式が行われる。これを通過儀礼という。この儀礼の種類と意味についての研究。	同　上
5	24	信　仰　治　療	病気は、人生の苦しみのうち、耐えがたいものの1つである。宗教は、この解決にあたろうとした。俗信、呪術と呼ばれる治療儀礼もその試みである。さらに信仰によって病気がなおるということは、何を意味しているか。	同　上
6	10/1	修　　　　　　　　行 — 心と身体 —	宗教は心の問題であるというが、心だけの問題ではない。「行」によって、自分の身体に一定の制約を与え、それを通して、精神の展開をはかろうとする。修行がこれである。神秘主義とも関連するところが深い。	同　上
7	8	タブーから戒律へ	タブー（禁忌）は、何かをするなという戒しめであり、原始宗教から世界宗教においても普遍的にみられる。ただ、内容において、ユダヤ教の十戒、仏教の五戒のように、倫理にまで高められる。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	15	道　徳　と　宗　教	宗教、ことに近代の宗教においては、道徳と分ち難くなっている。いかに生くべきかという日常倫理の問題が主になるからである。しかし、宗教には、道徳を超越する分野のあることも特徴である。	柳　川　啓　一
9	22	宗　教　的　世　界　観 －　神　と　法　－	宗教は、科学とは異なる次元の、宇宙観、世界観を持っている。その中心には、人格をもった神(または神々)、あるいは宇宙の法則がおかれている。これらの世界の描写を、いくつかの宗教を比較しながら研究する。	同　上
10	29	生から死への移行	人間に死がなければ、宗教はなかったであろうといわれる。宗約のもつ世界観にも、死後の世界、すなわち来世が描かれている。まず、葬送儀礼を通して、生から死への移行がいかに考えられたのだろうか。	同　上
11	11/5	死　後　の　世　界　Ⅰ －　生　者　と　死　者　－	1つの考え方では、死者は生者とのつながりが完全には切れず、お互いに助け合わねばならないという。日本の祖先崇拝死者供養にはこれが強い。近隣のアジアとの比較も必要になる。	同　上
12	12	死　後　の　世　界　Ⅱ －　天　国　と　地　獄　－	死後の世界は、生前の行いによって、行き場所が違うという考えもある。天国と地獄に分ける来世観は、各宗教において、精細に述べられており、ここでは、ごく一部を述べる余裕しかない。	同　上
13	19	社　会　と　宗　教　Ⅰ －　宗　教　集　団 の　類　型　－	宗教は、この世の外へ逃れることをすすめるだけではない。この世をそのまま受け容れることもあり、この世の批判、改革を志すこともある。その相違の理由の1つは、宗教集団(教会、教団)の理念の違いに基づく。	柳　川　啓　一 阿　部　美　哉 (日本女子大学 教授)
14	26	社　会　と　宗　教　Ⅱ －　政　治　と　宗　教　－	政治と宗教の関係は、祭政一致から政教分離にいたるまで、さまざまなタイプがある。とくに、近代における両者の関係に重点をおいて説明する。	同　上
15	12/3	現代における宗教	現代は宗教の衰退する時代とよばれることは事実か。あるいは、宗教の内容が変わっているのか。日本における宗教にも触れて、全体のまとめをする。	柳　川　啓　一

＝ 歴 史 の 理 論 ＝

〔主任講師：藤田健治（お茶の水女子大学名誉教授）
阿部玄治（千葉大学教授）〕

全体のねらい

歴史の理論を取り扱う際、歴史観の歴史の変遷を主として古代から現代に到るまでを鳥瞰した。但し各時代におけるすべて歴史観に渉るわけに行かないので、代表的な人々のそれに限ることとした。その場合歴史学自身と共に歴史哲学者の歴史観を取り上げたのは、後者により体系的なものを見出すことが出来たからである。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	歴　史　と　は　何　か	序説として歴史自身は多く書かれ且読まれているが、その根本にある歴史の理論については、現在多くの学者の注目を惹いていないかに見える。そこで先づ歴史とは何かということから始めて歴史と理論的考察に対する関心を喚起する。	藤　田　健　治 (お茶の水女子 大学名誉教授)
2	神　話　と　歴　史	神話は古代人の一つの世界観的表示である。神話を欠いた民族はかつてなかったし、それに当時の社会や文化の反映を見る事に異論はあるまい。日本神話は世界的に稀にみる独自なもので、これをギリシア神話と対比してその本質を明らかにする。	同　上
3	古代ギリシアの 歴史観	古代ギリシアの歴史観の代表として、ヘロドトスとトゥキュディデスを取りあげる。前者の物語風歴史、後者の実用的（教訓的）歴史と呼ばれる歴史記述の特徴を述べる。	阿　部　玄　治 (千葉大学教授)
4	ヘレニズム・ローマ 時代の歴史観 世界史の成立	ヘレニズムの世界市民主義、ローマの地中海世界統一のなかで、世界史への傾向が生じ、教文史学において世界史が成立する。世界史記述のための紀年法が確立するためにはなお数世紀を要する。	同　上
5	中　世　の　歴　史　観	中世の歴史家はキリスト教の神の攝理が歴史を貫くと考えた。キリスト教の終末観と関連して、彼らは自分たちの時代を年老いた終末に近い時代と感じていた。そこに中世特有の時代区分も生ずる。	同　上
6	近代の歴史観 ルネッサンス史学 及びブルーノとヴィコ	ルネッサンスとなって、中世期的な歴史に神の攝理を見る思想から離れて行くが、しかしそれも一挙にという訳にはいかない。ブルーノの自然主義的世界観とヴィコの歴史主義的世界観とに焦点をあてて説明する。	藤　田　健　治 (お茶の水女子 大学名誉教授) 阿　部　玄　治 (千葉大学教授)
7	啓蒙主義の歴史観 とヘーゲルの歴史 観	十八世紀は啓蒙主義の時代と言われるが、すべてを合理的に証明しようとする反動として十九世紀のにロマン主義が台頭する。そしてこの時代の総決算としてヘーゲルの歴史哲学が時代を大きく支配する。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	反ヘーゲルの歴史観 ランケ ブルクハルトニーチェ	ヘーゲルの一世を風靡した歴史哲学に対して十九世紀後半から反ヘーゲル的な潮流があらわれる。歴史哲学もブルクハルトやニーチェが夫々ヘーゲルの歴史学に反対して新生面をひらく。	藤　田　健　治 (お茶の水女子 大学名誉教授)
9	マルクス エンゲルス 及びマルクス主義 の歴史観	同じく反ヘーゲルの潮流の中でマルクシズムも位置する。その唯物史観として知られる下部構造と上部構造の規定関係は必ずしも普通解せられるように明らかではなく、生産力の概念もたびたび解釈を変える。	藤　田　健　治 (お茶の水女子 大学名誉教授) 阿　部　充　治 (千葉大学教授)
10	生の哲学の歴史観 ディルタイ とジルメル	二十世紀初頭に盛んである科学論、自然科学と精神科学との境をどこで引くか、精神科学に特殊の方法はあるか等の疑問に答えるべく生の哲学があらわれる。それは歴史理論からやがて人間的そのものの哲学理論へと移って行く。	藤　田　健　治 (お茶の水女子 大学名誉教授)
11	現象学　の歴史観 シェーラーと ハルトマン	フッサールの現象学自身が後期に生の世界を志向するが、シェーラーにおいて歴史的社会的動向の研究として知識社会学が生れ、さらにハルトマンにおいて精神的存在の問題として客観的精神論が展開される。	同　上
12	実存主義の歴史観 ハイデッカー とヤスパース	実存哲学はキルケゴールにおいて反ヘーゲルの立場を反歴史主義とみて現わしたが、ハイデッカーもサルトルもその哲学において歴史的世界との対決に進む。ハイデッカーの歴史哲学は時間性に基づいて展開される。	同　上
13	シュペングラー とトインビー 和辻と田辺 歴史哲学の現況	この時代の歴史学自体はシュペングラーとトインビーにおいて代表される。彼等の文明批評は技術社会の到来や挑戦と応戦にみられる。日本の代表的歴史哲学者としては、和辻の「風土」と田辺の「種の論理」をとり上げる。その他ロシア史のカーやマイネッケのシュタートルゾン等語るべき点が多い。従来歴史哲学とみられた社会変動や進歩と変形の理論等に社会学、心理学の新しい動きがみられる。	同　上
14	続歴史哲学の 基礎学としての 哲学的人間学	歴史哲学は畢竟するに人間の学である。そして又人間の生の哲学は究極においてその生の歴史的展開を求めざるを得ない。その意味で歴史哲学は人間学に帰着するのである。その意味の人間学は生命・精神・実存と観想・実践を主軸とした世界構造と動態の学でなければならない。歴史の理論は究極において人間的生を時間的に現実的に把えるものであると考える。	同　上

＝ 情 報 と 記 号 ＝

（→記号と人間）

〔主任講師：吉田夏彦（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

記号に関連した事項をいくつか取り上げて論ずることを通じ、人間の世界を理解する上でどんなに記号に頼っているかを論ずる。記号について論ずるべきことは他にもいくらでもあるが、わかり易くすることを旨とするので、あまり手は広げない。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	さまざまな記号	ことば、表情、身ぶり、字、文章、数字、術語、論理記号、交通標識、絵、音楽、建物、貨幣、仏像、などといった例をあげながら、広い範囲で人間と記号とが関係していることを論ずる。	吉　田　夏　彦 （東京工業 大学教授）
2	自然の中の記号	遺伝、神経系、生態系、にみられる記号の例をあげる。その働きが、人間のつくりだした記号の働きと、どういところで似ていて、どういところで似てないか、また、自然の中に、記号をあやつる心のあるかないか、などについて話す。	同　上
3	機　械　と　記　号	昔の道具、機械の中にみられる、記号伝達のしくみ、コンピュータを代表とする、最近の情報処理機器での記号の役割について話し、自然の中の記号と比較する。機械になぞられて自然を理解しようとする考え方についても論ずる。	同　上
4	通　　　　　　　　信	遠く隔れたところに情報を送る時の記号の使い方を、古代ののろしの例から、最近の人工衛星の例にまで触れながら話す。ラジオやテレビについても論ずる。	同　上
5	解　　　　　　　　読	古代文字、暗号、の解説の例から始め、考古学、歴史学、国際交流などにも触れながら、記号を手がかりにしてその表現しているものをさぐるようとする努力のことを話す。	同　上
6	常識的なみとり図	前図までの話をふまえ、記号が送り手から受け手に届くまでの過程についての常識的なみとり図のようなことを話す。つまり、送り手の心から、何段階の、記号の翻訳を通じて受け手の心に、情報が届くとするみとり図についてである。	同　上
7	誤　　　　　　　　解	前図のみとり図の問題点として、誤解のことを取り上げる。特に、落語の「蒟蒻問答」を例にして、誤解に気が付かないという場合のことを論ずる。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	有　用　な　誤　解	古典を読んで理解することが、その著者の意図どおりのものであるという保証はないが、だからといって古典を読むことが無意味だということにはならない。この例をひきながら、誤解の有用性ともいえるべきものについて話す。	吉　田　夏　彦
9	コミュニケーション	前二図で論じた事項をふまえ、記号をとおしたコミュニケーションとはどんなものかについて考える。伝承、儀礼といったものの意味、また、世代や性の違うものの間で話がかよふとはどういうことか、などについても話す。	同　上
10	記号のひとりだち	記号自体が重要なものとなっている例を、抽象美術、音楽、数学、数理科学、の例をひきながら話す。話好きな人間や一人で深く考えている人間も、案外、記号に魅せられているのかもしれないといったことについても論ずる。	同　上
11	抽　象　と　記　号	普通名詞や数詞の働を緒として、抽象的なものを指す記号が、人間にとって、極めて重要なものであることを論ずる。特に、多くのものをまとめたものを、また一つのものとして扱う時の記号の働きをとりあげる。	同　上
12	論　　　　　　理	記号表現の意味をできるだけはっきりさせようとする手続きとしての論理について述べる。論理は、根本概念、定義の手続き、根本前提論証の手続きを与えることによって提示される。	同　上
13	複　数　の　モ　デル	論理学の成果によって、蒟蒻問答がいわば人間の宿命であることがわかる。しかし、このことは、かえって、記号が有用であることを示している。7図、8図で論じたことを、論理的に見直す図となる。	同　上
14	世　界　と　知　識	人間の知識は、記号によって体系化される。このことを、自然科学の例で考える。そうして、世界も、人間にとっては記号化されることを論ずる。自然科学とは正反対にみえる神秘主義も似たことをしているのではないかということ、象徴ということに触れて論ずる。	同　上
15	ま　　　　　と　　め	記号についてよく論ぜられるものでありながらここでは取り上げなかった問題のいくつかとその難点に軽く触れた上で今までの話を振り返り、また、今後更に勉強したい人はどうすればよいか、などということについて話す。	同　上

= 構 造 と 解 釈 =

〔主任講師：渡辺二郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

いかなる事象も、そのうちに、なんらかの構造を内蔵している。しかしその構造がそれとして明示されうるためには、人間の側からするなんらかの解釈が加えられねばならないであろう。しかし、解釈するためには、なんらかの視点や観点が必要である。その観点に立脚して、さまざまな能動的働きかけを行なうことによってのみ、解釈は成立する。一方に、この世界の客観的構造があるとすれば、他方に、それに対して人間の側から加えられた多様な主観的解釈の歴史がある。こうした思想史の出来事を、種々の点から明らかにしてみたい。

主な項目

- (1) 東西の思想史への展望
- (2) 世界と人間
- (3) 主観と客観との関係の種々相
- (4) 存在と実存
- (5) 現象学と解釈学

〔この講義はまだ大分先のことなので、十分考えきっていません。変更の余地有。〕

＝ 美術史・美術論 ＝

{ 主任講師：前川誠郎（東京大学教授）
 町田甲一（武蔵野美術大学教授）
 放送局：テレビ朝日 }

全体のねらい

前半において日本の美術史を、後半において西洋の美術史と兼ねて美術理論を分担する。即ち、いずれも、通史、概説という形をとらないで、毎回テーマを選んで毎回ごとにも理解が得られるように構成を考えて、日本の美術、西洋の美術の歴史を考えてみることにした。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	54/12 6	浮彫的なものから 丸彫的なものへ	日本の美術史は仏像の伝来に始まる。6世紀の中国仏像の様式がその手本で、それは当時盛んだった石窟寺院の浮彫の様式をひくものである。この浮彫的な観照形式から次第に丸彫的な観照形式へと展開して行くのが、わが飛鳥時代から白鳳時代へ向う時期である。	町　田　甲　一 （武蔵野美術 大学教授） 前　川　誠　郎 （東京大学教授） 鄧　　健　吾 （成城大学教授）
2	13	古典美の成立と展開	人間の姿をかりて表現される仏像が次第に写実への道を辿ったのは自然である。理想的写実をもとに、古典的様式の美が追求されることになる。8世紀前半の天平時代がその最盛期である。	町　田　甲　一 （武蔵野美術 大学教授） 五　味　充　子 （清泉女子 大学教授）
3	20	和風様式の成立と展開	絶えざる中国からの影響をいわば食餌として生成展開して来たわが国の文化は、9世紀末になって、中国との交流が絶え、和風文化が展開されることになる。美術においても和風様式が生まれ、非仏教的な世俗美術も行なわれるようになる。	町　田　甲　一 （武蔵野美術 大学教授） 水　野　敬三郎 （東京学芸大学 教授）
4	10	宗教と絵画－古代－	日本の絵画史の大まかな分野のひとつは仏画である。その初期は、もっぱら中国の仏画を手本として製作されたが、奈良時代から平安・鎌倉時代へと変遷のあとをたどると、日本独自の種類や表現が形成されて行くことが明らかとなる。	町　田　甲　一 （武蔵野美術 大学教授） 水　屋　比呂志 （武蔵野美術 大学教授）
5	17	自然と絵画－中世－	宗教絵画とは別の分野の世俗絵画で、日本人は自然の表現に最も強い愛着を示した。ここでも、中国の唐絵から、日本独自の和絵が平安時代に生み出されるが、さらに水墨山水画の摂取とその日本化という現象が、室町時代に見られる。	同　上
6	24	生活と絵画－近世－	近世は、人間に対する関心が高まってくる時代であるが、日本の絵画にも、その動きが顕著に見られる。 洛中・洛外図・初期風俗画、浮世絵という風俗画のなかに、日本人と生活と人間像を探ってみる。	同　上
7	31	近代化と伝統	明治以降の日本の近代美術の最も顕著特徴として、絵画の分野に洋画（洋風画）と日本画という二つのジャンルが生じたことが挙げられよう。これに象徴されるように、日本の近代美術は西洋美術の受容と日本の伝統への反省という二軸をめぐって展開する。	町　田　甲　一 （武蔵野美術 大学教授） 浅　野　　徹 （国立近代 美術館）

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/7	空　間　の　造　形	柱と梁、アーチとヴォールト等の西洋建築の基本構造、宗教建築における長堂と円堂、また世俗建築における宮殿と別荘の空間構成について、それぞれの本質と特色を豊富な図解を用いて説明する。	前　川　誠　郎 (東京大学教授)
9	14	形　式　と　様　式 (formとstyle)	西洋聖堂建築の基本形式の一つでバジリカを例にとり、その史的展開を様式史として把握し、美術史の基礎概念である形式と様式の問題を巡って話題を次第に彫刻や絵画へと移しながら、美術史とは何かを考察する。	同　上
10	21	人間像の展開　(1)	西洋の彫刻や絵画の基本主題は人体であり、ときには自然すら人間の姿において表現された。その意味で古代美術は常に典範として存在し、史上幾つかのルネッサンス現象を指摘することができる。第10講は宗教美術における人体表現について。	同　上
11	28	人間像の展開　(2)	世俗美術における人体表現の最も親しみ易い種目として肖像を取り上げ、その史的展開の跡を辿りながら、各種の形式、肖似性の問題、さらには西洋の肖像画に特異なものとしての自画像をも考察する。	同　上
12	3/6	自　然　の　表　現	宗教画の背景または添景として出発した西洋の風景画や静物画が次第に画種として独立して行く過程を追ひ、西洋美術における自然観の展開を概観する。	同　上
13	13	もの　の　視　方　の　変　化	例えば壁画と板絵を比較対照させて歴史的に考察すると、その根底にあるものの視方(視形式)の基本的な相違に気付く。西洋美術史を視形式の変遷から捉え、具象と抽象、写実と心象表現美の問題から20世紀美術について考察する。	同　上
14	20	美　術　の　中　の　意　味	1930年代から近年まで西洋美術史研究法の主流を占めたアイコノロジー(図像解釈学)がどのような成果をもたらしたかを具体例に即して説明し、美術に託された意味と人間との関係について考える。	同　上
15	27	日本　の　美　術　と　外国 の　美　術 (鼎談)	日本の美術は古くは中国や朝鮮の美術、そして明治以降は欧米の美術からさまざまな影響を受けながら、しかも独自の発展を遂げて来た。それら彼我の美術の本質的な異同を、具体的な影響関係を踏まえて論ずることより、それぞれの美術の特色を浮彫りにする。	前　川　誠　郎 (東京大学教授) 町　田　甲　一 (武蔵野美術 大学教授) 水　屋　比呂志 (武蔵野美術 大学教授)

＝ 音 楽 史 と 音 楽 論 ＝

〔主任講師：柴田南雄（元東京芸術大学教授）〕
放 送 局：テレビ朝日

全体のねらい

TVの特性を生かし、教室で教科書をなぞるようにでなく、縄文・弥生の石笛や琴にはじまり、古典音楽から現代音楽まで、各地の遺跡のロケや邦楽・洋楽の実演もとりまぜ、しかも東西音楽の通史となるよう話を進める。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	55/8 30	外来音楽と日本人	太古から今日まで、日本の4つの島にはどのようなヒトが、どのような音楽を持ち込んだか。仏教伝来と共に入った音楽を消化する過程と、西洋文明とともに入った音楽を消化する過程との類似点。日本と西洋の音楽史におけるサイクル現象の存在。	柴 田 南 雄 (元東京芸術 大学教授)
2	9/6	音楽文化の深層を 探る	旧石器時代、欧州大陸にどんな楽器があったか。日本の縄文時代の石笛の出土品を紹介、その音色や用途から能楽の横笛との関連を考える。オリエント、エジプト、ギリシャ、インド、中国には古代にどのような音楽があったか。	柴 田 南 雄 (元東京芸術 大学教授) 笹 森 建 英 (弘前大学助教授)
3	13	祭 祀 の 音 楽	弥生・古墳時代（ほぼBC 300年～AD 600年）の間に用いられた土笛、銅鐸、琴などの出土品と復元品を紹介、あわせて中国（儒教）や西欧（キリスト教）のこの時期の音楽の状況をしらべる。	同 上
4	20	制 度 化 と 学 習	飛鳥時代と奈良時代（6世紀～8世紀）における大陸からのさかんな音楽の輸入とくに大宝律令で制度化された＜雅楽＞のこと。西欧でもグレゴリウス大法王による聖歌の集大成と、各地に聖歌学校の設立を見た。	柴 田 南 雄 (元東京芸術 大学教授) 高 橋 大 海 (東京芸術大学 助教授)
5	27	芸術音楽の胎動期	平安時代（9世紀～12世紀）には、楽制の改革により輸入音楽が定着し（雅楽）独自の曲種が発生（今様）しはじめる。西洋ではゴシック様式の大聖堂が多声音楽の発生源となる。	柴 田 南 雄 (元東京芸術 大学教授) 桜 井 茂 治 (国立音楽 大学教授)
6	10/4	諸国を行脚する音楽	鎌倉時代と南北朝（13世紀・14世紀）が対象で、平曲が起り田楽猿楽の流行をみる。西欧でもトルバドゥールなど騎士階級からの吟遊歌人が起る。また音楽理論の整備とともに、多声音楽がますます発展する。	柴 田 南 雄 (元東京芸術 大学教授) 横 道 万里雄 (東京芸術大学 教授)
7	11	ル　ネ　サ　ン　ス	室町、戦国、安土・桃山時代（15世紀・16世紀）に、世阿弥による能の確立、キリシタン音楽、三味線の琉球からの輸入を見る。西欧ではルネサンス多声音楽の花が咲き、遠近法に見合う機能と和声の音感が確立する。	柴 田 南 雄 (元東京芸術 大学教授) 戸 口 幸 策 (成城大学教授)

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	18	キリシタン音楽	1549年ザビエルは日本上陸と共にミサの歌を信徒に歌わせた。数種の楽器も入り、少年使節は欧州各地でオルガンを演奏、帰って信長にきかせている。禁教徒も隠れキリシタンの祈り歌(オラッシャ)は今日まで伝承している。その実情を紹介する。	柴田 南雄 (元東京芸術 大学教授)
9	25	東と西のバロック音楽	江戸時代の前半、元禄をへて享保の終り(1735年)頃までは上方が優勢で、曲、薩摩琵琶、三味線楽、長歌、尺八、義太夫節などが市民の生活に支えられて競い咲く。西欧ではバロック音楽の時代(1600年頃～1750年頃)。	同 上 平野 健次 (独協大学教授)
10	11/1	古典派・ロマン派	江戸時代の後半、宝暦から文化文政をへて幕末まで。前記に誕生した曲種の拡充が行われるが新味に乏しい。これに反し西洋では古典派・ロマン派音楽が西洋音楽を一気に頂点に導く。	柴田 南雄 (元東京芸術 大学教授)
11	8	無からの出発と隆盛の絶頂と	明治政府の音楽教育政策は西洋音楽を基本とした。伝統邦楽の活力は衰退しこれに反して西洋音楽はヴァーグナーの楽劇に代表される隆盛の極にあった。第一次大戦までを対象に考える。	同 上
12	11/15	両大戦間の状況	日本ではようやく西洋音楽様式の創作がはじまる一方、邦楽はますます背景に後退する。西欧で「古典派・ロマン派」の最後の段階としての新古典主義(新則物主義)の時代を迎える。シェーンベルクの12音音楽もその思潮の中から生まれた。	同 上
13	22	第2次大戦後の作曲界	第2次大戦を境に作曲の様式は大きく変わる。世界の諸民族の音楽を取り入れた、単純で即興的なものからの再出発。邦楽器への再認識もその一環である。電気音響装置やコンピュータの作曲への導入。	同 上
14	29	第2次大戦後の演奏界	現代は作曲不振、演奏上位の時代である。また作曲の時代様式と演奏の時代様式の間にはあきらかに平行関係が認められる。20世紀初頭に遡るレコード録音から典型的な事例をあげて比較する。	柴田 南雄 (元東京芸術 大学教授) 横道 万里雄 (東京芸術 大学教授)
15	12/6	未来の展望	今日、一般の日本人はどのような音楽を好んでいるか。人々は何を音楽に求めているか。今、音楽とは何か。これからの音楽はどのような形をとるであろうか。ビートルズの諸芸術循環説を紹介する。	柴田 南雄 (元東京芸術 大学教授) 小泉 文夫 (東京芸術 大学教授)

＝ 文 芸 史 と 文 芸 理 論 ＝

（ →近代日本における文芸理論）

〔主任講師：江頭淳夫（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

坪内逍遙以来第二次大戦後にいたる近代日本の文芸理論を、主として比較文学的手法を用いて分析・解説するが、その際紀貫之から本居宣長にいたる日本古典文学の文芸理論が、近代の文芸理論にいかなる投影を示しているかをも併せて考察する。これを要するに、近代の文芸理論については通時的に通観し、それを古典文芸理論との共時的対比に置き直して、日本文芸理論の不易と流行の相を明らかにすることを目的とする。

主な項目

未 定

＝ 万 葉 の 世 界 ＝

－うたの歴史を探る－
(→和文古典Ⅰ)

〔主任講師：稲岡耕二（東京大学教授）〕
放 送 局：ラジオ日本

全体のねらい

万葉集の広さ・豊かさは、口誦の歌謡から記載の文学へ転化した前後の、さまざまな歌のすがたを記しとどめていることに因る。歌謡の音楽性や集団性、作者未詳歌の等質的類歌性を基盤としながら、長歌・短歌・旋頭歌など多様な歌体を利用して、個性的文学へ、どのように道が開かれて行ったかを探る。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	56/12 10	うたと文字との交渉	文学に記されることによって、歌はどう変らざるをえなかったか。諸外国の例をも参照しつつわが国におけるうたと文字との交渉の歴史を考える。	稲　岡　耕　二 (東京大学教授)
2	17	初期万葉の相聞歌	鏡王女・藤原鎌足・久米禪師・石川郎女などの贈答歌の特徴を理解するとともに、その源流を考える。	同　上
3	24	国見歌の表現	舒明天皇御製と伝えられる歌および記紀の国讃め歌・国見歌を読み、その表現が時代とともにどう変っていったかを考える。	稲　岡　耕　二 (東京大学教授) 神野志隆光 (大阪教育大学) (助　教　授)
4	57/1 7	口誦の歌人額田王	近江遷都の時の歌や熱田港出航の時の歌の性格を理解するとともに額田王の歌人としての性格を考える。	稲　岡　耕　二 (東京大学教授)
5	14	天武朝と人麻呂	謎の多い人麻呂歌集および人麻呂の生涯について、さまざまな問題点を探る。	同　上
6	21	人麻呂と中国文学	柿本人麻呂の表現に中国文学の影響がどのようにあらわれているかを探る。	同　上
7	28	私的挽歌の創造	天智朝の挽歌とくらべて、人麻呂の時代には新しい性格の挽歌が作られるようになった。それは、どのようなものでどこに文学としての新しさがあったか。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/4	反　歌　の　歴　史	反歌は、はじめどのような形であったのだろうか。反歌史を整理しつつ万葉集における反歌の魅力と、史的展開を理解する。	稲　岡　耕　二 (東京大学教授) 神野志　隆　光 (大阪教育大学) 助　教　授
9	11	旅　人　と　憶　良 (その一)	中国文学の影響が深まるとともに、思想や趣味の上にも個性的分化の傾向が強まった。梅花歌や松浦河の歌などをおして、旅人と憶良の対蹠的な性格を理解する。	稲　岡　耕　二 (東京大学教授)
10	18	旅　人　と　憶　良 (その二)	旅人と讃酒歌と憶良の志賀白水郎歌の構造を吟味し、その成り立ちを考える。	同　上
11	25	赤　人　と　自　然	赤人の表現の特徴を検討し、作者の性格および叙景歌を生み出した時代的背景などとの関連を考える。	同　上
12	3/4	伝説歌人高橋虫麻呂	伝説歌とは何か、また、虫麻呂はなぜ伝説を歌ったのかなど、虫麻呂をめぐる諸問題を考える。	同　上
13	11	東歌・防人歌と その性格	東歌は、はたして民謡なのか、防人歌はどのような場で作られ、蒐集されたのかなど、東歌・防人歌の謎を探る。	稲　岡　耕　二 (東京大学教授) 遠　藤　　宏 (成蹊大学教授)
14	18	作者未詳歌の世界	大量の作者未詳歌に見られる豊富な類歌性は何を意味するのか。万葉集の底辺を形づくる等質的な共感の世界を探る。	同　上
15	25	万　葉　の　終　焉 — 家持の孤独 —	家持秀歌の特徴と、末期万葉的な性格を理解する。	稲　岡　耕　二 (東京大学教授)

＝ 王 朝 の 文 学 ＝

（ →和文古典Ⅱ ）

{ 主任講師：秋山 虔（東京大学教授）
 放送時間：午前6時～午前6時45分
 放送局：ラジオ短波 }

全体のねらい

400年にわたる平安王朝の文学の主たる担い手は平安京の貴族たちであったが、彼らによって創出された諸形態の文学の高度の達成は、後世に規範的意味をもちつづけ、日本の美意識の源流となった。そうした王朝文学の形成・展開の姿をさまざまな視角から追求する。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/12 12	王朝文学の始発	平安遷都にはじまるこの時代の文化はまず大々的な唐風謳歌に特徴づけられるが、そのことの意味と、その唐風がしだいに和様化していく過程を説く。	秋　山　　虔 （東京大学教授）
2	19	古今集とその時代	万葉文学と様式を一変した古今集文学形成の必然性を、漢字文化圏内における日本文化の自立の様相として捉える。	久保田　　淳 （東京大学助教授）
3	26	物語文学の形成 －竹取物語と伊勢物語－	口誦のモノガタリから仮名散文の虚構文学としての物語へ。その経過を探りつつ物語文学の本質は何かを考える。	秋　山　　虔
4	58/1 9	日記文学の成立 －土佐日記と蜻蛉日記－	物語文学と並んで仮名散文の日記文学の成立してくる事情を、和歌との関わりその他の要因から考えてみる。また日記文学によって、いかに人間の内面世界が掘り起こされるに至ったかを明らかにする。	同　上
5	16	虚構物語の成熟	当時の物語の制作・享受の実情を説明し、現存する長篇物語の宇津保物語や落窪物語の成立の意義を考える。	同　上
6	23	後撰集、拾遺集の位置	漢詩に代って公的文学の座を獲得した和歌は、貴族たちの私生活感情を託す表現手段としてどのように機能したか。また歌物語との関わりあいや後代に及ぼした影響なども考えてみる。	久保田　　淳
7	30	枕草子と清少納言	日本人の美意識に規範的意義をもつ枕草子の特質と作者清少納言の個性を、政治的文化的背景のうえに考察する。	秋　山　　虔

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/6	源氏物語の世界(1)	源氏物語の作者紫式部と人間形成と源氏物語創作の意義を考え、三部作と考えられる源氏物語の第一部世界の主題や構造を説明する。	秋　山　　虔
9	13	源氏物語の世界(2)	源氏物語の第Ⅱ・Ⅲ部の世界の推移、主題の展開の様相を説明し、物語文学としての独自の達成についてその意義を考える。	同　上
10	20	源氏物語以後	源氏物語がその成立の時期から後代にかけてどのような影響を及ぼしたか、更級日記の作者菅原孝標女の源氏享受をはじめ、長短篇の物語群の様相をながめてみる。	同　上
11	27	女流歌人と 後拾遺集	和泉式部・赤染衛門などの女流歌人の輩出した後宮文学の開花を受けて撰ばれた後拾遺集の時代背景を明らかにし、同集の成立が王朝和歌史の屈折点に位置する理由を明らかにする。	久保田　　淳
12	3/6	和歌文学の革新 —金葉・詞花・ 千載の時代—	古代王朝文化とは矛盾するものをはらむ院政文化の性格と浄土教の滲透が和歌文学にいかなる影響を及ぼしたか、歌人層の変化、詠歌の場の変質などの諸相を追求する。	同　上
13	13	歴史物語の諸相	歴史的事実を素材とする、いわゆる歴史物語、栄花物語・大鏡などの成立の意義を考え、それぞれに描き出される世界について説明を加える。	多　田　一　臣 (千葉大学助教授)
14	20	説話文学の誕生	説話文学の世界は、貴族を中心とする王朝の文学のいわば周縁に位置している。最古の説話集である日本霊異記を取りあげながら、説話文学誕生の史的意義を考える。	同　上
15	27	今昔物語集の世界	今昔物語集の膨大な説話群を統一するものは何であったのか。説話内容の分析を通じて、その世界認識のありかたについて考える。	同　上

＝ 漢 文 古 典 I (or II)＝

〔 主任講師：頼 惟勤（お茶の水女子大学教授） 〕

全体のねらい

日本文学、あるいは日本語の発展にとって、漢文は深刻な影響力を持っていたと考えられる。この講義の目指す所は、中国語の文語文としての漢文古典文献としてよりは、むしろ日本に影響を与えたものとしての漢文体の文献というところに力点を置く。

主な項目

- (1) 奈良・平安時代における漢文受容の概観
- (2) 鎌倉・室町期における受容と創作
- (3) 江戸期における漢文体の文学の創作
- (4) 明治以後における漢文の役割

＝ 日 本 近 代 文 学 ＝ (→ 近代文芸 I、II)

〔 主任講師：紅野敏郎（早稲田大学教授） 〕

全体のねらい

日本の近代の文学者の生きた時代と作家活動との具体的な関連を探究する。作家研究・作品論・文学史論の三位一体的な考察に力を入れる。とくに明治末から大正期にかけての、いわゆる 1910 年代を中心とする。この時期は自然主義と反自然主義の時代であり、日本の近代文学のもっとも実りのある成熟期にあたる。出来得る限りその時代の雑誌を丹念に押え、初版本を眺め、実物を確認しつつ、作家と作品の初発のエネルギーを掘りさげたい。文学と美術、文学と演劇との重層性にも注目していく。

主な項目

- (1) 漱石文学の出発―「ホトトギス」「朝日新聞」との関連―
- (2) 自然主義文学の特質―「早稲田文学」をめぐって―
- (3) 「白樺」「三田文学」「第二次新思潮」の検討
- (4) 漱石の「明暗」、有島の「ある女」、志賀の「暗夜行路」の作品分析
- (5) 文学史における大正 5 年の意味

＝ イギリスの言語文化 ＝

〔主任講師：橋口 稔（東京大学教授）〕
放送局：テレビ朝日

全体のねらい

ルネサンス時代から20世紀の現代まで、主として文学作品をとおして、イギリス文化の諸相を歴史的に辿ってみようと思う。もちろん抜粋によってであるが、英語のテキストを読むことも交えながら、イギリスの言語文化の特質を明らかにしたいと考えている。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/12 12	シェイクスピアⅠ ーその言語ー	単にイギリス・ルネサンスの精華であるにとどまらず、イギリス文学全体の中でも最も豊かな表現を持っているシェイクスピアの英語を通して、英語そのものの特徴を考えてみようと思う。古英語から中英語を経て近代英語に至る英語の変遷についても考察する。	橋　口　　稔 （東京大学教授）
2	19	シェイクスピアⅡ ーその生活ー	シェイクスピアの生涯については、確かなことはごく少ししか分っていないのだが、分っている範囲のことをもとにして、シェイクスピアを生んだイギリスの自然の風土や季節の変化などについて考えてみたいと思う。	同　上
3	26	シェイクスピアⅢ ーその舞台ー	シェイクスピアの戯曲がどのような劇場の、どのような舞台で、どのような形で上演されたかを、今日分っている範囲で理解してみた上で、現代の舞台に上演されているシェイクスピアと比較し、それを通してシェイクスピアの本質を考えてみたいと思う。	同　上
4	57/1 9	欽　定　訳　聖　書	ジェームス一世の指示によって作られ、1611年に刊行されたこの英訳聖書が、その後の英語に与えた影響は限りなく大きいと言われている。欽定訳聖書について考えながら、併せてイギリスの宗教について考察を加えたいと思う。	同　上
5	16	ミ　ル　ト　ン	ミルトン「失楽園」は、アダムとイヴの墮落を主題とした叙事詩である。ピューリタン革命にも自ら積極的に関与したミルトンの生涯を考えながら「失楽園」がイギリス文化の中でどのような意味を持つかを考察したいと思う。	同　上
6	23	デフォーとスウィフト	デフォーの「ロビンソン・クルーソー」とスウィフトの「ガリバー旅行記」は、おそらく日本において、イギリス文学の作品として最も多くの読者を持っている読物であろう。クルーソーとガリヴァー、デフォーとスウィフトの対比をもとに、イギリス文化の問題を考えてみようと思う。	同　上
7	30	近代小説に見る生活Ⅰ	ヘンリー・フィールディングの「トム・ジョーンズ」とジェイン・オースティンの「高慢と偏見」に抽かれた、田舎の屋敷におけるイギリス紳士の家族の生活を見てみたい。併せて、地主であるイギリス紳士階級について歴史的な考察もしたいと思う。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/6	ロマンティシズム	18世紀末から19世紀初頭にかけてのイギリスのロマンティシズムの動向を、ワーズワースを初めとする詩人たちの作品に即しながら、同時にほぼ並行して起っていた産業革命との関連のもとに考えてみたいと思う。	橋　口　稔 (東京大学教授)
9	13	近代小説に見る生活Ⅱ	紳士階級の子弟が学ぶパブリック・スクールの有様を、トマス・ヒューズの「トム・ブラウンの学校生活」によって見た上で、貧しい階級の子供の実態もチャールズ・ディッケンズの小説を通して見て、その対比を当時の社会的変化の中で浮き上がらせてみたいと考えている。	同　上
10	20	ヴィクトリアニズム	漠然と「道徳主義的な上品気取り」とか「時代の進歩を信じる楽観的な自己満足」というふうに言われるヴィクトリア朝の風潮がどのような詩作品を生みだしているかを、テニソン・ブラウニング、アーノルドといった詩人たちの代表作を読むことによって考えてみたいと思う。	同　上
11	27	ブルームズベリー・グループ	ブルームズベリー・グループというのは、リットン・ストレイチー、ヴァージニア・ウルフ、メイナード・ケインズ等をメンバーとする、強い友情で結ばれた知識人たちの私的な集まりであった。このグループを通して、1900年代から第一次世界大戦を経て1920年頃までのイギリス文化の変化について考察してみたいと思う。	同　上
12	3/6	オーデン世代	W.H. オーデンを中心とする1930年代に活躍した詩人、作家たちの世代を取り上げて、第一次大戦後から第二次大戦にかけてイギリス文化の動向を考えてみたいと思う。	同　上
13	13	ザ・ムーヴメント	定冠詞だけで形容詞なしに「ザ・ムーヴメント」と呼ばれた1950年代の詩人たちの動きを中心に、その年代の小説や演劇における動きも一諸に考えることによって、第二次大戦後のイギリス文化の新しい動向を考察したいと思う。	同　上
14	20	イギリスと日本Ⅰ —幕末まで—	イギリスと日本の接触は、1600年にウィリアム・アダムズが日本に来た時から始まる。17世紀から19世紀半ばの幕末まで、イギリスと日本の間の交渉を、それぞれの文化の違いを念頭において考察してみたいと思う。	同　上
15	27	イギリスと日本Ⅱ —明治維新以後—	明治維新以後のイギリスと日本の間の関係について考えてみようと思う。日本が西欧に学んで、西欧に追いつき、追い越したと言われている現在を踏まえて、あらためて考え直してみたい。	同　上

＝ アメリカの言語文化 ＝

〔主任講師：本間長世（東京大学教授）〕
放送局：テレビ朝日

全体のねらい

毎回英文のテキストをもとにして、アメリカ文化の各側面を取り上げ、講義とゲストを迎えての対談を通じて、全体としてアメリカ文化の特質の理解が深まることを目指す。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	54/12 7	アメリカ人になること	移民の国であるアメリカ合衆国で、人びとがいかにしてアメリカ人となり、英語を学び the American Way of Life を身につけていたかをあとづける。	本　間　長　世 （東京大学教授）
2	14	合　衆　国　の　建　国	13の植民地がイギリス本国に反逆して独立し、連邦共和国を建設した過程をふり返り、啓蒙思想に基づくアメリカの建国の理念を探る。	同　上
3	21	ヨーロッパとアメリカ	日本でひとくちに、“欧米文化”と言うことが多いが、ヨーロッパ文化と区別されたアメリカ文化というものはあるのかという問題を考えてみる。	同　上
4	55/1 11	ア　メ　リ　カ　の　詩	アメリカの代表的詩人ウォルト・ホイットマンの詩をはじめ、いくつかの詩を通じてアメリカ的想像力ともいえるべきものを探る。	同　上
5	18	アメリカのナショナリズム	アメリカのナショナリズムに神秘性を与えたといわれるリンカーンの演説を中心に、アショナリズムとインターナショナリズムの関連まで説明する。	同　上
6	25	ア　メ　リ　カ　の　黒　人	自由と平等の国であるはずのアメリカで奴隷制の下にしいたげられてきた黒人の、解放へのたたかいをふり返り黒人のアメリカ文化への貢献を考える。	同　上
7	2/1	西　部　の　開　拓	アメリカ精神は開拓の最前線であるフロンティアで形成されたといわれる一方で、アメリカ大陸では自然とのたたかいが厳しく、文化が洗練されるのが遅れたともいわれる。アメリカ史におけるフロンティアの意義を論じてみたい。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/8	アメリカのフォークロア	アメリカの代表的な“フォーク・ヒーロー”の一人ジョン・ヘンリーの英雄像が、鉄道建設の労働者たちの間で歌われた歌をもとにしてつくられた経緯をたどり、アメリカのフォークロアの特徴を説明する。	本　間　長　世 (東京大学教授)
9	15	大恐慌とニューディール	史上かつてない大恐慌がアメリカ社会にもたらした悲惨と、ルーズヴェルト大統領のリーダーシップの下でのニューディールの成果を論ずる。	同　上
10	22	ワスプ対 エスニック・アメリカ	アメリカ人の主流だった WASP に対して ethnic Americans が挑戦し、アイルランド系のケネディ大統領が誕生したこと文化史的意義を論ずる。	同　上
11	29	アメリカの南部	南北戦争後のアメリカ南部が独特のイメージを抱かれた歴史を訪ね、カーター大統領出現に及ぶ。	同　上
12	3/7	アメリカのユーモア	外国の言語文化を理解するにはユーモアを理解し得ることが極めて重要で、ある。アメリカ的ユーモアの味わいを、漫画にも触れて観賞したい。	同　上
13	14	アメリカのミュージカル	ミュージカルはアメリカのユニークな舞台芸術である。代表的なミュージカルを取り上げ、いかなる点でアメリカ的かを解明する。	同　上
14	21	アメリカの食物	料理は生活文化の中で重要な地位を占める。アメリカの料理はおいしくないという“通説”を吟味する。	同　上
15	28	未来への展望	アメリカ人は未来に対して楽観的だと言われるが、近年のアメリカ人は未来に対して無関心だったり未来を恐れたりしているともいわれる。アメリカ文化の未来を展望してしめくりとする。	同　上

＝ドイツの言語文化（未定稿）＝

〔主任講師：辻 理（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本におけるドイツ像の歴史的な由来を、ドイツ史との関連から解明し、受容の側の必要が対象を作りあげている事態を明確にする。その上で、ドイツの文化がアイデンティティーを獲得したと見られているゲーテ時代と、このゲーテ時代の文化を政治的なドイツ統一のイデオロギーと化してゆく19世紀後半の状況を対比。分邦主義の影にありながら、時にはその政治的な遅れの故に、高度の内省的、批判的な文化を作り出してゆく一種のメカニズムを解読してゆきたい。容体的な研究対象は、天から与えられているのではなく、私たち自身によって成立するのである。

主な項目

日本におけるドイツ像。その由来と制約。アイデンティティーの問題。ゲーテ以前。ゲーテ時代。なんでこんな時代が？「教養」と「学問」——ドイツの大学。ロマン主義。文学時代の開幕と政治。分邦主義とベルリン。「遅れてきた国民」と戦争。ワイマール共和国とその文化。狂った戦争。何がドイツとして残ったか。解体への道？

＝ フランスの言語文化 ＝

〔主任講師：福井芳男（東京大学教授）〕

全体のねらい

フランス語はフランス文化を形成する基本的要素であり、それ自体世界に誇る文化財となっている。フランス語がいかなる場で用いられ、歴史的にどう成立したか、言語芸術がどうなっているかをフランス語を知らない人にもわかるように説明し、フランス語の美しさを守る心を日本語の美しさを守る心と関連させて考えてみたい。

回	テ　　マ	内　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	フランスという国 — 序 論 —	フランスとはどういう国であるか、フランスに関して人の持つイメージに触れながら、フランスの地理と歴史について基礎的な事柄を学ぶ。	福 井 芳 男
2	フランス語はどこで、どんな風に話されているか	フランス諸地方の方言、また特殊なブルトン語、バスク語に触れる。後半では世界のどこでフランス語が使われているか（ベルギー、スイス、ケベック、アフリカなど）を見る。	同 上
3	食べる楽しみ、話す楽しみ	料理を味わいながら、話をする、会話を楽しむ、これがフランス語をうけつぎ、また洗煉させる源泉であった。そして名高いフランス料理とはいったいどういうものか。	同 上
4	言　葉　は　遊　び — 社交、ギャラントリー —	言葉はまた人間の飾りにもなる。巧みに言葉を操り、社交を楽しむ、そしてサロンなどで女性たちを楽しませる。こういったことが、いかにフランス語を磨かれたものとしたか。	同 上
5	言葉は武器になる — マス・メディアと政治家の フランス語 —	フランス語に変貌を強めているのは、ジャーナリズムであるが、ここでフランス語はどう使われているか、フランス歴代政治家がいかに名文家であったか。	同 上
6	フランス語を守り伝える — 学校教育と辞書 —	フランス語の純粋さを守るのは、学校教育である。ここでどういう風にフランス語を教えているか、さらに辞書はどういう発展をとげたか、辞書がフランス語の護持にいかに関与したかを示す。	福 井 芳 男 井 村 順 一
7	フランス語の誕生と中世文化	ラテン語がカエサルスのゴール政治により入ってから、フランス語が成立する過程と、それとともに中世の文化がいかに花さいたかを述べる。	福 井 芳 男 新 倉 俊 一

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所　属・氏　名)
8	ヴェルサイユ宮の 栄光 ―近代フランス語 の確立―	17世紀古典主義時代に確立したフランス語について、そして18世紀全ヨーロッパに輝いたフランスの栄光を語る。	福 井 芳 男
9	パリに生きる人たち ―現代のフランス語―	現代フランス語のさまざまなをそれを使う人たち、場所などとの考察とともに述べる。	同 上
10	明快さと深さは矛盾しない ―散文の美しさ―	バスクルを中心にして、フランス語の明快さとは何か、それを駆使して人間の心の奥へ迫った思想家たちに触れる。	同 上
11	魂の深い淵から ―詩の美しさ―	ポートルールを中心にして、フランス語の詩の形、美しい詩の形の発見、さらにそこから人間の魂の幸福をいかに歌い上げたかを考察する。	同 上
12	人間の心をたずねて ―小説の伝統―	ブルーストを中心にして、人間の心の奥をたずねるフランス小説の伝統と、そして「書くこと」の意味を追求する近代・現代小説の流れとを考える。	同 上
13	人間の運命に対して ―喜劇と悲劇―	フランス演劇の典型として、喜劇のモリエール、悲劇のラシーヌをとりあげ、古典の伝統、フランス演劇の伝統について考える。	同 上
14	映像、旋律と 言葉とを結んで ―映画とシャンソン―	大衆芸術としての映画と言葉とのかかわり合い、そしてフランス映画の楽しみ、民衆の心を歌うシャンソンなど、現代の言語芸術について考える。	同 上
15	日本とフランス ―2つの言語文化 の触れ合い―	フランス人の日本観、日本語観の変貌、日本人のフランス文化、フランス語観の変遷を通じて、深いところでの日仏文化交流の道を考える。	同 上

＝ ロ シ ア の 言 語 文 化 ＝

〔 主任講師：本村彰一（早稲田大学教授）
 “ ：川端香男里（東京大学教授） 〕

全体のねらい

ロシア文学は、他の外国文学以上に日本人にとってなじみ深い文学であるが、それは19世紀のロシアの大家作家たちが日本でよく読まれたおかげである。これらの作家をとりあげて、新しい光をあて、かつその前の時代、後の時代とのつながりを考えて、ロシアの言語文化の諸相を明かにする。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	『イーゴリ軍記』	世界文学史上の傑作の一つとされている『イーゴリ軍記』をとりあげ、それと同時に、その時代の背景、ロシア文化の成り立ちを展望する。	木　村　彰　一 （早稲田大学教授）
2	ピョートル大帝 とエカテリーナ女帝	ピョートル大帝に始まりエカテリーナ女帝に至るロシア近代化・西欧化の激動の世紀 — 18世紀 — を文学の面から見てみる。	直　野　　　敦 （東京大学 教授）
3	プ　ー　シ　キ　ン　Ⅰ — その歴史的 위치 —	プーシキンはロシア近代化の一世紀の総決算として歴史の上に登場し、文字通り19世紀ロシア文学の黄金時代のとびらを開いた。ここでは、まず文学言語、文学意識、国民意識の面でのプーシキンの画期的な独創性を考える。	栗　原　成　郎 （東京大学助教授）
4	プ　ー　シ　キ　ン　Ⅱ — その作品 —	プーシキンの多種多様な作品を、その劇的な生涯をたどりつつ、説明する。	栗　原　成　郎
5	プ　ー　シ　キ　ン　Ⅲ — 『エヴゲーニイ・オネーギン』 —	プーシキンの代表作『エヴゲーニイ・オネーギン』をとりあげ、プーシキン文学の魅力について語る。	木　村　彰　一
6	ゴ　ー　ゴ　リ	ゴーゴリというきわめて特異な作家を通してロシア文学の持っている不思議な特質 — 芸術と思想の相克、リアリズムと幻想的な要素の混淆等 — について考える。	川　端　香男里 （東京大学 教授）
7	ドストエフスキイ Ⅰ — その時代 —	プーシキン、ゴーゴリという二人の先達の後に、ツルゲーネフ、ゴンチャロフ、ドストエフスキイ、批評家ベリンスキイらが続々と姿を現わす。ドストエフスキイが現われて来たこのような文学環境、時代背景をまず考えて見る。	直　野　　　敦

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	ドストエフスキイⅡ ーその生涯と作品ー	ドストエフスキイの波瀾にみちた生涯と、作品の歴史を展望する。	直　野　　敦
9	ドストエフスキイⅢ ー『罪と罰』ー	ドストエフスキイの代表作『罪と罰』を読み、この作品の意味、魅力をさぐる。	木　村　彰　一
10	トルストイⅠ ーその生涯と作品ー	19世紀ロシア最大の小説家トルストイはおそらく世界的に最も広く読まれた作家の一人である。しかしトルストイは決してやさしく読める作家ではない。その創作の秘密を、その作涯をたどりつつ解説する。	川　端　香男里
11	トルストイⅡ ーその思想ー	トルストイの同時代、および後代への影響は文学の面にとどまらず、むしろ思想的な面で大きかった。同時代の他の思想家たちや社会主義者たちと比較しながら、トルストイの思想について考える。	同　上
12	チェーホフⅠ ーその小説ー	ロシア小説の黄金時代は1870年代に終わりを告げるが、チェーホフはガルシン、コロレンコなどと共に、新しい短篇の時代を築く。リアリズムの時代の最後の栄光を担い、同時に20世紀を準備したチェーホフの独自性を解き明す。	島　田　　陽 (東京大学助教授)
13	チェーホフⅡ ーその演劇ー	今日にまでおよぶチェーホフの影響のうち、最も大きなものは「演劇」である。チェーホフ劇の成立とその本質について考えてみる。	同　上
14	ロシア革命と 詩人たちⅠ	20世紀初頭から1920年代までは、ロシア文化がブーシキン時代について活況を呈した時代であった。しかし、それは同時に戦争と革命の時代でもあった。マヤコフスキイを中心にすえてこの時代と文化のあり方を考えてみたい。	同　上
15	ロシア革命と 詩人たちⅡ	詩人は、激動の時代にあって、芸術と政治の相克に悩むーその典型的な例としてエーニンとバステルナークをとり上げ、文学と政治というソビエト文学に固有な問題に光をあててみる。	同　上

＝ 西 洋 古 典 ＝

〔 主任講師：久保正彰（東京大学教授） 〕

全体のねらい

古代ギリシア・ローマ時代（紀元前 700 年頃～西暦 500 年頃まで）に活潑に開花・結実した。叙事・叙情詩、喜劇・悲劇、歴史記述、旅行記、伝記、弁論・対話文などの諸種の文芸作品に直接に触れることによって西洋古代の言語、思想、芸術、生活についての理解を深めると同時に、古代人が打立てた世界の認識や人間・社会の自己把握、またさらに芸術・造形上の基本的約束ごとが、歴史の淘汰を蒙りつつもなお、中世・ルネサンス・近世を経て今日まで生きている部分があることを、具体的に紹介しつつ、現代人の中に息づく古代の生命を再認識してみたい。

主な項目

英雄叙事詩の世界；抒情詩人たち－原型とバリエーション；演劇の発祥、成立、伝承、古代歴史記述の目ざすところ；ギリシア・ローマ人の伝記文学、古代の文芸論；ことばと人間、等

＝ 物 理 科 学 史 ＝

－ 近代宇宙像を巡って－

〔主任講師：村上陽一郎（東京大学教授）〕
放送局：ラジオ関東

全体のねらい

近代科学的世界像の成立に焦点を当て乍ら、科学或いは物理学を“出来上った体系”として見るのではなく、宗教、芸術、文学、思想などとの全体的な関係のなかから生れて来る動的な経過として理解する。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	56/8 27	科学史とはどうい う学問か	発明発見の英雄物語、迷蒙から真理への単線的な進歩史観、あるいは宗教と科学の二項対立図式等、古い科学史の道具立ての欠陥を明らかにし、新しい科学史の方法とその理念を考える。	村　上　陽一郎 (東京大学助教授)
2	9/3	歴史の全体的な流れ	ヨーロッパの歴史の流れを、古代からビザンツ、イスラム世界に十分眼を配りながら概観し、12世紀ルネサンスを経て近代への道程を振り返る。	同　上
3	10	ギリシャ的 宇宙観の意味	天体现象に対する人間の関心を考えながら、インド・中国等の古代文明圏に比べてギリシアの宇宙観のもつ特色を理解する。	同　上
4	17	なぜ太陽中心説 (地動説)は捨て られたか	なぜ太陽中心説(地動説)は捨てられたか。ギリシアの太陽中心説とそれに対する批判の根拠を探りその一部が力学上の問題と結びついていることを明らかにする。	同　上
5	24	アリストテレス的 運動学	天上界と月下界の区別、強制運動と自然運動、運動力と速さ、真空嫌悪、慣性運動に関する考え方などの説明を通じて当時の世界像の大筋を理解する。	同　上
6	10/1	中　世　の　自　然　学	古代末期からイスラム世界を経て、12世紀ルネサンスによってスコラ学のなかに受け継がれた古代自然学の状況を考える。	同　上
7	8	ルネサンス期の変動	スコラ学への対抗文化として現われた15世紀末以降の新プラトン主義、ヘルメティズム、魔術的世界像の展開などを概観し、それが歴史の上でどのような意味をもっていたかを探る。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	10/15	コペルニクスと	新プラトン主義的な新思潮とスコラ学統のアマルガメーションとしてのコペルニクス説を取り上げ、同時にブルーノの魔術的な無限宇宙論との関係を見る。	村　上　陽一郎 (東京大学助教授)
9	22	ケプラー的世界像	新プラトン主義者としてのケプラーがどのような考え方の下で、惑星の運動の三法則に到達し、さらに惑星の運動の原因としての太陽という「万有引力」的着想を得たかを考える。	同　上
10	29	ガリレオの辿った道 (1)	ガリレオと落体の法則、「円慣性」の考え方、ガリレオの望遠鏡等を取り上げながら、ガリレオの仕事の意味を明らかにする。	同　上
11	11/5	ガリレオの辿った道 (2)		同　上
12	12	デカルトからニュートンへ	デカルトがガリレオの円慣性を否定し慣性法則を立てたことによって、ニュートンへの道が開かれたこと、それを受け継いだニュートンの仕事の展開を振り返る。	同　上
13	19	ニュートンの力学	ニュートンの全体的世界像、錬金術師としてのニュートン像などを顧みながらそのなかでの万有引力の法則の意味を理解する。	同　上
14	26	近代的な世界像の成立	ニュートンを受け継いだフランス18世紀啓蒙主義思想家たちが、如何に独自の世界像を立てたかを「ラプラスの魔」を参考にしながら考える。	同　上
15	12/3	終　　　　　　章	現在の我々の常識的科学観や歴史観がどれ程啓蒙主義の直接の所産であるかを反省し、改めて科学史を学んで来た意味を明らかにする。	同　上

＝ 生 命 科 学 史 ＝

〔主任講師：筑波常治（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

人間は自然をどのように理解してきたか、その研究のあとをたどり、成功した例だけではなく、失敗した例をもととして、現代への教訓を学びとるのが、科学史とよばれる学問である。この講義はそのねらいを、生物系の領域について実践する。どんな環境のもとで、科学が発達したか、それは人間生活にどんな影響を、功罪両面でおよぼしたか、歴史上のエピソードおよび全体の傾向を展望しながら、文化創造の一側面をえがいてみたい。

主な項目

科学史の見方、生物学の思想と方法、情物学と生命論、生命観の変遷、生物学とキリスト教、探検および顕微鏡により開かれた新世界、進化論の歩み、医学と生物学、農業と生物学

〔参考：＝生命科学史＝〕

＝ 生 命 の 科 学 史 ＝

－その文化的側面－

〔主任講師：筑波常治（早稲田大学講師）
放送局：ラジオ関東〕

全体のねらい

古代から時代順に学説の発展を追うことはせず、人間と生物の関係、生命への関心について、いろいろな角度から文化的に考察したい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	55/12 14	生物学史の見方	生物学史にかぎらず科学史をみる場合過去の学説を結論の当否だけで批評してはならない。その結論に到達するまでの過程を重視すること。フエン・ヘルモントの「ネズミの自然発生の実験」を例に説明する。	筑　波　常　治 (早稲田大学講師)
2	21	生　物　学　と　数　式	生物学をふくめて現代科学は自然現象を数量化してあらわす定量的方法を採用している。その先駆であるフエン・ヘルモントの「ヤナギの実験」を例に、現代生物学の研究手段について説明する。	同　上
3	28	二　つ　の　生　物　学	人間の生物にかんする知識は、二つの源泉をもっている。ひとつは身のまわりにいる多種多様な生物群との関係でありもうひとつは生命の正体をさぐるあくなき探求である。それぞれに由来する生物学の潮流を考える。	同　上
4	56/1 11	生　命　観　の　変　遷 (1)	生命とは何か、その正体をめぐる思想史をたどる。生氣論、機械論、全体論などが提唱された背景と根拠、それぞれの文化一般におよぼした影響について考える。	同　上
5	18	生　命　観　の　変　遷 (2)		同　上
6	25	生　命　観　の　変　遷 (3)生物学		同　上
7	2/1	生物学とキリスト教	キリスト教における自然界の秩序の思想、人間優位の思想は、いずれも現代の生物学説に直接間接の影響をあたえている。一見対立しているかにみえる両者をつなぐ底流に注目したい。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	8	探　検　と　生　物　学	探検によって未知の地域が開発されると、それまで知られなかった新種の生物が数多く発見された。この知識が分類学の母体となり、さらには進化論を生む一因になった。絵画の技術と生物学の関係にもふれたい。	筑　波　常　治 (早稲田大学講師)
9	15	顕微鏡　と　生　物　学	顕微鏡の出現もひろい意味では未知の領域への探検といえる。17世紀の顕微鏡学派の役割と、その後の生物学への影響についてのべる。切片技術、染色技術など、生物学の発達をささえた各種の操作と装置についてもふれてみたい。	同　上
10	22	進　化　論　の　歴　史 (1)	進化論の出現の背景を、自然科学と社会科学の両面にわたって解説する。その影響についても同様、狭義の生物学の範囲をこえて展望したい。進化の原因を説明しようとする代表的な学説を紹介するとともに、それぞれのかかえる問題点を指摘する。	同　上
11	3/1	進　化　論　の　歴　史 (2)		同　上
12	8	進　化　論　の　歴　史 (3)		同　上
13	15	病魔論　と　病因論	古代の医学には、病気の原因を、外部の超人的な何らかの力にもとめる立場と人体内部の生理的不調和にもとめる立場とがあって、それぞれ形をかえ現代まで受けつがれている。医学の歴史を概観する。	同　上
14	22	農業における生物 (1)	人間と生物がもっとも密接に関係しあってきた舞台のひとつが農業である。農業をとおして獲得された生物にかんする知識をまとめ、日本と西洋の比較文化論にまで言及してみたい。	同　上
15	29	農業における生物 (2)		同　上

＝ 宇 宙 の 進 化 ＝

(→宇宙の構造と進化)

〔 主任講師：小尾信弥 (東京大学教授)
放 送 局：テレビ朝日 〕

全体のねらい

太陽系、銀河系、銀河宇宙と階層化し、多様化している現在の宇宙の特徴や構造から、それが形成された100数十億年の歴史についての理解を深める。専門分野の講師によって、各分野の最前線の研究にもふれる。

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所 属 ・ 氏 名)
1	54/12 8	宇宙とはどういう ものか	現在の宇宙は生物を含む太陽系、銀河系、銀河宇宙ときわめて分化し階層的な構造をしている。その概観を示すとともに、宇宙における距離や時間の概念にふれるとともに宇宙探究の方法にも及ぶ。	小 尾 信 弥 (東京大学教授)
2	15	星 の 世 界	宇宙を構成する単位は銀河であるが、銀河を構成しているのは非常に多数の星 (恒星) と星間物質である。ここでは星の基本的な性質と統計的な性質を明らかにする。	小 尾 信 弥 (東京大学教授) 日江井 栄二郎 (東京大学助教授)
3	22	私たちの 銀 河 系	星の間の空間は空虚ではなく、ガスと微塵からなる星間物質で充たされている。さまざまな銀河系の天体と、銀河系の構造について述べる。また電波や赤外線観測で明らかにされた銀河中心核にもふれる。	小 尾 信 弥 (東京大学教授)
4	55/1 12	銀 河 の 世 界	銀河系の外には、数えきれない別の銀河が見られる。ここでは銀河の分布や運動などに見られる特徴をも述べるとともに、電波銀河やクエーサーなどの特異な天体にもふれる。	小 尾 信 弥 (東京大学教授) 寿 岳 潤 (東京大学助教授)
5	19	有限宇宙から無限宇宙へ	天動説が受け入れられていた時代からずっと、宇宙は有限であるとされてきた。16世紀末のG・フルーノに始まる無限宇宙の思想や、19世紀に提出されたオルバースのパラドックスなどを中心に、宇宙観の歴史と流れを述べる。	小 尾 信 弥 (東京大学教授) 村 上 陽 一 郎 (東京大学助教授)
6	26	相 対 論 的 宇 宙 論	原子力学と相対性理論は物理学を大きく変えたばかりでなく、私たちの宇宙観を根底からくつがえした。1916年に提出されたアインシュタインの一般相対論に基づく宇宙の構造を述べる。	小 尾 信 弥 (東京大学教授) 佐 藤 文 隆 (京都大学教授)
7	2/2	膨張宇宙のすがた	私たちの宇宙は現在膨張していると考えられている。一般相対論に基づき宇宙原理を仮定したフリードマン・モデルによって膨張宇宙が開いているか閉じているか、宇宙の観測をもとにその未来を考える。	小 尾 信 弥 (東京大学教授)

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	9	宇　宙　の　開　闢	開いているにせよ閉じているにせよ現在膨張を続けている私たちの宇宙はおよそ150億年以前に爆発をもって開闢した。3 Kの宇宙背景輻射の性質から、初期の宇宙を調べる。	小　尾　信　弥 (東京大学教授) 佐　藤　勝　彦 (京都大学助手)
9	16	銀　河　と　星　の　誕　生	開闢して3、4分後に水素とヘリウムの2元素が創られた初期の宇宙は、膨張するにつれて密度と温度が急激に下がり、100万年程度で物質は光より優勢になった。こうして、宇宙の物質は無数の銀河と星に分化した。	小　尾　信　弥 (東京大学教授) 松　田　卓　也 (京都大学助教授)
10	23	星　の エ　ネ　ル　ギ　ー　源　と　構　造	宇宙の初期に生まれた星が、現在もすべて輝いているわけではない。星の熱源は、高温度の中心部で起こっている原子核反応であるが、それが発見された歴史的背景や、それに基づく星の寿命や内部構造について述べる。	小　尾　信　弥 (東京大学教授)
11	3/1	星　の　進　化	中心部で熱を放つ原子核反応が進むにつれ、星の内部構造は変化し、光度や半径など外部の特徴も変化する。主系列星として誕生した星はこうして巨星、超巨星へと進化するが、星のモデルの立場からこれを考える。	小　尾　信　弥 (東京大学教授) 森　本　雅　樹 (東京大学助教授)
12	8	星　の　終　末	原子核燃料を使いきった重い星は、超新星の爆発により一生を終り、中性子星やブラックホールを残す。それは星の終末のひとつの姿であるが、太陽程度の質量の星は白色矮星として一生を終る。ここでは星の終末とその後の変化を述べる。	小　尾　信　弥 (東京大学教授) 杉　本　大　一　郎 (東京大学助教授)
13	15	ブ　ラ　ッ　ク　ホ　ー　ル	超新星の爆発で残されるブラックホールとはどういうものか。その研究の歴史的背景や、因果の地平線などその特徴、実際にどういう天体として見つけられているかなどを述べる。銀河中心のブラックホールやミニ・ブラックホールなどにもふれる。	小　尾　信　弥 (東京大学教授) 小　田　　　稔 (東京大学教授)
14	22	物　質　宇　宙　の　進　化	進化する星の内部では、水素から始まって種々の元素が合成される。超新星の爆発の際には超ウラン元素に至る重い元素がつくられる。ここでは、星の輪廻の考えに基づいて、現在の宇宙を構成する元素の起源を考える。宇宙進化の全体像にもふれる。	小　尾　信　弥 (東京大学教授) 増　田　彰　正 (神戸大学教授)
15	29	宇　宙　と　人　間	進化する銀河系のなかで、私たちの太陽系はおよそ50億年以前に誕生した太陽系の誕生と進化について述べ、それをもとに銀河文明やそれとの接触についても考える。最後に宇宙の進化とはなにかについてもう1度考えたい。	小　尾　信　弥 (東京大学教授)

＝ 地 球 の 歴 史 ＝
(→地球の科学)

〔 主任講師：竹内 均 (東京大学教授)
放 送 局：テレビ朝日 〕

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	53/12 9	星の進化と元素の 起源	地球や私たちの体をつくる元素が、ど のようにしてできたかを知るには、主系 列星から超新星の爆発へと至る星の進化 のあとを明らかにしなければならない。	竹 内 均 (東京大学教授) 小 沼 直 樹 (筑波大学助教授)
2	16	銀 河 系 と 太 陽 系	私たちの太陽系が属する銀河系には、 1000億個もの恒星が存在し、宇宙にはこ のような銀河系が100億個もあるという、 銀河系内での太陽系の位置とその特徴を 明らかにしてみたい。	竹 内 均 (東京大学教授) 松 田 卓 也 (京都大学助教授)
3	23	太 陽 系 の 起 源	太陽系の起源については、昔から多く の説があった。それらを展望し、起源論 における現在の主流である凝縮説を紹介 したい。	竹 内 均 (東京大学教授) 松 井 孝 典 (東京大学助手)
4	54/1 13	岩石と地球の年令	地層や化石の研究だけからではわから ない岩石の絶対年令を岩石中の放射性元 素を使って決める方法について説明する。 「地球の年令」がどのようにして決めら れ、どのような意味を持ったものである かについても説明したい。	竹 内 均 (東京大学教授) 小 嶋 稔 (東京大学教授)
5	20	地球と月のたどっ た歴史	人間の月着陸によって、月のたどった 歴史が、ある意味では地球のそれよりも 明らかになった。その結果を参照しつつ、 地球と月のたどった一般的な歴史のすじ みちを明らかにしたい。	竹 内 均 (東京大学教授) 武 田 弘 (東京大学助教授)
6	27	造山運動と大陸の 成長	大陸と海洋の接する部分の海洋側に地 向斜と呼ばれるくぼみができ、そこにた まった堆積物がやがてそびえたって山脈 となり、大陸の成長がおこる。そのよう な大陸成長の具体的なからくりを明らか にしてみたい。	竹 内 均 (東京大学教授) 河 野 長 (東京大学助教授)
7	2/3	大陸と海洋と大気 の起源	火山作用にともなって地球内部からし ほりだされてきた水蒸気と火山ガスが集 積して海洋と大気が作られた。地球科学 が明らかにしたこのような大陸と海洋と 大気の起源について説明したい。	竹 内 均 (東京大学教授) 松 尾 禎 士 (東京工業大学 教授)

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	10	生　命　の　誕　生	これまで見つかった地球上で最古の生物の化石は約32億年前のものである。一方実験室内では、無機物から有機物を作る実験が活発におこなわれている。これらの2つの立場から、地球上での生命の誕生についてふれてみたい。	竹　内　　均 (東京大学教授)
9	17	大気の変化と生物	火山ガスが集積して地球大気ができたとすれば、その大気は金星や火星のそれと似た炭酸ガスのようなものであるはずである。このような炭酸ガスの大気を現在のよう酸素の大気に変えたのは、光合成をする植物である。	同　上
10	24	地　質　時　代	今から約6億年前の古生代カンブリア紀のはじめから、化石を残すような生物が地球上に大量にあらわれた。それ以後の古生代、中生代および新生代のころの地球の歴史をたどってみたい。	同　上
11	3/3	大陸と極の移動	約1億5000万年前には、地球上の大陸はすべて集まって超大陸パンゲアを作っていた。その後、このパンゲアが分裂移動して、現在のよう大陸の配置になった。大陸が移動しただけでなく、極もまた地球上を移動したことが確かめられている。	同　上
12	10	プレート テクトニクス	現在では、大陸だけでなく、海底をも含めた地球の表面が約10枚のプレートに分かれ、それらが独立に運動していると考えられている。プレート(板)テクトニクス(構造地質学)と呼ばれるこの考えについて、詳しい説明をしてみたい。	同　上
13	17	地震と火山活動	地球が今もなお生きており、大陸と海洋と大気の成長が今もなお続いていることを物語るのは、地震と火山である。こういう立場にたって、地震と火山活動について説明する。	同　上
14	24	氷　河　時　代	最近約10億年間に、4回の氷河時代があった。1つの氷河時代の中では、10万年程度の時間スケールで、氷期と間氷期とが交代する。現在は最後の氷河時代に属する間氷期であるなどとも言われている。	同　上
15	31	人間活動と地球	現在の人間活動の規模は、自然のままの地球のバランスをくずす程度にまで大きくなっている。このような立場にたって、環境汚染、エネルギー消費、異常気象といった問題についてふれてみたい。	同　上

＝ 地 球 像 の 変 遷 ＝

〔主任講師：奈須紀幸（東京大学海洋研究所長）〕
放送局：テレビ朝日

全体のねらい

地球についての人々の理解の深まりの歴史を紹介するとともにいろいろな時代（例、古生代）における地球の姿を再現する。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/8 30	宇宙観の変遷Ⅰ ーギリシャ的な宇宙観の特色ー	古代文化圏の中で宇宙に関する特徴的な見方（例えば地球説、太陽中心説、地球中心説などを含む。）を持っていたギリシャ人達の宇宙に対する見方を探る。	奈　須　紀　幸 （東京大学） 海洋研究所長 村　上　陽一郎 （東京大学助教授）
2	9/6	宇宙観の変遷Ⅱ ー近代的な宇宙観の形成ー	ギリシャ人の宇宙観がビザンツ・イスラムを経て中世ヨーロッパに伝えられ17世紀に科学的な宇宙観の誕生を迎える事情とその後の展開を探る。	同　上
3	13	固体地球研究の進展	現在知られているところでは、固体地球は層状構造をしている。このような構造の解明はどのように行われてきたのか。また、存在する物質はどのようなものと推定されているのかを学ぶ。以前人々は地球の内部についてどのように想像していたのかという点についても触れる。	奈　須　紀　幸 （東京大学） 海洋研究所長
4	20	大気研究の進展	船乗り達の経験、天気図上に見られる気団、前線、高・低気圧、高層気象観測で発見された惑星波、ジェット気流などが地球規模の大気大循環像に組み込まれてきた。その変遷をあとづける。	奈　須　紀　幸 （東京大学） 海洋研究所長 浅　井　富　雄 （東京大学教授）
5	27	海洋研究の進展	海洋の顕著な現象である循環に焦点を合わせ、有史以来の海洋循環像の変遷を概観する。海洋循環の研究は、まだ未解決の問題が多く残されており、その解明は今後に待たれる。最近の研究に力点をおいて述べると共に、将来の研究をも展望したい。	奈　須　紀　幸 （東京大学） 海洋研究所長 寺　本　俊　彦 （東京大学教授）
6	10/4	地質時代の確立	いろいろな時代に形成された地層や岩石を、どのように正確に識別し、順序正しく時代区分できるかが、地球の歴史を学ぶ第一歩となる。化石を使ったり、放射性同位元素を用いたりして、次第に地質時代が確立されてゆく。	奈　須　紀　幸 （東京大学） 海洋研究所長 浜　田　隆　士 （東京大学教授）
7	11	大陸の研究の進展	陸地は太古の昔から同じ形の陸だったのであろうか。ヒマラヤのような高い山地から、なぜ海の生物の化石が見出されるのであろうか。陸の研究のためには、陸地そのものの調査だけではなり立たないことがわかってきた。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	18	太平洋底研究の進展Ⅰ ー調査技術の進歩に伴う解明の歴史ー	近代の深海底の研究は、19世紀後半のチャレンジャー号世界周航に始まる。その後、音響測深の進歩、底質採取法の進展、地震波による解析の進歩によって大洋底の姿は次第に明らかにされていった。その過程について学ぶ。	奈　須　紀　幸 (東京大学) 海洋研究所長
9	25	太平洋底研究の進展Ⅱ ー太平洋底拡大の概念の確立ー	ウェゲナーの大陸移動説の見直しと深海底研究の進展、特に中央海嶺系の連続性の発見は太平洋底拡大という概念を生み、やがてプレートテクトニクスの概念の誕生にまで発展した。その経緯について述べる。更にチャレンジャー号の深海掘削による上述の概念の検証に言及する。	同　上
10	11/1	古　生　代　の　地　球	地球上に生物が出現し、化石として大量に見出されるようになってから後を顕生累代といい、その前半が古生代である。植物が初めて陸上に進出し、海中では三葉虫が栄えた。古生代の海陸分布は現在と大きく異なり、気候もまったく違っていた。	奈　須　紀　幸 (東京大学) 海洋研究所長 浜　田　隆　士 (東京大学教授)
11	8	中　生　代　の　地　球	古生代から中生代への移り変わりは、生物界の激動期であった。アンモナイトと恐竜の全盛をほこる中生代の地球は、古生代とどのように違っていたのであろう。そしてその恐竜達はなぜ中生代の終わりに姿を消してしまったのであろうか。	同　上
12	15	新　生　代　の　地　球	新生代は、現在地球上に見られる大山脈が形成され、現代型の生物が発展した時代である。ここでは、現在の地球上の自然景観や生物界がどのようにして出現してきたか、また、新生代末の氷河時代の実態がどんなであったかを学ぶ。	奈　須　紀　幸 (東京大学) 海洋研究所長 鎮　西　清　高 (東京大学助教授)
13	22	日　本　の　古　生　代・ 中生代	化石や測定年代をまとめて組みあげられた日本の古生代・中生代の有様は、地球史の中でどのように位置づけられるのであろうか。フズリナやアンモナイトからわれわれは何を学べるのだらう。日本列島はやはり昔も列島の形をしていたのであろうか。	奈　須　紀　幸 (東京大学) 海洋研究所長 浜　田　隆　士 (東京大学教授)
14	29	日　本　の　新　生　代	化石や岩石の測定年代からまとめられる日本の新生代の有様はどのようなものであったか。さらに、古第三紀、新第三紀、第四紀と分けて調べた場合の日本の姿はどのようなものであったかを学ぶ。	奈　須　紀　幸 (東京大学) 海洋研究所長 鎮　西　清　高 (東京大学教授)
15	12/6	日　本　列　島　周　辺　の 海底の姿	現在の日本列島の姿を支えている周辺の海底の姿は一体どのようなものか。大陸棚の存在に着目し、古久慈川の埋積谷の形成過程や富山湾入善沖埋没林の発見と大陸棚について学ぶ。また、チャレンジャー号の海底掘削によって発見された東北日本沖の親潮古陸について述べる。	奈　須　紀　幸 (東京大学) 海洋研究所長

＝ 海 洋 の 科 学 ＝

(→ 大 気 と 海 洋)

〔主任講師：奈須紀幸（東京大学海洋研究所長）〕
〔放送局：テレビ朝日〕

全体のねらい

地球表面の7割をおおう広大な海洋の本質を知るために、色々な専門分野にわたって学ぶ。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	55/8 31	海　洋　探　究　の　歴　史	海の科学的探検の時代から現今の海洋実験の時代までにわたり、主として海洋と海底の構造と運動の面から探究の成果を概観し、海洋の科学へと誘うよすがとする。	奈　須　紀　幸 (東京大学) 海洋研究所長 寺　本　俊　彦 (東京大学) 海洋研究所教授
2	9/7	海　洋　大　循　環	海洋の物理現象の中でも特に顕著な海洋大循環について、その成因、構造について説明し、それらを更に深く理解する上で必須な課題である人工衛星からの観測や深層の循環の観測について述べ、関連する重要なトピックスである海洋—大気系の大規模変動や海洋温度差発電について触れる。	同　上
3	14	黒　　　　　　潮	北大西洋における湾流とならんで顕著な海流である黒潮を中心とする黒潮循環の構造、その著しい変動である蛇行と冷水渦や暖水化、それらと同じ程度のスケールをもつ中規模擾乱等についての最近の研究を紹介する。	同　上
4	21	波　と　潮　汐	海岸では常に沖から岸に向かって波が打ち寄せている。この波はどこで作られどのような性質があるのか、実験を行って説明する。特殊な波として、高潮と津波に触れる。次に潮汐のメカニズムと水理模型による瀬戸内海の潮流の研究について話したい。	木　村　龍　治 (東京大学海洋) 研究所助教授 奈　須　紀　幸
5	28	海　洋　と　気　候　変　動	地球大気生成以来、気候は変動をくり返しながら今日に至っている。気候変動の仕組みについては不明な点が多いが、これまでの変動の実態と海洋の果たしている役割について述べ、最後に、人間活動の気候変動に及ぼす影響についてふれる。	浅　井　富　雄 (東京大学) 海洋研究所教授 奈　須　紀　幸
6	10/5	海　岸　地　域　の　気　象	陸地と海洋の熱的・動的特性に大きな差異があるため、海岸地域には特有の気象現象が生じる。一日周期の海陸風や広範囲に見られる一年周期の季節風がその例である。これら沿岸域の気象の特徴・機構・影響等について述べる。	同　上
7	12	海　の　物　質　循　環	生物の活動を通じて、いろいろの元素が循環している。酸素、炭素、窒素に注目して、海の中に残された生物活動の軌跡をたどることによって、その動き、特徴などについて探る。生物生産や沿岸の富栄養化の問題との関係についてもふれる。	服　部　明　彦 (東京大学) 海洋研究所教授 奈　須　紀　幸

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	19	海流と生物資源	わが国は、四面海にめぐらされ、豊かな海の幸にめぐまれている。このような海の生物資源の生産は日本近海では、黒潮や親潮と呼ばれる暖流や寒流と密接な関係をもっている。世界の海のどのような海流が、どのように生物生産と関係しているかを探ってみよう。	平野敏行 (東京大学) 海洋研究所教授 奈須紀幸
9	26	漁業資源とその利用	海洋漁業資源は決して無尽蔵ではない。しかし年々再生産されるから、資源の利用方法を適正に保つように努めれば、長期間安定した漁獲を得ることが可能である。このことは、今日の国際漁業情勢の中で特に重要性を増している。	青山恒雄 (東京大学) 海洋研究所教授 奈須紀幸
10	11/2	海洋の生体系	大小の部分生体系に別れ、200m 以浅の浅海系には植物の光合成活動があるが、深海系では微生物と動物のみとなる。沿岸域と外洋域とでは種類も生物量も異なるが、近年内湾の有機汚濁が外洋にはみ出す傾向がみられる。	堀越増興 (東京大学) 海洋研究所教授 奈須紀幸
11	9	底生生物の生活	海底やその直上の水中には、表層や中層の水中とは異なる海底の生活に適応した種類の生物がすむ。これらは生物群集をなしており、植物連鎖などを通じて互いに関係して生活を送る。陸上のミミズのように堆積物を攪拌する現象が知られるようになった。	同上
12	16	深海底の生いたち	深海底は中央海嶺で生まれ、横に数cm/年の速さで移動していることが数多くのデータから示されている。海底が生まれ出る場所の様子についてその構造や形態について詳しくのべ沖縄トラスマリアナトラフなども小さいながらも海底が生まれつつあるか生まれたばかりのところについても述べる。	小林和男 (東京大学) 海洋研究所教授 奈須紀幸
13	23	深海底の沈み込み	深海底は海溝の下でななめに陸の下に沈み込んでいる。その形は深発地震面の様子が推定されているが、最近では地震の波の伝わり方からも確認されている。沈み込みの形は地域によってもかなり異なっている。このちがいは地震の起り方や火山活動の歴史にも深く関係している。	同上
14	30	大陸棚の生い立ち	大陸の周辺には海底傾斜のゆるやかな大陸棚がひろがっている。その外縁の水深はほぼ120～130m程度である。このような海底地形が生じたのは氷期・間氷期の繰り返しに対応した海水準変動が原因であることが判明した。その経緯について説明する。	奈須紀幸
15	12/7	海　　岸	海岸は岩石海岸と砂浜海岸及び内湾の干潟に大別される。この様な海岸の地形や堆積物の分布について分類を行う。さらに、砂浜海岸の沖合いにおける波や流れのパターンを知り、砂浜海岸の形成の機構について学ぶ。	同上

＝ 生 態 学 概 論 ＝

〔主任講師：岩城英夫（筑波大学教授）〕

全体のねらい

個体 — 個体群 — 群集の各レベルにおける生物と無機的环境、生物と生物の関わり合いを具体的事例をあげて講義し、生物的自然の構造と機能、生物群集や生態系の多様性、全体性およびその動的平衡についての理解を深める。講義を通じて、生物個体と環境、個体群の動態の問題を扱う個生態学、生物群集や生態系の構造と機能の問題を扱う群生態学の分野における基本的な原理と概念を理解させる。

主な項目

- (1) 生物と環境要因
- (2) 個体群の成長と調節
- (3) 群集（群落）の構造と分布
- (4) 種間関係（競争、捕食、寄生など）
- (5) 群集の遷移
- (6) 一次生産とエネルギーの流れ
- (7) 生態系の物質循環

＝ 鉱 物 資 源 と そ の 開 発 ＝

(→ 現 代 資 源 論)

〔 主任講師：山口梅太郎（東京大学教授）
放 送 局：ラジオ関東 〕

全体のねらい

資源問題が論議されている割には、鉱物資源について、例えば、鉱物資源と人間とのかかわり合いや、資源の分布や資源量の問題、資源を獲得し、利用するための技術、更に、わが国としてどう対応すべきかといったことがあまりにも知られていない。このセミナーでは鉱物資源の諸問題を、その開発と利用を中心に、技術的側面から概説する。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担 当 講 師 (所 属 ・ 氏 名)
1	56/8 29	鉱 物 資 源 と 文 明	火打石としてのフリント、やじりとしての黒曜石など、石器時代を象徴する資源をはじめとして、青銅器時代、鉄器時代、現代に至る文明にかかわる資源の役割りを概説する。	山 口 梅 太 郎 (東 京 大 学 教 授)
2	9/5	資 源 の 有 限 性 について	鉱物資源は農産資源、水産資源などと異なり、栽培することのできない資源であって、掘り取ればいずれは無くなってしまう。1970年に発表されたローマクラブの「成長の限界」などを中心に、鉱物資源の有限性を論ずる。	同 上
3	12	わが国の鉱物資源 とその確保	わが国は古くから開発された鉱山国であるが、今日では、その資源需要の大部分を海外からの輸入に依存している。わが国の活動を支える鉱物資源確保の状況それを支える経済、技術などを概説する。	同 上
4	19	金 属 鉱 物 資 源	鉄、銅、コバルトなどの金属資源について、その鉱床、分布、埋蔵量など、いくつかの金属を例にとって解説し、その問題点を論ずる。	武 内 寿 久 禰 (東 京 大 学 教 授)
5	26	非 金 属 鉱 物 資 源	石灰石、硫黄、燐鉱石など非金属鉱物もまた地下から得られる重要な鉱物資源であるが、それぞれ特長のある資源問題をかかえている。	同 上
6	10/3	核 燃 料 鉱 物 資 源	7回以下のエネルギー鉱物資源と関連して、ウラン、トリウムなどの核燃料鉱物資源について解説する。併せて、リチウムやジルコニウムなど原子炉材料として重要な資源についても触れる。	同 上
7	10	エ ネ ル ギ ー と そ の 資源	地熱、太陽、水素など新しいエネルギー資源を含めて、将来のエネルギー供給のバランスを展望し、その中における石油や石炭などの化石燃料資源の占める重要性を論ずる。	富 永 博 夫 (東 京 大 学 教 授)

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	17	石炭・石油・天然	石炭、石油、天然ガスなどはエネルギー資源であるばかりでなく、重要な工業原料である。これらの利用の歴史、その化学、将来を展望する。	富　永　博　夫 (東京大学教授)
9	24	オイルサンド、オイルシェールなど	石油の代替資源といわれるオイルサンド、オイルシェールとはどんなものか、その他の代替資源はあるのか等、石油代替資源の特性と開発の可能性を探る。	同　上
10	31	鉱山とその開発(I)	鉱物資源の供給源である鉱山の開発はまず鉱床の発見からはじまる。鉱床の性質、鉱床探査の技術、発見した鉱床の評価、開発の可能性の検討などをまとめる。	武　内　寿久禰 (東京大学教授)
11	11/7	鉱山とその開発(II)	鉱床をどのように開発し、鉱石を採掘する技術について述べる。露天掘、坑内採掘、砂鉱床の採掘、あるいはインプレースリーチングなど、いろいろな採取方法が行われる。	山　口　梅太郎 (東京大学教授)
12	14	鉱山とその開発(III)	鉱山から掘り出された鉱石は、多くの場合、そのままでは利用できない。鉱石の中の不用な部分を取除き、品位を高める選鉱の技術、鉱石から金属を取出す製錬の技術について述べる。	井　上　外志雄 (東京大学助教授)
13	21	海から得られる鉱物資源	海水に溶けている各種の塩類も重要な鉱物資源であり、最近ではウランを採取することも試みられている。海岸や浅い海に堆積している砂利や砂、錫やチタンなど。さらには深海底に知られるマンガン団塊など、海には多くの資源がある。	山　口　梅太郎 (東京大学教授)
14	28	未利用資源とリサイクル	マンガン団塊やオイルシェールなどのほかにも、まだ十分に利用されていない資源は多い。これらの未利用資源の有効利用を考え、また、利用された後捨てられる資源をもう一度活用するリサイクルの問題を考える。	井　上　外志雄 (東京大学助教授)
15	12/5	資源開発と環境問題	鉱山をはじめとして、鉱物資源の開発は、どうしても自然環境の破壊を伴うことになる。資源の確保と自然環境の保護をどのように調和させたらよいか、破壊された環境をどうしたら回復できるのか等を考える。	山　口　梅太郎 (東京大学教授)

＝ 微 粒 子 の 科 学 ＝

(→ 物質の科学 I)

〔 主任講師：北原文雄 (東京理科大学教授)
放 送 局：テレビ朝日 〕

全体のねらい

物の性質の一断面として、我々の生活に関連の深いコロイドを取りあげる。コロイドは微細粒子であるが故に界面という二次元世界の性質—表面張力、吸着、ぬれ、界面電気など—に深くかかわっていることをみて、これら界面の性質を調べる。ついでコロイド—あわ、エマルジョン、分散系—の生成、寿命 (安定性)、消滅の原理と応用について述べる。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	56/12 13	コロイドと界面の 定義と分類 —序論として—	物質は、気体、液体、固体の三状態をとるが、これらを微粒子にすると、特殊な性質を示すようになる。これをコロイドという。コロイドは、その表面積が著しく大きいので界面の性質に支配される。このコロイドと界面の関係を調べ、コロイドの分類を行い次回以下の準備をする。	北 原 文 雄 (東京理科大学教授)
2	20	粒子コロイドの生成とその性質の概観	コロイドのうち、粒子コロイドはその生成にある条件を必要とする。それを主にエマルジョン、ゾルについて調べ、粒子の大きさ、形とコロイドの沈降や濁り色との関係を見る。	同 上
3	27	界面活性とミセルコロイド	溶液の表面張力測定から海面活性という現象が見出された。界面活性と吸着との関係を調べ、表面張力測定から、臨界ミセル濃度 (CMC) を求め、ミセルコロイドの存在を知る。	同 上
4	57/1 10	界面活性剤の性質	界面活性剤の特性としてのミセルコロイド形成と吸着性に関連する現象を調べる。すなわち、ミセルの存在による不溶性物質の溶解 (可溶性)、ミセルの触媒作用や起泡、乳化、分散などの作用も調べる。	同 上
5	17	膜 の い ろ い ろ	前章の気・液界面の吸着膜は単分子膜であるが、この外に二分子膜、多分子膜があり、これらは生体膜、工業用膜としても重要な意味をもつ。これら膜の形態、性質、応用などについて調べる。	同 上
6	24	吸 着 の 界 面 科 学	気・液界面の吸着の他に、固体表面への気体の吸着があり、これは固体表面の改質、触媒作用の立場から重要である。気・固界面の吸着に関する現象、その応用、また溶液から固体表面への吸着その応用についても述べる。	同 上
7	31	ぬれの界面科学	“ぬれる”という日常的な現象は、界面化学にとって重要な意義をもつ。浸透接着現象もぬれの一面であり、ぬれは工業的にもよく利用されている。ぬれの定義、ぬれに関連する現象、ぬれの応用などについて述べる。	同 上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/7	界　面　電　気　現　象	固体と溶液の界面には、一般に電気が存在している。この界面電気について、生成の原因を調べ、結果として生成している電気二重層の性質、その調べ方について述べる。これは次回の重要な伏線である。	北　原　文　雄 (東京理科大学教授)
9	14	コロイドの安定性と界面電気	粒子コロイドは本来不安定なものであるが、作り方によってはかなり安定で、安定なコロイドには、利害得失がある。コロイドの凝集(不安定化)の実験からコロイドの安定化の原因の一つに電気二重層の存在があることをみ、電気二重層従ってコロイドの安定性に及ぼすいくつかの因子について調べる。	同　上
10	21	コロイドの安定性と高分子	高分子はコロイドの一つであるが、現在は、高分子化学として、一つの分野をつくり、大きな分子という見方をしている。粒子コロイドは高分子を吸着するので、凝集することもあるし、より安定化することもある。これらの事情について、高分子溶液の性質と関連させつつ調べる。	同　上
11	28	エ　マ　ル　シ　ョ　ン	微細な液滴が他の液中に分散している場合をエマルジョンという。エマルジョンは我々の生活になじみが深い。エマルジョンはどうしてでき、どうして消滅するか(乳化と解乳化)、また、その性質応用について調べる。	同　上
12	3/7	あ　　　　　　わ	あわもまた我々にとってなじみの深いものである。起泡と消泡、何がそうさせるのか、あわの性質や応用について述べる。	同　上
13	14	レ　オ　ロ　ジ　ー	物の流れ方、くずれ方などを調べるレオロジーはコロイドの性質を調べるのに大変役に立つ。レオロジーの基礎について述べ、とくに粘性のコロイドにおける役割を調べる。	同　上
14	21	分子の集合状態としてのコロイドー別の見方からー	コロイドを分子の集合状態という立場から見直すことは現代的意義がある。とくに分子の配向的集合体として、単分子膜、ミセル、逆ミセル、二分子膜、多分子膜、液晶などを見直すことができる。	同　上
15	28	コロイド・界面と生活	コロイド科学、界面科学は我々の生活と深いつながりがあることは、しばしば述べたが、最後にこれらを見直し、まとめてみたい。この面からの学問への刺激もあり得るであろう。たとえば、環境問題とのつながり、新しい材料の開発など。	同　上

＝ 脳 と 行 動 ＝

〔主任講師：伊藤正男（東京大学教授）〕

全体のねらい

脳の研究は、現代生物科学の極めて重要な課題の一つであり、その医学上の応用や人工知能開発への波及効果に対する期待も大きい。この講座では、現在自然科学の手法を動員して行われている脳の研究の成果をもとに、脳の構造とその働き方の仕組みを解説する。更に、脳と行動の関わりを考察し、脳と心の問題に言及する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	脳　　の　　働　　き	脳とは一体何であろうか。動物の行動に現われるその複雑で精妙な働きは如何にして生まれるのであろうか。そして、どのようにして脳は遂には我々の精神の担い手になるのであろうか。現代の自然科学はこれらの問いにどう答えるのであろうか。	伊　藤　正　男 (東京大学教授)
2	ニ　ュ　ー　ロ　ン	脳は膨大な数のニューロンから成っている。ニューロンは電気信号を発生し、伝播させ、特殊な化学物質を分泌して相互に情報を伝え合う。ニューロンとニューロンの間をつなぐシナプスは脳の働きにとって最も重要な微細構造である。	同　上
3	脳　　の　　構　　造	多数のニューロンとその突起が集まって核と呼ばれる集塊を作り、また、美しい皮質構造を作る。脊髄、延髄、小脳、橋、中脳、間脳、大脳と呼ばれる脳の各部分は、それぞれ特徴のある構造をしており、脳の働きの上で違う役割を分担している。	同　上
4	反　　射　　系	脳の働きのもっとも底辺にあるのが反射である。われわれの日常行動には数多くの反射が含まれている。多数の反射をうまく組合わせて実施する働きは脳に特有のものである。反射における信号の伝わり方を調べてみよう。	同　上
5	脊　髄　下　降　路	延髄より上位の中枢から脊髄へ何本もの下降路が降りていく。これら下降路の信号は、自動車のギアのように脊髄で行われている反射を活動させたり、停止したり、種類を切り換えたりする働きがある。代表的な下降路の構造と作用を調べる。	同　上
6	小　　　　　　脳	小脳は直接、あるいは脊髄下降路を介して間接に反射系につながり、反射の働きを正確な、円滑なものにする。環境状況に応じて反射を適応的に修正したり、多くの反射活動の協調をとるのも小脳の役目であり、所謂運動学習の中核となっている。	同　上
7	大　脳　基　底　核	大脳の深部にある幾つもの核の集合体で、運動の自動的な制御の中核である。これが病気で侵されると、いろいろな型の不随意運動が起ってくる。大脳基底核は運動制御における自動的な安定装置の役を担っているようである。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	感　　覚　　系	皮膚、目、耳、鼻、舌で受けたいわゆる5感の情報は神経信号に変えられて上位の中樞へ送られる。脳はどのようにしてこれらの情報を分析し、われわれが身を置いている外界のイメージを脳の中に作り出すのであろうか。	伊　藤　正　男 (東京大学教授)
9	随　意　運　動	われわれは意のままに運動を行うことができるが、その仕組みはどうなっているのであろうか。大脳の運動領野で生まれた司令信号が脊髄に送られて運動を引き起す過程を分析してみる。	同　上
10	情　　　　　　動	われわれの感情の根底にあるのは、外界からの刺激に対する生物学的な価値判断である。益になるものは喜びを、害になるものは怒りや怖れを引き起す。この価値判断機構は視床下部にあり、大脳辺縁系に助けられて働くと思われる。	同　上
11	本　能　行　動	摂食、飲水、性行動など本能的な行動は情動と密接な関係があり、大脳辺縁系、視床下部が中枢として働く。視床下部を中心に広がる報酬系、罰系とよばれる脳の領域には行動の結果に対して報酬が与えられたか否かの判断機構がある。	同　上
12	睡　眠　と　覚　醒	通常の睡眠はノンレム睡眠と呼ばれるがこれが時折レム睡眠と呼ばれる別の型に切り変わる。覚醒とこれら2型の睡眠のリズムが作り出される脳内の仕組みについて考えてみよう。合せて脳内にある生物時計のはたらきを調べてみよう。	同　上
13	記　憶　と　学　習	脳の記憶装置は、使い方によって信号の伝わり方が変化する可塑性シナプスにより作られている。最近、幾つかの可塑性シナプスの働き方が判ってきた。これらのシナプスが神経回路網に組込まれて脳の学習機能が生まれる。	同　上
14	大　脳　連　合　野	大脳皮質の感覚野、運動野の間を占める連合野は動物が高等になるにつれて発達し、人間では大脳表面積の大半を占めるに至る。ここに言語野が生まれ、認識、思考、直観的判断、行動のプログラミング、自我意識などの高次機能が含まれる。	同　上
15	脳　　　　　と　心	反射に始まって大脳連合野まで、脳の構造と機能について一步一步登ってきたが、最後に「脳と心」の問題を考えてみよう。われわれの心は果して脳の働きとして最終的にとらえるのであろうか。	同　上

＝ 生 命 の し く み ＝

〔主任講師：木原弘二（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

“生命のしくみ — 化学の立場 I” で一通り学んだ点を基礎知識として、これらの知識の根拠を改めて確かめ、また、補充発展させることを目的としている。主に、個々の独立した問題を取り上げて、基礎的な紹介では触れることのできなかった点を検討し、現代の生化学が直面している問題を二・三紹介する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	生 命 観 と 物 質 観	物質についての考え方をギリシャ時代から中世、近代へと辿り、その間、生物の働きについて生命に特有な力やしくみが考えられてきたことを紹介し、現代での考え方と対比させてみる。	木 原 弘 二 (慶応義塾大学教授)
2	有 機 化 学 の 確 立	18世紀末ごろから、多数の有機化合物が発見され確認されてきた。19世紀初頭は、無機化合物の研究が華々しい成果を挙げていた頃で、無機物質と有機物質との区別が明確になり、その後の生化学の発展の方向が確かめられていった。	同 上
3	尿 酸 と 痛 風	尿酸は、精製され確認された有機化合物の最初のものの一つである。この物質の血液中濃度が高い痛風の発作がおこる。ヒトという生物に特有の二つの事情が、この病気の起こるための条件となっている点を解説する。	同 上
4	ビ　タ　ミ　ン　C	私たちの健康な生活には、適量のビタミンを摂取する必要があるが、ビタミンの必要性が明らかにされてきた研究の歴史は、物質を研究する上での考え方を教えている。ビタミンCを例にして、この点を紹介する。	同 上
5	コ　ラ　ー　ゲ　ン	ビタミンCの欠乏で、もっとも影響を大きく受けるのは、コラーゲンである。このタンパク質は、特殊なアミノ酸が含まれている点、アルファ・ラセン構造が主構造となっていない点など、標準的なタンパク質と異なっている。	同 上
6	A　B　O　型　物　質	赤血球の表面には、さまざまな血液型を決定している物質が存在している。血液型については、A B O 型が最初に発見された(1801)。しかし、この型を決定している物質が確認されたのは約半世紀後で、この例について糖指質の研究を紹介する。	同 上
7	白 血 球 抗 原 型 (H L A)	腎臓移植などの臓器移植の際に問題になるのは、移植片に対する拒絶反応である。この免疫現象には、白血球の細胞膜表面の抗原が関係していて、その抗原型はきわめて多数で、A、B、C、D、DR の5群に分類されている。	同 上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	タンパク質の分解	タンパク質は、赤血球などの場合のように、細胞全体として分解される場合の外にも、細胞の内部で絶えず分解されている。細胞内タンパク質が分解される過程では、それぞれのタンパク質は異なった速さで分解され消失していく。	木　原　弘　二 (慶応義塾大学教授)
9	タンパク質分解酵素阻害因子	白血球の働きのためには、タンパク質を加水分解する酵素が必要であるが、その過剰な作用を防ぐために血液中には、タンパク質分解酵素を阻害するタンパク質が存在していて、このタンパク質の遺伝的変異型の人では肺気腫が起こりやすい。	同　上
10	酵素作用の調節	酵素の活性は精妙なしくみで調節されている。肝でのグリコーゲンの分解と合成に関係している酵素系と、窒素を含む化合物の合成の出発点ともいふべきグルタミン合成酵素を例として取り上げる。	同　上
11	ホルモン放出因子	ホルモンによるさまざまな身体のしくみの調節について、そのホルモンの産生が視床下部から放出される別のペプチドによって支配されている。副腎皮質刺激ホルモン (ACTH) の放出因子などについて述べる。	同　上
12	水	生物体の大部分は水である。水という物質はきわめて特別な物質で、この特殊性が生物の示すさまざまな現象の基盤となっている。そのため、水の補給は生命の維持に不可欠であり、この点をきわだった形で示しているのが脱水症状である。	同　上
13	ヘモグロビン遺伝子	DNA分子を切断し、適切に結合し直す方法を用いて、動物、とくにヒトの遺伝子を純粋にすることができるようになり、その構造を究明することが可能となった。ヘモグロビン遺伝子を例として、この分野の研究の現状を紹介する。	同　上
14	放射線の影響	放射線的作用には、さまざまな型があるが、DNA分子に対する影響が、もっとも詳細に研究されている。細胞には、生じたDNA分子の損傷を修復するしくみが具わっている。大腸菌と、ヒトの培養細胞を利用して得られた成果を紹介する。	同　上
15	生命と物質	これまでの講義全体をふりかえって考察し、物質についての研究から、生命現象が究明されてきた成果をまとめて考察してみる。このことは、とりまなおさず、生命についての考えを改めて整理することになるであろう。	同　上

= 集 団 遺 伝 学 =

〔主任講師：松永 英（国立遺伝学研究所）〕

全体のねらい

集団遺伝等は、個体の集まりである集団を対象として、その遺伝的構成がどのような法則に支配され、時とともにどのように変化していくかを追求する学問で、究極的には生物の進化機構の解明を目的としている。この学問は現在、高度の数学的理論体系を軸として各種生物集団における観察結果（とくに分子レベルの変異）の解析と理論の検証を行っている。本講義では、放送大学の主旨にのっとり、集団遺伝学のあらましの一端をできるだけ平易に、そして人間とのかかわりを念頭において、解説してゆきたい。

主な項目

- (1) 遺伝の基礎（遺伝子、染色体、DNA）
- (2) 任意交配集団
- (3) 近親交配
- (4) 量的形質の遺伝
- (5) 突然変異と自然淘汰
- (6) 小集団の変異
- (7) 分子進化
- (8) 人種の分化
- (9) 日本人の遺伝的特徴
- (10) 遺伝学からみた人類の未来、など

＝ 動 物 の 行 動 ＝

〔主任講師：河合雅雄（京都大学教授）〕
放 送 局：テレビ朝日

全体のねらい

動物は単細胞のアメーバから、人間に近い類人猿まで、非常に大きな幅がりをもっている。ここでは動物の行動を系統と進化の軸にそってとらえてみる。そしてそのことを動物の生活や社会を背景にして展開し、行動のメカニズムを探りながら、生命活動の具体的な表出としての行動の意味を考える。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	57/8 28	総論 原生動物の行動	動物の行動を、どのような立場でとらえるかについての基本路線を説明する。まず、単細胞で他の動物とはまったくちがった構造をもつ原生動物がいかにか巧みに行動するか、またそのしくみは？について述べる。	河　合　雅　雄 （京　都　大　学　教　授） 日　高　敏　隆 （京　都　大　学　教　授）
2	9/4	昆　虫　の　行　動	チョウは異性や花を求めて飛び回る。彼等の行動がおこるしくみを実験と観察によって解析しつつ、生得的行動解発機構（IRM）、リリーサー、動機づけ、欲求行動など、動物行動学の基本的認識を彼等の生活との結びつきの中で理解する。	日　高　敏　隆
3	11	社会性昆虫の行動	昆虫の中でもアリ、ハチ、シロアリはいわゆる社会を作って生活をする。この“社会”の中での彼等の行動は驚異的である。また、保護色や擬態はそれ自体が驚くべき現象であるが、行動が組合わさってこそその効果が発揮される。	同　上
4	18	鍵刺激のさまざま	魚、両生類、爬虫類の行動ではどのようなものがリリーサーになっているだろうか？いろいろな実験例をあげながら、斗争、採集、防御などの行動について、生得的行動解発機構の理解を深める。	同　上
5	25	鳥の行動と刷りこみ	鳥の行動は巣作り、育児などが加わって、相当に多岐にわたっている。しかしそれらの行動も基本的には生得的解発機構によっておこる。ただし鳥類では、よく知られているとおり、刷りこみというふしぎな現象がみられる。	同　上
6	10/2	哺乳類の母子関係	哺乳類の行動の特徴のひとつに母子関係の緊密さがあげられる。草食有蹄類ではそれがとくに著しい。奈良公園のシカを中心にそれを観察する。また、攻撃とその抑制行動についても述べる。	河　合　雅　雄 朝　日　稔 （兵庫医科大学教授）
7	9	食肉獣の捕食行動	肉食獣は餌をねらって生活せねばならない。そのため同じ種のなかでも対立する面と協力を必要とする面が生じる。また餌を襲う行動にもいろいろな型がみられる。また、攻撃とその抑制行動について、肉食獣の特徴的行動をとりあげる。	同　上

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	16	嗅　覚　の　世　界	嗅覚は重要な感覚で、多くの哺乳類は嗅覚にたよって生きている。また、皮膚腺の分泌物や尿などは通信手段ともなっている。いくつかの例から“匂いづけ”行動の意義を探ってみよう。	河　合　雅　雄 (京都大学教授) 朝　日　稔 (京都大学教授)
9	23	鳴　き　声と超　音　波	イヌの遠吠え、ゾウのトランペットなど、遠距離通信に用いられる鳴き声、さらにコウモリやイルカの超音波など、音の世界での哺乳類の行動を調べる。	同　上
10	30	霊長類の社会行動	霊長類社会を成立させているいくつかの原理のうち、主なるものとして順位制、血縁制、リーダー制があげられる。そのことについてふれ、特に順位制の問題をとりあげ、攻撃行動と社会的調整行動、あいさつ、分配行動などを解析する。	河　合　雅　雄
11	11/6	霊長類の性に関する諸問題	霊長類の性行動、その発現と抑制機構、性関係、性周期子殺しについて述べ、インセスト（近親相姦）の問題ともあわせて種族維持行動としての性行動の意味を考える。	同　上
12	13	霊長類の育児行動と発達	霊長類の特徴は、成長期間が長いことである。例えば、チンパンジーは5歳まで母子関係は密接である。育児に関する母と子、他個体の行動を子供の発達と関連してとらえる。	同　上
13	20	霊長類のコミュニケーション	ニホンザルは37種の音声を使ってお互いのコミュニケーションを行っている。その他多様な身振りによるコミュニケーション活動もある。それらについて述べチンパンジーの言語習得の問題にもふれる。	同　上
14	27	霊長類の文化的行動について	文化は従来人間だけに特有の現象とされてきたが、動物にもそれが見出されることがわかった。道具の使用と製作などを含めた文化行動を紹介し、文化とは何かという問題を考える。	同　上
15	12/4	動物の行動について ま　と　め	三人の講師が各々の分担講義をもとにし、動物行動の見方、意味のさぐり方、個体維持と種維持の関連性などについての談話をし、全体のまとめを行う。	河　合　雅　雄 朝　日　稔 日　高　敏　隆

＝ 植 物 の 生 理 ＝

〔主任講師：増田芳雄（大阪市立大学教授）〕

全体のねらい

植物は動物と異なり、自栄養（光合成）の機能をもっている。また、環境変化から逃れることができないので、種々の環境要因に対応する能力を備えている。植物の形態形成と生理的機能はもちろん遺伝子のもつプログラムにしたがって発現されるが、それはしばしば環境要因に強く影響される。このような植物に特徴的な構造および生理機能の調節について、植物ホルモンの役割などにもふれながら、主として個体の水準において解説したい。

主な項目

- (1) 植物の体制
- (2) 遺伝的性質と環境要因
- (3) 光合成と栄養
- (4) 成長、分化と運動

＝ 生物の進化と系統 ＝ (動物の部)

〔主任講師：丸山工作（千葉大学教授）〕

全体のねらい

この地球上で、どのようにして生物が出現したのか、他の天体からの飛来説をふくめ論ずる。細菌など原核細胞と真核細胞の出現と進化について述べる。さらに原生動物から多細胞生物への進化をたどる。発生過程から進化をみたヘッケル説と、べん毛虫から進化したとするハッジ説を論じ、比較する。

タンパク質や核酸の変異からみた分子進化について考察する。

地球上の多様な生物の系統進化について、これだけ論じられて、なお、不明である点をタイムスケールの大きな科学の困難さを言う。

主な項目

- (1) 生命の起源
- (2) 最初の生物
- (3) 原核生物
- (4) 真核生物
- (5) 多細胞生物
- (6) 無脊椎動物
- (7) コン虫とホヤ
- (8) 脊椎動物
- (9) 哺乳類
- (10) ヒト化の道

= 生物の進化と系統 =

(植物の部)

〔主任講師：西田 誠（千葉大学教授）〕

全体のねらい

現在、われわれをとりまいている種子植物の体制と構造および生活史を紹介するだけでなく、それらが4億をかけて成立してきた過程を紹介しようとするものである。化石を含めた比較形態学（比較器官学）が主体となるが生活史の変遷にもふれ、それらと地質時代の環境との相関を考えることにより、陸上植物の進化の方向とその必然性についても考えようとするのがねらいである。

主な項目

- (1) 植物の上陸
- (2) コケとシダ～世代の交代とその起源～
- (3) 葉の成立
- (4) 種子の系統発生～裸子植物の起源～
- (5) 花の成立
- (6) 被子性～被子植物の起源～

＝ デ ー タ 解 析 法 ＝

〔主任講師：林知己夫（統計数理研究所長）〕

全体のねらい

データによる現象解析法をデータ解析法と名付ける。どのようにデータを取り、どのようにデータを解析して情報を取り出すかの方法を言う。これは、データを解析するための基礎的な考え方の上に構築される数理的方法である。データを取得する方法は別に講義があり、ここでは、データを解析する方法、特に数量化について述べる。

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 (所属・氏名)
1	データとは何か	以下の講義では、統計学の基礎的知識を前提とする。この講義の学習の仕方について説明する。 データとは何か。これは単なる数字の羅列ではなく、それが出現した背景が重要である。こうした点について述べる。	林 知己夫 (統計数理研究所長)
2	グラフ化の重要性	データ解析では、データを基にさぐりながら情報をつかみ出すことが大事で、このためには、データをグラフ化していくことが基本である。こうしたことに関連した考え方や方法についての基本を説明する。	同 上
3	データにおける質と量	データは究極的には数量によって表現される。しかし、測定や計測によって得られる標識には、つまり「なま」の測定は、数量である場合と質的な分類である場合とがある。これらについての性格を述べる。	同 上
4	相 関 に つ い て	データ間の関連性の最も単純なものを説明する。質的データの場合の関連性、数量的データの関連性。この特殊な場合で重要なものが相関係数で、これについて説明し、さらに相関の諸相について言及する。	同 上
5	重相関関係について	多数の変量の間の関係を見るものとして、重相関関係がある。まず、重相関関係の意味について説明し、新しい概念である偏相関係数について説明する。ここで、多次元的なデータ処理の考え方を習熟させるようにする。	同 上
6	多次元空間における分散	一次元におけるデータの散らばりを表わす分散から出発し、多次元空間におけるデータの散らばりを表わす一般化分散に言及し、この意味について説明する。	同 上
7	判別の測度について I	判別とは何か、について説明し、これを表現するための測度を説明する。それぞれの測度のもつ意味や特色について説明する。判別の概念と距離の概念との関連性について説明する。	同 上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	判別の測度についてⅡ	前講の続き。	林　　知己夫 (統計数理研究所長)
9	距離と一般化分散	多次元データを分析するに際して、ユークリッドの距離、一般化分散の特色に基づいて、どう使い分けていくのが適切かについて説明する。	同　上
10	多次元データ分析の重要性	以上の基本を踏まえて多次元データ分析の方法に進むが、ここで多次元分析が、いかに現象解析に対して重要な意味をもつかについて説明する。	同　上
11	測定誤差の意味Ⅰ	多次元データ分析の方法を説明する前に、測定誤差がデータ分析に対して与える影響について述べる。まず、測定したものが数量である場合について説明する。	同　上
12	測定誤差の意味Ⅱ	前講の続きで、測定が質的なもの、カテゴリー反応として表現されるのでカテゴリカル・データというが、この場合についての測定誤差の問題を取扱う。	同　上
13	データ解析における数量化	データ解析における数量化の位置について説明する。その前に数量化とは何か、その発生について述べる。これがデータ解析の基本理念であることを説明する。数量化の基本が理解できればその考え方で各種のデータ解析が可能となる。	同　上
14	数量化の基本概念	数量化における測定・計測したことの表現と基本的二つの立場について説明する。こうしたことが、数量化を超えて広い意味のデータ解析の基本となっていることを示す。	同　上
15	外的基準が数量である場合の数量化Ⅰ	数量化Ⅰ類と呼ばれる方法で、これについて詳細に説明する。これは、形式的には、重相関関係の拡張となっている。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
16	外的基準が数量である場合の数量化Ⅱ	前講の続き。	林　　知己夫 (統計数理研究所長)
17	外的基準が分類である場合の数量化Ⅰ	外的基準が分類である場合の数量化を説明する。数量化Ⅱ類と呼ばれ、形式的には線型判別関数の拡張となっている。	同　上
18	外的基準が分類である場合の数量化Ⅱ	前講の続き。	同　上
19	外的基準のない場合の数量化、パターン分類の数量化Ⅰ	外的基準のない場合の数量化の一つであるパターン分類の数量化、数量化Ⅲ類と呼ばれる方法について説明する。どうしてこの方法が発生したかについて説明する。	同　上
20	パターン分類の数量化Ⅱ	この数理的構造について説明し、解り易いモデルについてその解釈を示す。	同　上
21	パターン分類の数量化Ⅲ	種々の応用法について説明する。	同　上
22	外的基準のない場合の数量化、 e_{ij} 型の数量化Ⅰ	二つのものの間の関係が数量で示されているが厳格な意味でメトリカルでない場合の数量化の方法である。二つのものの間の関係を基にする諸方法のなかで位置付けて説明する。この場合、関係は親近性、非親近性を表わすものとする。	同　上
23	e_{ij} 型の数量化Ⅱ	理論的構造と応用法について説明する。さらに、これを発展的に応用した例について述べる。	同　上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
24	一対比較法の数量化	一対比較法の諸方法の説明とガットマンによる一対比較法の数量化について述べる。数量化の方法発展の礎となった考え方を中心に据えて説明する。	林　　知己夫 (統計数理研究所長)
25	一対比較法における 矛盾と数量化	一対比較法では矛盾がよくおこる。 $A > B$ 、 $B > C$ 、しかし $A < C$ という関係である。 $>$ はより好ましい、好ましくないという事を示す。この従来の取扱いと、数量化による別角度からの取扱いを述べる。	同　上
26	多次元尺度解析法 MDS (Multi-Dimensional Scaling) I	二つのものの間の関係を基にして、要素の空間的位置付けを求める方法で、 e_{ij} 型数量と関係が深い。二つのものの関係が、親近性、或は非親近性をあらわす順位もしくは順位のついた分類で表現されている場合について述べる。	同　上
27	M　D　S　　II	二つのものの間の関係表現が、単なる分類、いわゆる名義尺度である場合について述べる。	同　上
28	三つの要素の間の 関係に基づく数量化	三つの要素の間の関係が数量であらわされているが、厳格な意味でメトリカルでない場合の数量化について述べる。これは e_{ij} 型数量化の拡張となる。	同　上
29	PARAFAC モデル	三つの要素の間の関係が数量で表わされている場合のデータ解析法としてタッカーの三相因子分析があるが、これは二つのものの間の関係に帰着し本質的なものではない。ここでは Parallel Factor Analysis (PARAFAC) について述べる。	同　上
30	分類と クラスター化	分類は科学における最初の重要な操作である。分類を通しての情報抽出は不可欠の考え方である。このための統計的方法としてのデータに基づくクラスター化による分類について述べる。但し、これは外的基準のない場合の方法である。	同　上

＝コンピュータ・情報処理・数値計算＝
(→統計解析とデータ処理)

〔主任講師：石田正次（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

まず、基礎統計量の意味とその計算法を説明し、同時にプログラミングの基本的な技法の演習を行う。次に各種の統計解析法についてその数値計算法を実例に基づいて講義する。最後はより高度の統計解析のためのプログラミング言語と計算機システムについて述べる。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
1	数値計算と計算機	ソロバン、手廻し計算、数表による計算から電子計算機によるデータ解析までの過程を示す。最も簡単な電子計算機（ワンボード・マイ・コン）によって電子計算機の構造とその働きを説明する。（CPU、Memory（RAM）、I/O、Monitor（RAM）など）プログラミング言語の生い立ちについて話す。	一部現地ロケ。 ワンボード・マイ・コンを用意する。
2	BASIC による プログラミングの基礎	マイ・コンのコマンドとBASICの文法の初歩を簡単な計算例によって説明する。 プログラムの作成、計算の実行、プログラムの修正の実習。	1.2は講義の準備。 使用するマイ・コンはFM-7（富士通）を考えている。
3	平均と分散の計算	最小二乗法による平均と分散の統計的意味について述べ、その計算法を示す。	3～7は一次元の話。
4	統計的分布の実例	年令構成、共通一次試験、電車の時刻表、自動車の通過台数など身近な実例によって統計的分布を説明し、その形を特徴づけるための統計量（平均、分散、モーメント、メディアン、レンジ、変位係数、歪度、尖度）を計算する。	一部現地ロケ。
5	乱数によるいろいろな分布の実験	乱数（物理乱数、擬似乱数）と確率事象の話の前置きとして、乱数による等確率分布（サイコロ）、三角分布（二つのサイコロ）、ガウス分布、二項分布、ポアソン分布の実験を行い、その結果と理論値とを対比する。（コンピュータ・シミュレーションとしての確率実験）	物理乱数発生器を作る。
6	中央極限定理	平均値の分布の実験から中央極限定理の説明をする。ガウス分布に近づく速度についての考察を行う。 標本調査法の考え方と推定誤差について説明する。	
7	理　論　分　布	統計の理論でよく現れるt分布、 χ^2 分布、F分布の生い立ちとその性質をコンピュータ・シミュレーションによって究明する。	6.7は良質の乱数が必要とし計算時間も長いので統計数理研究所のマシンを使用する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	級数展開と数値積分	円周率の計算を例として級数展開と数値積分の計算法を述べる。ここでは倍精度計算も使う。どうすれば計算精度を上げることができるかという問題も合わせて考える。	9のための準備
9	確率密度関数から確率を求める	ガウス分布、 χ^2 分布などの確率密度関数を積分することにより確率変数がある与えられた範囲の値をとる確率を計算する。	
10	相　関　係　数	最小二乗法による直線の当てはめから回帰直線、相関係数、回帰直線のまわりの分散の説明をし、その値を計算する。更に相関係数と回帰係数の標本分布をシミュレーションによって考察する。序でSpearmanの順位相関にもふれる。	例題として歩く速さと歩幅の関係を使うのでその測定を戸外で行う。
11	連立一次方程式と逆行列の計算	数値計算で頻繁に用いられる連立一次方程式の解法を述べ、その応用として常数項だけ異なった複数の連立一次方程式をまとめて解く方法と逆行列の計算法を説明する。	12以降のための準備。
12	曲　線　の　当　て　は　め	最小二乗法による多項式の当てはめ方とその応用として逐次近似法による非線形曲線の当てはめ方を説明する。	世論調査での支持率と得票率の関係、木の高さと太さの関係を例題とする。
13	自　己　相　関　係　数　と 移　動　平　均	自己相関係数からコログラムを作って時系列データの周期成分を求め、移動平均によって曲線のスムージングを行う。	経済データのトレンド計算を例題とする。 10～13は二次元の話。
14	三つの変量間の相関	x と y の間に相関があり、 y と z の間にも相関があるとき、 x と z の間に相関があるかという問題から多変量解析の基本的な考え方を述べる。	
15	重　相　関　係　数	n 次元空間での平面の当てはめから回帰平面、重相関係数、偏相関係数の話をする。	物さしだけで重さが測れるか、つまり身長と胸囲から体重がどの程度の精度で推定できるかという問題。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所　属・氏名)
16	重　相　関　の　計　算	回帰平面、重相関係数、偏相関係数の計算法について述べる。	
17	質　的　特　性　か　ら、 量　的　特　性　の　推　定 (数量化法Ⅰ)	重相関の特別な場合として、定性的に与えられた特性から定量的な変量を推定する問題を考える。	土壌、地形、樹種から樹木の生長量を求める。
18	二　次　曲　線　の　分　類	二次曲線の分類の問題から特性方程式を導き、まずその最大根を求める方法について説明する。	21の準備。
19	特　性　根　の　計　算	特性方程式の全根を同時に求める計算法について述べる。	18、19は21の次にまわす方がよい。
20	相　　　　関　　　　比	分類(層別)の効果を示す量としての相関比の意味について述べ、その応用として平均値推定のための層別標本抽出の効果を考える。	
21	数　量　化　法　Ⅱ	意見調査の回答パターンから回答者の性別とか国籍をいい当てる問題を相関比を最大にするという考え方で解決する。	
22	数量化法Ⅱの計算	数量化法Ⅱによってデータ解析をするためのプログラムを作る。	以上でBASICによるプログラミングは終る。
23	A　　　　P　　　　L	BASICより高度の機能をもつ会話型プログラミング言語APLの概要について述べ、APLを使うことによって、これまでのプログラムがいかに簡単になるかをみる。	統計数理研究所でのロケ。またはPDP 11を持ち込む。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
24	P A S C A L (その1)	BASICやAPLは会話型言語で大変使い易いが計算スピードは至って遅い。これは言語の構造がinterpreter型であるためである。計算スピードを上げるためにはCompiler型の言語を用いなければならない。最近マイ・コンから大型機まで広く使われた Compiler 型言語 PASCALの文法をBASICと対比しながら説明する。	マイ・コン用の P A S C A L Compiler を用意する。
25	P A S C A L (その2)	これまでにBASICで作ったプログラムをPASCALで書き直し、その計算スピードを比較する。	
26	外 部 記 憶 装 置	大量のデータを処理するためには磁気テープとか磁気ディスクなどの外部記憶装置を利用しなければならない。ここではテープやディスクによるデータ・ファイルの作り方と使い方を述べる。	
27	P L / I (その1)	中大型計算機用に作られた高い機能のプログラミング言語PL/Iの文法をBASICやPASCALと対比しながら説明する。	
28	P L / I (その2)	磁気テープ、磁気ディスクを使った本格式のプログラムPL/Iで作る。	
29	プ ロ グ ラ ミ ン グ 言 語 の 比 較	BASIC、PASCAL、PL/Iの文法を比較しながらそれぞれの特徴について述べる。	
30	統計解析のまとめ	これまで行ってきた講義の内容をまとめ、今後の勉強法を指示する。	
	スタジオに用意するもの	ワンボード・マイクロコンピュータ(自作も可) マイクロ・コンピュータ(本体、CRT、DISK、PRINTER、 乱数発生機)3システム PASCALのCompiler APLが使えるミニ・コンまたはTSS端末 (不可能ならば統計数理でロケ)	

= 現 代 数 学 特 論 =

〔主任講師：赤 摂也（立教大学教授）〕

全体のねらい

超準解析 (non-standard analysis) の概要について講述する。超準解析は、数学的結果を導くのに、数理論理学におけるモデル理論を活用しようというものである。今日これは、きわめて強力なものであることが知られており、また、古来多くの人達をなやませてきたライプニッツの「無限小」の概念も、これによって完全に合理化された。

超準解析そのものだけでなく、数理論理学や集合論などについての理解をもあたえるのが本講のねらいである。

主な項目

- (1) 数理論理学（構文論）
- (2) 集合論の公理
- (3) 数学的構造
- (4) 超準解析の基礎概念
- (5) 超準解析の応用

＝ 現 代 応 用 数 学 ＝

〔主任講師：伊理正夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

現在の社会において実際に応用され役に立っている数理的手法を数学的な立場から整理して講じる。しかし、数学的な厳密性をあまり強調しすぎないように注意し、なるべく実際に手法が使われている場面における動機づけを重視した話としたい。

主な項目

1. 数と量と次元
2. システムの数学
 - 2.1 離散システムの数学 — 組合せ論、グラフ理論、ネットワーク理論
 - 2.2 連続システムの数学 — 常微分方程式、偏微分方程式
 - 2.3 最適化の数学 — 数理計画法、オペレーションズ・リサーチ（の一部）
3. 情報処理の数学
 - 3.1 数値情報の処理 — 各種数値計算法
 - 3.2 非数値情報の処理 — 各種データ構造とその取り扱い

＝ 生 理 と 心 理 ＝

〔主任講師：中川大倫（放送大学教授）〕

全体のねらい

心理学は人や動物が、それぞれの生活環境の中において、いかに適応するかを課題としており、一方、生理学は、肉体的機能に関する科学として、肉体の器官や組織において行われる諸過程の法則性を明らかにしようとする。そこで、両方の関係を取り上げようとするれば、ある種の心的過程に対応する有機体内の正確な生理学的過程が、いかに提示されうるかが中心課題となろう。この対応関係の提示は、行動の理解に有効であり、また、異常行動の理解と精神衛生への道をも開くものと考えられる。本講の視点は以上の点におかれる。

主な項目

- (1) 情報の受容と処理過程
- (2) 覚醒水準
- (3) 高次精神作用と生理学的基礎
- (4) 心身症の様相と治療

＝ 地 域 開 発 論 ＝

（→都市問題と都市政策）

〔主任講師：伊藤善市（東京女子大学教授）
（→加藤秀俊（学習院大学教授））
放送局：テレビ朝日〕

回	放送日	テ ー マ	内 容	担 当 講 師 （所属・氏名）
1	54/8 24	地 域 経 済 の 変 貌	戦後における地域経済の構造変化の実態を、人口と所得を手がかりとしてつかみ、脱農と都市の社会淘汰がどのようにして展開したかを明らかにする。あわせて人口比・ターン現象の意味をさぐりたい。	伊 藤 善 市 （東京女子大学教授） 佐 貫 利 雄 （日本開発銀行設備 投資研究所副所長）
2	31	日本の工業化と都市化	明治維新以後の日本の歴史は、工業化と都市化の歴史であった。日本の工業化の特徴をさぐり、特に戦後においては、工業化と都市化とが楯の両面であることを多くの事実によって明らかにする。	伊 藤 善 市 （東京女子大学教授） 加 藤 寛 （慶応義塾大学教授）
3	9/7	向都性向を規定する要因	都市のごみごみした生活はごめんだ、と言われながら、なぜ人々は都市に集まってくるか。ここでは職場という経済的要因のほか、いろいろの非経済的要因について、理論的・実証的に吟味する。	伊 藤 善 市 （東京女子大学教授） 清 水 肇八郎 （千葉大学教授）
4	14	地域格差は縮小したか	現段階における地域開発の政策課題として、過密、過疎、格差、環境という四つの問題がある。ここでは、地域格差を測る方法とその実態を明らかにし、格差縮小の政策手段と効果について吟味する。	伊 藤 善 市 （東京女子大学教授） 西 岡 久 男 （青山学院大学教授）
5	21	過密都市と過大都市	過密都市と過大都市の違いを明らかにし、前者が入れものと中味との間の社会的バランスを、後者が都市の適正規模論を問題にしていることを論証し、過密是正のための政策について解明する。	伊 藤 善 市 （東京女子大学教授） 菊 竹 清 訓 （東京女子大学教授）
6	28	山村、離島の過疎問題	過疎地域とは、人口が大幅に減少したために、社会生活を営むことが困難となった地域をさす。ここでは、過疎の実態を明らかにし、過疎対策の諸類型とその効果について、広い視野から比較検討を加えたい。	伊 藤 善 市 （東京女子大学教授） 大 城 常 夫 （琉球大学助教授）
7	10/5	地域開発と環境の創造	現在、工業化と都市化の進行に伴い、公害問題をはじめとする環境破壊が深刻化している。ここでは、開発がよりよき環境の創造と両立させるために、なぜ発想の転換が必要であるかを論じたい。	伊 藤 善 市 （東京女子大学教授） 鈴 木 忠 義 （東京工業大学教授）

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	12	開　発　理　念　の　変　遷	戦後における日本の開発政策の理念を類型化し、それが戦後における日本経済の復興、自立、高度成長、高密度、高福祉社会の建設、人間居住の総合的環境の創造という歴史的課題と対応していることを解明する。	伊　藤　善　市 (東京女子大学教授) 阿　部　　　統 (東京工業大学教授)
9	19	三全総の特質とねらい	ここでは、三つの全国総合開発計画の特質を比較検討し、第三次全国総合開発計画が、なぜ定住構想をうち出したかを明らかにする。また、21世紀における地域政策について長期展望を行う。	伊　藤　善　市 (東京女子大学教授) 下河辺　　淳 (国土庁事務次官)
10	26	国土利用計画と地価問題	地域開発政策は、国土の有効利用面積を拡大するが、土地の効用を高めるために地価を上昇させる。この利益を公平に分配するための政策を明らかにし、国土利用計画法のねらいと効果について吟味する。	伊　藤　善　市 (東京女子大学教授) 日　下　公　人 (長　　　　銀) (開発第一部長)
11	11/2	地域開発と交通問題	交通・通信体系の整備は地域開発の必要条件である。これに地域住民のやる気が加わって十分条件が満たされる。ここでは、総合交通システムについて論じ、波及効果と逆流効果について解明する。	伊　藤　善　市 (東京女子大学教授) 角　本　良　平 (交通評論家)
12	9	地方中堅都市の育成	過密、過疎、隔差、環境という政策課題にこたえるためには、地方中堅都市を育成することが必要である。それが果すべきいろいろな役割について解明する。	伊　藤　善　市 (東京女子大学教授) 吉　田　達　男 (地域振興公団幹事)
13	16	地域開発と中小企業	人間は職場のないところ、職場に通勤できないところに定住しない。ここでは、地域開発が、中小企業に与える影響は何か。また、成長業種をどのようにして育てるかについて解明する。	伊　藤　善　市 (東京女子大学教授) 清　成　忠　男
14	23	経済開発と社会開発	地域開発政策の究極のねらいは、住民福祉の向上を図ることにある。したがって、経済開発は、そのための手段にすぎない。ここでは、福祉の意味を明らかにし、社会開発のプログラムについて解明する。	伊　藤　善　市 (東京女子大学教授) 松　原　治　郎 (東京大学助教授)
15	30	美しい都市づくり	はじめに都市が「みやこ」と「いち」という基本的機能をもっていることを明らかにし、都市に期待されている安全性、快適性、利便性、芸術性について論じ、美しい都市づくりの意義を論ずる。	伊　藤　善　市 (東京女子大学教授) 内　藤　錦　樹 (交通公社主任) (研究員)

＝ 人 口 ・ 食 糧 ・ 資 源 I ＝
－ 人 口 ・ 資 源 －

（主任講師：岡崎陽一（厚生省人口問題研究所）
深海博明（慶応大学教授）
放送局：テレビ朝日）

全体のねらい

人類にとって、基本的に最も重要である人口と資源の問題を対象として、その本質や所在、日本と世界の問題展開の過去・現在・将来、および危機の虚実等を分析し、人間が快適にかつ永遠に生存していくためにはどうすべきかを考えてみたい。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/8 27	世　界　の　人　口	過去から現在に至る期間に地球上の人口がどのように増加してきたかを概観し、産業革命後の一つの増加倍と第2次大戦後の人口爆発の意義を説明する。将来における世界人口の増加の予測についても述べ、人口問題の重要性を指摘する。	岡　崎　陽　一 (厚生省人口問題研究所人口政策部長)
2	9/3	開　発　途　上　国　の　人　口	開発途上国の人口爆発の原因を高出生率と低死亡率の両面から説明し、ついで人口増加が経済社会開発の障害要因となる事情について考える。さらに人口増加抑制のための政策について説明する。	同　上
3	10	先　進　国　の　人　口	先進国の人口が多産多死から少産少死に転換した過程を概説し、出生率低下のメカニズムと死亡率低下の原因を説明する。ついで人口都市集中の問題ならびに人口老齢化の進行に伴って生じている諸問題について考える。	同　上
4	17	日　本　人　口　の　動　向	日本人口の長期間にわたる動向を概説し、とくに明治以降の人口増加と第2次大戦後の変化について説明する。出生率と死亡率の低下、それに伴う年齢構成の変化と将来人口見通しについて考える。	同　上
5	24	日　本　に　お　け　る 地　域　人　口　の　変　化	人口都市化は明治以降進行しているが第2次大戦後とくに急激になった。しかし最近地域開発の推進、産業構造の変化によりUターン、Jターンなどの変貌があらわれている。これらの状況を分析し、将来望ましい人口分布はどうであるべきかについて考える。	同　上
6	10/1	高　齢　化　社　会　の　問　題	わが国は今後、西欧諸国が経験しなかったほどに急速かつ深刻な高齢化社会をむかえようとしている。その原因と実状について説明し、さらにその中で発生する諸問題、中高年人口問題、高齢者対策などについて説明する。	同　上
7	8	資　源　問　題　入　門	資源問題とは一体何なのかを正面切ってとりあげ、まず問題の本質や真の所在、その基本的決定因、その課題および問題の範囲・対象を明確化する。さらに資源の定義やその分類・整理をも考える。	深　海　博　明 (慶応義塾大学教授)

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	15	資源問題の展開過程	まず有史以来現在に至る世界資源問題の大きな展開過程を概観し、次に日本に重点をおいて、明治維新以来の展開過程を考察する。さらに1960年代以来の資源問題の新しい登場ないし挑戦の展開をとらえて分析を行い資源問題の現段階をも解明する。	深　海　博　明 (慶応義塾大学教授)
9	22	資源危機の虚実	種々提起されている資源危機論を対象に、その分類・整理を大胆に行うとともに、地球資源や環境の物理的枯渇が差し迫っているのかどうかを、地球の資源力や埋蔵量の検討等から、大きく評価・判断し、さらに現在の危機の基本的性格(人為的危機)を明示する。	同　上
10	29	石油・エネルギー危機の構造	1973年の第1次石油危機以来、最大の関心対象である石油・エネルギー危機をとりあげ、どんな危機が存在し、それが差し迫っているのかどうか、石油は何時枯渇し我々はエネルギーの谷間を乗り切ることができるのかどうかそして資源ナショナリズムの挑戦ともからませて、1980年代の危機の性格は何かを考察する。	同　上
11	11/5	世界の資源需給構造	世界の資源の賦存・供給と需要・消費の偏在性を考察し、それと関連させて世界資源需給の動向とパターンを総合的に分析する。さらに国際大資本の存在と今後の役割そして世界資源貿易や資源市場についても説明する。	同　上
12	12	日本の資源問題の特徴	日本は世界で資源最稀少国といわれているが、本当にそうなのかどうか、何故稀少国なのにこれだけ豊かな経済活動や生活を営めるのかの問題意識に中心をおいて、世界の資源循環に占める日本の地位・特徴・特殊性を分析する。	同　上
13	19	資源問題の理論分析	社会科学とくに経済学に重点をおいて、資源問題はこれまで理論的にどのように分析されてきたのか、現段階でどんな新しい分析が展開されつつあるのか、資源問題の十分な理論的解明は可能なのかどうか、資源問題のもつ根本的な挑戦とは何か等を考察する。	同　上
14	26	資源政策の体系と方向	資源問題解決のための政策は、どのような基本目標なり基本前提の下に、どう立案・実施されていくべきかの問題を、総合的戦略と具体的戦術との双方から体系的に分析を加える。	同　上
15	12/3	今後の展望と対応	今後世界と日本の資源問題はどのように展開していくのか、その将来を決定する要因は何か、危機を回避するためにはどんな発想の転換なり対応策が必要であるかを日本に中心をおいて考究し、各自の問題として真剣に受け止め、解決に努力する必要性を指摘する。	同　上

＝ 人 口 ・ 食 糧 ・ 資 源 Ⅱ ＝

－ 人口・食糧 －

〔 主任講師：安川正彬（慶応義塾大学教授）
唯是康彦（千葉大学教授）
放 送 局：テレビ朝日 〕

全体のねらい

有限の地球にふえ続ける人類が生存していく道は厳しいものがある。そこでの焦点は、人口増加と資源・食糧とのバランスをどのように図るかにある。後期の授業では、とくに人口と食糧に課題をもとめて考察する。

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
1	56/12 10	経済社会と人口変動	経済社会の発展と多産多死から少産少死にいたる人口転換過程との対比を考える。	安 川 正 彬 (慶応義塾大学教授)
2	17	人口変動の仕組み	第一次産業から第三次産業への構造変化にかかわる人口移動の姿を検討し、人口転換との関連を加えて人口学の基本をさぐる。	同 上
3	24	人口学説と時代的背景	人口と経済の学説の変遷をたどり、その時代的背景を概観する。	同 上
4	57/1 7	適 度 人 口 を 測 る	一国の適度人口はいくらか。それはどのように測ることができるか。適度人口をめぐる学説と計測の可能性をさぐる。	同 上
5	14	人口増加と経済成長	人口増加は経済成長へのプラス要因かマイナス要因か。経済成長論を通じて、先進国と発展途上国との対比を検討する。	同 上
6	21	有限の地球と人口	人類生存への道は、人口の将来に何を目標に置くべきか。有限の地球への認識を強調して、静止人口を目標設定とする必要を強調する。	同 上
7	28	人 口 と 食 生 活	人口が増加する場合はもちろんのこと減少する場合も食糧消費は増加する。それは生活水準が向上するからであり、そこにもいろいろの段階がある。	唯 是 康 彦 (千葉大学教授)

回	放送日	テ　　マ	内　　　　　　容	担　当　講　師 (所属・氏名)
8	2/4	地球の食糧供給能力	世界は長期的に食糧消費の増加傾向にあるが、地球はこれに適応できるのだろうか。植物の光合成能力と環境条件から潜在生産力の推定を行う。	唯　是　康　彦 (千葉大学教授)
9	11	開発途上国と緑の革命	人口爆発の震源地は開発途上国であるが、その食糧供給はどのようにしてなされるか。緑の革命は一つの希望であるが、そこにはまた多くの問題が山積している。	同　上
10	18	世界の水産資源	食糧原料の一端を担う水産業は日本人にとってとくに重要であるが、地球の有限性のために供給制限が発生し、それが200海里問題として顕在化している。	同　上
11	25	食　糧　戦　略	世界の食糧問題は決して長期的問題にとどまることなく、現在の貿易構造に投影されて、国際政治と密接な関係をもつようになった。その有効性と影響は何か。	同　上
12	3/4	日本の食糧自給率	不安定な世界の食糧需給関係の中において、日本の食糧自給率は国際的にみてきわめて低いといわれる。自給率の考え方、現状の実態その問題点と対策について述べる。	同　上
13	11	アグリビジネスと食品価格（農業関連産業）	食糧需給の不安定性は具体的には価格水準とその変動に反映されるが、この点で原料生産と最終消費をつなぐアグリビジネスが、重要な役割を果たす。	同　上
14	18	農業政策と財政負担	食糧の安定供給は世界にとっても日本にとっても重要であるが、他面で消費者は安い食糧を欲しているし、供給者はそれで生計を立ててゆかねばならない。その点で農政の任い方が究明される。	同　上
15	25	生態系・技術・人口	食糧生産は生態系と密接な関係をもっており、その関係の中から技術体系も確立してくるし、食生活も成立してくる。食糧と人口の関係もここに基礎を置くことになる。	同　上